
IMAGE ~ラストイメーヅバトル~

赤夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IMAGE（ラストイメージバトル）

【Nコード】

N0360Z

【作者名】

赤夜叉

【あらすじ】

倒して、勝てっ！ 壮絶な死闘を繰り広げた『闇の書事件』
終結から、10年。体内に『ジュエルシード』を宿したあの男が、
二体の最強サーヴァントを連れて帰ってきた！ ミッドチルダに機
動六課が発足されて、新たな物語が動き出す。原作での理不尽な結
末を迎えたナンバーズの運命を変える為に、敢えて原作通りに事を
進める。だが、隼樹達が知らぬ裏で、闇は着々と力を付けていた。
時空管理局の闇！ ナンバーズの最悪な運命！ 甦る最凶の宿敵！
次々と迫りくる危機に、隼樹は己の力と仲間達の力を駆使して挑

む！ 作中に過激なシーンが含まれますので、苦手な方はご注意ください。バトルを読みたい方は、『魔王降臨篇』からでも楽しめます。と思います。

始動（前書き）

皆さん、こんにちは。

このたび、『イメージ』の続編を再執筆・掲載する事になりました。今回は、前作のような余計な『ゲーム』や『アンチ・ヘイト色』が無いように描いていきます。

物凄くく久しぶりなので、色々不安もありますが、よろしくお願ひします。

では、本編をどうぞ。

始動

ある無人の世界。荒れ果てた荒野の中で、一ヶ所だけ異様な光景があった。

無人で生物が棲んでいない八ズの荒野に、死体があるのだ。それも、一体や二体ではない。様々な種類の生物の死体死骸が、何十何百 いや、万に届こうかと言う異常な数が死体の山を作り上げている。腐り切った死体は腐臭を放ち、荒野を陰惨で惨劇の場に変えていた。

そして、異常な数の死体に囲まれた中心に、一つの建物があった。王宮のような外装で、高く聳え立つ建物の大広間に、沢山の影が立ち並んでいた。静寂を守り、微動だにしないで大広間の中央に立ち尽くしている。正体不明の影が立ち並び、不気味な程に静寂な間は、通常の空間とは違つどす黒い雰囲気満ちていた。

影の軍団の前には、玉座が据えられている高い壇があった。黒一色に内装された大広間と同色の王座に腰を降ろすのは、一人の少女だった。年齢は十代後半と言つた若さで、下ろされた艶やかな黒い長髪、黒く生地薄いドレス、黒いストッキング、黒いハイヒールと上から下まで全身が黒一色に統一されていた。瞳も黒く、目に映る物全てを飲み込む深さと漆黒さ。逆に肌は透き通るように白く、黒の出で立ちの中でよく映えて艶めかしく見える。

眼前の影の軍団を見下ろし、少女は口を開き、静寂な空間に声を響かせた。

「十年……！ 長かつた……ココまで力を付けるのに、随分と長い時をかけた……！」

漆黒の美少女の脳裏を過るのは、過去に忌まわしき敗北の記憶だった。

「ようやく我は、復讐と支配の力を得たのだ……！ この力で、あ
奴らに復讐する時は近い……！ 憎きあ奴らを葬り去り、全ての世
を我が望む漆黒の世界に創り変えてやるうぞ……！」

闇は静かに、その時を待つ。

*

新暦0075年4月。

ミッドチルダでは、時空管理局の一部隊である古代遺失物管理部・
機動六課が正式に発足された。部隊長は、小さい頃に起きた『闇の
書事件』で魔法の力を開花させた八神はやてが部隊長を務め、部隊
長補佐にはパートナーのラインフォースを側に置いている。部下に
は、一等空尉となった高町なのはと執務官となったフェイト・テス
タロツサが着き、他にも優秀な成績を持つ者や将来有望の若手まで
揃っている、まさにエリート部隊だ。

綺麗に整っている部隊長室に集まった四人は、機動六課発足の挨拶
をするべく、ロビーに足を運んだ。隊舎のロビーは広々としてお
り、壁はガラス張りで外の景色が見える面があって解放的な空間に
なっている。ロビーに集まっている部隊局員の数は、約30名程だ。
部隊局員の中には、守護騎士のシグナム居達とフェイトの姉である
アリシア・テストアロツサの姿も見える。彼等を前にして、はやての
部隊長としての挨拶が始まる。堅苦しく長い挨拶は嫌われると言
う事で、簡潔に短く挨拶を済ませた。挨拶が終わると、前に並ぶ局員
一同から拍手が上がった。

拍手が収まるのを見計らって、はやては再び口を開いた。

「私からの部隊発足の挨拶は以上です。では続きまして、我が機動六課に“民間協力者”として協力してくれる方々を紹介します。

セイバーさんとセイバーオルタさんのお二人です」

はやてに紹介され、若干の色違いをした金髪の少女が一同の前に歩み出た。

一人は、陽の光を受けて煌びやかな金髪を青色のリボンで後ろに結び、端正な顔立ちをした少女だ。瞳の色は碧色で、濡れた宝石のように美しい。凜とした顔つきからは、意思の強さをハッキリと現しながらも、どこか穏やかさも感じられる。

「初めまして。紹介にありました、セイバーです。一年間、よろしくお願いします」

丁寧な挨拶で、セイバーは名乗った。

「セイバーオルタだ」

次いで名乗ったのは、彼女の隣に立つセイバーオルタだった。淡々とした口調ながらも、“王”としての威圧的なモノが感じられる声をしていた。

髪は金色だが、隣のセイバーと比べると若干薄い感じに見える。着ている衣装も、白い服を着用しているセイバーとは対極の黒いゴスロリ衣装である。肌も美白と称するくらい綺麗で、目力はセイバー以上だ。もう一つ両者の違いを挙げるとすれば、頭の天辺に“アホ毛”が有る無しくらいだろう。実力も違いがあるが、ソレは追々明らかになる事となる。

紹介を聞いた局員一同は、男女問わず二人を凝視していた。姿がソックリである事もそうだが、何より“存在感”が違っていた。明らかに他を圧倒する気があり、畏怖する者もチラホラと見える。そ

して何より、気高い気品さ漂う美しさに数少ない男性陣は見惚れていた。

ココで挨拶と紹介は終わり、といきたいところなのだが、そうはいかなかった。実は、もう一人民間協力者が居るのだが、この場に居ないのだ。

どないしたもののか、と部隊長のはやては頭を抱えた。

その一方で、セイバーはロビーの入り口に目を向けた。

ヤッベー！ 完全完璧に遅刻だよ……！

ロビー入り口の陰に座り込み、頭を抱える一人の男が居た。

地味と凡人を合わせたモノを絵に描いたような容姿の男で、眼鏡をかけている。彼の名前は、葉谷資隼樹^{はやしゅんき}。体内にロストロギア『ジュエルシード』を宿し、セイバーとセイバーオルタのマスターとなつた男だ。

くっそ〜！ 今日の挨拶に緊張して眠れなかったのがマズかったか……。いや、一番の原因はセットした目覚ましですが、電池切れで鳴らなかつた事だつ……。！ 断じて、俺は悪くない！

遅刻の原因は、寝坊と言つべつちやあべつな理由だった。

いや、最大の原因は“敢えて原作通りの選択をした自分自身”だ。

何で？ 俺、今まで学校の入学式、始業式、終業式、卒業式と集まり事には遅刻した事無かつたのに、何で今日遅刻なのよ？

何でよりによつて、初めての遅刻が今日なんだよ〜！？ マジあり得ねえ〜！

頭をグシャグシャと掻き乱して、隼樹は苦悩する。

そうこうしてる間にも、時間は無情に過ぎていく。今更出ていても気まずいだけであり、時間が過ぎればどんどん出づらくなる。

どうすればいい？ どうすれば……？

悩んだ時の常套句を心中で呟き、隼樹は解決策を考える。

しばし考えた後、意を決した顔で言つた。

「よしっ……！ 今日のところは帰ろう！」

「そうはいきませんよ、ジュンキ」

不意に聞こえた後ろからの声に、隼樹は体を揺らし、顔を引き攣らせた。

そして、恐る恐る後ろを振り向く。

背後に立つのは、腰に手を当て、呆れた表情で隼樹を見下ろすセイバーだった。

引き攣った笑みで、隼樹は挨拶する。

「や、やあ、セイバー。おはよう。今日も綺麗だね」

「ありがとうございます、ジュンキ。ですが、いくら褒めたところで、見逃しはしませんよ」

「いや、ソコを何とか……！ って言うか、どうして起こしてくれなかったのさ!？」

「起こしに行きましたよ。そうしたら貴方が、「分かった。先に行つて」と言いましたので」

「え……？ マジで……？ 全然覚えてないんですけど……」

どうやら、二度寝してしまったようだ。

愕然とする隼樹の腕を掴み、セイバーは無理矢理立たせて強制的にロビーに連れて行く。

「ちよっ……セイバー！ タイムタイム！」

「言い訳も制止も聞きません。いずれ顔を合わせるのですから、挨拶くらいはキチンとして下さい」

待つよう訴える隼樹を、セイバーは問答無用でロビーに連れ込んだ。

ロビーで待たされた局員一同の注目が、一斉に隼樹とセイバーに向いた。毅然とした態度でセイバーは、隼樹を一同の前に立たせた。完全に退路を断たれた隼樹は、逃げる事を諦めた。自分に視線を注ぐ一同を見渡して、より一層緊張感が増す。ぎこちない動きで一同と向かい合い、挨拶をした。

「えっと、あの……は、葉谷資隼樹です。その、よろしく願います」

ロビーは、静寂を保っていた。登場の仕方が仕方だったので、皆啞然としているのだ。

ほら〜！ こういう空気になっちゃったあ〜！

微妙な空気に、隼樹は激しく帰りたい気持ちに駆られた。

始動（後書き）

後書きは……ん、特に無いかな。
感想・ご意見など、気軽にどうぞ。
では。

教導

「もう嫌だ……。俺帰る」

ロビーでの気まずい挨拶を終えた後、隼樹は隊舎の自室で落ち込んでいた。

ただでさえ人前で行動するのは苦手なのに、更に大恥をかく事になったのだ。落ち込むなと言う方が、無理である。

そんなに恥ずかしい思いをしたくなかったのなら、機動六課発足や民間協力者にならなければいいじゃん、と読者諸兄はお思いだろう。だが、実は彼なりの理由があるのだ。

今回の隼樹の目的は、ナンバーズの完全救済である。原作では、時空管理局トップの歪んだ正義の犠牲者であるにも関わらず、闘いに敗れた敗者と言う事で、半数近くが拘置所に入れられてしまった。その結末に納得いかない隼樹は、敢えて原作通りの流れに乗る事にした。『闇の書事件』では、はやて達が管理局入りを拒むよう仕向けたが、事件後で冷静になって考えて計画を変更する。機動六課は、地上で自由に動ける部隊だ。ソレを設立させたからこそ、なのは達主人公勢はスカリエッティ一味が関わるレリック事件を捜査する事が出来た。一般人には、万が一の逮捕権はあるが、捜査権は無い。それならば、自然と事件に関われる原作の状況にした方が良く、隼樹は考え直したのだ。

問題は、どうはやてを管理局に入局させるかだったが、意外な展開になった。なんと、はやての方から管理局に入局したいと言いだしたのだ。友達であるなのはに協力したいと言う、純粋な想いからだった。最初は反対した守護騎士だったが、後にギル・グレアム提督と和解を果たし、局員全てが悪い人間でない事を理解して、主に付き従った。続いてフェイトやアリシアも、同じような想いから入局を決意して、あれよあれよと言う間に凶らずも隼樹が望む通りに

事が運んだ。

そして、隼樹、セイバー、セイバーオルタの三人は、入局こそしなかったが、『民間協力者』と言う事ではやて達に協力する立場となった。ちなみに、隼樹が持つ『イメージ』は希少技能レアスキルとして、二人の騎士王は地球出身の例外的魔導師と言う事で何とかごまかす事に成功した。

そんなこんな色々な事があり、現在に至る。

自室に居る隼樹は、未だロビーでの忌まわしい記憶を引き摺っていた。

「はあ……いつそ死のうかな……」

「ジユンキ。落ち込む気持ちは解りますが、いい加減に元気を出して下さい」

隣に座っているセイバーが、励ましの声をかける。

しかし、なかなか隼樹は立ち直ってくれない。両手で顔を覆い隠し、俯いてしまう。

「だって……あんな恥ずかしいの初めてだったんすよ……？」

「全く、つくづく情けないマスターだな、貴様は」

壁に寄りかかっているセイバーオルタは、呆れてかぶりを振った。

しかし、一転して妖艶に笑みで落ち込む隼樹の前に歩み寄り、屈んで目線を合わせる。訝るセイバーが見てる前で、右手を伸ばして隼樹の顎を指先で掴み、顔を上げさせた。

「なんなら、私が慰めてやってもいいのだぞ？」

「え……？ な、慰めるって……？」

「勿論、身体でだ……！」

「待ちなさい、オルタっ！」

セイバーは顔を赤くさせ、半ば反射的に声を上げてオルタを睨んだ。

常識を持つ者からすれば、オルタの言動は少なくとも真昼間に言う事ではない。

「貴女は一体何を考えているのですか!？」

「決まっている。情けないマスターを、私が慰めてやろうと言っているのだ……身体を使ってな」

「ですから、ソコがおかしいのです! 他の慰め方を知らないのですか?」

「何だ? 自信が無いのか?」

オルタは挑発的で妖しげな笑みをセイバーに向け、隼樹に体を寄せた。お互いの体を密着させて、女性特有の胸の膨らみを押し付ける。独特の弾力と柔らかさ、体温で迫るオルタは妖艶な笑みの口から濡れた舌を出して、隼樹の首筋を舐めた。

「ひいつ!?!」

いきなり首を舐められ、くすぐったさに隼樹は悲鳴を上げた。

オルタの行為に、セイバーは顔を真っ赤にさせ、ワナワナと体を震わせる。

「ジユンキから離れなさいっ!」

「ならば、力づくで奪ってみせろ」

「上等です!」

挑発を受けて、セイバーは甲冑姿に変化した。

コレには、流石の隼樹も落ち込んでる場合ではなく、慌てて止め

に入る。

「ままま、待て待て！ お前達二人が暴れたら、冗談抜きで隊舎が跡形も無く吹き飛んじゃうから！ 俺なら、もう元気になったから！ 喧嘩は止めようよ！ ね？」

「しかし……！ いえ、マスターがそう言うのでしたら……」
「ふんっ。つまらん」

マスターが仲裁に入り、とりあえず両者は矛を収めた。

二人の衝突を防げて、隼樹は本気で心底安心した。

「ん？ 何だアレは？」

ふとオルタの目が、窓の外の光景を捉えた。

隼樹とセイバーも見ると、外の海上スペースに廃墟があった。

*

海上にある空間シュミレーターで、新人フォワード陣の訓練が行われていた。

ガジェット・ドローンと呼ばれる自律型機械兵を相手にした訓練で、リアリテイの高い廃墟が舞台となっている。相手のガジェットには、アンチ・マギング・フィールドAMFと呼ばれる特殊なフィールドを張る。これは、魔力結合を妨害して、魔法効果を打ち消すモノだ。魔法を駆使して闘う魔導師にとっては、厄介なフィールドで、セイバーの対魔力に似ている。

訓練に挑むのは、青髪の少女のスバル・ナカジマ、オレンジ髪の少女のティアナ・ランスター、赤髪の少年のエリオ・モンディアル、

ピンク色の髪をした女の子のキャラ・ル・ルシエの四人のチームだ。皆まだ新人だが、才能に溢れている将来有望な魔導師達だ。厄介なAMFに苦戦するものの、ティアナの指揮の下、コンビネーションでガジェットを撃破していった。一発の破壊力があるスバルは接近戦で挑ませ、エリオは得意のスピードを活かして反撃の隙を与えず、キャラは召喚魔法で鎖を出して相手の動きを封じたりとフローを行い、ティアナは『多重弾核射撃』と呼ばれる魔力の外殻で弾丸を覆って放つ魔法でAMFを突き破り、ガジェット本体の装甲を貫いていく。メンバーの能力を活かしたティアナの戦略で、見事に全機破壊する事が出来た。

新人四人の活躍を、教導官のなのはとシャリオ・フィニーノ通称・シャリーと呼ばれる眼鏡をかけた女性局員の二人が、一つの廃ビルの屋上から一部始終を見ていた。

新人とは思えない活躍に、シャリーは感嘆する。

「わゝ、凄い！ 全機撃破……！」

「うん。初めての訓練にしては、皆いい感じだね」

なのはも、満足げに頷いた。

「なのは」

不意に後ろから名前を呼ばれ、なのはは振り返った。

自分と呼んだのはシャリーではなく、いつの間にか屋上に現れたセイバー、オルタ、隼樹の三人だった。

「はええっ!？」

突然、隣に現れた三人に、シャリーは驚きの声を上げた。

一方、なのはは特に驚きもせず、落ち着いた様子で話しかけた。

「セイバーさん、セイバーオルタさん、それに隼樹さんも。どうしたんですか？」

「窓から、先ほどは見えなかった廃墟を目にしたので」

「ああ、そうでしたか。ココは、空間シミュレーターと行って、環境を自由に設定してリアリティの高い立体映像を作って訓練する場所なんです」

訪れた理由を述べたセイバー達に、なのはが場所の説明をした。

訓練と聞き、僅かにオルタの眉毛がピクリと動いた。

「つまり、今訓練を行っていると言う訳だな」

「はい。あ、でも丁度ついさっき終わったところです」

なのはが周囲に出してるディスプレイに、視線を向けた。

画面には、無事に訓練課題をクリアした新人四人が、喜び合っている様子が映っている。

「訓練内容は、どのような感じなのですか？」

「さっき終えたのは、ガジェットを相手にした模擬戦闘です。この後、しばらくは基礎をみっちり固めて、個々の能力を高めていこうと思っ
てます」

「基礎、ですか……」

今後の訓練予定を聞いたセイバーは、怪訝そうに呟いた。

基礎固めの目的は、おそらくフォワード四人の基本能力を底上げして、危険な目に遭わせないようにしたいのだろう。しかし、聞けばティアナとスバルは、訓練学校で一通りの訓練は既に受けており、エリオとキャラも保護者であるフェイトの下でそれなりに力を付けている。実際に、四人は自分達の力だけでガジェットを全て破壊し

ている。基礎固めを完全否定する気は無いが、それよりも少しでも多く実戦形式の訓練をするべきではないだろうか。

訓練の内容に疑問を抱くセイバーだったが、担当の教導官がなのはである以上、自分が余計な口出しをするべきではないと判断した。しかし、オルタは違った。

「高町」

「何ですか？」

「午後の訓練は、私にやらせる」

「えっ!？」

発言した本人以外が、一斉に驚きの声を上げた。

マスターである隼樹は、恐る恐ると言った風に訊いた。

「え……? 一体どういう風の吹き回し?」

「なに、最近体を動かしていないからな。鈍らないよう、動かしておこうと思っただけだ」

薄笑いを浮かべるオルタに、なーる、と隼樹は納得した。

それと同時に、新人達が危ないとも思った。温厚なセイバーと違って、オルタは妙に好戦的な気がある。ちゃんと手加減をするだろうが、オルタ一人に任せるのは危険だ。本人には悪いが。

隼樹の心配を他所に、オルタはなのはに教導の件を交渉する。最初は戸惑ったのはだが、高い実力を有し、何よりフェイトの師匠でもあるセイバーの分身のような存在だ。もしかしたら、自分では教えられない事を新人達に教えられるかもしれない。

「分かりました。それじゃあ、セイバーオルタさん、よろしく願います」

「ああ、任せておけ」

答えるオルタは、ニヤリと口元を歪めて笑った。
ソレを見た瞬間、シャーリーと隼樹は嫌な予感がして顔を引き攣らせた。オルタに背中を向け、声を潜めて囁き合う。

「あの、隼樹さん。彼女、大丈夫なんですか？」

「いや、大丈夫だと思いたいですけど……。うーん、やっぱり不安だ」

不安が拭えない隼樹は、一つ対策を起用する事にした。

「セイバー。セイバーも一緒に参加してくれない？」

「私ですか？」

「お願い……！」

必死に頼み込む隼樹の様子から、心情を察したセイバーは頷いた。

「分かりました。オルタが無茶をしないよう、見張ります」

「ありがとう」

こうして、セイバーとオルタの二強英霊サーヴァントが訓練の教導をする事になった。

*

午前の訓練を終え、休憩と昼食を済ませた後、午後の訓練の時間となった。

新人四人は訓練用の服に着替え、空間シュミレーターに集まっている。環境は午前と同じく廃墟で、体力と魔力を回復させ、起動し

たデバイスも構えて準備万端だ。

そんな一同の前に立つ臨時教導官は、騎士甲冑を纏ったオルタとセイバーの二人だ。

二人の噂はフォワード四人も聞いてるので、午前の訓練以上に緊張した様子をしている。

固まる一同の顔を見渡して、オルタは口を開いた。

「さて、訓練を始める前に、貴様等に確認したい事がある。青髪の貴様……！」

「は、はいっ！」

指名されたのは、短い青髪でボーイツシュな容姿をした少女のサブだった。少し上ずった声で返事をした。威圧的な雰囲気を持つオルタを前にしてるのだから、無理も無い。

ナチュラルに威圧感を放っているオルタに、居合わせてるセイバーは早くも眉根にシワを寄せた。

そんな周りの気疲れなど意に介さず、オルタは一つ問い掛けた。

「貴様等は基本四人一組のチームで闘うようだが、チームワークの意味を知っているか？」

「え……ええつと……」

いきなりの質問に取り乱すも、何とかサブは答える。

「はいっ……！ チームワークとは、チームの皆が力を合わせて一丸となって立ち向かう事です！」

訓練校でも、サブとティアナは教導官からそう教わった。今でも、ソレが正しいと思っている。

しかし、答えを聞いたオルタは、皮肉げに笑い、衝撃の言葉を言

い放つ。

「ふっ……！ やはりな……そんな考えでは、貴様等全員、死ぬな
っ……！ 間違いなくっ……！」
「ええっ……！？」

訓練校での教えを完全否定され、スバルとティアナは激しく動揺した。

エリオとキヤロも、それなりに驚き、目を丸くしている。
その時、たまりかねてセイバーが口を挟んだ。

「オルタ！ いくら何でも直球過ぎます！」
「だが、私は間違った事は言っていない。そうだろうか？」

オルタの問いに、セイバーは押し黙ってしまう。
言葉は選ぶべきだが、本質は間違っではない。だから反論出来なかつた。

それからオルタは、動揺収まらず、チームワークの意味について悩むフォワード四人に言った。

「とりあえず、“真のチームワーク”の意味は頭の片隅にでも置いておけ。

早速、訓練を始めるが……内容は、私が相手をする四対一で行う
実戦形式の模擬戦だっ……！ その際、私は貴様等を“殺す気”で
かかる……！ だから貴様等も、本気で、必死になって、全力で生
き残るよう動けっ……！ 相手を倒そうなどと考えるな……とにかく
く、生き残る事だけを考えろっ……！ いいな？」

笑みを浮かべたオルタを見て、フォワード一同は背筋に悪寒を感じた。

今まで感じた事が無い本物の“殺気”と“命の危険”だった。周囲の空気が下がり、冷や汗を流し、恐れを抱いた途端に足は震えだす。

凍りつく一同を前に、オルタは妖しくも恐ろしい笑顔で黒い約束クスカリパーされた勝利の剣を構える。

「さあ、始めるぞ……！」

冷徹な声で、訓練開始の合図をした。

自分（前書き）

言い忘れてました。

リインフォースが生存してるので、本来彼女の消滅後に二世として生まれるツヴァイは登場しません。

ツヴァイファンの皆さん、すみません！

自分

オルタの実戦形式の訓練は、フォワード四人にとって地獄の時間だった。

混じりつ気なしの本気の殺気を当てながら、迫りくるオルタは四人の目には悪魔か戦鬼せんきに見えていた。一応攻撃の際には手加減されるが、それでも容易にアスファルトの地面を斬り、ビルの壁を破壊し、凄まじい剣圧を放っていた。想像を超えた威力を誇る凶悪な刃に、これで本当に手加減してるのか、と疑問に思うのも一瞬で、仰天すると同時に圧倒的恐怖を憶える。

ティアナが牽制で放った魔力弾は、オルタの高い対魔力で簡単に掻き消されてしまう。ガジェットのアMFを貫通した多重弾核も撃つたが、通常魔力弾と同様に無効化されてしまい、激しく動揺した。その他にも、全員が一通りの魔法を繰り出したが、全て対魔力の前に無効化されてしまった。魔導師の武器である魔法を封じられては、とてもじゃないが勝ち目は無い。

ティアナとスバルは、機動六課に訪れる前に陸士386部隊に所属して、突入隊フォワードとして危険な任務も、それなりにこなしてきた。しかし、今行ってる模擬戦は、ソレ等がお遊戯のように思える程に過酷且つ危険な状況で、まるで別物だった。

自分達の力が一切通用しないと悟って理解したフォワードの四人は、指示された通り“生き残る”事だけに全力を注ぎ出した。初めて感じる“迫りくる死の恐怖”を切り抜ける為に、四人は知恵を絞り、魔力を最後の一滴まで使いつくす。

最初は様子見をしていたセイバーだったが、オルタが過剰な攻撃を仕掛けそうになった時は、すかさず止めに入った。怪我をしない“ままごと訓練”など生温いが、万が一にも戦闘不能状態にさせる訳にもいかない。

時折セイバーが止めに入りつつ、午後の地獄模擬戦は続けられた。

その様子を、隼樹、なのは、フェイト、アリシア、ヴィータの五人は、心臓をハラハラドキドキしながら見守っていた。

「容赦ねーな、セイバーオルタ……！ セイバーを参加させといてホント正解だったよ……！」

「ああ、ああ……！ エリオ！ キャロ！」

二人の保護者であり、過保護な面があるフェイトは、もう気が気じゃなかった。心配し過ぎて、拳動不審になっている。

そんな彼女を、姉のアリシアが落ち着かせようとする。

「フェイト、落ち着いて！ セイバーが付いてるんだから、大丈夫だよ！」

両肩を掴んで、耳元で声をかける。

アリシア・テストアロツサも妹と共に入局して、二等陸士として機動六課に所属している。魔法の才能はフェイトより劣るが、それでもランクは陸戦AAAと言う高い実力を備えている。

取り乱すフェイトと宥めるアリシアの姉妹のやり取りを隣に、なのはも苦笑していた。

「ううー！ セイバーオルタさん、^{かげき}過激過ぎるよ……！」

闘いの厳しさや、戦場においての命の危険性を教える事自体は、なのはも反対する気は無い。

しかし、物事には順序と言うモノがあり、いきなり過激過ぎる地獄模擬戦は、新人の四人には早すぎるように思えた。だが、今の教官はオルタであり、ソレを許したのは他でもないなのは自身だ。故に、意見出来ず、ただ見守る事しか出来ずにいた。

悪魔的かつリアル鬼ごっこ的な模擬戦は、オルタが終了宣言をす

るまで続けると言う、何ともアバウトな決まりになっている。しかも、手加減していても実力差があり過ぎて、オルタが一方的に新人四人を追い詰める戦況だ。傍から見たら、リンチと捉われかねない光景である。

結局、フォワード四人は、全員がオルタに撃墜されてアウトとなった。魔力も体力も全て使い果たし、疲労困憊の状態で地面に倒れている。まだ恐怖が抜けきれず、体は小刻みに震えてる。仰向けになった一同の視界には、夕焼け空が広がっていた。

疲れ切った一同を見下ろすオルタには、全く疲労の色が見えない。汗もかかず、呼吸も全く乱れてないどころか、かすり傷一つ付いていなかった。

「まあ、初めの内はこんなものだろう」

オルタが見下ろす先で、フォワード四人は、切れ切れに呟く。

「し……死ぬ……！ 死ん、じゃ、う……！」

「な、なのは、さんの……訓練も、キツかった、けど……！ セイ、バー……オルタ、さんの……もう、次元が、違う……！」

「キャ……キャロ……。大丈夫、夫……？」

「う、うん……」

激しく呼吸を乱す四人は、もはや喋る事すら辛くなっていった。特にまだ若過ぎる上に女の子のキャロは、一言返すので精一杯の状態だ。

「皆さん、よく頑張りましたね」

立ち上がる事すら出来ない程に疲労した四人を、セイバーは労った。

その一言が、心身ともに疲れ切った四人の心中に、沁み渡っている。たった一言で、これ程嬉しく思ったのは、初めてだった。しかし、そんなフォワード一同に、オルタから戦慄の言葉が告げられる。

「今日のところは終わりだが、これから午後の訓練はほぼ全て私との実戦形式の模擬戦だ。覚悟しておけ……!!」

「ええええええええええええ……!!?」

衝撃の予定を知らされ、フォワード四人は最後の力を振り絞って絶望の声を上げた。キャロはもう限界に達したようで、喉を枯らして激しく咽出す。

「待ちなさい、オルタ!」

これには、流石のセイバーも我慢出来ずに声を上げた。

「いくらなんでも、毎日貴女と訓練をしているには、新人達の身が持たない。それに、いつ出勤するか解らないのですよ? せめて二日空けるか、それが出来なければ、代わりに私が彼女達の相手をお願いします」

「ふむ……」

聞いたオルタは、セイバーの意見を一蹴したりせず、顎に手を添えて考え込んだ。

そして、この時の新人四人の心中は一つ。

セイバーさん! 私達を救ってくださいっ!

救世主に見えるセイバーの意見が通る事を、必死に、そして心を一つにして切に願う。

ややあって、オルタは口を開いた。

「いいだろう。ならば、たまに休日を挟みながら貴様と私で交代してやる事にしよう。明日の新人達の相手は、貴様がやるのだぞ？」
「分かりました」

セイバーさん、ありがとうございますっ！

フォワード四人は、心中にお礼を良い、快哉を叫んだ。明日の休みは取れなかったが、連続でオルタの相手をすると言う最悪の展開だけは免れた。

屋上から見守っていた隼樹達は、フォワード四人が無事に訓練を終えた事に、とりあえず安堵した。

*

訓練初日から始まった、騎士王様によるスパルタを超えた超スパルタ模擬戦と言うか、コレただの新人イジメじゃね？ 的訓練」
は、たまに休みを挟みながらほぼ毎日続けられた。

午後の訓練は、セイバーとオルタの交代で行われる本格実践形式の模擬戦で、新人達がやる事は基本的には変わらない。とにかく、生き延びる事に全力を尽くす。

オルタ程酷くは無いが、普段は温厚なセイバーも訓練となれば、殺気をぶつけて襲い掛かってきた。対するフォワード四人も、最初は死の恐怖に怯えて体が竦み、動けなくなってしまふ事もあった。だが、訓練を続けていく内に、怯えながらも生き延びる道を模索するようになり、また行動も起こすようになっていった。

射撃魔法を専門にするティアナは、迫りくる相手の顔目掛けて魔力弾を発射して、時間稼ぎの目くらましを作る。エリオとスバルは得意の機動力を活かして、ティアナとキャロをフォローするように

なった。キャロは使役竜のフリードリヒの火炎を使い、ティアナも動き回り、相手の動きや仲間達の状況を観ながら指示を出す。色々と工夫を凝らし、自分の持てる力を最大限に発揮させて地獄の時間を生き抜いていく。

なのはの訓練で基礎を固め、セイバーとオルタによる模擬戦で実戦の恐さを体験しながら実力を上げていった。

当然、そんな激しい訓練にデバイスは耐えられず、実戦用デバイスに切り替える事となった。予定よりデバイスチェンジの時期が早まったが、構わず訓練は続けられた。

*

そして、地獄訓練が続いて数日が経った。

フォワードの四人は、最初の頃より大分恐れで動きが鈍らなくなり、撃墜されるまでの時間を伸ばしていた。訓練の空間も廃墟や荒野、森林と変えていった様々な場所に対応出来るようになっていく。昼食を済ませて少し休み、午後の訓練に行こうとした時だった。

隊舎内で、アラームが鳴り響いた。山岳地帯を走るリニアールでレリックらしき物とガジェットの襲撃を確認して、出動命令が出されたのだ。

スバル、ティアナ、エリオ、キャロの四人にとって初実戦任務だ。

「皆！ いけるね？」

「はいっ！」

なのはの声に、フォワード四人は力強く答えた。

前日はセイバー達による訓練は休みだったので、体力も魔力も充分に回復している。出動には問題無い。

ふとフォワードの四人は、出勤の見送りにきたセイバーとオルタを見つけた。小さく頷くセイバーとオルタに、フォワード四人は敬礼をした。

そして、初出勤した。

*

パイロットを務めるヴァイス・グランセニツクのヘリで、なのは達を乗せたヘリは山岳地帯を目指す。フェイトは別件で外に出ていて、飛行して現場に駆け付けるそうだ。新人達の実力を試すと言う事もあり、副隊長であるシグナムとヴェータは欠員している。

航空型のガジェットが多く接近しており、空の敵はなのはとフェイトの二人が殲滅する事になった。フォワードの四人は、直接リアレールに移り、車内のガジェットを破壊しつつレリックを確保する事が役目だ。

不意に、スバルが口を開いた。

「何か、あんまり緊張しないね」

「そうですね」

隣に座ってるエリオが、頷いた。

二人だけでなく、ティアナとキャロも初の実戦だと言うのに、不思議とあまり緊張していなかった。いや、実戦に挑む怯えや不安が少ない、と言った方が正しいか。セイバーとオルタの二強による、過激な模擬戦を受け続けてきた影響だろう。

しかし、だからと言って気を抜いてはいけない。

そう思ったティアナが、二人に注意する。

「アンタ達、緊張し過ぎないのはいいけど、緊張感を持ってなさいよ」

「ご、ごめん、ティア」

「そ、そうですね。セイバーさん達の訓練でも、ずっとそうしてきたんですから」

スバルとエリオは素直に謝り、セイバー達との訓練の体験を思い出した。

気を引き締め、任務に挑む緊張感を持つ。

そして、ヘリ後方のメインハッチが開かれた。

「じゃあ、先に出て空の敵は引き受けるから、皆は列車をお願いね」

「はいっ！」

フォワード四人の迷いや恐れのない返事を聞き、なのはは安心して空に飛び降りた。そして、空中でセットアップしてバリアジャケットを身に纏い、レイジングハートを構える。飛行魔法で空を舞い、駆け付けたフェイトと二人で航空型のガジェット？型殲滅に動く。

一方、なのは達がガジェットの相手をしてるお陰で、ヘリは無事に降下ポイントに着いた。フォワードの四人は、なのはのように空中ではバリアジャケットを展開せず、ヘリの中で行った。コレも、安全確実に戦闘準備を整える為だ。

「スターズ3、スバル・ナカジマ！」

「スターズ4、ティアナ・ランスター！」

「行きますっ！」

まずは、スバルとティアナが先行してリニアレールの上に着地した。

「ライトニング3、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「行きますっ！」

続いて、エリオとキャロ、それにフリードも無事に列車に降りた。全員が着地してすぐに、車内に潜り込んでガジェットが動き出す。ガジェット？型の黄色いレンズから光線が放たれ、天井を破って表に出てきた。

その時には、既にティアナが拳銃型デバイス『クロスミラージユ』を構え、射撃体勢に入って待ち構えていた。

「シュートっ！」

オレンジ色の魔力弾が発射され、AMFを貫き、そのままガジェットの装甲を貫通して破壊した。

畳みかけるように、スバルがローラーブーツ型デバイス『マツハキヤリバー』で突っ込み、空いた穴から車内に入り、籠手型デバイス『リボルバーナックル』の突きでガジェットを一撃粉碎する。初陣の緊張による動きの鈍りも見られず、次々とガジェットを破壊していく。

スターズとライトニングは、それぞれ前方車両と後方車両に分かれ、挟み込むように突き進む。

ティアナとスバルは、前方車両から制圧しにかかった。相手のガジェットは、力で劣る分は数に物を言わせて襲い掛かってくる。

私が道を作るんだっ！

後方のティアナの援護射撃を受けながら、スバルは敵に突っ込んだ。

「リボルバーシュート！」

リボルバーナックルのスピナーを高速回転させ、加速させた衝撃波を放つ。

強力な衝撃波は、眼前に立ち塞がるガジェット of 装甲をひしゃげ、本体を破壊した。ついでに、その先にある列車の扉も壊して道を開いた。

一方、後方から攻めるエリオとキャロのコンビの前に、大型のガジェット？型が立ち塞がった。上部から太いアームを伸ばして、攻撃してくる。ソレをエリオは、得意の高速移動でかわし、一気に懐に潜り込む。槍型デバイス『ストラーダ』の刃に魔力変換させた電撃を付与させ、ボディを下から斬り上げるように振り上げた。が、装甲が思った以上に硬く、切り裂けない。刃と装甲の間で、激しい火花を散らせる。

「くっ……！」

苦戦するエリオの前で、ガジェットは強力なAMFを展開させる。効果が強く、間近のエリオの電撃は掻き消されてしまった。

「エリオ君！」

戦況が悪い流れに傾いてる事に気付き、キャロは考える。

私が何とかしなきゃ！

エリオが敵を押さえてる間に、キャロは車内を見回し、傍で飛んでるフリードを見る。

そして、一つの手段を思い付き、実行を決意する。魔力を高めてAMFに抗い、フリードに指示を出す。

「フリード！ 天井に向けてブラストフレア！」

「きゅ〜！」

フリードは開いた口に火炎を溜め、天井に向けて放つ。火炎の直撃を受け、天井に大穴が空いて空が見えるようになる。

「エリオ君！ 一旦下がって！」

「分かった！」

キャロの指示に従い、エリオはガジェットから離れて大穴から列車の屋根に移った。

先にキャロは屋根に居て、足下にピンク色の魔法陣を展開している。何か魔法を仕掛けるつもりだ。両手にはめられたグローブ型デバイス『ケリユケイオン』の甲部分の球体が、強い輝きを発する。

「竜魂召喚っ！」

魔法の発動と同時に、フリードの小さな体が光に包まれた。

光が収まると、中から現れたのは巨大な白い竜だった。成人よりも遥かに大きな巨体を誇る白い竜は、キャロの魔法によって本来の姿に変身したフリードである。セイバー達との命懸けの訓練の中で、竜を制御する力を得ていたのだ。

フリードの赤い眼は、車内に居るガジェット？型を睨んだ。

「フリード！ ブラストフレア！」

グオオオオオオオオオオオオ！

巨体に見合った野太い雄叫びを響かせ、フリードは口に火炎を溜める。

そして、ガジェットに向けて放射した。オレンジ色の火炎は、大型ガジェットのボディを軽く飲み込んだ。AMFで防ぐので精一杯

のようで、反撃してこない。それを見たエリオは、好機と見て動く。

僕が決めて終わらせるっ！

再び槍先の刃に電撃を付与させ、重力と振り下ろす勢いと腕力を乗せ、ガジェットに斬りかかる。今度はAMFを破り、しかも火炎の熱で装甲が溶けて脆くなり、ストラダの刃が通った。自分よりも大きな機体を誇るガジェットを、上から真つ二つに両断する。断面で放電を起こし、機体は爆発した。

「エリオ君！」

喜びと安心から、キャロは笑顔で声を上げた。

車両内と外のガジェットは全て殲滅され、レリックもスターズのスバル達が確保した。コントロールも取り戻して、車両を止める事も出来て、無事に任務は完了する。

*

同時刻のとあるラボ。

一人の男が、広々とした研究室で、リニアレールでの機動六課の活躍を眺めていた。白衣を着た男は、ジェイル・スカリエツィ。

広域指名手配されている違法研究者で次元犯罪者だ。彼が眺めているモニターには、今の機動六課の戦闘データが表示されている。

そして、真横には小型のディスプレイが展開しており、一人の女性映っていた。ウエーブのかかった紫色をした長髪の女性は、戦闘機人？1のウーノだった。

『ドクター。追撃のガジェットを送りますか？』

「いや、止めておこう。レリックは惜しいが、機動六課の戦闘デー

タが録れただけで、良しとしよう」

ウーノに答えたスカリエッツィは、大型モニターに顔を戻した。

「それにしても、この案件はやはり素晴らしい。私の研究にとって、興味深い素材が揃っている上に……」

一旦言葉を切り、映像を切り替える。映し出されたのは、フェイトとエリオだった。

顔の笑みを深め、スカリエッツィは言葉を続ける。

「生きて動いている『プロジェクトF』の残滓を、手に入れるチャンスがあるのだから……！」

しかし、出来る事なら、彼等の戦闘も観戦したかったね」

また画面を切り替え、別の人物が映し出される。大型モニターに並ぶのは、セイバー、セイバールタ、そして隼樹の三人である。

前の二人は恰好よく剣の構えを決めているが、何故か隼樹だけ漫画雑誌を読んでいる姿だった。

小型ディスプレイに映るウーノが、口を開いた。

『今回は、初出勤で新人達の実力を試す機会であつたらしく、三人は同行なさらなかつたようです』

「ふむ……。また機会があるだろうとは言え、やはり残念だね。ミッドチルダの魔導師や魔法とは異質の力を有する三人を、是非この手で隅々まで調べたいものだよ……！」

モニターに映る三人の顔を見て、スカリエッツィは不気味な笑みを一層深めた。

*

無事に任務を終えた一行は、機動六課隊舎に帰還した。帰ってきたスバル達を出迎えたのは、セイバーだった。先頭に居たスバルが、セイバーに気付いた。

「あ、セイバーさん」

「お疲れ様です。無事に任務を終えて、何よりです」

隊舎に残っていたセイバーも、管制室の画面で様子を見ていた。

「はい！ これもなのはさんや、セイバーさん達の教導のお陰です！」

初任務から帰ったばかりだと言うのに、スバルは元気だった。

そんな相棒にティアナは半ば呆れ顔で笑い、エリオとキャラも笑顔を向かい合わせる。

和やかな雰囲気です、セイバーは唐突に言った。

「無事に任務を果たせたと言う事は、皆も“真のチームワーク”を理解したようですね」

「え………？」

セイバーの言葉に、フォワード四人は意表を衝かれたように呆けた顔になる。

そう言えば、セイバーオルタさんが言ってような。

新人達の後ろに立つなのはも、彼女の言葉を思い出す。

するとセイバーは、メンバーの中からキャラを指名した。

「では、キャラ。真のチームワークについて、貴女の答えをどうぞ」
「えっ……！？ あの……その……」

急に話を振られ、キャラはどう答えればいいのか解らず、口ごもってしまふ。

他のメンバーも答えに窮する中、セイバーは無言で答えを促す。やがて、キャラは静かに口を開いた。

「えっと……実は、その……私、訓練の時も、今日の任務の時も、チームワークの話忘れてました……。その……“皆で協力する”とか、あんまり考えなくて……。」

それよりも考えてたのは、“私が何とかしなきゃ”とか“私がエリオ君を護らなきゃ”……そんな事ばかりで……。」

キャラの言葉に、他の三人も心中で同感と頷いていた。皆、キャラと同じ考えだったのだ。

そして、キャラの答えを聞いたセイバーは、満足そうに笑った。

「キャラ、正解です」
「えっ！？」

答えたキャラ本人が、驚きの声を上げた。まさか、合っていると思わなかったのだ。

スバル達やなのはとフェイトも、意外そうな顔をしていた。

驚く一同に、セイバーは説明した。

「“チームワーク”と聞くと、殆どの人は「皆で力を合わせて立ち向かう」と答えます。ですが、ソレはオルタが言うように間違った認識です。」

“真のチームワーク”とは、『皆が』では無く『自分が』なのです！ 『私が』『僕が』『俺が』と言う意識を全員が持つて挑む事が、個々の能力を高めのです。皆が力を合わせるとは、聞こえはいませんが、それではただの慣れ合いに終わってしまう。助け合うのではなく、『自分が』助けるんです！

そして、コレはチームに限った事ではありません。今は四人一組、二人一組で闘っていますが、いずれ遅かれ早かれ一人で闘う時が来ます。そんな局面を迎えれば、自分一人だけで頼れる者など他には居ません。だからこそ、『自分が』と言う強い意識が必要なのです。自分の力一つで、戦局は変えられるのですから。

どうか忘れないで下さい。『自分がやる』………単独でもチームでも、そういう気持ちで臨めば、諦めずに困難に立ち向かう事が出来ると言う事を………！」

セイバーの説明が終わると、場は静まり返った。

地獄のような訓練で皆を追い詰めたのは、ただ単に殺気や恐怖に慣れる為ではなく、困難で危険な状況で『自分が』と言う意識を根付かせ、真のチームワークを解らせるのが目的だったのだ。

その事に気付いたフォワード四人は、セイバーに頭を下げた。

「セイバーさん、ありがとうございます！」

「いいえ。私はただ説明しただけで、実際に手助けをしたのはオルタです」

「あの………」

なのはの隣に居るフェイトが、控え目に手を上げた。

「そのセイバーオルタは、何処ですか？」

「え………？」

言われてセイバーは、周囲を見回した。

フェイトが指摘した通り、オルタの姿は無かった。管制室で、スバル達の戦闘を見ていた時には、確かに一緒に居たはずだ。

姿が消えたのは、おそらくスバル達が無事に任務を終えたのを確認した後だ。

その時、ハツとセイバーは目を見開いた。

「しまった……！」

「セ、セイバーさん!？」

一同の声も聞かずに、セイバーは慌てて踵を返して隊舎内に駆けこんだ。

階段を駆け上がり、廊下を走り、壁に並ぶ扉の一つを乱暴に開けた。

室内を見て、衝撃の光景をセイバーは目にして固まった。

「セ、セイバー!？」

「チツ……! 思ったよりも早く戻ってきたな」

驚きの声を上げたのはリインフォース、忌々しげに舌打ちしたのはセイバーオルタ。

二人で何をしていたのかと言うと、答えは部屋の主にあった。リインフォースとオルタは、隼樹を挟み込む形で寄り添っていた。セイバーをフォワード陣の出迎えに行かせ、その隙に隼樹の身体を愉しもうと言う魂胆だったのだ。

「セ、セイバー……! いや、あの、これは……!」

マズイ場面を目撃され、隼樹は顔を引き攣らせる。

しかし、既に遅かった。

自分（後書き）

主人公の出番が少ない？

主人公の活躍が全然無い？

いいんです。だって、隼樹だもの。

教会（前書き）

今回は、あの女性キャラがちよいヤバい事に……。
うん、大丈夫かコレ？

教会

フォワード隊の新人四人は、今日も早朝から訓練に励んでいた。セイバーとオルタの二人から受けた模擬戦と初任務の成功が、良い刺激になったらしい。以前よりも増して、訓練に熱が入っている。基本的には、午前と午後は正規の教導官や上司であるのはやフエイト達が教導するのだが、週に二、三回の割合で騎士王による実戦形式の訓練は続けられる事になった。こういう訓練は、折角覚えた感覚を鈍らせない為にも、続けていく事が大切なのだ。回数が減ったとは言え、訓練の中身は相変わらず殺気をぶつけてくる厳しいモノである。

初任務を終えてからは、個々の能力^{スキル}アップを目的とした個別指導に入った。なのは、フェイト、ヴィータが参加して全体的に訓練はハードになってきた。森林に変化させた空間スペースで訓練に励む一同を、セイバー、オルタ、アリシアの三人が見学していた。時折見学している彼女達からも、助言が入る時があった。

例えば、こんな感じである。

なのはは、ティアナの能力アップの為に、射撃型の基本思想と技術を徹底的に鍛えようとした。具体的に説明すれば、定位置に立つて、なのはが動かす的を射撃で撃ち落とす訓練である。

チームの中央に立ち、誰よりも早く中長距離を制する。ソレが、自分やティアナのポジションであるセンターガードの役目だとなのはが語った。

しかし、ココで見学していたオルタが口を挟んだ。

「ソレは賢明な態勢では無いな。確かに、チームの中央に立って戦況を見渡して把握する事は大事だ。が、場合によっては、突っ立っている者は狙い撃ちされる標的以外の何者でもない。ランスターは、高町のような砲撃タイプではなく、小回りの利く二丁拳銃が武器だ。

ならば、狙い撃ちを許さないよう動き回り、敵を制すると言う戦術も叩き込んでおけ」

オルタの指摘を受けて、なのはは自分とティアナの明らかな違いを自覚した。

なのはは一発のある砲撃タイプだが、ティアナは主に手数と小回りで攻める射撃タイプだ。センターガードと言う位置は同じでも、戦闘スタイルが根本からして違う。

ズバズバ遠慮なしに指摘してくるオルタだが、決して間違っただけではない。

教官であるなのはも、時折勉強になる時がある。まだ十九歳と言う若さなのだから、完璧に人に物を教えろと言う方が無茶である。寧ろ、ココで間違いや新たな発見が出来る事は、幸いと考えるべきだ。

こんな具合で、隊長陣も新人達も一緒になって訓練に励んでいた。

*

機動六課で訓練が行われている頃、隼樹は別の場所に居た。

場所は、ミッドチルダ北部ベルカ自治区『聖王教会』大聖堂だ。

かなり大きな教会建物で、数多くの次元世界に影響力を持つ何気に凄い組織でもある。

そのデカイ組織の建物の入り口に、隼樹とはやての二人が佇んでいた。連れて来られた隼樹は、目の前に聳え立つ教会の高さに圧巻する。

「いや、しかしデカイな〜！」

「そやる？ 私も、初めて来た時は驚いたわ」

横で驚いてる隼樹を、はやては笑って見ていた。

その時、扉が開いて教会の人間が出てきた。入る際に、巡礼用のケープを手渡され、身に纏うよう言われた。何でも、制服や私服では、教会の巡礼者を不安にさせてしまうらしい。管理局の中 特
に地上本部 には、強い権力を持つ教会を嫌って敵視している者も少なくない。そう言った不仲な関係が、起因しているのだろう。

面倒臭いと思いつつも、隼樹は言葉に従って巡礼用ケープを身に纏った。

そして、はやてと案内の職員と共に教会の中に、足を踏み入れた。今回、隼樹がはやてに連れられて聖王教会なんて所に訪れたのは、理由がある。機動六課の設立に貢献して、後盾にもなっている人物に会いに行く為である。はやてとその人物は知り合いなのだが、隼樹はまだ顔を合わせてはいない。六課も発足されて、民間協力者として協力していく関係となつて良い機会なので、顔合わせをする事になったのだ。ちなみに、会った事は無いが、隼樹はその人物が誰なのか見当はついていた。

正体は解っているのに、警戒すべき相手でも無い事も解っている。だと言うのに、何故か廊下を歩く隼樹は得体の知れない不安を感じていた。ケープの下の顔を顰めて、妙な緊張感を抱く。

何なんだよ……？ 自分でも解らないけど、何か妙な胸騒ぎと言つか……嫌な予感がするんだよ……。

不安を胸に、隼樹ははやてと二人で一つの扉の前で立ち止まった。はやてが手を伸ばし、軽く扉にノックをする。

「どござ」

扉の向こうから、綺麗な声が返ってきた。

「失礼します」

一言断り、はやてが扉を開ける。部屋の中に入り、ソコでようやくケープを外せた。

先にケープを外したはやてが、室内で待っていた人物と挨拶を交わす。

「久しぶりやな、カリム」

「ええ。いらっしやい、はやて」

明るい二つの声に、ケープを脱ぎ終えた隼樹が顔を向けた。ソコには、金髪の美少女が居た。長い金髪は腰まで届いて、窓から差し込む光を受けて煌びやかに光沢を放っている。頭には、紫色のリボンをカチューシャ風に付け、黒をベースとした修道服らしき恰好をしていた。陽の光を背にして微笑んでいるからか、聖母のような温かみがある印象を受ける。

超綺麗じゃん……！

リアルで見るカリムは、かなりの美少女だった。セイバーに勝るとも劣らない容姿で、彼女とはまた違った魅力が感じられる。

隼樹が見惚れていると、カリムが挨拶をしてきた。

「初めまして。聖王教会騎士団の騎士、カリム・グラシアです」

「あ、どうも。初めまして。葉谷資隼樹です」

丁寧なお辞儀をするカリムに対して、隼樹も会釈する。

「立ち話もなんですから、どうぞお掛けになってください」
「ど、どうも」

カリムに促され、隼樹とはやては近くの椅子に腰をかけた。

あまり彼女のようない丁寧な対応を受けた事が無いので、隼樹は余

計に緊張していた。

三人が席に着くと、職員がタイミング良く紅茶を運んできてくれた。

テーブルに置かれた紅茶を見て、隼樹は心中にヤバい、と思った。実は彼、紅茶が苦手なのである。甘い物は好きだが、紅茶独特の甘みがどうしても受け付けられないのだ。まあ、しかし、飲めない程に完全に駄目と言う訳でもないのだから、残すのも悪いと思い、飲む事にした。カリムとはやてが飲んだ後に、自分も一口飲む。うん、やっぱり好きになれない。

「隼樹さん。はやてから聞きましたが、『イメージ』と言うレアスキルをお持ちのようですね」

「ええ、まあ……」

「もし、よろしければこの場で見せていただけないでしょうか？」

ハア、とカリムの要望に隼樹は頷いた。

能力を披露する事になり、何を実体化させるか考える。ややあって、ベタだけどこレかな、と頭の中で一つチョイスした。

無言でテーブルの上に両手を出し、頭の中で出す物を想像する。イメージ

突如、隼樹の両手が光に包まれ、見守るカリムは目を細める。次の瞬間、彼の手に現れたのは、二振りの双剣だった。中華風のデザインが施された白と黒の双剣は、正義の味方を目指した男が愛用していた『干将・莫耶』かんしょう・もへだ。過去に生み出した時は、剣の重みに苦しんだが、今回はちゃんと事前に『双剣の重みに耐えられる自分』をイメージしていた。

突然、手に剣を出した現象に、カリムは面食らった。

「話には聞いていましたが、本当に何も無い所から物を生み出せるのですね……！ 驚きました。何でも生み出せるのですか？」

「いえ、何でもって訳にはいきませんよ。魔力量を超えた事象は実

現出来ませんし、物も強力過ぎるのは作れませんから。まあ、万能じゃないって事です」

軽く説明をして、隼樹は干将・莫耶を消した。

彼の能力を整理しよう。実現不可能の例は幾つかあり、その中の一つが『無限の剣製』だ。アンリミテッドブレードワークス現実世界を侵食して、術者の心象風景を現す大禁呪。ジュエルシードの魔力では世界を侵食する事は出来ないの、コレは実現不可能。

次に宝具の精製。セイバーが使ってるような超強力な宝具『約束された勝利の剣』は、あまりに高ランク過ぎて、ジュエルシードでは再現し切れない。干将・莫耶のようなある程度ランクが低い物ならば、実体化は可能。

本人も言っていたが、要するに体内にあるジュエルシードの限界を超える現象は起こせない、と言う事だ。一見チートのようだが、決して万能ではない。

「それでも、凄い魔法だと私は思います。他の方には、とても真似出来るような事ではありません」

「まあ……そうです、ね……」

お褒めの言葉を頂いた隼樹だったが、あまり素直に喜べなかった。確かに能力に制限はあるが、『イメージ』は凄い。だが、決して“隼樹本人”の能力では無いのも事実。あくまで偶然体内に宿したジュエルシードすいかいの力であり、自分が凄い奴だと思った事は一度も無い。

そんな事情があつて、他人に褒められても隼樹は素直に喜べずにいた。

紅茶を楽しみながら（約一名除く）、しばらく部屋で雑談をした。

話題は、セイバー達や、その騎士王様コンビにしごかれたフォワードの四人の事など最近起こった出来事だった。

「それじゃあ、そろそろ戻ろうかな。六課の仕事もせなあかんからね」

時計を確認したはやてが、席を立った。

やっと解放される、と隼樹は心中に溜め息をついた。美少女と話が出来るのは悪くは無いが、男が自分だけと思うとどうしても落ち着かなかったのが本音だ。

隼樹も次いで席を立ち、退室前にケープを被ろうと手を伸ばした時だった。

「あつ、ちよつと待って下さい！」

「はい？」

急にカリムに呼び止められ、二人は退室する動きを止めて振り返った。

「はやて。彼と、もう少し話がしたいから、残ってもらっていいかしらっ。」

「え？ まあ、隼樹さんには特に仕事は無いから、本人さえ良ければ構わんけど……」

「どうでしょうっか？」

カリムが尋ねてきたので、隼樹は考える。

断つてもいいのだが、今後の事を考えると無下にするのは良くないかもしれない。まあ、時間もそんなにかからないだろう。

「解りました。俺は別にいいですよ」

「ありがとうございます」

「ほんなら、私は先に戻ってるから」

ケープを被り、はやては先に退室した。

「それで話つて……っ!？」

はやての退室を見届け、振り返った時だった。

急にカリムが、隼樹に抱きつき、身を寄せてきたのだ。二人の身長は同じ位なので、彼の真横にカリムの綺麗な顔が添うような形になっている。胸部には、立派に膨らみのある胸が押し当てられていた。

突然の予想外の展開に、隼樹は動揺を禁じ得なかった。一気に顔を赤くさせ、取り乱す。

「は、はあっ……!？ ちょっ……カリムさん……!？ な、なな、何して……!？」

「この聖王教会では、過去に男女の関係に堕ちた事が原因で、ある大事件が起きました。その事があり、以後、教会の者は職員同士の恋愛行為が禁止されたのです」

隼樹の取り乱す様を意に介さず、唐突にカリムが教会の事について語り出した。

な、何言ってたんだ、この人……!？ 何の話をしてるんだ……? 教会の人間同士の恋愛が原因で起こった大事件……?

混乱する隼樹の頭に、思い当たる事件が一つ浮かび上がった。

ああっ……! もしかして、『聖骸布盗難事件』か……!？

ドゥーエが教会のシスターに成りすまして、聖骸布の管理を担当してた司祭を誑かして盗ませたって言う……!

隼樹の考えは、当たっていた。

あの事件以降、教会は職員恋愛を固く禁じる規則を設けた。そんな規則に縛られ、教会内での男女間では見えない壁が出来ていた。しかも、教会の職員であり、上の立場に立つカリムは、気軽に外出する事すら出来ない。つまり出逢いが無い、教会に閉じ込められた箱入り娘状態なのだ。

流石に外出禁止の件までは知らないが、恋愛に縁が無い状態なのは解った。

でも、だからって俺を選ぶか？ と言う気持ちはあった。俺を相手に選ぶなんてどうかしてるぞ、と言うのが隼樹の本音である。

くそ〜！ 俺が感じてた胸騒ぎは、コレかあ〜！

「いや……いや、事情は解らなくも無いですけど……」
「私では、ご不満ですか？」

潤んだ涙目で、カリムが迫ってきた。

その可愛さに、ぐう、と隼樹の心は激しく揺れて呻く。

「いやいや、不満とかそういう事じゃなくてですね、相手はちゃんと選びましょって言うてるんですよ……！ 俺は、もう四人の女性と付き合ってるような、その優柔不断と言うか、節操無しと言うか……とにかく、駄目な男なんですよ……！！」
「そんな貴方を誘惑してる私は、もっと酷い女です……！！」

自分を卑下して引き離そうとする隼樹だったが、相手は更に上を行っていた。

「聖王教会騎士団に身を置く騎士ですが、私はそんな綺麗な女では無いんです……！ 隼樹さん……そんな私を、受け入れてくれますか……？」

問い掛けながらカリムは、顔を近付けて迫ってくる。

壁を背にしている隼樹は、逃げる事も抗う事も出来ずに、徐々に追い詰められていく。鼻と本能を刺激する甘い匂いを纏った美少女の唇が、隼樹の口を塞いだ。柔らかく、張りのある綺麗な唇を受け、隼樹は目を見開いた。

カリムは体を密着させた状態を保ち、キスを続ける。

「ん……！ んん……！」

初めて味わうキスの味に、カリムは夢中になっていた。舌を相手の口内に突っ込み、唾液と舌同士を絡め合う。口の中で淫らな音を鳴らし、口端からは一筋の涎を垂らしている。

隼樹の背中に回した腕は、力を込めて離さないように強く抱き締めている。捕まってる隼樹は、甘い接吻の味と押し付けられる胸の感触、甘い香りに興奮が昂る。いつの間にか、隼樹も抑え切れずにカリムを抱き締めていた。

「んむっ……！ ちゅぱ……はむ……！ んっ……！」

誰かが部屋に入ってくるかも、なんて危機感も抱かず、濃厚なキスを続ける。

同じく興奮状態のカリムも、顔を真っ赤にさせ、息を荒くして、身体を火照らせていた。

ややあつて、ようやくカリムは隼樹から顔を離れた。開いた口から濡れた舌を僅かに出し、赤い顔は艶っぽく惚けている。

「コレが……キスの味、ですか……！ 凄く、良かったです……！」

キスの快感を味わい、満足そうにカリムは言った。指で口周りの涎を拭う仕草は色っぽく、とても教会に身を置く聖職者には見えな

い。

「隼樹さん……！ これからも、私の相手をしていただけませんか……？」
「そ、それは……」

興奮冷めやらぬ隼樹は、頭を掻き乱した。
迷ってる素振りを見せると、カリムが迫ってきた。

「ご迷惑でしょうか……？」

僅かに頭を下げ、濡れた瞳での上目遣いを向けてくるカリム。
目の前の美少女の仕草に、隼樹はドキツとなる。見上げる顔の角度、表情、全てが男の本能を刺激して虜にする完璧なポーズだった。
カリムに迫られ、隼樹はより一層激しく頭を掻いた。

「……女ってズルイですよ、カリムさん」

「では……」

「ん〜……。ま、まあ……たまに、なら……」

「ありがとうございます！」

隼樹の同意を得ると、カリムは一転して嬉しそうに笑って抱き付いてきた。

どうも自分は、女からの押しに弱いようだ。

まいったな〜、と隼樹は困り顔で力無く頭を掻いた。

*

カリムの部屋を出た隼樹は、閉じた扉の前で頭を抱え、座り込んだ。

何をどうしたら、こうなった……？

屈んで苦悩する隼樹の前に、人影が現れた。

「どうしたんだ？ 大丈夫か？」

「え……？」

降りかかった声を聞いて、隼樹は顔を上げた。

目の前に居たのは、同じくケープを纏った若い男だった。ミッドには珍しい黒髪で、髪型は短く、顔は整ったイケメンだ。

「ああ……！」

黒髪の男を見た隼樹は、弾かれたように立ち上がった。

「クロノ君じゃないか……！」

「やあ、久しぶりだな、隼樹……！」

相手の男は、クロノ・ハラウン。現在、時空管理局の次元航行部隊の艦船艦長を務め、提督の地位に着いているエリートだ。元アースラの一員だったエイミィと結婚をして双子の父までしている、隼樹と違ってシツカリ家庭を持った出来る男である。

親しい感じで接してる二人だが、初めて出会った当時は最悪な間柄だった。何せ隼樹は、『原作でフェイトを傷付けた』と言うあまりにもあんまりな理由で、十年前のジュエルシード事件でクロノをリンチの如くボコボコにしたのだ。その後の『闇の書事件』でも、険悪な関係は変わらずだった。

しかし、後から冷静になって考えた隼樹は、自分の間違いに気付いた。原作でクロノが牽制目的で放った魔力弾でフェイトを傷付け

たのは事実だが、『この世界のクロノ』は、フェイトを傷付けては
いない。隼樹と言うイレギュラーな存在が介入した事で、その場面
が無くなったのだ。つまり、『この世界のクロノ』は何にも悪くな
いのだ。それに原作での彼の行為は、ジユエルシードを身元不明の
魔導師に奪われない為の局員としての当然のモノだった。自分の間
違いに気付いた隼樹は、流石に罪悪感を抱き、クロノに謝罪する事
を決意する。はやてが入局の意を伝える時に、ちょうどクロノも立
ち合っていたので、思い切って彼に謝った。クロノも、捜査のやり
方が強引だった事や柔軟さに欠けていた事を謝り、互いの非を認め
合う。

それから二人は、友好的な関係になり、現在に至る。

「しかし、キミがこんな所に居るなんて珍しいな。何か用でもあつ
たのか？ ソレに何だが、落ち込んでたと言うか、悩んでるように
見えたが……」

「あゝ、ソレは……」

理由を訊かれた隼樹は、カリムとの出来事を打ち明けようか悩ん
だ。

しかし、一人で溜め込むより、親友に話した方が気も少しは楽に
なるかも、と思い、正直に話す事を決意した。

「クロノ君……キミ、口固いよね？」

「僕が真面目なのは知ってるだろう？」

クロノの笑顔を見て、隼樹は改めて話す事を決めた。

他人に聞かれ^{ひと}ないように、とりあえず教会^{ひと}を出る事にした。

聖王教会を出た隼樹は、全てをクロノに話した。

部屋で起こった出来事を話終わると、クロノは難しい顔になった。

「そうか……騎士・カリムがそんな事を……」

「そうなんだよ……」

外に出た二人は、ミッドのとあるファミレスに居た。二人が着いてる奥の席は、他の席と離れた位置にあって他人に会話を聞かれる心配は無い。

話を聞いたクロノは、しばらく考えて意見を言った。

「僕の考えだが、騎士・カリムは誰かに甘えたいんじゃないかな」

「甘えたい？」

「ああ。いくら優れた騎士で理事官とは言え、まだ若い女の子だ。

仕事のプレッシャーもあるだろうし、教会内には特別仲の良い男の友人は居ない。それ以前に、男女関係が厳しい教会内では、頼れる男の友人すら作れない。だからと言って、局員の男に頼る訳にもいかない。聖王教会と管理局は深い関係にあるが、決して友好的では無いからな。局員との付き合いも、万が一公になれば問題になる」

「ソコで白羽の矢が立ったのが、民間協力者とは言え一応民間人の俺……って事なの？」

「まあ、あくまで僕の推測だがね」

しかし、クロノの推測はあながち間違いでも無いように思える。

思い返してみると、部屋で迫ってきたカリムは何処か寂しそうと言うか、辛そうな感じに見えた。

けどな、と隼樹は頭を掻いた。

「だからって、いきなりキスは無いだろう？」

「確かに、ソレには僕も驚いてるよ。騎士・カリムも、意外と積極的なんだな」

クロノの言葉に、隼樹は一つの懸念を抱いた。自然と声を潜めて、言った。

「ねえ、クロノ君……。まさかとは思うけど……。カリムさんが、俺に惚れてる、な〜んて事は無いよね？」

「さあな。いくら僕でも、ソレは推測のしようが無い」

「いつそ否定してくれよ〜！」

頭を抱え、テーブルの上に突っ伏した。

悩む隼樹の前で、クロノは壁にかかった時計を見て時間を確認した。

「済まない、隼樹。これから仕事があるんだ」

「……ん？ ああ、分かった。いいよ、行ってきな」

「悪いな。騎士・カリムの件だが、セイバー達に殺されないよう気を付ける、としか言えないな」

「ご忠告ありがとう。仕事頑張ってね」

「ああ。また何かあったら、連絡してくれ。それじゃあ」

クロノは席を立ち、店を出て行った。

残された隼樹は、すぐに機動六課に帰る気になれず、もう少し一人の時間を過ごそうと思った。

しかし、彼の女難はまだ終わってはいなかった。

*

時間は少し遡り、所変わってスカリエッティのラボ。

「失礼します、ドクター」

「ん？」

研究室のデスクに座るスカリエッティの前に、秘書であるウーノがやってきた。

「何だね、ウーノ？」

「実は、少しお暇を頂きたいのですが、よろしいでしょうか？」

ほお、とウーノの要望にスカリエッティは意外そうに反応した。彼の知る限り、ウーノが休みを求めてきたのは、今回が初めてだ。普段とは違う彼女の行動に、スカリエッティは少なからず興味を抱いた。

「何か用事でもあるのかね？」

「はい。少し、私用がありまして……」

「ふむ……。いいだろう。特に、これと言って急ぎの予定も無いからね。好きにしまえ」

「ありがとうございます。それでは、失礼します」

丁寧に頭を下げ、ウーノは研究室を出て行った。

接触（前書き）

えー、今のところ気楽な感じで執筆出来ています。この調子で続けられたらな、と思います。

接触

人間、誰しも一人になりたい時があるもんだ。

クロノが出て行った後も、隼樹はファミレスに残って注文した料理を待っていた。

椅子に深く腰をかけて、隼樹は溜め息をつく。機動六課が発足されてから、大変な目に遭ってきた。六課発足の挨拶には寝坊して遅刻するわ、セイバーとオルタが新人四人を鍛えるわ、いきなりオルタとリインフォースの二人に襲われ、更に駆け付けて現場を目撃したセイバーが鬼神の如く暴れ出して、本当に酷い目に遭ってきた。セイバーの暴走は、オルタが何とか止めてくれたので被害は最小で済んだ。そして極め付けは、今日のカリムから受けたキスだ。万が一にも、この事がセイバー達の耳に入れば、半殺しは確実となる。ソレを考えただけで、精神的に疲労が溜まる。

いや、今は考えるのを止そう。何も考えず、心を休めようじゃないか。

好きな人達と一緒に過ごす時間も良いが、たまには一人で過ごす時間も大事だ。周りを気遣ったり、周囲の目や反応を気にしなくて済む。妙に開放的な気分になれるのだ。

こうして一人になるのは、本当に久しぶりである。『こっちの世界』に来てからは、セイバーやフェイト達と一緒に行動してきたので、あまり一人でゆっくりしてる時間は無かった。

今日は、そんな貴重な時間を堪能しようじゃないか。

そんな事を考えてると、店員さんが注文した料理を運んできてくれた。テーブルに置かれたのは、チョコレートパフェだった。伝票も置き、失礼します、と店員さんは去っていく。

目の前のチョコレートパフェを見て、隼樹は自然と笑顔になる。パフェと言えば、子供や女子が食べるイメージが強い。それにセイバー達の前でパフェを注文して食べるのは、何か恥ずかしくて勇気

が要る事なのだ。

「ああ、久しぶりのパフェだ……！ 味わって食べよう」

銀色のスプーンを右手に持ち、パフェの天辺に突き刺す。一口分のチョコクリームを掬い、顔に近付ける。

「いただきます……」。

今まさに、開けた口にチョコクリームを入れようとした時だった。

「あの……」

「あ……？」

不意に聞こえた声に、口に入れる寸前で隼樹は手の動きを止めた。自分にかけられた声だと思い、顔を横に向ける。

案の定、隼樹が座ってる席の隣に一人の女性が立っていた。妙齡の綺麗な女性で、ウェーブのかかった紫色の長髪と切れ目な金色の瞳が特徴で、落ち着いた物腰をしている。

目が合った瞬間、隼樹は思わず顔を引き攣らせた。

そんな彼の反応など意に介さず、女性は尋ねる。

「すみません。相席をお願いしても、よろしいでしょうか？」

「え……？」

動きを固めた隼樹は、すぐに返事が出来なかった。

女性に声をかけられた事に、驚いたのではない。問題はソコでは無く、声をかけてきた女性に衝撃を受けたのだ。

予想外の展開に動揺した隼樹は、冷静さを欠いて適切でない答えを返してしまった。

「あ、まあ、はあ」と曖昧な感じだった。

「ありがとうございます」

女性は笑顔でお礼を言うと、テーブルを挟んだ向かいの席に座った。

店員さんがお冷とおしぼりを持って、席にやってきた。女性はメニューを開いて飲み物欄を見て、コーヒーを一つ注文する。その間に隼樹は、後ろを振り向いて店内を確認した。所々に空席が見られ、わざわざ相席を頼むような状態ではない。

注文を聞き終えた店員さんが去ると同時に、隼樹は前に向き直った。向かいの席に座る女性の顔を見て、引き攣った笑みを浮かべる。

いや……無い無い……！ 絶対に無いっ……！ そりゃあ見た目“あの人”にクリソツだけど、こんな所に来るなんてあり得ないよ。考えられないよ……！

心中で必死に否定するが、ただの現実逃避に過ぎない事を隼樹は解っていた。姿を見間違えるハズは無いし、声も確かに聞き覚えがある。

すると、隼樹の視線に気付いたのか、向かいの女性はクスリと笑った。

「もしかして、私の事をご存じかしら？」

薄笑いを浮かべる女性に問われ、隼樹は困ったように笑う。

向こうの方も人違いでは無いらしく、シラを切るのは無理のようだ。

諦めた隼樹は、恐る恐ると言った風に口を開いた。

「あゝ、違ってたらすみません。……ナンバーズのウーノさん、ですか？」

「ええ、そうよ」

やっぱりかいいいいいいいいい！

正解してしまった隼樹は、心中にシャウトした。

彼の前に現れたのは、スカリエッツィの造り出した戦闘機人の一人であるウーノだった。原作には無い彼女の行動に、隼樹は動揺を禁じ得なかった。

何でウーノが、ファミレスなんかに来るんだよ！？ そんなシーン、アニメで見た事無いよ！ 着てる服もいつもの制服じゃなくて、私服だしさ。いや、しかし、私服姿のウーノも綺麗だな……じゃなくて！ 何？ コレは、イレギュラーな俺に対するイレギュラーな行動？

予想外の展開に、隼樹は内心で取り乱す。原作通りの流れの時は問題無いのだが、少しでも想定外の場面に出くわすと、すぐに動揺してしまうのが彼の欠点だ。過去の『闇の書事件』でも、防衛プログラムの思わぬ行動に面食らい、危うく世界を滅亡させてしまうところだった。

しかも、敵を前にして一人の状況など初めてなので、緊張感も高まっていた。

湯気が立つ熱いコーヒーを一口飲み、ウーノが言う。

「そう警戒しないでちょうだい。私は別に、貴方と闘いに来た訳ではないわ」

「え？」

「ココに来たのは、私だけで妹達は連れてないわ。それに、私が戦闘タイプで無い戦闘機人である事も、貴方は解ってるんじゃないかしら？」

「う………！」

どうやらウーノは、隼樹の存在だけでなく、彼が自分達の事をあんな程度把握していると踏んでるらしい。

それもそのハズ、過去のドゥーエの諜報活動によって、『闇の書事件』で隼樹が管理局のグレアムの行動を読んでいたり、まるで先の展開が解っているかのような行動の報告は受けている。それならば、ナンバーズの事も知っている可能性は十分に考えられる。

敵側である上に、美人のウーノを前にして隼樹は委縮した様子で尋ねた。

「えっと……じゃあ、その、何の御用で……？」

「少し貴方と話をしに来たのよ」

美しい笑顔を作り、一拍間を置いてウーノは言った。

「貴方、私達の仲間になる気はないかしら？」

「えっ……！？」

予想だにできなかった言葉に、隼樹は目を丸くした。

「仲間って……俺が、ウーノさん達の、ですか……？」

「ええ、そうよ。ドクターはセイバー達だけでなく、貴方にも興味を抱いているわ。それに貴方は民間協力者として機動六課と協力関係にあるけれど、管理局の為に協力してる訳では無い。もし、貴方にその気があれば、ドクターだけでなく私達も喜んで歓迎するわよ」

妙に穏やかな声音で、ウーノは隼樹を勧誘する。

誘われた隼樹は、驚きつつも思考を働かせた。確かに、科学者のスカリエツティから見れば、他の魔導師とは違う魔法を使う隼樹は研究対象となる存在だろう。加えて、セイバーとセイバーオルタと言う二つの超強力な魔導師の天敵となる戦力を持っている。その力を欲し、調べたいと思うのがスカリエツティの狙いだと思われる。

自分なりに考えをまとめた隼樹は、答えを言うべく静かに口を開

いた。

「その……折角のお誘いですけど……すみません。お断りさせていただきます」

「そう、残念だわ」

勧誘を断られたウーノは、言葉とは裏腹にあまり落胆した様子は見られない。

「断られたものは仕方ないけど、よければ理由を教えてくださいませんか？」

「理由、ですか？」

「ええ。貴方が断った理由は、おそらく機動六課にあると私は睨んでるわ。管理局には協力的では無い貴方が、私の勧誘を断るとしたらソレしか無いわ。六課に居る子達を護るため？ それとも裏切りたくないからかしら？」

ウーノから断りの理由を問われ、隼樹は答えに窮した。

実は、ウーノがわざわざ休みを取ってまで隼樹に接触したのは、コッチが本当の目的だった。誘いを断られるのは、予想はついていた。それよりも、彼の目的が知りたかった。管理局に協力的でも無く、世界の平和の為でも無いのに、機動六課に協力しているのは何が目的なのか。そしてソレは、こちらの勧誘を断る理由と関係があるのではないだろうか、と踏んでいる。

コーヒーを飲みほしたウーノは、静かに答えを待った。

ややあって、隼樹は答えた。

「まあ、セイバーやフェイト達を裏切りたくないってのもありますけど……。一番の理由はやっぱり、『自分の為』ですかね」

「自分の為？」

「はい。その、詳しくは言えないんですけど、この世界で助けたい人達がいます……その為には、機動六課に居る方が都合が良いと言うか、寧ろ機動六課に居ないと出来ない事で……」

「ソレがどうして、『自分の為』なんですか？」

怪訝そうに尋ねるウーノに、隼樹は言う。

「誰かを助けたい、何かをやりたい……こういうのって、結局は全部自分の願望から生まれてるんですよ。他人の為とか言っても、その中身は『他人の役に立ちたい』って言う自分の願望で、突き詰めればどんな事でも『自分の為』なんです。俺に限らないで、皆自分の欲望を原動力に動いてるんです。私利私欲って、よく悪人に対して使われますけど……俺から言わせれば皆そうですよ。」

だから、俺が『助けたい人達を助けたい』って言う目的も、結局は自己満足なんです」

隼樹の話聞いて、ウーノは考え込む。

欲望を原動力に動く、とはスカリエッツィと同じ動機である。管理局の最高評議会によって、『無限の欲望』アンリミテッド・デザイアとして生み出され、自身の尽きる事の無い欲望に忠実に従う。

しかし、ソレはスカリエッツィに限った事では無い。隼樹の言う通り、人間は己の欲望を満たす為に動いている。そして、その違いは世間にとって“善”か“悪”のどちらに分類されるかではない。スカリエッツィの場合は、出生の経緯もあるが、“悪”に分類される。なんと理不尽な事だろう。

善悪の違いこそあれど、隼樹はスカリエッツィや自分達と同じく欲望に忠実に従って動いている。いや、欲望に忠実であると、理解と同時に自覚していると解った。やはり、敵対するには惜しい。

とりあえず、ウーノが知りたかった事は一応聞けた。相手は誰かは解らないが、隼樹は助けたい人達の為に機動六課に協力してるら

しい。

「自己満足、ねえ……。分かりました。でも、仲間になれないのは本当に残念だわ。貴方とは、理解し合えそうだと思っただけだから」「すいません」

頭を下げて謝った時、隼樹は衝撃の物を目にした。

隼樹が頼んだチョコレートパフェが、変わり果てた姿になっていた。ウーノと話してる間に、溶けてドロドロになってしまったのだ。

「え〜！？ う〜わ、マジかよ〜！？ 最悪……。！」

シヨックを受けた隼樹は、しかめっ面で頭を抱えた。ウーノに声をかけられ、その後も会話を続けていたので、まだ一口も食べていなかった。

そんな隼樹の様子を、ウーノは可笑しそうに見ていた。

「うふふ……。！ ごめんなさい。よろしければ、私の奢りで代えのパフェを注文しましょうか？」

「え……。？ いや、でも、そんな」

「私の責任のようなものですし、話に付き合っただけのお礼も兼ねて」

「そ、そうですか……。？」

そこまで言われては、女性からの押しに弱い隼樹は断れない。

「じゃあ、すみません。ありがとうございます」

隼樹が礼を言うと、ウーノは意表を衝かれたように目を丸くした。彼女の反応に訝り、隼樹は声をかける。

「ウーノさん？ あの、どうしたんですか？」
「え……？ ああ、ごめんなさい。ドクターや妹達以外から、お礼を言われたのは貴方が初めてでしたので……」

ああ、と隼樹は納得して頷いた。

ウーノは、隼樹からのお礼の言葉を頭の中で反芻させ、微笑みを浮かべた。

「悪くないものですね」

向かいの隼樹に聞こえないよう、小さく呟いた。

彼と出逢って、話をして、お礼を言われて、自分の世界が少し広がったような気がした。

それから、ウーノも自分の分のパフェを頼み、二人っきりで甘いデザートを味わった。

接触（後書き）

次回は、ホテル・アグスタの回……の予定です。
では。

変身（前書き）

今回は、主人公がえらい事になります。
その前に、冒頭から……。

変身

深夜の機動六課隊舎。

部隊局員の皆が寝静まっている時間帯に、まだ明かりの点いている部屋が一室あった。隼樹達が使用している部屋だ。薄暗く調整された明るさの中で、二人の人影が抱き合っている。いや、片方が相手の後ろから抱き付いていた。

「あつ……！」

抱かれている方は、短い嬌声を上げた。

綺麗な素肌の上には白いワイシャツ、下はパンティーのみで下半身を露出したあられもない姿をして抱かれているのは、セイバーだった。いつもは青いリボンで結われている金髪は、下ろして少女らしい印象を強め、普段の高貴溢れる彼女とは別人である。

そんな彼女は後ろから抱かれ、しかも両手で胸を揉まれて快感に身をよじらせ、悶えていた。頬は赤く紅潮させて、息遣いも荒い。目を細めた切なげな顔で、セイバーは声を漏らす。

「ああ……！　じゅ、ジュンキ……！　んくう……！　はぁ……もつと……もつと、してください……！」

「セイバー！　可愛いよ……！」

セイバーを後ろから抱き、胸を揉むのはマスターであり恋人の隼樹だった。右手はワイシャツの下に入れ、左手はワイシャツの上から膨らんでる胸を揉んでいる。

控え目ながらも感触の良い胸と、セイバーが漏らす嬌声を聞いて、隼樹の興奮も自然と高まる。

「ジュンキ……！ ジュンキ……！ ああつ……！」

一際大きな嬌声を上げた瞬間、セイバーの体内に電流が走った。恍惚とした顔を天井に向けたかと思うと、一気に脱力して後ろの隼樹に身を預ける。

そんなセイバーを、隼樹は愛おしそうに抱き抱えた。

「ふんつ。胸を揉まれたくらいで果てるとは、情けない。それでも騎士王か？」

二人の行為を、ベッドに座って見ていたオルタが、鼻を鳴らした。

「いやいや、ソレがセイバーの可愛いところなんだよ。それに普段とのギャップがあるし、慣れてないところも良いんだよ」

セイバーを抱える隼樹が、言った。

本人が堕ちて口を挟めないのを良い事に、二人は好き勝手に喋る。会話が聞こえているのかいないのか、セイバーは赤くなった顔を恥ずかしそうに俯けていた。

すると、オルタが立ち上がり、黒のゴスロリ衣装を脱ぎ出した。

「さて、次は私の番だ。王が直接快樂を与えてやろうと言うのだが、光栄に思え……！」

「ああ、今夜は手短にお手柔らかかにね？ 今日、任務があるから」

時刻は、とつくに午前零時を過ぎていた。

隼樹の言う“任務”とは、ホテル・アグスタの警備だった。

*

そして夜が明けた。

機動六課隊舎から、ヘリが飛び立った。乗っているのは、はやてを入れた隊長陣三名、副官のリンフォースと医務官のシャマルに護衛のザファイラ、新人フォワード四名に使役竜が一匹、隼樹達民間協力者三名の計13名と一匹だ。パイロットのヴァイスもカウントすれば、14名になる。

これから向かうのは、骨董オークション会場となるホテル・アグスタ。オークションに出品される品物の中には、取引許可の降りてくるロストロギアが混ざっている。今回の警備任務は、出品物をレリックと誤認して襲撃してくる可能性があるガジェットに備えての事だ。ちなみに、シグナムとヴィータの副隊長二名とアリシアは、既にホテルの警備に当たっている。

ヘリで移動をする中、なのは達はレリック事件にジェイル・スカリエッティが関わっている事を皆に説明をした。事件の真相については、既に知っている隼樹は軽く聞き流した。最後に今回の任務内容や警備配置について説明がされて、現場に到着した。

「いいですか、三人とも？」

「は、はい……」

現場に着き、準備を整えて警備に当たろうとしたところで、早くも事件が勃発した。ガジェット襲撃では無いのだが、ある意味こっちの方が大変な事態だ。

場所は、ホテルの裏側。はやて部隊長、なのは隊長、フェイト隊長の部隊の3トップを地面に正座させて、腕を組んで見下ろすのはセイバー。項垂れる隊長陣に、セイバーは厳しい言葉をかける。

「建物内の警備をするな、とは言いません。ドレスアップするのも、オークション参加者の中に自然に溶け込む為と言う事で一応は納得しましょう。ですが、隊長陣全員を中の警備に当てると言うのは、正直いただけません。特になのは 貴女の砲撃魔法は、どう考えても建物内で使用出来るモノではないでしょう？ 犯人と建物内で対峙した場合、大勢の客が居て且つスペースに限りのある会場内でどう対応するつもりですか？

これならば、スバル達新人四人を建物内の警備に当てておくべきです。おそらく、経験を積ませる為に外の配置に着かせたのでしようが、ソレを加味しても隊長陣全員を建物内に入れるのは、賢い判断とは言いがたいです。

スバル達を外に配置するのであれば、隊長陣の中から最低でも一人は一緒に外に出すべきです。は yet は部隊長と言う立場もあるので、建物内の警備も止むを得ません。フェイトのスピードも、建物内で使えない事ありません。消去法でいけば、やはりなのはが妥当でしょう。

いいですか？ 事前に現場の状況や自分達の能力をキチンと把握して……」

ドレス姿で正座をさせてる隊長陣に対する、セイバーの説教は続く。

訓練の時でも、彼女達のやり方に口を挟まなかったセイバーだったが、今回の件は流石に黙って見過ごす訳にはいかないと思った。隊長陣が一人も外の警備をしないのは、明らかにおかしい。ソコでセイバーは彼女達をホテルの裏側に連れて、説教を始めたのだ。

その光景を、少し離れた所で隼樹達一同は眺めていた。

「あゝあ。セイバー、完全に説教モードに入っちゃったよ」

「愚かな。大体、八神達は部隊のトップに立つには明らかに若過ぎる上に、指揮能力が乏しい。経験が足りない現段階では、とても人

の上に立てる器ではない。身の程を知れ」

「本人達に聞こえないからって、ボロクソ言うね、セイバーオルタでもさ、セイバーも選定の剣を引き抜いて、王になったのフェイト達よりも年下の頃だったじゃん？」

「だからこそ、三人の愚かさ、未熟さがよく解る」

「あ、なぐる」

オルタの言葉に納得して、隼樹は小さく頷いた。

経験者は語る、と言うヤツだ。

民間協力者に説教を受けている上司達の姿を、スバル達は複雑な心境で眺めていた。

結局、セイバーの指摘を受けた隊長陣は、はやとフェイトが建物内の警備を、なのはが前線に出て新人達をフォローする事になった。

そんな事がありながらも、機動六課は配置に着いて警備は始まった。

ホテルの入り口を警備してるのは、スターズ4のティアナだった。彼女の頭は、機動六課と言う部隊について思考を働かせていた。

思うに、六課の戦力は無敵を通り越して明らかに異常だ。隊長格全員がオーバーSであり、副隊長でもニアSランクと言う実力の高さ。他の隊員も前線から管制官まで、未来のエリート達ばかりだ。僅か十歳でエリオは魔導師ランクBを取り、キャラはレアで強力な竜召喚師、コンビを組んでるスバルは潜在能力と可能性の塊で優しい家族のバックアップもある。

そして、特筆すべきは六課の民間協力者だ。八神部隊長の使用デバイスは夜天の書で、シグナム達守護騎士は彼女が保有している特別戦力であり、ソレにリインフォース曹長を加えて六人揃えば、無敵の戦力と言うのがスバルからの情報である。だが、セイバー、セ

イバーオルタは更に上を行く別格の存在と言われている。二人共、剣の腕はシグナムを上回り、まだ見ぬ一撃必殺の威力はなのはの砲撃魔法以上と聞く。二人の素性や能力等の詳細は、一切記録が残っていないのでレアスキル持ちの八神部隊長以上に謎に包まれている。ただ一つハッキリしているのは、セイバー、セイバーオルタ、隼樹の三人が揃えば、無敵を誇る八神勢以上の最強無敵の戦力である、と言う事だ。二人のマスター的位置に居る隼樹の実力だが、訓練にも参加しないで闘うところを一度も目にしていないので、何とも言えない。だが、隊長陣や副隊長陣が信頼を寄せて六課に招き入れたところから察するに、それなりの実力を備えていると思われる。少なくとも、自分よりは。

やっぱり、ウチの部隊で凡人は私だけか……。

なのはとセイバー達の訓練を受けて、自分は強くなっているだろう。だが、周りの優秀なチームメイトと一緒に受けていると、比べる事が出来ずに自分が強くなった実感がいまいち湧かないのが現状だった。それに、教えを受けてる身として失礼かもしれないが、教導官の実力が高過ぎて、拭いきれない劣等感を抱いてしまう。

しかし、だからと言って軽々と他人に相談出来る事ではない。否、元より相談する気など、彼女には無かった。

凄い魔法が使えなくなっただって、特別な才能が無くても、一流の隊長達が居る部隊でだって闘えるって事を、証明するんだ……！

*

ホテルの裏側を警備するのは、セイバー、オルタ、それに隼樹だった。

これからガジェットが襲撃してくるかもしれない、と言う時に、隼樹は気楽で居た。唯一の気がかりであるティアナのミスショット

も、現状なら大丈夫と思っているのだ。ティアナのミスショットは、彼女自身が起こしたミスでもあるが、フォローが遅れた上司にも幾ばくかの責任があった。しかし、今回は隊長のなのはが、ラインフオースとシャマルと共に屋上に着いて、外で何が起きてても即座に動けるよう待機している。この態勢ならば、ミスショットは回避出来るハズだ。

それに、ホテルを襲撃してくるのはガジェットのみで、ナンバーズ等が出て来ない。あまり心配する事もないだろう、と思った時だった。

シャマルの『クリアールヴィント』のセンサーに反応があり、前方から接近してくるガジェット軍を確認する。噂をすれば影、と言うヤツだろうか。

すぐにシグナム、ヴィータ、ザフィーラの三人が最前線に向かい、ガジェット迎撃にかかる。新人の四人は、ホテルの真正面に集まって防衛ラインを固めた。

ココまでは問題無かったのだが、念話でシャマルから予想外の知らせを受ける。

（皆、ホテル後方からも敵の反応をキャッチしたわ！ しかも、かなりの数でガジェットじゃないわ！）

「はあ!？」

通達を聞いた隼樹は、思わず声を上げた。

原作では、ガジェットの襲撃はホテル正面側のみだった。だが、後方から、しかもガジェットじゃない正体不明の敵が近付いていると言っ。

予想外の展開に、隼樹は舌打ちした。

「んだよ、まさかのイレギュラーな展開かよ……!!」

「オルタ！ 後方の敵は、我々で迎え撃ちましょう！」

「潰しても構わないのならば、少しは本気が出せるかもしれんな」

セイバーとオルタは、騎士甲冑を纏って戦闘態勢に入る。青い騎士の手には風を纏った不可視の剣が、黒い騎士の手には赤い筋が通った漆黒の剣が握られていた。

二人は振り返り、隼樹に告げる。

「ジュンキ、私達は接近してくる敵を叩いてきます。貴方も万がに備えて、『イメージ』で肉体を強化させておいて下さい」

「まあ、何体来ようが、ココには通さんがな……！」

「ああ、分かった。二人共、気を付けて！」

「はい、マスター！」

答えた直後、二人の騎士は風の如く速さで森の中に突っ込んでいった。

*

森の中を突き進むセイバーとオルタは、木々の無い空いた空間に出て足を止めた。

二人の超人的な視力は、既に敵の姿を捉えていた。剣を構える二人の前に現れたのは、影の軍団だった。文字通り影のように全身が黒く、目で確認出来るだけで三十体ほど見える。だが、シャマルからの通達では、その倍は居るとの事だ。おそらく、奥の方に控えているのだろう。

眼前の敵を前にして、二人の騎士は顔を険しくさせた。

「魔力は感じるが、生気は感じられない。傀儡くわいの類でしょう……」

「ならば、消しても構わんな」

敵が人間じゃないと解った途端、オルタは妖しい笑みを浮かべた。無闇に周囲を更地にする訳にもいかないから全力は出せないが、その代わりに相手を潰しても問題は無い。闘いの中で込み上げてくる破壊衝動のようなモノを抑える必要が無く、彼女は機嫌が良かった。殺気を膨らませるオルタの横で、セイバーは険しい顔つきをしていた。

しかし、この影から感じられる魔力……。まさか……。謎の影から感じる魔力に、セイバーは覚えがあった。

*

ホテルの前方と後方で戦闘が行われてる中、離れた場所に一人の女が居た。

頭に白いカチューシャを付け、青黒いゴスロリ衣装を着た少女だ。年齢はスバルやティアナと同じ年位だろうか。しかし、ソレにしては胸の発育が良く、程良い膨らみをしている。茶色がかった長い黒髪、幼さが残る顔は無表情で、黒い瞳は何処か一点を見つめている。木々の隙間を通ってくる風に長髪をなびかせ、少女は静かに呟く。

「遠隔召喚……！」

直後、少女の前に召喚魔法陣が展開された。身に付けてる衣装と同じ、青黒いを光を発している。

光が収まった魔法陣から現れたのは、ホテル裏側で待機していた八ズの隼樹だった。突然の出来事に動揺して、周囲を見回す。視界に捉えたのは、彼をココに移動した張本人である少女だった。

見た瞬間、隼樹は警戒して後ずさる。

「だ、誰……？」

しかし、少女は隼樹の問いには答えしないで、頭上に魔法陣を展開させた。

隼樹が、少女の頭上に出現した魔法陣を見た時だった。魔法陣の中から何か物が凄く速さで放たれ、標的に直撃する。打撃音が鳴り、衝撃を受けて後方に吹き飛ぶ標的は、他でもない隼樹だった。

後ろの大木に叩きつけられ、隼樹は地面に倒れた。

「ぐう……があゝ！ あああああああああ……！ いでえええ……！ いったえええええ……！」

苦痛に顔を歪め、激痛を負った胸部を押さえてのたうち回る。直撃を受けた胸部に痣が出来て、骨折したような激痛を味わう。もしも、セイバーのアドバイスで『イメージ』による肉体強化を施していなかったら、今の一撃で死んでいたかもしれない。

ぐああああああああ……！ ちつくしゅう！

あのクソガキ、いきなり攻撃してきやがった……！

初めて味わう激痛に、汗を滲ませ、歪めた顔で少女を睨む。

隼樹の睨みを受けても、少女は全く動じる事なく無表情で言った。

「安心して下さい、じゅんにーさま。死なない程度に手加減しておきました」

誰が“じゅんにーさま”だ、コラッ……！

激痛に耐えながら、隼樹は心中に悪態をつく。

一体何が起こってるのか？ この女は何者なのか？ 何が目的なのか？

様々な疑問が頭の中を飛び交うが、まずは傷の治癒が先だ。いきなり攻撃された事に対する怒りもあったが、あまりに痛みが強過ぎるので、何とか治癒を優先する判断が出来た。

しかし、傷を治したと同時に、腕ごと上半身にバインドをかけられて拘束されてしまう。

「ココでは殺さないわ。でも……ふふ、すぐに死ぬ事になると思うけど……！」

初めて少女が、笑った。人の死を愉しむような、無邪気で残忍性が垣間見える冷たい笑顔だ。

その瞬間、隼樹は本能的に危険を感じ取った。コイツは、ヤバイ。今すぐ逃げなければ、本当に死ぬ事になる。臆病者故の危機察知能力が、少女の危険性と命の危機を感じた。生存本能に従い、隼樹は『イメージ』の能力で脱出を試みる。肉体強化した自分の身体をイメージして、魔力を純粋な力に変換させる。

直後、無理矢理バインドを破壊した。

自由の身となった隼樹と少女が動いたのは、同時だった。

隼樹は後ろに飛び退き、少女は頭上に魔法陣を展開させた。先ほどと同じように、魔法陣の中から何かを発射する。だが、今回は外れた。何とか隼樹は、草木が生い茂る場所に身を隠した。

くそっ……！！ どうすればいい……？ どうすれば……？

『イメージ』で興奮を鎮め、冷静になって考える。

転移魔法は使えなくは無いが、発動の際にどうしても魔力光まりよくこうが発して位置を相手に知らせてしまう。バレたら、その瞬間に狙い撃ちされる。だからと言って、森の中を移動すれば草木に触れる音で感付かれてしまう。

そう考えると、もう闘うしかない。

だが、ココで大きな問題がある。

相手が、『女の子』である事だ。

野郎相手なら、何も気にせず攻撃する事が出来る。しかし、相手が女子となると、妙に手が出せない。女の子を傷付ける事に、どうしても躊躇してしまう。しかも、可愛い美少女なので、余計に手が出せない。

くっそ〜！ 誰だよ、“女を傷付ける男は最低”とかのたまつて、世間に浸透させた奴は……！？ お前をぶん殴ってやりてえよ、チクシヨウ……！ 俺が男じゃなけりゃあ……っ！？

その時、隼樹の脳裏に、ある閃きが走った。

同時に、雨のように飛来物が迫ってきた。肉体強化してるとは言え、受ければ痛みを伴い、無傷では済まない。

回避を選んだ隼樹は、立ち上がって駆け出す。後ろでは、飛来物が地面に突き刺さる恐ろしい音が鳴る。

そして、手足をバインドで拘束された。しかも、先ほどよりも強度が増している。バランスを崩して、また隼樹は地べたに倒れた。

「もう逃がしませんよ……！！」

頭上に魔法陣を展開させた少女が、歩み寄ってくる。氷のように冷たく、寒気を抱くような笑みを張り付け、隼樹を見下ろす。

気絶させる為に、隼樹の頭目掛けて魔法陣から飛来物を発射する。他にも手足を完全に使用出来ないよう潰す為に、飛来物の雨を降り注いだ。

着弾した瞬間、場は砂煙に包まれた。

「ふふ……おやすみなさい、じゅんにーさま……！！」

「何がおやすみだよ……！！」

「えっ！？」

返事が返ってきた事に驚き、少女は咄嗟に後ろに下がって距離を離れた。

煙の中で、倒れていた人影が立ち上がる。

「男だから攻撃出来ないって苦心してたけど……簡単な解決法があったわ……！」

煙の中から聞こえる声に、少女は違和感を憶えた。

明らかに隼樹の声で無いどころか、“男の声”ですら無いのだ。

そして砂煙が晴れ、人影の正体が見えた瞬間、少女は驚愕して目を見開いた。

「私……女にな……ちまえばいいんだよ……！」

「誰……？」

少女は、我が目を疑った。

砂煙の中から現れたのは、隼樹とは丸つきり別人の金髪美少女だった。

仕置（前書き）

今回は、かなり過激な内容になっています。

まずは、オリキャラ相手に女の子となった主人公の恐ろしさを……。

苦手な方はお気を付け下さい。

仕置

ゴスロリ衣装を着た少女　　アリスは、目を見開いて半ば啞然と
していた。

葉谷資隼樹を捕える目的で、機動六課が警備するホテル・アグスタ付近にやってきた。スカリエッティの駒であるガジェット襲撃に合わせ、セイバーとセイバールタを隼樹から引き離す為かけひとに影人を投入させた。そして思惑通りに事は運び、召喚魔法でターゲットを自分の元に召喚する形で攫さらう事に成功する。

ココまで予定通りであり、多少の抵抗も想定内だった。
しかし、コレは全くの計算外だ。

目の前に居たハズの男の隼樹が、女に変化したのだ。それも、とびっきりの美少女に　　。

太陽の光を受けて煌びやかな光沢を放つのは長い金髪、切れ目で燃えるような紅い瞳、誰もが振り向く端正な美しい顔立ち、抜群のプロポーションを誇る身体に薄着にミニスカートの挑発的な出で立ちと言う完璧な美少女になっている。ハッキリ言って、『葉谷資隼樹』と言う“地味男じみお”の面影は微塵も残っていない。全くの別人に変身していた。まるで、狐につままれたようだ。

美少女に変身してしまった隼樹は、激しく動揺するアリスを前に変身した自分の身体を確かめている。

「へえ〜！　初めてにしては、上出来じゃん！」

女性化した自分の姿に、隼樹はご満悦の様子だ。女に変身すると同時に性格も変えたようで、口調も男の時と違っている。しかも、声まで女になっていると言う徹底ぶりだ。

「でも、コレはちょっとやり過ぎたかねえ……」

そう言っただけで、隼樹は顔を下に向け、自分の胸元を見た。視線の先にあるのは、シャツを突き破らんばかりの大きな二つの膨らみ。とにかく女に成る事で頭が一杯だったので、体型のバランスを考えていなかった。結果、胸が爆乳クラスの大きさになってしまったのだ。ちよつと動くだけで、揺れを起こし、体に軽い振動が伝わってくる。代わりに、股間にあつた男の勲章が無くなって下半身も妙な感じだった。

「まあ、いつか。別にずっとこのままでいる訳じゃないしね」

体型については深く考えず、気を取り直してアリスと向き合う。相手もハツと我に返って、警戒心をもって身構える。頭上には魔法陣を展開させたままで、いつでも攻撃可能な状態だ。

ビビりな性格が排除された女版隼樹は、不敵且つ妖艶な笑みでアリスを見つめる。

「覚悟しなよ、お嬢ちゃん……！ 女同士になった事で、あたしはアンタを攻撃する事に躊躇しないからさ……！」

「くっ……！」

逆に追い詰められたような心境になり、アリスは険しい顔で魔法陣から飛来物の雨を発射した。

冷静で勝ち気な性格に変化した隼樹は、すかさず障壁を張って防御する。飛来物の雨を降り注がれ、障壁に衝突して轟音と震動が森に広がる。

そして、半透明の障壁で受け止めてる事で、飛来物の正体が判明した。

「鉄球……！？」

隼樹を襲う飛来物の正体は、魔力弾では無く、黒光りする鉄球だった。

アリスは無機物召喚によって、貯蔵してある鉄球やその他の武器を飛び道具として利用しているのだ。鉄球に回転と魔力強化による加速を加えて、威力をコントロールして相手に撃ち込む。通常の魔力弾を撃つよりも、魔力消費は低く抑えられる戦法だ。

しかし、そんな細かな工夫は、今の隼樹にはどうでも良かった。

あんのガキンちよ……！ か弱いあたしの身体に、こんな危なっかしい物叩き込みみやがったのか！？ ふっざけんじやないわよ！ このあたしが、どんだけ痛い思いしたと思ってるのよ、あのガキンちよ！ 絶対酷い目に遭わせてやるよっ！

怒りを燃やすと同時に、先ほどやられた復讐を誓う。

反撃のチャンスをうかがうが、鉄球の弾切れが来る様子が無い。容赦無く撃ち続け、オマケに槍や鉄パイプ等の新たな武器まで使ってきた。

アイツの武器庫の中身は無尽蔵なのか？ と苛立ちを抱いて思った時だった。

撃ち続けられる飛来物の中から、軌道を変えた幾つかの弾が見えた。ハッと後ろを振り向けば、背後から複数の鉄球が迫っていた。

「チツ………！」

半球状の障壁をイメージして、隼樹は全体的に護りを敷く。間一髪で防御が間に合い、鉄球を弾いた。

どうやら敵は、なのはのアクセルシューターのように、弾の軌道を自分の意思で操れるようだ。よく見れば、全方位から弾の雨が降り注がれている。これでは、手も足も出ない完全な亀状態だ。それに、いくら頑丈な障壁でも、受け続ければ耐えられずに破壊されてしまう。現に、全方位攻撃なんてとんでもない攻撃を受けて、障壁

が揺れている。

「上等じゃない……！」

しかし、隼樹もやりたい放題を許すばかりではない。冷静になり、頭の中で反撃の画えをイメージする。ああして、こうして、とブツブツと呟き、イメージが固まった。

よしっ……！ うちよやるか！

男の時と違い、すぐに実行に踏み切る事を決断した。

頭の中で固めた戦術を、『イメージ』で実現させる。障壁の中で引きこもっていた隼樹の体が、突然、発光した魔力光まじよくこうに包まれた。攻撃を続けるアリスは、何か仕掛けてくると察して警戒心を強め、身構える。

次の瞬間、光が収まると同時に障壁の中から、隼樹の姿が消えた。

「えっ……！？」

アリスが驚く目の前で、主を失った障壁が消滅する。

その時、アリスは背後から“何か”を感じた。

本能的に、反射的に後ろを振り返った少女の前に居たのは、不敵な笑みで拳を構えた隼樹だった。

「遅いつ！」

防御や回避の間を与えず、素早く隼樹は構えた拳で突く。

鋭く放った突きは、アリスの腹に思いつきりめり込んだ。『イメージ』で強化されて突いた拳は、敵の体温に包まれ、肉を押す感触がした。

「がはっ……！？」

痛みに目を見開き、アリスは後方に吹き飛ばされる。突きの威力で飛ばされたアリスは、衝突した後ろの大木を折り、転がるように地面に倒れた。

「う……！ ぐっ……があ……！」

打撃を受けたアリスは、すぐに起き上がる事が出来なかった。叩き込まれた拳は、内臓にまで衝撃を与え、ダメージを負わせていた。ちよつとでも体を起こそうと動かすだけで、内側から抑えようの無い痛みに襲われ、苦痛に顔を歪める。骨が折れてないのが、唯一の幸運だ。

しかし、女に変身した事で、本当に隼樹は少女への攻撃の躊躇を無くしていた。

早く体勢を整えて、反撃しなければやられる。そう思い、自分を奮い立たせて、ようやく倒れた体を起こした。

だが、その時には手遅れだった。痛みに耐えて上体を起こした直後、アリスの首に腕が絡み付いて絞められる。

「んぎっ……！？ きはっ……あっ……かはっ……！」

突然の異変に虚を衝かれて混乱して、呼吸まで閉ざされてアリスは苦しむ。

「ほーら。つかまえたよ、お嬢ちゃん……！」

背後からアリスを締め上げるのは、不敵且つサディスティックな笑みを浮かべる女版隼樹だった。

振りほどけないよう、腕はガッチリと首を絞めている。勿論、

イメージ』による強化を施してある。

「うっ あっ……！ いった……あぎっ……！ くる……しい……いい
っ……！」

必死に逃れようともがくアリスだが、首を絞める腕はビクともしない。

逆に、もがけばもがく程、文字通り自分の首を絞める事になり、苦しみが増していく。氣道を圧迫されて、呼吸困難に陥るアリスは、見開いた目から涙を流し、開かれた口からは溜まっていた涎を垂れ出す。更には、括約筋の弛緩により、スカートの中で失禁まで起こしてしまう。パンツが濡れて、生暖かい液体が足下の地面に広がる。後ろで絞め続ける隼樹は、アリスの状態に気付いてSっ気を全開させた。

「アンタ、失禁してんの？ そんなに苦しいの？ もっとキツく絞めてやるつか？」

「いい……いい、やあ……！ こお……こおんな、の……うっ……聞いて、な、い……！ うええっ……！」

「は？ 当たり前でしょう？ 誰からあたしの事聞いたのか知らないけど、あたしがこの姿になったのは今回が初めてなんだから。テーションションも上がってきて、妙に気持ちいい気分だよ！」

隼樹が女に変身した事は、アリスにとって完全に誤算であり、そんな情報は全く聞いていない。

しかも、外見だけでなく中身も別人に変わっており、アリスを苦しめる事を愉しむ完全なサディストと化していた。苦しみに悶え、失禁までしたアリスの姿に、興奮して顔を赤く紅潮させている。

「いいわよ、アンタの表情……！ 苦しそうで、凄く可愛いよ……」

！ 失禁までしちゃってさ……。このまま管理局に渡して、拘置所に送るには勿体無い位だよ……。！

ねえ、アンタ……。名前、何て言うんだい？」

首を絞める腕の力を少しだけ緩め、喋りやすくさせた。

アリスは空気を求めるように濡れた舌を突きだし、必死に声を絞り出す。

「ア……。アリ、ス……。！」

「ふん。アリスって言うんだ。名前も可愛いじゃない。

じゃあ、アリス。よく聞きな。もし助かりたければ、あたしの奴隷になりな。奴隷になるなら、あたしを『お姉様』と慕って、あたしの足を舐めるんだ。そうすれば、アンタはあたしが護ってやるよ。逆らうんなら、このまま容赦無く絞め落としてイカせてやる……。！
ホラッ、どっちにするか決めな？」

「うう……。か……。はっ……。！」

涙と鼻水、涎の三つの液体で、グシャグシャになった顔でアリスは悶える。

力を振り絞って、アリスは答えた。

「な……。な、るう……。！ 奴隷、に……。なり、ます、からあ……。助け、て……。！」

「ククツ……。！ そうやって助けを乞う顔も可愛いじゃない！ ますます気に入ったよ……。！」

アリスの両手にバインドを仕掛け、体の自由が利かないように縛る。それから腕を首から離して、アリスの前に立つ。

目の前のアリスは、解放されたと同時に激しく嘔せて、咳き込む。

とにかく空気を求めて、呼吸をする。

そんなアリスの眼前に、綺麗な素足が差し出された。

「ホラッ、舐めな……！」

足を出して、ドSな笑みを浮かべる女版隼樹。

アリスは、半ば放心したような虚ろな顔で、差し出された足を見つめた。

「……は……はい……。じゅんねーさまあ……」

答えた後、アリスは顔を近付け、口から小さな舌を出した。濡れた舌で、足の親指を舐める。ペロペロ、と犬のように舐め、次に指の付け根部分を舐め回す。

「んあっ……！」

その時、隼樹の頬に朱がさした。

ヤバッ……！ コレ、くすぐったくて、ちよっと気持ちいい

……！ 癖になっちゃうかも……！

初めての快感に、隼樹は興奮してきた。

「そうよ……！ もっと舐めな……！ いい？ あたしが上！ アンタが下！ 分かった？」

「ん……。は、はい……。じゅん、ねーさまあ……！」

こうして謎の襲撃者は、女になった想像者の奴隷となった。

*

リインフォースは、ホテルを囲む森の上を飛行していた。

先ほど、召喚魔法で裏側に待機していた隼樹が、さらわれてしまった。シャマルが召喚魔法の発動元を割り出して、ホテルをなのは達に任せてリインフォースが助けに飛んだ。

そして、シャマルが割り出したポイントが見えて、地上に降り立った。リインフォースの前に居るのは、アリスを抱える女版隼樹だった。

隼樹は、少し驚いた顔になる。

「リインフォース……！」

「何故私の名を……？ お前は誰だ？ その女の子をどうした？」

相手が女の子になった隼樹とは露知らず、リインフォースは警戒心を抱く。森の中で、半ば放心状態となってる少女を抱えてる姿を見れば、誰だって怪しく思う。

すると隼樹は、リインフォースが女の子になった自分に気付いてないと解った。

「ああ、そうか。アンタ、あたしに変身した場面見てないもんね。

あたしだよ、あたし」

「だから、誰ですか？」

「だーかーらー、隼樹だってば」

「は………？」

相手の言葉に、リインフォースは怪訝そうに目を細めた。

「嘘ならば、もう少しマトモな嘘を吐いたらどうだ？ 女のお前が、隼樹の訳がないでしょう」

「まあ、聞きなつて。あたしは、『イメージ』で女に変身したんだよ。相手が女の子だと、男のまんまじゃ闘^やり難くくてさ」

「え……！？」

言い分を聞いたリインフォースは、相手の女の子の魔力を確かめる。魔力の感覚は、隼樹のソレと同じだった。

魔力は指紋と同じで、魔力光や感覚が皆違うのだ。

ソレに気付いたリインフォースは、僅かに動揺を顔に表した。

「え……？ ええつ……！？ ほ、本当に隼樹なのですか……！？」

「そうだって、言ってるだろう？ アンタのだ〜い好きな、ヘタレな葉谷資隼樹だよ……！」

別人と化した隼樹の言葉に、リインフォースはハツとなる。自分が隼樹を好きな事、隼樹がヘタレな事を知っている人物は限られてくる。局内に知れ渡つてはいるが、少なくとも外部の人間が知るはずが無い。何より、先ほど『イメージ』と言う能力の名を口にした。それに、さらわれた隼樹と犯人が居るであろう場所に居るのだ。抱えられてる少女が犯人だとすれば、残った金髪の美少女が変身した隼樹と言う事になる。『イメージ』を使えば、性格を変えたり、肉体老化を防ぐ事が出来る。ならば、“性別を変える”事も可能だろう。

そこまで思考が至った時、リインフォースは改めて驚き、目を大きく見開いた。

「ま、丸つきり別人じゃないですか！？」

「そうだよ。可愛いだろう？」

「いえ、可愛いとかそういう問題では無く……。姿どころか声と性格まで変わって、完璧に女の子に……。しかし、コレはコレでアリかもしれない……」

何を想像したのか、リンフォースの頬が若干赤く染まった。彼女の反応を気にせず、寧ろ可愛い物を見るような目で見ながら隼樹は言った。

「それでさ、このガキンちゃんんだけど、六課で保護する事にしてくれない？」

「え？ ですが……」

「別にコイツ自身がホテルに何かした訳じゃないし、あたしだって結果的にこうして無事な訳だしさ。大目に見てくれない？」

「むう……。分かりました。貴方が、そう言うのでしたら、主にそしてお伝えします。と言うか、貴方本当に別人ですね」「イケてるだろ？」

軽くウインクして答える隼樹に、不覚にもリンフォースは顔を赤くして目を逸らした。元が隼樹であると解ると、妙に意識して心臓がドキドキしてしまう。

うう……！ 隼樹、可愛いです……！

「ホラッ、さっさと戻るよ！」

「あっ、待って下さい！ って、その姿のまままで戻る気ですか!？」

「いや、アンタの反応が面白かったからさ、他の奴等の驚く様も見たくなっただね」

「本当に別人ですね、今の貴方っ！」

不安を抱きながら、リンフォースは女版隼樹と共にホテルを目指した。

*

「いや、誰っ……!?!」

「あはははははははははは……!」

ホテル前に集まった六課メンバーとセイバーが声を揃えて驚き、予想通りの反応に隼樹は笑った。

案の定と言うか、女に変身した隼樹を見て、皆も最初は誰だか解らなかった。あのセイバーとオルタでさえ、変身したマスターに気付かなかったぐらいだ。ラインで繋がっているとは言え、一見しただけでは本当に別人の美少女で、リインフォース同様に魔力を探つてようやく隼樹と知り、驚愕した。

ガジェット軍の方は、六課メンバーが見事に殲滅した。途中で召喚魔法によつてガジェットがホテル前の防衛ラインにまで入ってきたが、新人四人に加えて隊長のなのも参戦した事で、危なげなく全機破壊した。

セイバーとオルタの方も、謎の人影の軍団を全て倒した。数が多かったが、戦闘能力はそれ程高くは無く、特に苦戦する事も無かった。

隼樹が墮としたアリスは、寝かせて先にへりに乗せている。何はともあれ、大きな被害も無く戦闘は無事に終わった。

「ジュンキ。いい加減、男の姿に戻ったらどうですか?」

「え〜? もうちよつといいじゃない」

「……貴方の為に言ってるんですよ」

困り顔でセイバーは、頭痛を堪えるように指で眉間を押さえた。そこへ、スバルの声が上がった。

「『イメージ』って、そんな事も出来るんですね。凄〜い……!」

「だろ？ 何なら、アンタを男の子に変えてやるつか、スバル？」
「あつ、いえ、結構です！」

ニヤつく隼樹に、慌ててスバルは両手を振って断った。

「そう？ じゃあ、エリオを女の子に……」

「だ、駄目っ！ エリオに変な事しないで……！」

隼樹の矛先がエリオに移ると、すぐさまフェイトが庇った。過保護故に必死な様子である。

すると、すぐに隼樹の標的が変わった。

「まつ、別に無理矢理やる気は無いけどさ。それにしても、シグナムやリンフォースもそうだけど、フェイトも良い胸してるわよね」

「え……？」

「ふふん。でも、あたしには劣るわよねっ！」

「ひゃっ!?!」

語尾を強めて言うと同時に、隼樹はフェイトの胸を掴んだ。

「わああああ!?!」

「何するの隼樹さん?!?!」

何の前触れも無い隼樹の悪戯に、一同は激しく動揺して声を上げた。

そして、狙ってやったのか、それとも『イメージ』の効力が切れたのか、突然光に包まれたかと思えば隼樹は元の男の姿に戻った。ちなみに彼の手は、フェイトの膨らみを掴んだままだ。

「え……？」

気まずい沈黙の中で、隼樹は引き攣った笑みで声を漏らした。そして、恐る恐る顔を上げれば、完熟したトマト並に真っ赤にさせたフェイトの顔があった。事態の悪さと身の危険を感じて、隼樹は弁明しようとする。

「い、いや、違うんだ、フェイト……！ コ、コレは俺のせいであつて俺のせいじゃなくて……」
「隼樹のスケベっ！」
「ぶがつ！？」

哀れ隼樹は、フェイトがフルスイングしたバルディッシュを顔面に受け、後方に吹き飛ばされた。

*

「ふふ……！ 面白い方法で返り討ちにしたな、隼樹の奴め……！」
薄暗い室内で、静かに笑うのは漆黒の美少女。目の前に出しているモニターには、先ほどの隼樹とアリスの戦闘映像が流れている。

「女相手なら、もしかしたら楽にイケるかとも思ったが、そうもいかないか……」

残念そうな言葉とは裏腹に、顔に落胆の色は無い。寧ろ、楽しんでいるようにさえ見える。

「まあ、コレは余興のほんの一部だ。復讐は、まだ始まったばかり

……まだまだ本番はこれからだ……！」

自信

もう嫌だ、と隼樹は部屋に引きこもっていた。

原因は言わずもがな、ホテル・アグスタでの一件だ。『イメージ』の能力ちからで女の子に変身して、襲撃者である少女を倒した。だが、その行動は問題だらけだった。まず、襲撃者であるアリスを失禁に至るまで締め上げ、更には足を舐めさせて奴隷に言う女王様っぷりを発揮して、最後はフェイトの胸を掴むセクハラ行為の直後、図ったように元の姿に戻ってしまった。ティアナのミスショットを回避した代わりに、隼樹が辱しめを受ける羽目に遭った。

あの後、隼樹は酷く傷付いて部屋に引きこもった。バルディッシュで殴られた顔よりも、激しい羞恥心によって心が粉々に粉碎されたのだ。扉には鍵を閉めた上に『イメージ』で強化を施し、誰も入れない密閉空間を作り上げた。これでセイバーのもう一つの宝具でもあれば、完全完璧の難攻不落、攻略不可能な引きこもり空間が実現出来るのだが、無い物は仕方ない。

セイバー達が部屋の外から声をかけ、フェイトが暴力を振るった事を謝ってくる。だが、隼樹は耳を塞ぎ、ベッドの中に潜り込んで答えようとしなない。死にたい程に恥ずかしくて、今は誰とも顔を合わせたくないし、話したくもなかった。

廊下で説得を試みていた一同も、隼樹の気持ちを察して、今はそつとしておく事にした。オルタだけが、扉を破壊する強行突破に出ようとしたが、他の皆が全力で止めて何とか事なきを得た。

一人部屋に引きこもる隼樹は、頭をグシャグシャと掻き乱す。

ああ、もう！ 何であんなバカな事したのかな……？ こんな事なら、女になるんじゃないかった……！ そうだよ……後から考えれば、別に俺自身が女になる必要ねーんだよ……！ アーチャー達を出したみたい、一時的に代わりに闘える女を想像して出せば良かったんだ……！ ああ、俺ってホントバカ……！

悶々とした気持ちで、後悔しながらベッドの上を左右に転がる。その時、腹の虫が鳴って空腹感を憶え、喉の渇きにも気付いた。

「ああ……そういや、戻ってから夕飯食ってなかった……」

ベッドの中から顔を覗かせ、隼樹は呟いた。

あまりの恥ずかしさに、隼樹は食事も摂らずに自室に直行して引きこもり、現在に至る。羞恥に悶え、落ち込んでいても減るモノは減るもんだ。

仕方ない、と空腹に従って隼樹は部屋を出ようとして、立ち止まった。このまま部屋を出て、廊下等でセイバー達とバツタリ遭遇したら、激しい羞恥心に駆られて逃走を図るだろう。飯は食べたいが、誰にも会いたくない。

どうしたものか、と室内を歩き回って悩む隼樹の目に、窓が入った。

「あつ、ココから出ればいいんだ」

スツカリ夜となった今の時間帯に、外を出歩く者は居ないだろう。それに外からなら、ガラス張りの壁から食堂内の様子をうかがい、人の有無を確認する事が出来る。まさに、一石二鳥だ。

そうと決まれば、後は実行あるのみ。窓を開けて、『イメージ』で体を浮かせて、ゆっくり静かに地面に降り立った。

誰にも見つかる事無く、無事に部屋を出れた隼樹が、早速食堂を目指して移動しようとした時だった。

静かな夜の隊舎の庭で、音が聞こえた。いや、聞こえてくる。

誰か居るのか？ と思いつながら隼樹は、極力足音を殺して物陰まで移動して、そっと音の出所を覗いた。

ソコには、隼樹にとって避けたかった未来の一つが、現実化していた。

「え……!？」

驚き顔と言うより、しかめっ面に近い表情で隼樹は呟いた。

何と、隊舎裏の庭で、一人自主練に励むティアナを発見してしまったのだ。自分の周囲にスフィアを幾つか配置して、クロスミラージユを向けて狙撃の訓練をしている。かなりの長時間で続けているらしく、顔色が若干悪く見える。

ティアナの訓練を目撃した隼樹は、訳が解らなかった。直接は見えないが、ホテル・アグスタでティアナはミスショットをしていないはずだ。ソレがどうして、原作通りに無茶な自主練をしているのか、全く解らなかった。

「何で……?」

「覗きとは良い趣味してるじゃねーか」

ぼやきの直後に声をかけられ、弾かれたように隼樹は後ろを振りかえった。

後ろに立っていたのは、パイロットのヴァイスだった。

「ヴァイスさん……。もう、おどかさないてくださいよ〜!」

「へへっ、ワリーワリー」

顔の前に手を添えて、謝りのポーズを取るヴァイス。

女性比率が圧倒的に高い機動六課のような場所は、男にとって夢のような所であると同時に肩身が狭い空間でもある。それ故に、自然と男の友人と言うか、親しい間柄を求めるのだ。

ヴァイスもその一人で、数少ない男同士で仲良くやっている間柄だ。

実は、隼樹はヴァイスの事をあまり好きでは無く、寧ろ嫌ってい

た。理由は、ナンバーズのデイドをライフルで狙撃したのを根に持っていたのだ。しかし、クロノ同様に『この世界のヴァイス』は、デイドに何もしていない。逆恨み行為を繰り返さない為に、隼樹は怒りを抑えて接した。それから六課の環境もあって、自然と逆恨みの感情は薄れていき、今ではそれなりに親しい関係になっている。相手がヴァイスと解り、隼樹は落ち着いて本題に入る。

「あの、ランスターさん、何時から自主練してるんですか？」

「任務から帰ってきて、そんなに間を空けてねーから……四時間だよ、四時間」

「いつ！？ 四時間っすか！？」

まんま原作通りの展開じゃねーか、と隼樹は心中に呟く。

「何でそんなに……今日の任務で、何か失敗でもしたんですか？」

「いや、俺が知ってる限りじゃあ、失敗はお前さんの変身くらいだな」

「その話は止めて下さい！ いや、ホントにつ……！」

聞いた瞬間、隼樹は自分の顔が熱くなったのを感じた。

やはりと言うか何と言うか、変身の件はヴァイスも知っていたようだ。誰かから聞いたのか、それとも映像で見っていたのか。正直、どっちでもいいが。

「すまねえ。ちょっとからかっちゃった。

んで、本題のティアナだけだよ……任務じゃあ、特に目立った、と言うかミスらしいミスは何もしちゃいなかったよ。ただ、俺がさつき止めようと思って話してみたら、自分は凡人だから人一倍訓練しねーと駄目なんだとさ」

ああああっ！　そういう事かアアアア！　完全に見誤ったアアアアアア！

ヴァイスから事情を聞いた隼樹は、内心にシャウトした。

ティアナのミスショット回避は、原作にあつた撃墜事件の根本的原因ではない。それよりも重要なのは、ティアナの心の問題だ。ティアナは幼い頃に、管理局で魔導師をやっていた兄のティード・ランスターを亡くしている。違法魔導師を追っている最中に、魔法を受けて、逃走を許してしまう。すぐに犯人は取り押さえられたが、運が悪い事にティードが受けた傷は致命傷となり、殉職してしまつた。更に、当時の心無い上司が、犯罪者を取り逃がすとは局員としてあるまじき失態であり、例え死んでも捕まえるべきだつた等と暴言を発したのだ。コレにより、ティアナの中で兄の魔法は役立たずで無い事を証明する事が全てとなり、努力してきた。

だが、そんな自分の努力を嘲笑うかのように、どんどん周りに優秀な魔導師が現れ、強い劣等感を抱く事になった。見返す目的と劣等感と二つの要素が、彼女を無茶な行動に駆り立てているのだ。

改めて彼女の問題点に気付く隼樹の前で、ヴァイスは頭を掻いて言った。

「俺が言つても聞かなくてな。お前さんの方から、ガツンツと言つてくれないか？」

「いやいや、ヴァイスさん。俺が他人に物事を強く言えないの解つてるでしょう？」

「例の『イメージ』ってヤツを使えば、性格を変えられるじゃないか」

「ん〜、出来なくは無いつすけど、あんまり説教染みた事は返つて逆効果になりかねませんし……」

ウーム、と野郎二人は腕を組んで考え込む。

自分達で無理なら、他の人に頼めばいいんじゃないかね？　と思つた時

だった。

ハッと気付いた隼樹は、間延びした声を出す。

「あゝ」

「ん？ 何か良い案でも思い付いたか？」

「はい。至極常識的な解決法を見つけました」

解決法を見つけた隼樹は、早速ヴァイスに話した。

*

ロクに休憩もせず、ティアナは自主練を続けていた。

才能も凄い魔力も無い自分は、こうして地道に人一倍トレーニングするしかない。そう自分に言い聞かせて、奮い立たせ、限界が迫っている体を無理矢理に動かす。

そうして自主練を続けていると、

「ティアナ」

不意に後ろから名前を呼ばれた。

聞き覚えのあり過ぎる声に、ティアナの体は硬直したように動きが止まった。心臓の鼓動は早鐘のように鳴り、緊張状態になる。

ゆっくりとティアナは、後ろを振り返った。

「……なのは、さん」

「ちよつといいかな、ティアナ？ 一旦休憩して、私とお話しない？」

隊舎裏に現れたのは、高町なのはだった。

隼樹が思い付いた解決法とは、上司であり教導官であるなのはに知らせる事だった。上司に部下の無茶な現状を知らせて、話し合わせる。言われてみれば、なんだそんな事か、と思う常識的な方法である。

なのはは、普段と変わらない笑顔を向けてくる。

逆にティアナは、気まずそうな顔をなのはから逸らした。悪い事をしてる場面を、教師に見つかってしまった子供のような反応だ。隊長の言う事には逆らえないので、ティアナは自主練を中止して、二人で近くの木に背中を預けて座り込む。

「ヴァイス君から聞いたよ。四時間も、ココで自主練してたんだってね」

「……はい」

答えるティアナの声は、小さかった。溜まっていた疲労もあるが、なのはに自主練を見られた事が一番堪えていた。内心でティアナは、叱られる事を覚悟した。

しかし、なのはの口からは、思っていたような叱りの言葉は出てこなかった。

「あのね、ティアナ。最初に言うておくけど、ティアナは凡人なんかじゃないからね」

「え………？」

意外な言葉に、ティアナは呆気に取られた顔になる。

笑顔のまま、なのはは続けた。

「確かに、スバルはパワーがあつて潜在能力もある、エリオもブラントクを取れる程の実力を持って、キャロも竜召喚のレアスキルがあ

る。うん、確かにティアナの周りに居る皆は凄いよ。

でもね、一番凄いのはティアナなんだよ？ お世辞抜きで、本当に。だって、ティアナが居なかったら、セイバーオルタさん達の訓練の時やホテルの任務の時も、上手いかなかったもん」

「どついつ事ですか？」

「訓練が上手くいってるのも、任務でフォワード四人が全員無事に警備を終えられたのも、ティアナの的確な指揮があつてこそなんだよ。セイバーオルタさん達の訓練で、最初はすぐに撃墜されてたけど、段々冷静さを保ててきたティアナの指揮で撃墜されるまでのタイムが徐々に伸びてきてる。ホテルの時だって、皆が勝手な行動をしないように指示を出してた。こういうのは、ちゃんと皆の能力を把握してたり、チームのリーダーとしての意識が無いと出来ない事だよ。」

私が言っても説得力無いかもしれないけど、別に派手で強力な魔法や才能が全てじゃないからね。幾ら凄い魔法やレアスキルを持ってても、ソレを上手く使えなきゃ意味が無い。だから、皆の力を活かした指揮が出来るティアナは、皆に負けない位に凄いんだよ。

それに、幻術や射撃しか出来ないって思ってるかもしれないけど、相手の目をくらませる幻術は威力の強い魔法以上に強力な武器に成りえるんだから。ソコにティアナの射撃が加わると、相手からしたら本当に厄介な武器なんだよ」

オルタ達による実戦形式の訓練で、新人フォワード組が生き延びるタイムを伸ばしていつてる要因は、なのはが語ったようにティアナの指揮が大きい。彼女の指揮が無ければ、タイムは伸び悩んでいただろう。それに、彼女の幻術は相手に本物か否かの判断の時間を要させ、隙を作る重要な役目も果たしている。

その事は、直接模擬戦で相手をしているオルタとセイバーがよく知っている。

なのはも、自分の訓練の中でティアナの指揮能力と魔法を評価し

ていた。

「本当なら、こう言った事は訓練が終わった後にも話してあげれば良かったんだけど、言わなくても自分で解ってるって勝手に思い込んでたから……。だから、ティアナが、一人で遅くまで無理して自主練をする事には、私にも責任があるんだ。ごめんね」

「あつ、い、いえ……。そんな……」

「それでね、ティアナ自身ちゃんと解って欲しいんだ。自分がチームの中でどれ程重要な存在なのか、どれだけ皆を助けているのか。ティアナが皆を助けて勝利に導いてるんだよ。って、セイバーさんの受け売りみたいになっちゃったけど、実際にそうだからね。ティアナの頑張りには、何よりもちゃんと結果に出てる！それに、私だけじゃなくて、セイバーさんもオルタさんも、皆ティアナの事を認めてるんだよ？ティアナの凄さは、私達が保証する！だから、自分に自信を持ってね」

「なのは、さん……！」

話を聞いたティアナの目から、自然と一筋の涙が流れた。上司の名前を口にした声も、僅かに震えていた。

初めて、自分の事を認めてくれた。その事がたまらなく嬉しくて、涙を堪え切れず、泣き出す。今まで努力してきた事が、自分の力が認められる事が、こんなに嬉しいと心に染みて知った。

そんなティアナの頭に、なのははそつと手を添えた。

「訓練で、何か不満とか意見があったら、遠慮なくいつでも言っ
てね？ 教官として応えられるように、私も頑張るから」

「……はい」

「うん。それから、自主練をするのはいいけど、無理は駄目だから
ね？ 体調管理も立派な仕事の一つだし、何より皆が心配するから」

「……はい」

嗚咽しながら、ティアナは返事をした。

よっしゃアアアア！ 撃墜ルート回避イイイイ！

こっそり物陰から二人の様子を眺めていた隼樹は、内心にシャウトしてガッツポーズを取った。

ティアナの問題が解決したのを見届け、自室に戻ろうとして食堂を目指した。

「あつ、そつだ」

隼樹が去った後で、なのが思い出したように言った。

「ちゃんとヴァイス君と隼樹さんに、お礼言っておいてね」

「え……？ 隼樹さん、ですか？」

泣き止んだティアナが、怪訝そうに訊いた。なのはに話をしたヴァイスは分かるが、隼樹が出てくる意味が解らなかった。

「直接私を呼びに来たのはヴァイス君だけど、私を呼ぶ事を考えたのは隼樹さんなんだよ」

*

翌朝。

目を覚ました隼樹は、着替えと髭剃り、洗顔を済ませて朝食を食べに行こうと窓を開けた。まだ皆に会う事を気まずく思い、昨夜と同じ方法で部屋を出る。

「よっこいしゅいちるう……っど。あ、よっこいしゅいちるう”って言っちゃった」

浮遊して、隼樹は地面に着地した。

さて食堂に行こうとしたところで、

「あの……」

「えっ!？」

不意に声をかけられ、隼樹は慌てて振り返る。

後ろに居たのは、訓練用の服を着たティアナだった。

「おはようございます」

「お、おはよう……」

ええっ……!？ 何で？ 何で、こんな朝早くに隊舎裏にテ

ィアナが居るの!？

気まずさを抱き、隼樹はぎこちない笑顔になる。

「えっと……ランスターさん、どうして、こんな時間に、こんな所に……？」

「その……隼樹さんに伝えたい事がありまして……。皆と会つのを気まずく思ってる貴方なら、こっそり窓から出てくるだろうと思つて待っていました」

俺の行動読まれてるウウウウウ!

ティアナの読みに、隼樹は内心にシャウトした。

行動を読まれていた事に動揺する隼樹の前で、恥ずかしそうに頬を赤くしながらも、ティアナは意を決して言った。

「隼樹さん……その、昨夜はありがとうございました！」
「え……？」

いきなりお礼を言われ、隼樹は呆気に取られる。正直、感謝されるような事をした覚えは無い。

「ありがとうって、何の事……？」

「なのはさんから聞きました。私の無茶を止める為に、なのはさんを呼ぶようヴアイス陸曹に頼んだって……」

「あ、ああ……」

あの女、何余計な事喋ってんだよ！？ 今度は、アンタを女版俺で仕置きしたるかっ！？

なのはに対してお仕置きを考えるが、そんな事しても、また自分が恥ずかしい思いをする事は目に見えている。それに、まあ、お礼を言われて悪い気はしない。

しかし、ソレでも一応ティアナに言った。

「でも、俺は何もしてないよ。たまたまランスターさんが無茶してるのを見つけたから、なのはに伝えるようヴアイスさんに頼んだだけだ。実質、ランスターさんを助けたのは、なのはだよ」

「そんな事ありません！ 確かに、なのはさんの言葉に私は救われました。でも、あの時に隼樹さんが私を見つけて、なのはさんと呼ばなかったら……きっと私、今でも無茶を続けてたと思います。だから、本当に感謝してます」

「そ、そうか……」

妙に気恥ずかしくなり、隼樹は照れ隠しするように頭を掻いた。

会話が途切れると、妙に気まずい空気になって、二人共黙り込んでしまった。

ややあつて、ティアナが沈黙を破った。

「あの、これから朝食なんですよね？ よかったら、一緒にいいですか？ 実は、私もまだなんです」

「え……？ あ、ああ、うん。いいよ。じゃあ、行こうかランスタ
ーさん」

隼樹は頷き、ティアナと並んで食堂を目指して歩き出す。
不意に、ティアナが言った。

「あの……」

「ん？」

「その、“ランスタ” って呼び方やめてもらっていいですか？

何だか、他人行儀な感じがして……」

「じゃあ……ティアナ、さん……？」

「はい。そっちでお願いします」

ティアナをファーストネームで呼ぶのは初めてなので、隼樹は妙に気恥ずかしく思った。

何だか不思議な人ね。何もしてないと思えば、実は何かしてる……何かしてると思ったら、実は何もしてない……。自分で思っ
といてなんだけど、よく解らない人ね……。

並んで歩くティアナの心中で、隼樹の印象は『よく解らないけど
良い人』となる。

今回の一件で、二人の距離が少し縮まった。

自信（後書き）

今回は、自分なりにアンチにならないよう工夫して『ティアナの回』を書きました。

他の二次創作だと、オリ主がなのは仲間達と対立したり、模擬戦でティアナを撃墜した後になのはをボコるのが主ですが、今回はなのはでティアナ励ましです。彼女の言う、純粋な話し合いです。まあ、一方的に喋らせちゃいましたが。

もうね、過剰な撃墜もシャーリーが開いた気分悪い説明会自体嫌いなので、そのルートを潰しました。ある意味アンチですが。あつ、シャーリーは好きなキャラですけどね。眼鏡っ娘。

んで、最後のティアナと主人公の短いやり取りですが……フラグなんて立ってないよ？ フラグ？ 何それ？ おいしいの？ だって、ティアナはお礼言っただけだし、頬が赤くなっただけだし、お礼言っただけだし。断じて恋愛フラグは立ってない！
つと、ちよつとムキになってしまいました。

次は、聖王争奪戦ですかね。

では、感想・ご意見お待ちしてます。

同盟

ティアナの問題が解決して、隼樹と皆の間にあつた気まずさも払拭された時だった。

朝早くから、隼樹は部隊長室に呼ばれた。

部屋に入ると、デスクに座るはやてに笑顔で迎えられる。

そして、部屋に居るのは、隼樹とはやての他にもう一人居た。青黒いゴスロリ衣装を着たアリスだ。入室した隼樹に、ペコリと会釈をした。つられるように、隼樹も頭を下げ返す。アリスが居合わせていると言う事は、呼ばれたのはアリスの件だろうと察した。

部隊長デスクの前に二人が揃ったところで、はやてが話し始める。

「もう察しはついていると思うけど、隼樹さんと呼んだのは彼女の件や。アリスちゃんは、機動六課^{ウチ}で保護する形で預かる事に決まったで」

「そうか」

やっぱり、と思いながら隼樹は答えた。

はやての話は続く。女版隼樹が、完膚なきまでに攻めて屈服させたアリスは、ホテル・アグスタから連れて来た際に事情を聞こうと六課で形式的な聴取をした。だが、自分の名前や魔法以外に関する事は、何一つ覚えていないと言う。隼樹を襲った目的、自分の意思なのか誰かに指示されたのか、黒幕が居るのなら仲間は何人いるのか、ソレ等の重要な情報は一切分からないの一点張りだった。

聴取を行ったはやて、立ち合ったなのはとフェイトの三人は、二つの可能性を考えた。

まず一つは、アリスが嘘を吐いている可能性。最初に疑うべき事だが、アリスが嘘を吐いているようには見えなかった。考え込む表情、悩む仕草、ソレ等の拳動に演技臭さが無い。長年執務官として多く

の犯罪者を検挙してきたフェイトの目から見て、嘘の可能性は低いと判断された。

もう一つは、記憶を消去された可能性。アリスの背後に黒幕の存在があり、洗脳して操って、六課に捕まった事で洗脳を解いたと同時に情報漏洩を防ぐ為に記憶を消去した。彼女が嘘を吐いてないとすれば、コレが一番可能性が高い。ガジェットの襲撃に合わせたような謎の影の襲撃、そして隼樹を連れ去ろうとした行動から、背後に何者かが糸を引いてるのは明らかだ。

洗脳の可能性を考え、女版隼樹の保護要望と襲われた隼樹が特に罰を求めない事を考慮して、アリスは機動六課で保護される事になった。

「それでな、アリスちゃんは保護する事に決まったんやけど、実際に面倒を見るのは隼樹さんをお願いするから、よろしくな」

「ええっ!？」

全く予想だにしていなかった決定に、隼樹は露骨に驚く。

子育ての経験も無いのに、子供の相手など出来ない。当然、隼樹は反論した。

「ちよっ……ちよっと待つてよ、はやて! 六課が預かるんでしょっ? 何で俺が……?」

「確かに、六課で保護する言うたけど、局員で面倒を見るとは言うてないで。それに、民間協力者とは言え、隼樹さんも立派な六課の一員や。何より、その子を拾ってきたんは隼樹さんやから、面倒みる義務はあると思うんやけどな」

語るはやての顔は、笑顔だった。まるで、この状況を楽しんでいるかのような。

そんなはやての笑顔に若干の苛立ちを抱きつつ、隼樹は言葉を詰

まらせた。六課の一員と言うのはあながち間違いではないし、女版
とは言え隼樹がアリスを拾ってきたのもまた事実な訳で。

それから、とはやては、チラッとアリスを一瞥する。傍で話を聞
いてるアリスは、無表情で大人しくしている。

「アリスちゃん、警戒してるみたいで私等には心開いてくれてない
みたいなんや。せやから、隼樹さんに頼るしかないんよ。お願いや、
隼樹さん！」

顔の前に合わせた両手を添えて、はやては頼んできた。

うん、と隼樹は悩みながら頭を掻く。視線を隣に向けると、ア
リスも見つめ返していた。お姫様カットで揃えられた前髪が、幼さ
の残るアリスの可愛さを引き出している。目が合った瞬間、隼樹は
気恥ずかしくて顔を前に向き直した。

苦悩した末、隼樹は諦めたように言った。

「分かりました。俺が面倒見ます」

「ありがとうな！」

引き受けてくれた隼樹に、はやては笑顔でお礼を伝えた。

話が済んで、二人で部隊長室を出ると、廊下で待っていたセイバ
ーとオルタが寄ってきた。隼樹の傍に立ってるアリスを一瞥して、
セイバーが尋ねる。

「ジュンキ。はやてからの話は彼女に関する事ですか？」

「うん。俺がさ、この子の面倒見る事になっちゃったんだよ」

「ジュンキがですか？」

聞いた瞬間、セイバーはオーバーな位に驚いた。

まあ、彼女の反応も無理からぬこと。グータラなイメージが強い隼樹が子供の面倒を見るなど、想像し難い上に柄では無い。過去に幼い頃のフェイトと同居した経験があるが、その時だって握り飯を作ったくらいで、その他はフェイト自身や使い魔のアルフ、セイバーがこなしていた。

オルタから見ても、隼樹は子供の面倒を見る柄では無かった。

「貴様が面倒を見る事になるとは……無謀だな」

「ストレートな意見ありがとう。つーか、俺だって不安なんです」

あまりに直球な意見に、隼樹は少し拗ねてみせる。地味男が拗ねてみたところで、全く可愛くないが。

その時、今まで沈黙していたアリスが口を開いた。

「黙って聞いていれば、勘違い無さならないで下さるかしら？ 私

が、この男の面倒を見るようなものです」

「え？」

怪訝そうに眉根を顰める一同に、アリスは続ける。

「眠りにつく前に、じゅんねーさまから言われました。「男のあたしは弱いから、アンタが護ってくれよな」って……。だから、私はじゅんねーさまのお言葉通りに、じゅんにーさまを側で護りするのよ」

「そんな事言ったの、女版俺っ……!？」

隼樹には、女の子になった時の記憶が無い、と言うよりあやふやなのだ。女になった、酷い事をした等おぼろげにしか覚えていない。アリスの口から、自分を護るよう女版の自分が命じたのを知って、

隼樹は複雑な思いを抱く。

そして、アリスの発言に、セイバーとオルタが対抗意識を燃やした。隼樹の護る剣サイヴァントであり、恋人である彼女達が黙っていられる訳が無い。

「ジュンキには私達がついています！」

「雑魚に務まるモノではない……！」

「あら？ 女の嫉妬は醜いわよ……？」

クスクス、と可笑しそうに笑うアリス。

挑発的とも受け取れる少女の笑いに表情を険しくさせ、大人気なく睨みを利かせるセイバーとオルタ。

三人の間で、バチバチと激しい火花が散る。

静寂ながらも踏み込む事を許さない争いに、小心者の隼樹はただ静かに見守るだけだった。

*

機動六課隊舎の食堂。

局長が集まり、朝食を摂っている。普段は平和な時間なのだが、今朝は少し違った。

あるテーブルで、他を寄せ付けない空気を漂わせているのだ。席に着いているのは、セイバー、オルタ、アリス、そして引き攣った笑顔の隼樹の四人だ。重苦しいオーラを放っているのは、当然二人の騎士王とゴスロリ少女である。『隼樹を護る女』と言うポジションを譲るまいと、対抗心と敵意を剥き出しにしている。お陰で、同じ席に着いてる隼樹は、落ち着いて食事も出来ない。しかし、当の本人達は黙々と料理を食べていた。

重苦しい空気の中、隼樹は念話で助けを求め。

（ザツファイ！ ヘルプミイイイイ！）

（……すまん。我では助けられん）

（裏切り者オオオオオオ！）

ほぼアツサリとザファイラに見捨てられ、隼樹は念話でシャウトした。友情って儂いよね。

他の局員も、我関せずといった様子で食事をしていた。

その中には、フォワード四人や副隊長陣も含まれている。

「何だか、アソコだけ空気が違いますね……」

「隼樹さん、何だか辛そうにしていますし……」

「ああ。だが、間違っても助けにいかうとはするな。ミイラ取りがミイラになるだけだからな」

エリオとキャロの二人に、シグナムが厳しい言葉をかけた。二人が心配する気持ちも解るが、あの場は下手に介入するところらまで被害を喰ってしまう性悪空間なのだ。副隊長として、部下の犠牲を防ぐ義務があるシグナムは、隼樹には悪いが二人に釘を刺した。

ハア、と頷くエリオとキャロは、別の事に関心を向けた。

「それにしても……」

「お二人共、本当に沢山召し上がりますね……！」

二人が注目してるのは、セイバーとオルタの食事量だった。

料理が山盛りに積まれていた何枚もの皿が、あつという間に二人の口に吸いこまれ、胃に収まっていく様には圧巻した。エリオとスバルの前衛組はカロリーを多く消費するので、かなり食べる方である。しかし、騎士王の二人は、その更に上を行っていた。次々とお

かわりを頼んで、厨房の食材を食べ尽くさん勢いである。初めて二人の食べっぷりを見た時は、大食いのスバルとエリオも啞然となった。親友の大食いに慣れていたティアナでさえ、目を丸くして驚愕する程だった。

今でも驚きが抜けないエリオとキャロに、同席してるヴィータが言う。

「エリオとスバルは前衛組って事や毎日訓練で体動かしてるからだけど、アイツらの場合は単純に純粹に“大食い”なだけだからな。隼樹も前に、『食王』『腹ペコ王』なんて異名を付けてたっけ」

二人の食べっぷりを見て、エリオとキャロはヴィータの言葉に頷いた。

一方でシグナムは、隣の席で食事をしてるリインフォースに話を振った。

「それにしても、お前が“あの輪”に入らないとは意外だな」

「確かに、恋人として、隼樹を好いてる者として加わりたい気持ちはあるにはある……。だが、私が加われれば、更に隼樹の精神に負担をかける事になる」

不参加は、自分なりに隼樹を想つての行為だった。

一ヶ所は不穏な空気だったが、他は割と平和な朝食の時間となった。

*

食事を済ませた隼樹は、セイバーとオルタに連れられて自室にや

ってきた。

何でも、大事な話があるそうだ。アリスを同席させるか、セイバー達は少し考えたが、今回の件に一応関わりがあると言う事で部屋に招き入れた。

ベッドに腰を降ろす隼樹の隣に、さり気なくアリスが座る。その事に、セイバーとオルタは僅かに眉根を顰めたが、今から話す事は真面目で重大な事なので、今回は見逃す事にした。

若干の険悪なムードを感じつつ、隼樹は遠慮がちに尋ねた。

「それで、話って何？」

「はい。実は、先日のホテル・アグスタの件で気になる事がありました」

「気になる事？」

片眉を上げる隼樹に、セイバーは続ける。

「ホテルの後方から接近してきた、謎の襲撃者の集団です。黒い影のような人型をしていました。数は多かったです。単体での戦闘能力はさほど高くはありませんでした。おそらく、スバル達でも充分に倒せる位です」

「その雑魚キヤラ集団が、どうかしたの？」

「はい。実は……」

そこでセイバーは一旦言葉を切り、より一層険しい表情を作った。やや雰囲気が変わり、室内も緊張感が漂い始め、間を取った後に続ける。

「影から感じた魔力が、あの防衛プログラムと酷似してるのです…

…！」

「えっ……！？」

衝撃の事実を聞かされ、隼樹は動揺を禁じ得なかった。

防衛プログラムとは、はやてが所有している『夜天の書』を『闇の書』に変貌させた原因の恐ろしい殺戮プログラムである。『闇の書事件』で隼樹達と壮絶な死闘を繰り広げ、セイバーの聖剣によって細切れにされ、消滅したハズの過去最凶の敵だ。

「いや……いやいや、ちょっと待ってよ、セイバー！ そりゃあ、おかしいって……！ だって防衛プログラムは、セイバーが斬って倒したじゃん！」

「確かに。私の剣で、奴を斬り捨てました。ですがジュンキ、よく思い出して下さい。私に斬られた防衛プログラムは、その後どうなりましたか？」

「どつって……」

問われた隼樹は、必死に記憶を辿る。

あの時、隼樹の目の前で防衛プログラムはセイバーに斬られた。ソレは間違いない。そして、斬られた後の防衛プログラムは。

「確か……塵になって消えたような……」

「そうです。あの時、私は防衛プログラムが消滅したのだとばかり思っていました。ですが、今回のホテルの一件でソレは疑わしくなりました。

ジュンキ……もしも、あの塵と化した現象が消滅ではなく、防衛プログラムが意図的に起こした事だとしたらどうでしょう？ 自分の身を護る為に、消滅を偽って離脱する為の逃亡手段だったとしたら……」

「まさか……！？」

「ジュンキ。防衛プログラムが、そのまさかをやる者だと言うのは、貴方も解っているハズです……！」

セイバーの鋭い眼差しと声を受け、隼樹は口ごもってしまった。
彼女の言う通り、防衛プログラムはまさかやる奴なのだ。隼樹
と言った一人の人間を消す為だけに、数百キロ範囲で反応消滅
を起こす魔導砲アルカシエルを利用しようとした悪魔なのだから。
動揺が収まらない隼樹に、セイバーが言う。

「現段階では、防衛プログラムが生存している可能性がある、と言
う推測の域です。魔力の感覚が酷似していたと言う印象的な事だけ
で、決定的な証拠がある訳ではありません。現状では、確証を得る
には、まだまだ証拠が足りませんから……。この事は、任務を終え
た当日にはやてには話してあります。ですが、まだ他の皆には話し
ていません。私の考え過ぎ、勘違いと言う事もありますから、軽々
には不安を与えるような事は言えない。防衛プログラムの生存確認
はまだですが、一応気を付けて下さい……。！」
「分かった……。！」

セイバーの言葉に、緊張した面持ちで隼樹は答えた。

*

スカリエッツィのラボ。

広いスペースを誇る研究室で、スカリエッツィはご満悦な様子で
笑っていた。理由は、ラボに訪れた客と同盟を結び、能力提供を受
けた事だ。彼女の手が加えられた作品が、驚異的な能力向上を見せ
たのである。

上機嫌な様子のスカリエッツィの前には、能力向上をしたガジエ
ットと戦闘機人のデータが表示されていた。

「素晴らしいよ……！ キミが手を加えただけで、まさかここまで飛躍的に能力を向上させるとはね……！ 実に面白く、興味深いよ……！」

スカリエッティは振り返り、後ろの椅子に座ってる協力者に顔を向けた。

「防衛プログラム……！ いや、今は黒龍くろりゅうだったね……！」
「ふふ……！」

椅子に座る協力者 漆黒の衣を纏った美少女の名は、黒龍。十年前の死闘で、隼樹とセイバー、フェイト達の前に敗れ去った凶悪プログラムだ。長い時の中で力を付け、黒龍と新たに名前を持ち、姿も変えて復讐の機会を待ち焦がれていた。スカリエッティに背中を向けたまま、黒龍は妖しい笑みを浮かべる。

「我に不可能は無いつ……！」

影のかかった笑みには妖艶さの他に、邪悪な本性が滲み出ている。研究室の隅から、ウーノが厳しい顔つきで黒龍を見つめる。彼女を快く迎えたスカリエッティと違い、ウーノは危険を感じていた。

本当に、この女と手を組んで大丈夫なのだろうか。言い知れぬ危機感を抱くウーノの脳裏に、ファミレスで仲間を誘った男の顔が過った。

開幕（前書き）

今回から、物語りは中盤戦に突入です！

開幕

世の中が理不尽なのは当たり前。

人間は自分達で“悪”を生み出しておきながら、“正義”を語って都合の悪いモノを排除しようとする。そして、犯した罪から目を逸らす。

欲望、願望、力、金、ありとあらゆる物を手に入れ、欲求を満たそうと平気で他者を犠牲にするのだ。しかし、いざソレが自分に回ってくると、何とか逃れようと足掻く。全く、ふざけた生き物だ。

黒龍と新たに名乗って復活を果たした防衛プログラムは、広域次元犯罪者であるスカリエツティのアジトに身を置いていた。目的を達成させるには、手駒が必要だ。それに、スカリエツティは強力なロストロギアを所有している。コレを利用しない手は無い。

スカリエツティの狙いは生命操作技術の完成とその空間作りだが、管理局排除と言つ共通の目的から、難なく手を組む事が出来た。何体かの戦闘機人からは警戒されているようだが、気にする事ではない。仮に何か仕掛けてきても、返り討ちにしてやるう。

場所は、研究室。黒龍は足組みをして椅子に座り、スカリエツティは小型モニターに映ってるウーノと何やら話をしている。特に聞き耳を立てる事なく、黒龍は手に持っているティーカップの中身を、口に含んだ。

話が終わったようで、スカリエツティが踵を返して歩み寄ってきた。

「ウーノからの報告では、近々、例の『マテリアル』がココに届くそうだ。もし本物ならば、アレを動かす“鍵”となるだろう……！」
「そうか……！」

静かにお茶を味わう黒龍の後ろで、スカリエツティは喜びを露にして笑っていた。

失敗が続いた中での唯一の成功例であり、ソレが遂に自分の手元に届くのだ。コレが嬉しくない訳が無い。物が手に入る前から、楽しみで仕方ない。何事も、始まる前や手に入れるまでが、テンションを高める時なのだから。

対照的に落ち着いた物腰をしている黒龍は、ティーカップを手近な机の上に置き、懸念を話す。

「輸送の途中に、何事も起きなければいいがな……」

「ああ、そうだね。だが、例えアクシデントが発生したとしても、何ら問題は無い。キミが強化してくれた、私の作品を使って回収に向かわせればいい。アレは、必ずココにやってくるさ……！」

確信に満ちた声で、スカリエツティは断言した。

話を聞き終えた黒龍は、椅子から腰を上げた。

「少し出てくる……」

靴音を鳴らして、研究室を出た。

薄暗い研究室を後にした黒龍は、出入口となつている洞窟の穴から外に出る。夜空には、宝石のように輝く星々が、点々と散りばめられていた。穢れの無い、純粋な美しさだ。

星空を見上げ、黒龍は呟いた。

「我と言う存在を生み出したのは、人間だ……！　そして、今の我を作ったのは、隼樹……お前だ……！」

正義も偽善も語らぬだけ、隼樹はまだマシな方だが。

「全て壊す……！ 殺して、奪って、破壊して、貴様等の全てを無に帰してやるっ……！」

突然吹いた風に黒い長髪をなびかせ、黒龍は憎悪に満ちた声を吐いた。

自分達で生み出した“悪”に殺されても、別に構わないだろう。人間共に、文句を言う資格などありはしない。

因果応報と言うヤツだ。

*

陽は再び昇り、真昼間のミッドチルダ。

首都・クラナガンには、今日も沢山の人が街中を行き交っている。近未来的な高層ビルが立ち並び、窓ガラスに日差しが反射して見た目的にも明るくなっていった。異世界ではあるが、街の中身は然程地球と変わりはない。ショッピングモールがあったり、ゲームセンターがあり、映画館もあり、道路には車も走っている。

機動六課のフォワード四人は今、クラナガンに来ていた。午前の模擬戦は、第二段階クリアの見極めテストだったのだが、新人四人は誰一人落ちる事なく合格となった。なのは達の訓練に加え、たまに行われるセイバー達との模擬戦も続けているのだ。コレで不合格だったら、それこそ大問題である。まあ、何はともあれ合格した一同は、デバイスリミッターを一段解除する事となった。そして、午後から丸一日は休みとなり、皆大喜びで街に繰り出した。実は、今まで午後の訓練が休みの時はあるにはあったのだが、前日のセイバ

「達との模擬戦での疲れが抜けきれず、部屋で寝てる事が殆どだった。オルタ曰く「限界までしごくっ！」だそうだ。しかし、今回は前日の模擬戦が休みだったので、疲労も深刻で無い新人一同は、久々に街に遊びに出たのである。なのは達隊長陣は、隊舎で待機となっている。

そして、クラナガンに出たのは、新人達だけではない。場所は、クラナガンにあるパチンコ店。

台の前に座り、打ち続けている目の前で、釘に弾かれる銀玉が虚しく外れ穴に落ちていく。全ての銀玉が一番下の外れ穴に飲み込まれ、打っていた男は頭を抱えた。

「はあ〜!? あり得ねえ〜! また負けたあ〜!」

敗北したのは、六課の民間協力者の葉谷資隼樹だった。

彼の後ろには、四人の女性が立って勝負の様子を眺めていた。白いシャツに青いスカートを履いた金髪の女性は、隼樹のサーヴァント・セイバー。その隣に居る黒いゴスロリ衣装を着たセイバーそっくりの女性は、彼女を黒化^{こくか}したセイバーオルタだ。青黒いゴスロリ衣装を身に付けてるのは、隼樹が保護しているアリスと言う名の少女である。最後の一人は、過去に隼樹の『イメージ』で蘇生したアリシア・テスタロッサで、フェイトの姉的存在だ。

完敗したマスターの後姿を見て、セイバーは呆れ顔になった。

「ジュンキ。もう気は済んだでしょう? そろそろ……」

「いや、まだまだ……! まだ終わらんよ……!」

「こうやって人は破滅に進むのだな」

隼樹の諦めの悪さに、オルタは厳しくも的を射た意見を言った。そこへ、やんわりとした口調で、アリシアも止めに入る。

「でも、もう結構なお金使っちゃったから……。セイバーの言う通り、ここら辺が切り上げ時じゃないかな？」
「いや、次こそ勝つ……！」

険しい顔でパチンコ台を睨み、ブツブツと呟きだす。

「信じるんだインスピレーション……！ 感じるんだイメージーション……！」
「貴方、『イメージ』使う気ですか!？」

隼樹の呟きを聞いたセイバーが、目を丸くしてシャウトした。自分のマスターは、何と『イメージ』によるイカサマと言う凶行に走る気のようなだ。

流石にソレはマズいと、セイバー達が止めようとしたが、先にオルタが彼の服の首根っこを掴んで、強制的に台から引き離れた。

「いい加減にしろ、クズが……！」
「だあああああ！ 待つて待つて待つて！ あと一回！ あと一回だけエエエエエエ！」

声を上げる隼樹だが、オルタは問答無用で店の外に連れ出す。その様子を、セイバーは呆れ、アリシアは苦笑いを浮かべて見ていた。

「惨めね……」

最後にアリスが、小さく毒舌を吐いた。

パチンコ店を出た一行は、クラナガンの街中を歩いていた。パチンコで大敗して金をスツた隼樹は、落ち込んで足取りも重い。情けないマスターに溜め息をつき、セイバーは口を開いた。

「ジュンキ、しっかりしてください。今日は、この後やる事があるのでしょう?」

「う、うん……そだね……」

敗北のショックが抜けきれない状態で、隼樹は頷いた。

フォワード四人が第二段階クリアを果たし、午後は休日で街に繰り出す今日はイベント日でもある。この後、『聖王のゆりかご』なる古代兵器を動かす鍵[†]となる少女を巡る戦いが起きるのだ。本当なら、まだ介入する気は無かったが、セイバーから防衛プログラム生存の可能性を聞いて、事情が変わった。万が一の事態に備えて、自分達も介入する事にした。

ちなみに、防衛プログラムの件を知っているのは、隼樹、セイバー、オルタ、事件関係者のアリス、部隊長のはやての五人だけだ。まだ推測の域を出ていないので、周りの皆に余計な不安や動揺を与えたくないのである。

これから起こる今日の事件や防衛プログラムの事を考えていると、休日を楽しんでいたスターズの二人から緊急連絡が入った。エリオが物音を聞き、路地裏でボロボロの衣服を着て倒れてる少女を発見したのだ。

アリスアのデバイスで受けた報告を聞いて、隼樹の顔つきが変わった。間違いなく、ヴィヴィオだ。

「来たあ……!」

コレが、新たな闘いの始まりだった。

幻惑

倒れてる女の子を発見した事で、休日返上で緊急に動く事になった機動六課。

隼樹達や隊長陣が現場である路地裏に駆け付け、医務官のシャマルが女の子の容態を診る。診断の結果、疲れて眠っているだけで異常は見られなかった。地下水路を長い時間歩いていたようで、しばらく目を覚ましそうにない。

女の子は、外見から年齢は五、六歳と推測される。長い金髪で、顔や素肌は汚れて灰色の衣服もボロボロになっている。更に、腕には鎖が巻かれており、先にはロストロギアの『レリック』の入ったケースが繋がれていた。レリックの方は、発見したキャロによって早々に封印されて、ガジェットに感知されないようにしてある。しかし、鎖の長さから、繋がれていたケースは二個と考えられ、残りの一個は地下水路にあると思われる。

女の子とレリックケースはヘリで搬送する事になり、フォワード四人は現場調査も兼ねて地下水路にあると思われるレリック搜索に当たる。

なのは達が指示を出し終えたところで、六課のロングアーチから連絡が入った。地下水路と海上に、それぞれガジェットが出現したのだ。数は地下にはグループに分かれて約二十機、海上方面はソレ以上とのこと。海上で演習中だったヴィータが向かい、フェイト、リインフォースの二人も海上を飛行しているガジェットの対応に飛ぶ。

なのはは、搬送ヘリの側を飛行しながら護衛に当たる事になった。そして、隼樹達も動く。フォワード四人が居る路地裏で、今後の行動を考える。

「よし、じゃあ……俺とセイバー、アリスの三人はフォワード四人

と一緒に地下に……！ セイバーオルタとアリシアは地上で万が一の時の為にヘリの護衛をお願いします……！！」

「うん。分かった！」

「敵は殺しても構わんのか？」

「いや、駄目に決まってるでしょう！」

物騒なオルタの問いに、思わず隼樹は声を荒げた。目線を向けてくるフォワード四人から少し離れて、潜めた声で話す。

「だ・か・ら、ナンバースは殺しちゃ駄目だって言ったでしょう？ 俺の目的は、あくまでクソ脳髓共の犠牲にさせないように、ナンバースを助ける事なんだから！」

「チツ……！！」

「あつ！ 舌打ちした！ 今、舌打ちしたよ、この娘！ どんだけ殺りたいの……！！？」

少々の不安は残るものの、後は常識人のアリシアに任せる事にした。

フォワード四人はバリアジャケットを纏い、甲冑姿となったセイバー達と共に地下水路に降りる。

オルタとアリシアも、地上からヘリの警護に着いた。

*

地下水路に降りた一行は、捜査協力する事になった管理局の女性捜査官と通信で会話をしていた。

捜査官の名前は、ギンガ・ナカジマ。ラストネームから解る通り、スバルの姉である。髪の色は酷似しているが、長髪に青いリボンを

付けた姉の方が大人っぽく女性的な印象を受ける。スバルのシューティングアーツの先生であり、年も階級も二つ上なのだ。

大好きな姉と一緒に働けると知って、スバルは嬉しそうにしていた。笑っていると、気を引き締めなさい、とティアナに注意されてしまったが。

ギンガの話では、地下道でトラック横転事故が発生して、現場にはガジェットの残骸と何か重い物を引き摺った跡、それに壊れた生体ポッドが残されていたそうだ。生体ポッドの大きさは、およそ五六歳の子供が入る位のサイズだと言う。話を聞いた一同は、路地裏で保護した女の子の事を思い出して、彼女であると心中で確信する。そして、ギンガが言うには、同じような物を別件で見たそうだ。

人造魔導師計画の素体培養機。ギンガの推測では、女の子は人造魔導師の素体として、人工的に造られた可能性が高いらしい。

魔導師や局員でも無いセイバーも、人造魔導師の事は知っていた。彼女の弟子であるフェイトも、『プロジェクトF』と言う技術で人工的に生み出された人造魔導師なのだ。

人造魔導師の話が出た時、エリオが若干思いつめたような顔をしたが、幸か不幸か誰にも気付かれなかった。

その時、キャロのケリユケイオンが、球体を光らせて反応を表す。

『動体反応確認。ガジェットドローンです』

「来ます！ 小型ガジェット六機っ！」

キャロの言葉を聞き、全員が足を止めて戦闘態勢に入る。

*

セイバー達が地下で戦闘を始めた頃、海上ではフェイト、ヴィー

タ、リインフォースによるガジェット殲滅が行われていた。リミッターがかけられているとは言え、機械に遅れを取られる事無く、圧倒して次々と撃墜していく。既に半数以上が、彼女達の手によって海に沈められた。この調子でいけば、割と早く海上の方は決着がつきそうだった。

しかし、相手はそう簡単には終わらせてくれそうになかった。

「アレは……増援か!？」

周囲のガジェットを破壊し尽くしたヴィータが振り向いた先に、新たなガジェットの群れが見えた。猛スピードで、こちらに接近してくる。

フェイトの周囲にも、増援のガジェットが飛び交う。その数は、50、60とこれまでとケタ違いに増えている。隊舎のロングアーチの方でも『実機』と確認しており、何より現場に居るフェイト達も視認していた。

フェイト達は、魔法を撃ってガジェットを撃ち落とそうとする。が、中には攻撃がすり抜ける機体があり、幻影が混じっている事に気付く。

「幻影と実機の構成編隊……!」

幻が混じっていると知った三人は、一旦攻撃を中止して守勢に入った。

ここまで派手な引き付けを言うと事、地下かへりに主力が向かってる事になる。しかし、だからと言って、海上を放り出す訳にはいかない。防衛ラインを突破されたら、街に被害が及ぶのは目に見えている。それに、地下とへりには、それぞれ頼もしい騎士が付いている。

だから、自分達の役目は、敢えて敵の策に嵌まってガジェットを

食い止める事だ。

ヴィータとリインフォースも、自分達が成すべき事を理解していた。

「ココから先には行かせねーぞ！」

「はい！」

ガジェットの群れを睨み、再び戦闘を開始した。

その頃、フェイト達が交戦してる地点から離れた上空に、人影が佇んでいた。

足下には、魔法陣のような緑色の術式が発現している。

雲の上に佇む人影の正体は、女性だった。長い茶髪をヘアバンドで左右に分け、可愛らしい顔には丸眼鏡をかけている。全身に青と灰色を基調としたボディーツを着用しており、身体のラインを浮かせている挑発的な格好に、背中には白いケープを羽織っている。彼女は、ナンバーズ？4のクアットロだ。

目の前には中型モニターが開かれ、ガジェットと交戦しているフェイト達の姿が流れている。それをクアットロは愉しそうに、それでいて小馬鹿にしたように笑う。

「うふふ……！ 流石は、エリート揃いの機動六課の中でも超エリート
の隊長陣……！ でも、リミッターが付けられてる今の貴女達
如き、黒龍お姉様から頂いた能力を使うまでも無いわぁ……！」

クアットロは笑みを浮かべたまま、右手を前にかざした。

「このクアットロのIS『シルバーカーテン』^{インテリジェントスキル} 嘘と幻のイリュージョンで、もう少し躍ってもらいましょう」

*

一方、地下でもガジェットとの交戦が行われていた。

海上と違い、相手のガジェットは全て実機である。

突っ込んでくるガジェット？型の群れに、ティアナが魔力弾を撃ち込む。当然、向こうはAMFを張って防いでくる。だが、ソレは予想通りの行動だった。ティアナの魔力弾は、本体にこそ届かないが、AMFを破って魔法が通る状態を作った。その隙を狙って、スバルとエリオが拳と槍でボディを貫き、ガジェットを破壊する。地下水路で爆発が起こり、破片が飛び散る。

新人達は、危なげなくガジェットに勝利した。

闘いの様子を観ていたセイバーは、微笑みを浮かべていた。

「皆動きに淀みが無く、良いコンビネーションでした」

「お上手ですね」

アリスも素直な感想を口にした。

「えへへ。コレも、セイバーさん達の教導のお陰です！」

笑顔で答えるスバルに、セイバーは心中に喜びを抱く。十年前にフェイトを鍛え、なのはに勝利した時も同じ気持ちだった。教え子の成長は、師にとってこの上なく喜ばしい事だ。

全機破壊を確認して、キャロが言った。

「ケースの推定位置まで、後もう少しです」

うん、とスバルが頷いた直後だ。

突き当りの曲がり角で、突如爆発が起こった。メンバーは即座に反応して身構え、油断なく曲がり角を見据える。爆発の際に生じた粉塵が晴れていき、中から一人の女性の姿が現れた。女性は、左手に籠手型デバイス『リボルバーナックル』、両足にローラーブーツ型デバイス『ブリッツキヤリバー』を装着している。

「ギン姉！」

「ギンガさん！」

女性を見た瞬間、スバルは弾かれたように名前を呼び、ティアナも笑顔で声を上げた。

彼女が、スバルの姉であるギンガ・ナカジマ。二人に笑顔を向けて、近付いてきた。

「一緒にケースを探しましょう。ココまでのガジェットは、殆ど叩いてきたと思うから」

「うん！」

ギンガの言葉に、スバルは笑顔で答えた。心から慕う姉と出会って、更に元気が増している。

エリオとキヤロは、そんな仲良し姉妹の様子を後ろから眺めていた。すると、ギンガに笑いかけられ、敬礼で挨拶をした。

それからギンガは、スバルとティアナの後ろに居るセイバーとアリスに気付いた。

「スバル。その人達は……」

「ああ、紹介するね。こちらは、セイバーさん。なのはさん達と一緒に、私達の教導をしてくれてる民間協力者。それで、この子は六課で保護してるアリスだよ」

紹介を受けたセイバーが、ギンガの前に歩み寄り、会釈した。

「初めまして、セイバーです」

「ああ、貴女がセイバーさんですか！　こちらこそ、陸士108部隊所属のギンガ・ナカジマ捜査官です。貴女の事は、妹のスバルからメールで聞いてます。いつも妹がお世話になってます」
「いいえ」

セイバーとギンガは、笑顔で挨拶を交わす。

ふとセイバーは、何か忘れてるような気がして、後ろを振り返った。その時、視界にある人物を捉えた。

「あ………」

「え………？」

セイバーの眩きにつられ、皆も彼女の視線を追った。

通路の隅っこに、蹲ってる隼樹の姿があった。冷たい床に『の』の字を書いて、眩く。

「ああ、そうだよ……。俺は皆と比べて地味だし、セイバーのような強さも無いし……。アリスのような魅力も無い……。目立たなくて、存在を忘れられて当然さ……。だから、ぜんぜん気にしてないさ……。そう、地味こそ俺のアイデンティティなんだから………」

一人空気と化していた隼樹は、完全にいじけていた。
シリアスな感じが、一転して気まずい空間に変わった。

哀しみの漂う背中を向ける隼樹を見て、ギンガは苦笑いを浮かべる。

「え、ええつと……スバル、あの人が、隼樹さん？」
「う、うん」

スバルも場の気まずさを感じて、引き攣った笑顔で頷いた。
どう声をかけようか困惑する一同の中で、アリスだけが平然と言った。

「惨めね……」

「容赦無し!？」

フォワードメンバーは、思わず声を上げた。

サーヴァントのセイバーが、静かに隼樹に歩み寄る。

「ジュンキ、元気を出してください。貴方の良いところは、私が解っているつもりですから」

「……ありがとう」

背中を向けたまま、隼樹は静かに礼を言った。

セイバーのお陰で何とか隼樹は立ち直り、新たにギンガを加えて一行は奥に進んだ。

途中でガジェットの群れと遭遇したが、厳しい訓練を経たスバル達の敵では無く、見事なコンビネーションで撃破していった。彼女達の活躍で、今のところセイバーも力を温存出来ている。

そして一行は、難なく目的地に到着した。レリックのある場所は、狭い通路と違って広い空間になっていた。一行は、手分けしてレリックを探索する。

やがて、フリードを連れたキャロがレリックケースを発見した。
駆け寄り、慎重にケースを持ち上げる。

「ありましたー!」

声を上げ、場に居る一同に知らせた。

何とか先にケースを確保出来た事に、皆ホツと安堵した。場の空気が僅かに弛緩した、その時だった。

地下空間に突如、壁を蹴る音が鳴り出す。

音に気付いた一同は、再び気を張って身構える。

「何、この音……?」

辺りを見回すが、何も見えない。空間は薄暗いが、全く視認出来ない程では無い。

壁を蹴る固い音が途切れたかと思えば、変わってバシャバシャと水の上を駆ける音が鳴った。

耳を澄ませて音の出所を探るセイバーが、いち早く顔を向け、音に合わせて飛沫を上げる水流を見つける。

危険を察したセイバーは、一瞬の間に“見えない敵”に斬りかかるよりもキャラの護りにつく事を判断した。自分達と同じように地下にやってきたのなら、狙いは十中八九レリツクだ。

次の瞬間、キャラの前に“見えない敵”が跳躍し、自分の前に生成した四つの魔力弾を発射した。反応する間も無く、攻撃を受けようとしたキャラの前に、セイバーが割って入り、

「はああああっ!」

両の手で握る不可視の剣を振るい、対魔力で掻き消した。

「セ、セイバーさん!？」

「キャラ! ジツとしてて!」

キャラをその場に置き、セイバーは跳んで迎撃に向かう。

奇襲に失敗した不可視の敵も、宙から突っ込む。互いに視認出来ない得物を振り抜き、二人は交差する。一瞬一撃の後に、セイバーはキャロの傍に着地した。

後ろに居るキャロが、心配そうに声をかける。

「セイバーさん……！」

「大丈夫です。心配いりません」

「セイバー！」

隼樹達も駆け寄り、セイバーとキャロの元に集まった。

集合した一同の前で、不可視の襲撃者が姿を現した。

全体的には人の形をしているが、容姿は別物だ。顔には赤く光る鋭い四つ目、首にはマフラーのような物が巻かれており、鎧のような黒い塊に覆われ、腰の辺りから尻尾を生やしている。人間と昆虫を合わせたような怪人に、フォワード四人とギンガは息を飲んだ。すると、怪人の後ろから人影が現れた。紫色の長髪の少女で、キヤロと同じ年位に見える。黒いドレス衣装を着て、両手にはグローブ型デバイス『アスクレピオス』がはめられている。

少女の名前はルーテシア・アルピーノ。一応、スカリエツティの協力者である。

「ほら〜！ だから言っただろ？ ガリユーだけじゃ厳しいってさ！」

ルーテシアの背後から、更に別の少女が出てきた。

掌サイズの小さな身長で、長い赤髪に腰の辺りから同色の翼を生やして、妖精と言うより小悪魔の方がシックリくる容姿をしている。彼女は、烈火の剣精・アギト。融合騎である。

「この騎士の相手は、“コイツ”にやらせればいいんだよ！」

デカい声を出して、アギトは後ろを指差す。

目の前の敵に注意を向けつつ、一同はアギトが示した方を見た。足音を鳴らして、誰かが近付いてくる。

そして、目で姿を確認した瞬間、一同は驚愕した。

「えっ………!？」

闘いの場において、冷静沈着でいるセイバーでさえ、思わず目を丸くして声を上げた。

暗闇の中から出てきたのは、銀色の鎧を纏った騎士だった。金髪を青いリボンで後ろに結び、凜とした顔をした少女騎士は見間違えるハズも無い。

「セイバー………!？」

度肝を抜かれた様子で、隼樹は騎士の名を呟いた。

ルーテシア達の前に歩み出たのは、もう一人のセイバーだった。

フォワード四人とギンガの動揺も大きく、二人の騎士を交互に見る。我が目を疑いたくなる光景だ。

「セイバーさんが、二人………!？」

ルーテシア側に居るセイバーが不可視の剣を構え、隼樹側に立つセイバーを見据えて、口を開く。

「貴女の相手は私が務めましょう………!」

最初こそ動揺したセイバーだったが、すぐに心を鎮め、同じように不可視の剣を構えた。以前に自分の身からオルタが出現した経験

があるので、いち早く平静に戻れた。

驚愕していた隼樹も、目の前に立ちはだかる“もう一人のセイバ”の正体を直感的に察する。

「はは……！ あの野郎、やりやがった……！」

他の皆も冷静になるよう努めて、戦闘態勢を整えた。

*

廃棄都市。

地下に居る隼樹達の真上辺りの廃ビルの中に、黒龍の姿があった。椅子に座って足組みをして、目の前に出しているモニターの映像を眺めている。映し出されているのは、隼樹達が居る地下の様子だ。同じ姿の騎士が対峙して、両陣で今まさに戦闘が開始されようとしている。

モニターを前に、黒龍は静かに笑う。

「ふふふ……！ 十年前の我とは違うぞっ……！」

投影

廃棄都市区域の地下で、激しい戦闘が繰り広げられていた。

「うりゃあああああ！」

炎属性のアギトは、宙に浮いて上から火炎弾を相手に向けて放つ。スバル達は咄嗟に後ろに跳び、直撃を避ける。着地したメンバーの前には、火炎を受けて発生した水蒸気と粉塵が立ちこめて視界が悪くなっていた。

その時、先頭に立つギンガが気配を察したと同時に、煙の中から昆虫怪人 召喚獣のガリユーが突っ込んできた。振り上げる右腕の手首上部から、鋭い刃が突き出る。いち早く気配を察していたギンガが、左拳を構えて迎え撃つ。

「はああああああつ！」

突き出す拳と刃が衝突して、激しい衝撃と火花を生じさせる。小競り合いは長くは続かず、エネルギー同士のぶつかり合いで爆発を起こして、両者は爆風を受けて後ろに飛ばされる。

二人に目立った外傷は無く、すぐさま構えを取った。

「やあるオオオオオ！」

宙に佇むアギトが、再び火炎弾を放つ。

しかし、フォワード陣も避けてばかりではない。ティアナが二丁のクロスミラーズを構え、迫りくる標的を狙って魔力弾を撃つ。軌道を読んだ精密射撃で、見事に狙った火炎弾を相殺させた。こういう時の為に、毎日訓練してきたのだ。

「ちつくしょう……！」

自分の攻撃が難なく防がれ、アギトは露骨に悔しがる。

ティアナ達の目的は、あくまでケースの確保だ。しかし、相手も同じケースを目的としているようで、そう簡単に逃してくれそうにない。だが、どうにか出来ない相手では無いのも事実だ。スバルとギンガ、エリオも加わればガリユーは押さえる事が出来るだろうし、アギトの火炎弾もティアナの射撃で撃ち落とせる。気がかりがあるとすれば、ルーテシアだ。彼女の魔法がどれ程のものなのか、未知数であるが故に油断は禁物だ。

それに、もう一つ問題がある。自分達が相對してるモノより、ずっと大きな問題が。

「ティア……！ セイバーさん達、大丈夫かな……？」
「正直分らないわ。けど、闘ってるのはセイバーさん達だけじゃなくて、私達も同じよ。だから、自分達の闘いに集中するわよ！」
「うん！」

ティアナの言葉に、スバルは力強く頷いた。

厳しい訓練の中で、スバル達は“何が何でも生き延びる事”を学んできた。他人の心配をしてる暇があるなら、まず自分の身を考えて。それで生き延びる事が出来たら、初めて他人を助けに行け。自分が生きていなければ、助けに向かう事すら出来ないのだから。

逞しく成長した妹スバルの顔を見て、ギンガは嬉しくなって顔が綻んだ。それから直ぐに気を引き締めて、眼前の敵と向き合う。

*

「はああああああつっ！」

気合いと共に不可視の剣を振り下ろし、眼前で閃光のような火花を散らす。

テイアナ達から離れた所で、セイバーも自分の偽者と闘っていた。二人の剣のぶつかり合いは、薄暗い地下空間で眩しい点滅を繰り返す。普通ならば、目に見えない剣の軌道など読めないが、自分の太刀筋故にセイバーは対応出来ている。剣の長さも把握しているので、攻撃の間合いも解る。

だが、両者には違いがあった。

互いに神速の域に達する剣戟を繰り出し、激しく打ち合う。空気を振動させ、甲高い金属音を響かせ、激戦の有り様を地下空間に広める。

「くっ……っ！」

剣を交えるセイバーは、僅かに表情を険しくさせた。

初撃に剣を交えた時から、ある懸念を抱いていた。ソレが、多く打ち合わない間に確信へと変わった。

一見すると、二人のセイバーは互角の闘いを演じている。だが、実際は違う。二人の実力は互角ではなく、紙一重で偽者が上なのだ。その証拠に、セイバーは僅かだが押されている。力負けだけでなく、剣戟の速さも偽者が上回っており、徐々に防戦一方の形になっていた。本人同士の本来の実力が互角ならば、考えられる可能性は魔力供給だ。マスターからの魔力供給の量が、偽者の方が僅かに上回っている分、本物より力を増していると考えられる。

嵐のような激しい剣戟の中で、偽者は横薙ぎの一閃を奔らせる。対するセイバーは剣を縦にして防ごうとするが、僅かに力負けして押され、体勢を崩されてしまう。

「ぐっ……!!」

「はああああああっ!!」

相手の体勢を崩したところで、偽者は上段から不可視の剣を振り下ろし、豪快な一撃を放つ。

咄嗟に後ろに跳び、間一髪でセイバーは剣戟を躲す。だが、避けきれずに額から一筋の血が流れる。

厳しい戦況に、セイバーは冷や汗を垂らした。強化された自分を倒すには、どうすればいいのか。単純に魔力供給の量を増やしたとしても、一時的対処に過ぎない。すぐさま、相手も量を増やすはずだ。確実に相手を倒す方法で無ければ駄目だ。

しかし、セイバーの思考は、偽者の猛攻によって強制的に中断される。

「はっ!!」

「はあああ!!」

劣る実力を気力で補い、セイバーは剣戟の嵐に身を投じた。

「セイバー!!」

「じゅんにーさま! ジツとして!!」

パートナーの危機に声を上げる隼樹を、前に立つアリスが制した。セイバーが偽者に苦戦している一方で、隼樹とアリスはガジェットの群れに囲まれていた。小型の?型と大型の?型が数十機で、黄色いレンズからの光線や太いアームで攻撃を仕掛けてくる。

隼樹が『イメージ』で全方位系の障壁を張って攻撃を防ぎ、アリスが頭上に展開させた魔法陣から鉄球を飛ばして返り討ちにする。

前回の女版隼樹との戦闘では、前方にしか攻撃を向けられない欠点を衝かれたアリスだが、今回は壁を背にして後方の隙を無くした状態を作っていた。

アリスの攻撃は鉄球による投擲なので、加えている魔法をAMFで無効化されても鉄球本体はガジェットのボディに撃ち込まれ、破壊していく。しかも、一度撃ち出された鉄球は、貯蔵庫に戻して再び使用する事が出来る。鉄球自体が破壊されない限り、無限に近い状態で発射し続けられるのだ。

アリスの後ろに立つ隼樹は、険しい顔で頭を掻き乱す。

「くっそ〜！ 防衛プログラムの奴、『イメージ』でセイバーを作りやがって……！」

防衛プログラムは、過去の死闘で隼樹の『イメージ』を蒐集して自分のモノにしている。一度セイバーを取り込んでいるので、想像するのは容易だった。

アリスの後ろでセイバーの闘いを見守っていたが、実力の差から徐々に押されている事に気付き、冷静さを欠如させる。

「じゅんにーさま……！！」

その時、ガジェットの相手をしているアリスに声をかけられた。

「じゅんねーさまのお言葉通り、貴方は弱いよ。だったら、出来る事なんて限られているでしょう？」

「あ……」

アリスの言葉を聞き、隼樹は目を見開く。

お前は“想像する者”だ。現実で敵わぬならば、想像の中で勝て。

かつて、アーチャーに言われた言葉が脳裏を過った。
大切な事を思い出した隼樹は、心を落ち着ける。

「そうだ……そうだった……。ありがとう、アリス……！」

「貴方を護るのがじゅんねーさまからの命令で、私はソレに従つて
るだけよ。ソレに、貴方が死んでしまったら、じゅんねーさまに会
えなくなるわ」

「それでも、ありがとう……！ この闘いが終わったら、アイツに
会わせるよ……！」

隼樹の礼を聞いたアリスは、小さく顔を動かして横目で後ろを見
た。すぐに、ピイツと前に向き直ってしまったが。

アリスのお陰で冷静になり、自分のやるべき事を見出し、隼樹は
思考を働かせた。

考える……！ まず考えるんだ、俺……！ 俺に出来る事な
んで、想像して作る事だけだっ……！ なら考えて、セイバーを助
ける方法を見つけろんだっ……！

必死に頭を働かせ、この戦況をひっくり返す方法を考える。相手
は、『闇の書事件』でのセイバーをコピーしたような奴だ。しかし、
ソレだけでは本物のセイバーが押されてる理由にはならない。おそ
らく、多くの魔力供給によって実力を上げているのだろう。

なら、俺も供給量を上げるか？ いや、駄目だ……！ そんな
事しても、相手が同じ手に出たら意味が無い……！ 単純に力を
上げる以外の手を考えるんだ……！ 何か無いか？ 何か……！？
オリジナルにあつて、コピーに無いモノ。

そこまで思考が至った時、ハツと隼樹は気付く。

そうだ……！ セイバーには、まだもう一つ見せてない宝具
がある！ ソレを使えば……！

勝機を見出したかのように思えたが、すぐにかぶりを振った。

いや、駄目だ……！ アレは強力過ぎる宝具故に、ランクがケタ違いに高過ぎる……！ ともじやないけど、俺の『イメージ』じゃあ再現出来ねえ……！

体内のジュエルシードが再現出来る武器には、ランクの限界がある。隼樹が見つけた切り札を使えば、戦況をひっくり返す事が出来るだろうが、作れなければ意味が無い。

こうしてる間にも、セイバーはどんどん追い詰められている。早く何とかしないと、取り返しのつかない事になってしまう。

くそっ……！ どうすればいい……？ どうすればいいんだよ、アーチャー……！？

かつて絶望の淵にいた自分を奮い立たせてくれた男を、頭の中に思い浮かべた時だった。

体に閃光が走った。

ある方法を見つけ、目を見開く。

「そつだ……！ その手があった……！ 要は作り手だ……！」

逆転の手を思い付いた隼樹は、早速『イメージ』を発動させた。

セイバーは、自分の偽者との激戦を続けていた。

重い剣戟が振動となって手に伝わり、僅かに防御の動きを鈍らせる。だが、太刀筋が自分である事が救いとなり、致命傷は避けられている。偽者も、このままでは相手を倒せないと悟ったようで、剣を引いて後ろに跳び、セイバーから離れた。

そして、両手で掴む不可視の剣を、高々と頭上に構えた。次の瞬間、剣を中心に台風のような暴風が地下空間に吹き荒れる。

「うわっ……！？」

「な、何……！？ この風は……！？」

離れて闘っていたティアナ達とルーテシア達も、あまりの強風に動きを止めた。

偽者の構えから、セイバーは何をしようとしてるのか察し、驚愕して目を見開く。

「まさか、宝具を使う気ですか？……！？」

不可視たらしめている風の鞘『風王結界』を解く事は、聖剣の力の解放 即ち宝具の使用を意味する。

しかし、まさか地下で使用するとは、思っていなかった。セイバーの宝具『約束された勝利の剣』は、強力過ぎる故に地下空間では使えない。使用すれば、地下を崩して仲間を危険な目に遭わせてしまうからだ。しかし、偽者の目的はあくまでセイバーを倒す事なので、ルーテシア達を気遣う様子も無い。どうやら、防衛プログラムに生み出されただけあって、内面でもオリジナルとは若干の違いがあるようだ。

しかし、問題はそんな事より、偽者の宝具にどう対処するかだ。

セイバーは、苦渋の決断をした。

「ならば、私のエクスカリバーで完全相殺させますっ……！」

同じ技を放つ事で、相殺して掻き消すのがセイバーの狙いだ。

しかし、少しでも威力が違えば、相殺し切れずに地下空間を崩してしまう可能性がある。強過ぎても弱過ぎても、地下を崩す結果に成りえるのだ。が、セイバーの中では、完全相殺以外に手段は無かった。

覚悟を決め、同じように不可視の剣の封印を解こうと、両腕を上に掲げた時だった。

「セイバー！ 撃つなアアアアアア！」
「えっ……！？」

突然上がった隼樹の声に、セイバーは聖剣解放を躊躇した。
すると、彼女の前に一人の男が割り込んだ。赤銅色の髪、白と青を基調としたシャツとジーンズを着た男の背中が目に映った。

男は、セイバーに背を向けたまま声を上げた。

「俺がアイツの攻撃を防ぐ……！ その隙に、お前の剣で決めるんだ……！」

「貴方は……！？」

訝るセイバーの問いには答えず、男は静かに目を瞑り、精神を集中させる。

「トレス・オン
投影開始っ……！」

鍵キとなる呪文を呟き、男は魔術回路を総動員して投影を開始した。作り出すのは、迎え撃つ剣では無い。
あらゆる攻撃から、主を護る無敵の盾だ。

「エクスカリバアアアアアアアアア！」

偽者の聖剣から、凄まじい威力の魔力光が放たれる。

男は取り乱さず、慌てる事無く投影を続ける。

ソレは、本来彼女セイバーが持っているべきだった、失われた宝具。

そして俺 衛宮士郎えみやしろうの中に持つ唯一無二の護りの宝具にして、
彼女が夢見た理想郷。

その名は。

「『^{アヴァロン}全て遠き理想郷』……！」

セイバーの前に立つ士郎の眼前に、黄金に輝く一つの鞘が投影された。聖剣の輝きに勝るとも劣らない、その美しい輝きは、まるで主を護らんとする光の盾のよう。

その場の全員が見惚れる中、迫りくる聖剣の刃が、鞘に衝突する。だが、その攻撃は鞘の持つ防御能力の前に、容易く防がれた。

「何っ……！？」

宝具による一撃を防がれ、偽者は激しく動揺する。

そして、決着の刃が彼女に迫った。

一瞬の攻防の後に、セイバーは神速の速さで踏み込み、間合いに入り込んだ。偽物が迎え撃とうと剣を振るうが、もう遅かった。セイバーの横薙ぎの一閃が、偽者の体に奔る。直後、二人の動きは静止した。

「がはっ……！」

短い沈黙を破ったのは、偽者の声だった。口から血を吐き、斬られた傷からは鮮血を噴き出し、うつ伏せに地面に倒れた。

意識を失った彼女の体は薄れていき、やがて消えた。

決着がつき、セイバーは振り返って士郎を見た。

「貴方は……」

「こっちじゃあ、初めましてになるな。俺は、衛宮士郎。隼樹に喚よばれてきたんだが、間に合って良かった……！」

「士郎……。ありがとございます。貴方のお陰で助かりました」

礼を言った後、セイバーはハツとなる。

「そつだ……！ ジュンキつ……！」

振り向いてマスターの安否を確かめると、ガジェットの残骸に囲まれ、アリスの後ろで膝をついてる隼樹の姿が見えた。

隼樹もセイバーが助かり、勝つたを見届けて、緊張の糸が切れて頂垂れる。

「間に合つたあゝ……！」

「ジュンキつ……！」

急いでセイバーは、隼樹に駆け寄つた。
肩に手を置き、声をかける。

「ジュンキ？ 大丈夫ですか？」

「あ、ああ……！ セイバーは……？」

「私も大丈夫です。ところでジュンキ、彼は一体……？」

隼樹が無事な事に安堵しつつ、セイバーは士郎に目を向けて尋ねた。

「ああ……士郎はね、セイバーのもう一つの宝具を持つ、ある意味セイバーの本当のマスターだよ……！」

「私の……？」

怪訝そうに片眉を上げるセイバー。

衛宮士郎は、小さい頃に冬木市で起きた聖杯戦争による大災害で、生死の境をさ迷っていた。ソコに助けに現れたのは、彼の義理の父親となる衛宮切嗣である。当時、セイバーのマスターであった切嗣は、死の淵に立たされていた士郎の体に“ある宝具”を仕込み、命

を救った。士郎の命を救ったその宝具こそ、先ほど聖剣の一撃を防いだアヴァロンだ。

『アヴァロン全て遠き理想郷』。セイバーの聖剣・エクスカリバーの鞘にして彼女の失われた宝具。持ち主の傷を癒し、老化を停滞させるだけでなく、あらゆる物理干渉・並行世界からのトランスライナー、多次元からの通信もシャットアウトする事が出来る能力は、既に『魔法』の域に達している。抜き身の刃を護る鞘のように、持ち主を護るまさに無敵の盾なのだ。

「俺の『イメージ』じゃあ、セイバーの鞘は再現出来ない。だから、セイバーの鞘を作る人物を、『イメージ』で実体化させたんだ。あの鞘を作るのは、世界中で士郎だけだからね」
「そういう事でしたか……」

セイバーの手に支えられてる隼樹は、安心して半面、自分を情けなく思っていた。本当なら自分がセイバーを助けたかったが、力が足りずに不可能だった。

だから、セイバーを救ったのは自分では無く、士郎だ。彼女の本当のマスターである彼が。
そう思った時、セイバーが言った。

「ジュンキ。ありがとうございます」

「え……?」

隼樹が顔を向けた先には、セイバーの微笑みがあった。

「貴方が士郎を喚んでくれなければ、もしかしたら私は敗れ、最悪の場合消滅していたかもしれませぬ。貴方が居たからこそ、私はこうして生きて、貴方の傍に居るのです」

「ああ、セイバーの言う通りだ」

士郎も歩み寄ってきて、笑顔で言う。

「隼樹が喚んでくれなきゃ、俺もセイバーを助ける事は出来なかった。アンタがセイバーのマスターで、良かったよ」

セイバーの感謝と士郎の嘘偽り無い言葉に、隼樹は不覚にも嬉し泣きしそうになった。気恥かしさと照れから、咄嗟に顔を逸らす。女の前で泣くのは恰好悪いと男の意地で、何とか涙を堪えた。すると、士郎が爽やか笑顔で挨拶をする。

「それじゃあ、また何かあったら喚んでくれ。セイバーを頼んだぞ……！」
「あ、ああ……！　ありがとう、士郎……！」

隼樹の礼を受け、士郎は消えた。最後まで爽やかな好印象で、本当に未来の自分と別人である。一体未来でどんな過酷な体験をしたのか、想像もつかない。

「残るは彼女達ですね」

真顔になったセイバーの視線の先には、ルーテシア達が居た。フオワード四人とギンガ同様に、自分の範疇を超えた闘いに面食らって固まっている。

「ジュンキ、彼女達はどうするのですか？」
「そうだな。……まあ、ココで捕まえるのは時期尚早だから、逃がしちゃおうか」

隼樹は立ち上がり、ルーテシア達に向かって声を上げた。

「あ〜！ キミ達が探してるレリックは、いくつの番号なの〜？」

本当は知っているのだが、ティアナ達が居る手前では下手な事は言えない。

地下空間に響く隼樹の声で、ようやく一同は我に返り、ルーテシアは口を開く。

「11番……」

「あ〜、じゃあ悪いけど、ルシエさんが持つてるヤツとへりにあるのは、どっちも11番じゃないから、この場は引いてくれないかな？ 嘘だと思うなら、遠目からでも確認させてあげるよ？」

「ちよっ……ちよつと隼樹さん!？」

「ままままま、ティアナさん！ 俺等の今回の目的は、あくまでレリックの確保なんだから、大目に見てあげようよ」

逃がそうとする隼樹と局員として見逃せないティアナが、声の響く地下で口論を始める。

その間にルーテシアは、どうしようか迷っていた。もし、本当にキヤロが持っているのが11番で無ければ、ココで無駄に戦闘を続ける必要は無い。それに、出来る事なら大切なガリユーも傷つけない。

考えた末、ルーテシアは彼の言葉を信じて、撤退する事にした。

「ガリユー、アギト、行こうか」

「あつ！ ルールー！」

ガリユーとアギトを呼び、ルーテシアは転移魔法の魔法陣を足下に出した。

その事に気付いたギンガ達が、止めようと動く。

「待ちなさい！」

「ああああああ！ アレは何だっ!？」

「えっ……!？」

突如響き上がった隼樹の声に、一同は足を止めて振り返った。

しかし、ドコにも声を上げるような異常は見られない。

訝る一同の中で、ハッとティアナが振り向いた時には、ルーテシア達の姿が消えていた。

隼樹の行動が、自分達の注意を引き付ける演技だと気づき、ティアナは顔を真っ赤にさせて詰め寄った。

「ちょっと、隼樹さん！ どういうつもりですか!？」

「いや、ゴメン！ ホントにゴメン！ 今回だけだから……!！」

「そういう問題じゃありません!！」

ティアナは完璧に怒り、隼樹に説教を始めた。最後の方で、今回の事は八神部隊長に報告する事を伝えたと、隼樹は頭を抱えて暗く高い天井を仰いだ。

まだ怒りが収まらないティアナを、スバルやギンガ達が宥める一方で、セイバーはアリスに歩み寄った。

「アリス」

「何かしら?」

「ジュンキを護っていただいて、ありがとうございます」

「……別に」

照れ隠しするように、アリスはソッポを向いてしまった。

*

「ほう……まだ、そのような宝具があつたか……」

地下の闘いを観戦していた黒龍は、興味深そうに呟いた。セイバの鞘の防御能力には驚かされたが、すぐに顔に笑みを作った。

「あの力も、いずれ手に入れたいものだ……！」

用は済んだと言わんばかりに、黒龍も廃ビルから姿を消した。

投影（後書き）

うぐん。戦闘描写を書いている時に、いつも思うけど……コレ、ちやんと書けてるのだろうか？ もし、よろしければ読者の皆さんからのご意見お待ちします。
では。

強化（前書き）

今回の話で、クアットロちゃんと思っばく書けてるかな？
書けるといいな。意地悪くて、悪っばいのが俺の大好きなクア
ットロだから。

強化

廃棄都市の上空を、ヘリが飛行していた。ヴァイスがパイロットを務め、シヤマルと路地裏で発見した金髪の少女を聖王医療院に運ぶ為である。ヘリの中にはレリックも積んであり、封印は施してあるが、万が一の事態に備えてなのはが側を飛んで護衛にしていた。そして案の定、航空型のガジェット？型の群が接近してきて、なのはが迎撃に向かう。

「アクセルシューター！」

複数の桜色の魔力弾を操り、襲い掛かるガジェットの機体に撃ち込む。エースオブエースの魔法は、AMFを突き破ってガジェット本体を次々と撃ち落としていく。相手のミサイル攻撃には、防衛魔法を張って防ぎ、お返しとばかりに砲撃魔法を放ってガジェットを飲み込む。

順調に迎撃しているのはだったが、胸中には妙な胸騒ぎを抱いていた。何だか、敵の襲撃が本気で無いような気がするのだ。

空で戦闘が行われてると同時に、地上でもガジェットと交戦している者が二人居た。？型と？型の群れが、二人の騎士王と魔導師を取り囲んでいる。

先に動いたのは、黒い騎士王　セイバーオルタだった。素早くガジェットの群の中に踏み込み、

「消えろっ……！」

黒い線を走らせ、ガジェットを横一文字に切り裂く。断面から放電を起こし、斬られたガジェットは全て爆破した。

常人の目では捉えられない程の神速の速さで振り抜かれた剣は、

黒く禍々しい魔力を放っている。全体的に真っ黒に塗りつぶされ、刃の部分には血管のような紅い筋が見られ、とても同じエクスカリバーとは思えない外見をしている。

オルタに続いて、魔導師のアリシアも攻撃を仕掛ける。グローブ型デバイス『ボルトアラクニ』を装着した指先から伸びた糸を、周囲に張り巡らせた。？型は勿論、ボディの大きい？型も糸に絡まって身動きが取れなくなる。

その瞬間、

「ショックっ……！」

魔力変換で糸に電流を流し、ガジェットの機体に電撃を浴びせる。高圧電流を受けたガジェットは、ボディの隙間から黒い煙を立ち昇らせ、ショートして動かなくなった。地上は、糸を張り巡らせて闘うアリシアにとって、自分の巢ネストそのものだった。

圧倒的強さを誇り、二人は難なくガジェットを哀れな鉄クズに変えていく。

あまりの歯応えの無さに、オルタは些か興奮めしたように溜め息をついた。

「つまらん……」

「あの、仕事なんですけど……」

「ふんっ。この程度、王である私が直接手を下すまでも無い……」

残りは、貴様と高町で片付けろ……」

「あはは……。まあ、オルタさんのお陰で、大分数が減ったから楽になったけどね」

オルタは剣を収め、後の事はアリシア達に任せた。

アリシアは、デバイスを装着した両手を構えて、残りのガジェットの一扫にかかる。隼樹が何か懸念を抱いていたようだが、この調

子なら問題無さそつだ。

それでも気を引き締め、アリシアはガジェットに挑んで行った。

*

レリックと少女を搬送してるヘリから、かなり距離が離れた廃ビルの屋上に二つの人影が佇んでいた。

一人は、ISでフェイト達を海上に引き付けていたクアットロだ。陽動作戦を終えて、廃棄都市に移動してきたのだ。

もう一人は、また別のナンバーズである。茶色の長髪を黄色いリボンで一つに纏めて垂らし、同じデザインのボディースーツの上に茶色のマントを羽織っている。？10のデイエチと言う。右手には、身の丈以上の高さを誇る布に包まれた棒状の物を持ち、無表情な顔で廃棄都市を見渡している。

傍に座り込んでるクアットロが、笑顔で尋ねた。

「デイエチちゃん。ちゃんと見えてる〜?」

「ああ。遮蔽物も無いし、空気も澄んでる。良く見える……!」

戦闘機人の中でも、デイエチは特別視力が強化されている。目の中で機械音を鳴らし、内部に仕込まれたレンズによって遠く離れた標的を綺麗に、正確に捉える。

「でも、いいのクアットロ? まとめて撃ち落としちゃって……。最悪、威力が強過ぎてケースも器も壊しちゃうよ……? そうなっても、あたし知らないからね」

確認するデイエチの声には、表情と同じく感情がこもっていない。

彼女の中で、ヘリの搭乗者やレリックを犠牲にする事への不安や恐れは全く無かった。今のも、ただ単に事務的な確認を口にしたただけだ。

冷酷冷徹な妹に、クアット口は嬉しそうに笑って答える。

「ぜんぜん構わないわよ。ドクターとウーノ姉様曰く「あのマテリアルが当たりなら、本当に聖王の器なら、強化された砲撃でも死ぬ事は無いから大丈夫」だそうよ。それに、もし死んじゃっても所詮は失敗作だっただけの事だから、別に怒られはしないわ」
「ふん。なら、いいんだけど……」

確認を済ませたデイエチは、マントと布を取り払った。彼女の右手に、黒光りする大きな砲身が現れる。砲撃手であるデイエチの固有武装『イノームスカノン』だ。砲身を横に倒して、目標のヘリに砲口を向けて構える。IS『ヘヴィバレル』を発動させ、エネルギーチャージを開始する。

「『ディアブルチャージ』……！」

更にデイエチは、黒龍から貰った能力を発動させた。

只でさえSランク並の威力のエネルギーに、更に禍々しく強大な力^{ちから}を上乗せする。イノームスカノンも、強化されたデイエチの能力に耐えられるように改造されていた。一応手加減はするが、それでも直撃すれば撃墜は免れない。

「後12秒……！ 11……10……9……」

標的を見つめ、デイエチは静かに惨劇へのカウントダウンを始める。

後ろで座って見ているクアット口は、歪んだ快樂を表す笑みを浮

かべていた。ヘリ付近に管理局のEースオブEースが飛んでいるが、砲撃に気付いて防ぎに入ったところで、リミッターが付いている状態では防ぎきれない。大切なモノを護れないかったのはが絶望する表情を想像するだけで、心が躍る。

チャージが完了して、デイエチは黒い引き金を引いた。

「『ディアフロアー悪魔の咆哮』発射っ………！」

直後、轟音を鳴らして砲口から膨大なエネルギーが、極太の光線となって発射された。禍々しい黒い光線は宙を翔け、一直線に標的に向かう。

空中に居るなのが、地上のアリシアとオルタが、迫りくる砲撃に気付く。

次の瞬間、砲撃はヘリに直撃して、空で大爆発を起こした。大気を震わせ、大音量の爆音を辺りに響き渡らせる。着弾地点に、濃い爆煙が立ち込めた。

「うふふのふ〜。流石、黒龍お姉様が強化された砲撃ね〜！」

「黙ってて。今、命中確認中」

姉を静かにさせて、デイエチは強化された視力で立ち込める煙を見据える。

徐々に晴れていく煙の中から、黒い物が覗く。目を凝らすデイエチが見たのは、無傷で飛行を続けているヘリの姿だった。

「あ。まだ飛んでる」

「あら、本当〜？」

特に驚いた様子も見せず、二人は暢気な声を出す。

クアットロもモニターを展開させて、自分の目で確認する。画面

に映し出されたのは、ヘリの前で砲撃を防いだと思われる高町なのはだった。砲撃が撃たれる前から嫌な予感を抱いていたなのは、はやくにリミッター解除の申請をした。着弾ギリギリのタイミングで限定解除の許可が降り、素早くエクシードモードに切り替えて全力防御したのだ。

ヘリ撃墜は失敗したが、モニターを見つめるクアット口の顔は笑っていた。

「流石は、不屈のエースオブエースと呼ばれる管理局最強の魔導師ね。うふふ……で・も・そんな超エリート魔導師様も、デイイチちゃんの砲撃の威力は予想外だったみたいねえ〜！」

なのはは、確かに砲撃を防いだ。

ヘリには傷一つ付いてないが、彼女自身は無傷では無かった。前にかざしたレイジンググハートにはヒビが走り、損傷してボロボロの白いバリアジャケットには所々に赤色の血が滲んでいる。レイジンググハートを持つ左手からも血を滴り落とし、額にも傷を負って一筋の血を流していた。爆風を受けて、苦しい顔で息も乱れている。

ISのみのデイイチの砲撃ならば、無傷で防げたかもしれない。だが、新たな力を得たデイイチの砲撃の威力は、軽くSランクを超えていた。

ヘリを落とせなかった代わりに、負傷したなのはの姿にクアット口は愉快げに笑う。他人が傷付き、悶え、苦しむ姿を愉しむ、普通の人なら嫌悪感を抱く外道の笑顔だ。

「うふふ……！ 果たして、そんな状態で次弾も防げるかしら？ デイチちゃん。次は少おし本気で撃っちゃいなさい……！」

次の砲撃を指示するクアット口だが、デイイチはかぶりを振った。

「あゝ、ゴメン、クアットロ。ソレ無理っばい……」
「え……?」

クアットロが訝ると、屋上に細長い糸が張り巡らされた。

二人は呆気に取られた様子で、反応する間も無く身体を縛られて拘束されてしまった。試しに力を込めて脱出を試みるが、魔力が通されて強化でもされているのか、千切れそうにない。

「捕まえたっ……!」

身動きを封じた二人の前に、アリシアとオルタが現れた。

大切な仲間を傷付けられて、アリシアは端正な顔を怒りに歪めていた。オルタの表情に大きな変化は見られず、黙ってクアットロとデイエチを見据えている。

鋭い眼光を二人にぶつけ、アリシアが告げる。

「市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の現行犯で逮捕しますっ

……!」

「いや〜ん! そんな恐〜い顔で睨まないで〜!」

わざとらしく怖いフリをして、アリシアの神経を逆なでするクアットロ。捕まっていると言うのに、随分と余裕な態度だ。

しかし、ソレが彼女の癩に障った。

瞬間、クアットロの頬を何かが掠めた。綺麗な肌色に薄い切り傷が出来て、赤い血を流す。顔を傷付けられ、動揺して目を見開いたクアットロにオルタが黒剣の切っ先を向ける。

「黙れっ……! 貴様の声は、耳障り以外の何物でもない……!」
次に王の機嫌を損ねれば、今度は腕を斬り落とすぞ……!」

低い声で威圧するオルタは、どす黒い殺気を放つ。隼樹からナンバースは殺すな、と言われているが、傷付けるな、とは言われていない。ならば、腕の一本や二本ぐらい、斬り落としても平気だろう。サイボーグなら、後で修理でもして元通りに直るハズだ。

顔を傷付けられたクアットロは、怒りと恐怖の混じった表情で睨んだ。相手を虫けらのように踏みつけ、苦痛と恐怖を与えるのは好きだが、自分がやられるのは不愉快と屈辱の極みだった。

アリシアが二人を連行しようとした時、オルタが何かを察した。

「下がれっ！」

「えっ……！？」

強引にアリシアを後ろに押しやり、オルタは黒剣を横薙ぎに振るう。直後、金属同士がぶつかり合ったような甲高い音が鳴り、火花が散った。

すぐに後ろを振り向くが、糸に捕まっていたクアットロとディエチの姿は消えていた。まるで鋭利な刃物で切られたように、縛っていた糸は切断されている。目にも止まらぬ速さで新手が救援に入り、拘束してる糸を切り裂いて二人を連れ去ったのだ。オルタが接近に気付き、切り捨てようとしたが、手応えは無かった。

「ちっ……！ 逃げられたか……」

逃げた方向に目をやり、オルタは苦い顔で舌打ちした。

*

捕まっていた廃ビルから離れた地点。

ソコに降り立ったのは、クアットロとディエチを両脇に抱えた救援者だった。長身の女性で、やはりボディースーツを着ている。紫色の短髪で、厳しい顔つきに金色の瞳を持つナンバーズは、？3のトーレだ。

床に降ろされた二人は、安堵の表情を浮かべる。

「はあく！ トーレ姉様あ、助かりました〜」

「感謝……！」

「バカ者共め……！ 油断するからだ……！ 監視目的だったが、来ててよかった」

呆れ顔で二人を叱り、トーレは腕を組んで溜め息をつく。

「地下の方は黒龍の兵が敗れ、お嬢も撤退されたそうだ。今日のところは、我々も引き上げるぞ……！」

指示を出すトーレの斜め後ろで、クアットロは頬の傷に触れた。顔を俯け、歯を覗かせて食いしばる。

あの黒騎士……！ この顔の傷と受けた屈辱、必ず倍にして返してやりますわあ……！ 私のISと黒龍お姉様から頂いた能力ちからで、必ずっ……！！

人知れずクアットロは、オルタへの復讐を誓う。

*

激しい戦闘の末、少女もレリックも何とか護り切り、事件は一応決着がついた。傷を負ったなのは、へりに搭乗して、そのまま目的地の聖王医療院で治療を受けた。なのはの怪我は、一、三日安静

にしていれば完治するそうだ。路地裏で発見された少女の検査も一通り終わり、大きな問題も見られず、とりあえずメンバーは解散となる。

隊舎に戻った隼樹は、地下での勝手な行動の件で、部隊長のはやてから軽くお叱りを受けた。フォワードの四人は、報告書を書き、それぞれの部屋で休んでいる。

そして夜も更けた頃、隼樹はセイバー、オルタ、アリスの四人で今回の闘いの映像を見直す。クアットロの幻術、デイエチの砲撃、トーレと思われる乱入者の高速移動。巻き戻しをしながら、全ての記録映像を繰り返し観て確認する。

「違うね……。全然違う」

映像を止めて、隼樹は呟いた。

「俺の知ってるナンバーズじゃない。少なくとも、デイエチの砲撃の威力は、せいぜいSランク程度……。リミッターを解除したものはを負傷させる程じゃ無かった……。明らかに、何か別の力が加えられてる……！」

「やはり、防衛プログラムの仕業ですか？」

「まあ、そう考えるのが妥当かな……」

疲れたように深い溜め息をつき、隼樹は眉根を寄せて深刻な顔になる。

「こりゃあ、思ったより厄介な事になりそうだな……。！ 今回の戦闘じゃあ、デイエチの砲撃しか強化されてないように見えるけど、実際は他のナンバーズも何らかの強化が施されてるハズだ……。！」

映像を見つめる隼樹は、苦戦を予感した。

協力

聖王医療院は、普段以上に静寂だった。

原因は、昨日路地裏で発見され、院に収容されていた少女が個室から姿を消したからだ。聖王教会の騎士、シャツハ・又エラが特別病棟とその周辺の避難と封鎖を済ませた。飛行や転移、侵入者の反応が無い事から、少女はまだ院の敷地内に居ると思われる。シャツハと病院に訪れたシグナムと、その連れである二人が手分けして探す。

検査では危険反応は見られず、魔力量がそれなりに高かったが、普通の子供の範疇の数値だった。しかし、人造生命体である事は確かで、存在的な危険は否定出来ないらしい。そう考えた上での、避難と封鎖だが、子供相手に些か大袈裟であるとも思える。

シャツハとシグナムが建物内を搜索する一方で、連れの二人は外の敷地を歩いていた。草木が植えられ、緑が色付けされている中庭だ。歩きながら周囲を見回していると、近くで草を踏む音が鳴った。音の出所に二人が顔を向けたのとほぼ同時に、少女が現れた。路地裏で発見された、あの金髪の少女だ。

「ああ、見つけた！ この子だね、プレシア？」

「ええ、そうよ」

少女を見つけて、二人は安心して微笑んだ。

オレンジ色の狼の耳を頭に、腰の辺りから尻尾を生やした女は、アルフ。フェイトの使い魔で、狼の体を素体としている。今は狼の姿ではなく、グラマラスな女性の姿だ。

彼女と並んで立っている女性は、名をプレシア・テストロッサと言い、アリシアとフェイトの二人娘の母親である。ミッドでは珍しい黒髪の女性で、美しい容姿をしている。実際は見た目以上の高齡

者なのだが、隼樹の『イメージ』の効果で美貌を保っているのだ。ちなみに、隼樹本人も老化を止めていたりする。

二人は隼樹から連絡を受け、少女の面倒を見てくれないかと頼まれ、シグナムの案内で聖王医療院に訪れたのだ。

「見つかってよかったわ。心配したのよ？」

穏やかに笑い、優しい声音で少女に歩み寄るプレシア。

すると、少女は一步後ずさった。初対面の相手に対して、子供ながらに警戒してるようだ。

少女の様子を見て、プレシアは歩みを止め、屈んで同じ目線に合わせて声をかける。

「大丈夫よ。何もしないから、安心してちょうだい」

「あ……うう……」

プレシアの声に警戒心を解いたのか、少女はゆっくりと近付いてきた。

ふと少女の目に、アルフの尻尾が目に入った。興味を引かれたのか、フリフリと動く毛並みを凝視する。

自分の尻尾を見てる事に気付いたアルフが、踵を返して尻尾を差し出した。

「触ってみるかい？」

「ふえ……」

最初は戸惑った少女だったが、好奇心が勝って恐る恐る小さな手を伸ばす。オレンジ色の毛並みを掴み、気持ちの良い感触を掌に受ける。

「わああ……！」

尻尾の毛並みを気に入ったようで、少女の顔に笑顔が生まれた。もうスツカリ警戒心を無くして、無邪気な様子で尻尾に抱き付く。フサフサの尻尾に、頬ずりまでした。

「あはは！ くすぐつたいよう！」

アルフも笑い、プレシアは少女の頭を優しく撫でた。
和やかな空気に包まれるが、

「逆巻け！ ヴィンデルシャフトっ！」

院内でシャツハがセットアップを起こし、急いで中庭に駆け付けた。

「プレシア女史！ アルフさん！ その子から離れて下さい！」

「ひいっ……！」

大きな音を鳴らして現れたシャツハは、双剣型デバイス『ヴィンデルシャフト』を両手に構え、険しい顔で少女を威嚇する。

少女の方は、突然現れたシャツハに睨まれて怯えていた。涙目になり、短い悲鳴を漏らしながら、すがりつくようにアルフの尻尾にしがみつく。頬を赤くして、今にも大泣きしそうな様子だ。

シャツハの行動に、たまらずアルフは少女を庇い、声を上げた。

「ああ、大丈夫だよ……！ ちょっとシャツハ！ 何してるんだい、こんな小さな子を恐がらせて！」

「いや、しかし……」

「シスターシャツハ」

プレシアが立ち上がり、シャツハと向き合う。

「まだ幼い子供相手に、些か大人気ないんじゃないかしら？」

「ですが、その子は……」

「貴女が仕事に真面目なのは知っているし、この子の事情も解っているわ。だけど、検査でこの子に危険が無い事は結果として表れている。それに、この子自身に敵意や殺意のような危険意識も確認出来ない。危険が確認されない以上、こんな幼い子を警戒する必要はないわ。だから、武器は収めてちょうだい」

普段には無い威圧感を放ち、声にも凄みがあった。かつて大魔導師と呼ばれた肩書きは、伊達では無い。勿論、少女に威圧感を向けないよう気を付けている。

今では仲の良い家族となっているが、プレシアは過去に自分の行き過ぎた感情から、まだ幼いフェイトに厳しく当たってきた。幼い少女がフェイトの姿と被り、自然と強い口調で反論していた。

「は、はい……。申し訳ありません」

プレシアの迫力に圧され、シャツハはデバイスを収めた。そうではなくとも、怯えた少女の様子を見れば、危険性が無いのは明白だ。

シャツハが矛を収めたのを確認して、プレシアは安心させるように少女の頭を撫でた。

「恐い思いをさせて、ごめんなさい。でも、もう大丈夫だからね」「うん……」

優しく接せられ、少女の不安と恐怖も、幾らか払拭された。落ち着いたところで、自己紹介を始める。

「初めまして。私は、プレシア・テスタロッサ。貴女のお気に入り
の尻尾を持つてるお姉さんは、アルフよ。貴女の名前は、何て言う
のかしら？」

「ヴィヴィオ……」

「そう、ヴィヴィオって言うのね。可愛いお名前ね。それで、ヴィ
ヴィオは何をしてたのかしら？」

「ママ、捜してたの……」

顔を俯け、ヴィヴィオは寂しそうに呟いた。

母を求める姿に、プレシアは胸の痛みを憶える。かつて、自分が
拒絶していた事で、フェイトも母親の愛情を求めていた。振り向い
てもらわぬ為に、どんなに過酷なおつかいでもこなしてきた娘に、プ
レシアは虐待と言う酷い仕打ちをした。散々酷い目に遭わせてきた
自分を、それでもフェイトは愛してくれた。自分の過ちに気付いた
プレシアは、これからはフェイトをアリシアと同じように目一杯愛
そうと決めたのだ。

プレシアは温かみある微笑みを浮かべ、ヴィヴィオを抱き上げた。

「それじゃあ、一緒に捜しましょう」

プレシアの肩に顔を埋めたヴィヴィオは、小さく、しかし確かに
頷いた。

*

所変わって、ココは聖王教会。

部隊長のはやてに呼ばれ、隼樹とセイバーが訪れた。他にも、な

のはとフェイトの隊長陣に六課の後見人であるクロノも同席している。なのはの怪我は完治していないが、戦闘や激しい運動をしなければ日常生活に支障をきたす程では無いので、今回の招集にやってきた。

再び教会に訪れた隼樹は、部屋でカリムを見た途端に顔を赤くして思わず目を逸らした。前にカリムに迫られ、キスされた事を思い出し、恥ずかしくて直視出来ないのだ。そんな隼樹の様子を見て、カリムは微笑み、唯一事情を知っているクロノは苦笑した。

皆揃ったところで、はやての口から本題が出された。今日集めたのは、機動六課設立の本当の理由についてだった。小難しい話は抜きにして簡潔に説明すれば、カリムのレアスキルの『プロフェーティン・シクリフテン預言者の著書』にある不吉な預言が現れたのだ。記された預言の内容は、管理局地上本部の壊滅と、管理局システムの崩壊だった。その未来を回避する為には、地上で自由に動ける部隊が必要となり、機動六課が設立されたのである。本当の目的と今後の事を知ったなのは達は、決意も新たに協力する事を約束した。

先ほど聞いたカリムの預言の内容に、原作との違いは無かった。防衛プログラムの件は事件前に決着がつくのか、それともこれから新たな預言が追加されるのか。

ちなみに、地上部隊はカリムの預言を嫌っている。当たる当たらない云々では無く、実質のトップであるレジマス・ゲイズ中将がこの手のレアスキル自体を快く思っていないのだ。コレが、聖王教会と管理局の悪い仲の一端でもある。

機動六課設立の件が済むと、今度は隼樹とセイバーから防衛プログラム生存について話をした。地下でセイバーの偽者と闘い、ナンバーズが明らかに強化されてるのを観て、二人は確信したのだ。隠す必要は無いと判断して、丁度いい機会でもあるので皆に暴露する。最初は信じられなかった一同だったが、冷静に戦闘を振り返ると納得してくれた。とりあえず、今まで以上に気を引き締め、覚悟する事を決めた。

話が終わり、解散しようとしたところで隼樹が口を開いた。

「あ、すいません。ちょっとクロノ君とカリムさんの二人に話があるんですけど、いいですか？」

「ああ、僕も少しなら時間がある」

「私も構いませんよ」

二人の許しを得て、隼樹とセイバーは部屋に残り、六課の隊長陣は先に隊舎に戻った。

話の口火を切ったのは、カリムだった。

「それで、お話とは何ですか？」

「あゝ、実はですね……。まだ詳しくは話せないんですけど、今回の事件でお二人にお願いしたい事があるんです」

「お願い？」

「ああ。ただ……。局員のクロノ君や管理局と関係が深いカリムさん達にとっては、ちょっと……。いや、かなり危険と言うか、損をすると言うか……。ロクな役目じゃないんですけど……」

怪訝そうに尋ねるクロノの問いに、隼樹は言葉を詰まらせ、選びながら答えた。

敢えて隼樹が、原作通りに事を進めるには彼なりの狙いがあった。ソレは、黒幕である最高評議会の存在と悪事を世間に晒す事だ。未来に起こる地上本部襲撃及び機動六課隊舎襲撃、更に『聖王のゆりかご』を起動させての大規模テロを指示したのも全て最高評議会のせいにして、全ての罪を押し付けてナンバーズを救うのが隼樹の計画である。イカサマをした者は必ずそのイカサマで自分の首を絞めるように、評議会の連中を自分達が犯した罪で破滅に突き落として生き地獄を味わわせてやる。その為には、管理局内部の者の協力が必要なのだ。

事実が公になれば、管理局への世間の批判は痛烈なモノになるだろう。だが、組織のトップが姿を現さない事に何ら疑問も抱かず、身内の犯罪に気付かなかった事を考えれば、当然の報いだ。それに、この事件をキツカケに管理局は内部改革をして、やり直せばいい。少しずつだろうが、徐々に信頼を取り戻せるだろう。

隼樹の目的は、あくまで最高評議会を蹴落とし、ナンバーズを理不尽な結末から救う事であって、管理局崩壊では無い。数多の次元世界を管理する管理局と言う組織は、必要な存在だからである。ソレに、なのは達は勿論、善良な局員も多く所属しているのだ。組織自体を潰すのは、どう考えてもやり過ぎだ。

頼みの内容が内容なだけに、この場では明かせない。虫のいい話なのは解っているが、それでもクロノ達の協力が必要なのだ。

「お願いします……！」

頭を下げ、隼樹は二人に頼み込む。

すると、カリムから穏やかな声がかけられた。

「隼樹さん、頭を上げて下さい」

言われた隼樹は、ゆっくりと顔を上げた。

向かいの席では、カリムが微笑みを浮かべていた。

「最初に協力を願ったのは私達の方ですから、そちらの頼みを断る訳にはいきません。何より、他ならない隼樹さんの頼みです……ちから力になるとお約束します！」

「ああ。内容が何であれ、その時が来たら僕も協力しよう！」

カリムに続き、クロノも後の協力を約束してくれた。

「ありがとうございます……！」

隼樹は、心から二人に感謝した。

クロノとカリムは、頼みの内容について言い淀んだ隼樹の反応から、管理局にとって非になるような事、或いはソレに近い事なのだろうと察しはついていた。それでも二人は、隼樹への協力を約束してくれた。損得勘定を抜きにした感情で、二人は応えたのだ。

隼樹の後ろで事の成り行きを見守っていたセイバーは、結果に安堵して微笑んでいた。

二人の協力を得た事で、コレで計画実行の準備が整ってきた。後は、どうヴィヴィオを原作通りに誘拐させるかの選択、強化したナンバーズの対処等の問題を解決するだけだ。
用件を済ませた隼樹は、席を立ち上がった。

「それじゃあ、俺はこれで……」

部屋を出ようと、扉に向かう途中だった。

（待って下さい！）

「え……？」

不意に念話が届き、隼樹は歩みを止めて振り返った。

念話の送り主は、席を立ったカリムだ。若干頬を赤く染めて、念話を続ける。

（あの、この後か明日くらいに空いてる時間がありますか？）

（え、えーっと、そうですね……今日は会う人達が居ますから無理ですけど、明日なら……）

（それでは明日、ココで私の相手をしていただけないでしょうか？）

カリムの頼みを聞いて、隼樹は自分の顔が熱くなるのを感じた。
これは頼みと言うより、カリムからの“お誘い”だ。つまり、こ
の間の続きを御所望なのだろう。
少し戸惑いつつも、

(……はい。分かりました)

(ありがとうございます)

隼樹は誘いを受け、カリムは嬉しそうに笑った。

念話のやり取りを知らないセイバーは訝り、クロノは肩を竦めた。

集結（前書き）

後半に工口描写注意！

集結

聖王医療院でヴィヴィオを引き取ったプレシアとアルフは、シグナムが運転する車で機動六課隊舎にやってきた。二人共、今日から六課隊舎に着いて、ヴィヴィオの面倒を見るのだ。形式上では、隼樹達と同じく民間協力者と言う事になっている。

フォワードの四人や他の局員も、フェイトとアリシアの母親であるプレシアとは初対面だった。ただ、フェイトが保護者として面倒を見てきたエリオとキャロは、二人と面識があるので、再会出来て喜んでいる。スバルとティアナも最初は緊張していたが、穏やかな印象の女性で優しく接せられ、自然と緊張も解れた。アルフも明るく声をかけてきて、元気の良いスバルとはすぐに打ち解けた。

今は、プレシアが隊舎の一室で、ヴィヴィオの世話をしている。ヴィヴィオの方も彼女に懐いており、一緒に絵を描いて遊び、褒められて笑顔になる。

不意に、扉が開いてアルフが入ってきた。

「プレシア〜！ 隼樹達が戻ってきたよ〜！」
「隼樹が!？」

アルフからの知らせを聞いたプレシアは、弾かれたように立ちあがった。

彼女が六課に訪れたのは、ヴィヴィオの世話を頼まれた事もあるが、やはり隼樹に会いたい気持ちが大きかった。かなり年の差があるが、プレシアも隼樹と付き合っている恋人の一人なのだ。

ようやく愛しい人に会えると思うと、胸が躍って自然と顔も笑顔になる。そんなプレシアを、側に居るヴィヴィオは茫然と見上げていた。

部屋を出て隊舎のロビーに行くと、セイバーを連れた隼樹が居た。

「隼樹！ セイバー！」

「プレシアさん！ アルフ！」

隼樹とセイバーも、二人に気付いて返事をした。

プレシアは駆け出して、人目も気にせず隼樹に抱き付いた。大きな胸の膨らみを、無遠慮に押し当てる。

「会いたかったわ、隼樹……！」

「そんな大袈裟な……」

「大袈裟なものですか！ 貴方、ここ最近ずっと六課にばかり籠りつきりで、私に会いにきてくれなかったじゃない……！ もう放置プレイはウンザリよっ！」

「いや、放置プレイってアンタねえ……」

胸を押し付けられ、詰め寄ってくるプレシアに隼樹は顔を赤くして、たじたじになる。

周りの局員からは注目的になり、その中でも男性局員は嫉妬の念を抱いていた。数少ない男仲間であるが、セイバーやオルタ、リインフォースにプレシアと言った美女美少女と幅広い女性と付き合いをしている隼樹は同時に敵でもあった。男の友情って脆いよね。

二人の傍で、セイバーもアルフと挨拶を交わす。

「アルフ、元気そうで何よりです」

「そっちも元気そうで良かったよ。まあ、こっちはちょっと大変だったけどね……」

「と言いますと？」

「プレシアの事に決まってるじゃないか。隼樹に会えないってんで、泣いたり喚わめいたり、落ち込んだり………しまいには、発狂寸前にまでなった時だってあるんだよ？」

「どんな精神状態ですか!？」

アルフが語るプレシアの状態に、思わずセイバーはツッコんだ。その時、アルフの尻尾にしがみついているヴィヴィオを見つけた。

「ほらっ、ヴィヴィオ。挨拶しな。あたしの知り合いだから、大丈夫だよ」

「……こんにちは」

「こんにちは。私はセイバーです」

「ヴィヴィオです」

セイバーは微笑み、ヴィヴィオと自己紹介を交わした。アルフの知り合いと聞いて、ヴィヴィオは警戒心を無くした。

「アルフお姉ちゃん。あの人は？」

ヴィヴィオが指差したのは、プレシアと話をしている隼樹だった。

声が聞こえたらしく、二人はヴィヴィオに顔を向ける。逡巡した後、プレシアは隼樹に寄り添って微笑み、答えた。

「この人は葉谷資隼樹と言って、私の旦那さんよ」

「いや、結婚してないから。恋人ですから、まだ彼氏止まりですか」
「ら」

プレシアの一段階飛んだ答えに、隼樹は即座にツッコんだ。

「プレシアっ……!」

「うおっ!？」

突然ロビーに上がった鋭く大きな声に、隼樹は驚いて振り返る。

やってきたのは、リインフォースだった。急いで駆け付けたのか、額には汗をかき、肩で息をしている。しかし目は鋭く、紅い瞳でプレシアを睨んでいた。

恐る恐ると言った様子で、隼樹が訊いた。

「ちよっ……大丈夫ですか……？」

「デスクワークを……済ませて……駆け付けました……！」

「いや、汗だくですよ！？ どんだけ量の書類処理したんすか！？ え？ そんなに大変なんですか、部隊長補佐って？」

声を上げる隼樹の前で、息も整わない内にリインフォースは興奮した様子で言った。

「プレシア！ 隼樹は貴女一人のモノでは無いのですよ！」

「少し違うな、リインフォース」

そこへ、別の声が挟み込まれた。

一同が集まるロビーに現れたのは、オルタだった。他者を見下す侮蔑の笑みを浮かべ、女性陣に言い放つ。

「隼樹^{ソイツ}は王である、私のモノだ……！ 誰にも渡しはしないぞ……！」

「オルタ……！ ソレは聞き捨てなりませんね！」

オルタの発言に、セイバーまで闘争心に火が点いた。

セイバー、オルタ、プレシア、リインフォースの女性四人が久しぶりに集まり、争奪戦に激しい火花を散らす。

四人の威圧感、迫力、凄みに気圧されて、周りに居る局員は顔を蒼ざめて離れていく。二人の騎士王と大魔導師、更に強力な融合騎の睨み合いともなれば、場は他を寄せ付ける事を許さない絶対領域

と化する。

「ヤバいやバいやバい……！」

「ふええ……！」

「ヴィヴィオ！ こっち来なっ！」

危険を察した隼樹と怯えるヴィヴィオを抱えたアルフは、そそくさとロビーから退散した。

*

「いや、危ない危ない……！ 危うく、超人バトルに巻き込まれるところだった……！」

「っていうか、アンタが争いの種なんだけどね」

「……返す言葉もございません」

ロビーを出た隼樹とアルフ、ヴィヴィオの三人は隊舎の廊下を歩いていった。

建物の外から、言い争う声や激しい爆発音が聞こえてくるが、隼樹とアルフは努めて無視する。何にも聞こえないし、何にも知りません。

「いや、でも……何だかんだで、皆元気そうで良かったよ」

「まっ、そうだね」

隼樹の言葉には、アルフも同感だった。久しぶりに全員が揃って、騒がしくて、何だか嬉しくなってくる。妙に懐かしくさえ思う。

すると、三人の前にアリスが現れた。初めて彼女を見るアルフと

ヴィヴィオは、首を傾げる。

初対面の二人に、隼樹がアリスを紹介した。

「ああ、この娘はアリス。六課で保護してるんだ」

アリスは無言で会釈して、アルフもつられるように頭を軽く下げた。

改めて思うのだが、アリスは初対面の人は勿論、なのはやスバルと言った他の局員とも話をしない。唯一話をしてるのは、隼樹、セイバー、オルタの三人だけだ。単に多くの他人と接するのが嫌いなのか、それとも管理局員が嫌いなのか詳しい理由は解らない。

隼樹がアリスの事を考えていると、彼女が話しかけてきた。

「じゅんにーさま。地下での約束……」

「え……？ あ、ああ、そうだったな……」

地下での約束とは、地下空間で取り乱していたところをアリスに自分がやるべき事を気付かされ、お礼に彼女が慕っている女版の自分に会わせると言ったのだ。アリスの要求に慌てて答えた隼樹は、決してド忘れしていた訳ではない、と信じてあげてほしい。

そこへ、隣でアリスの言葉を聞いたアルフが、怪訝そうに片眉を上げて訊いた。

「隼樹…… “じゅんにーさま” って何だい？ まさか、アンタ……
また新しい女を……」

「いや、それは、その……」

アルフの問い詰めに、隼樹はしどろもどろになる。女版とは言え一応は『隼樹』であり、奴隷と言う主従関係ではあるが、新しい女を作ったと言えば作った事になってしまう。何とも面倒で、答えに

くい関係である。

すると、アリスが隼樹の服を引っ張り、無理矢理連れて行く。

「あつ、ちよつ……！ ゴメン！ また後で……！」

されるがままに、隼樹はアリスに廊下の奥に連れて行かれた。

残されたアルフとヴィヴィオは、啞然とした顔で二人を見送った。ややあつて、ヴィヴィオがアルフに言う。

「アルフお姉ちゃん。隼樹お兄ちゃん、人気者？」

「あ、ああ、そうだね……。人気者だね。」

隼樹の現状を見て、アルフは笑顔を引き攣らせる。

隼樹……。アンタ地味男のクセに、結構罪な男だよなあ……。カリムの件まで知ったら、アルフはどう思うのだろうか。

*

アリスに引っ張られ、隼樹は自分の部屋に連れ込まれた。

扉には鍵をかけ、誰も入れないように密室状態にする。セイバー達は隼樹を巡る争いを外の空間シュミレーターで行っているので、邪魔者が来る事も無い。思う存分、女版隼樹との時間を堪能出来る大チャンスだ。

「さあ、じゅんにーさま……！」

「ああ、分かっている。分かっているよ、アリス」

出来る事なら、女に変身するのは物凄く恥ずかしく、御免こうむ

りたいのだが、約束してしまったものは仕方ない。諦めたように溜め息をつき、隼樹は『イメージ』を発動させた。想像するのには、ホテル・アグスタで変身した金髪の美少女だ。

隼樹の体が一瞬光に包まれ、消えた時には女版隼樹に姿が変わっていた。お慕いする美女と再会して興奮するアリスの前で、女版隼樹は自分の姿を確認した。

「うん。問題無し！ ちゃんとおあたしになってるじゃん！」

「じゅんねーさま……！ お会いできる日を、お待ちしてました……！」

普段は無表情のアリスの顔が、頬を赤く染め、喜びと興奮を混ぜた笑顔になっている。

隼樹はニヤリと笑って、喜ぶアリスの顎に右手を添えた。

「地下では御苦労だったね。ちゃんと言いつけ通り、男のあたしを護ってくれてさ」

「いいえ。ソレが、じゅんねーさまのお望みでしたから……！」

「くくっ……！ ホント、アンタって可愛いねえ……！ それじゃあ、言い付けを守ったご褒美をやるよ……！」

妖艶な笑みを浮かべ、隼樹は顔を近付ける。

アリスは切なそうな表情で、迫る隼樹の綺麗な顔を受け入れ

二人の唇が重なった。両肩を掴まれて、動けないよう固定される。

静かに目を閉じて、キスの甘い快樂に身を墮とす。

「ん……んんっ……！」

口の中を舌で掻き回され、アリスは感じた事も無い快感を味わう。興奮の昂りと共に、身体が火照って熱を帯びる。

一方の女版隼樹は、キスだけでは物足りないのか、右手を肩から離してアリスの胸を乱暴に鷲掴みにした。

「んんっ……！ あんっ……！」

胸を掴まれたアリスは、塞がれた口の隙間から嬌声をもらす。身体が火照っている事もあり、普通よりも敏感に感じていた。

アリスの反応を楽しみながら、隼樹は胸を揉んで愛撫する。

「アンタ……んちゅ……ロリの、クセに……ん……結構胸、あるわよね……！ そのアンバランスさも、好きだけどさ……！」

「んああっ……！ じゅん、ねーさまあ……！ はむ……んふっ……ああ、いいっ……！」

虚ろな目をするアリスは、口と胸の二重責めを受けて、快樂の海に溺れていた。刺激を受けて身体は熱くなり、切なそうに太股を擦り合わせ、今度は快樂で失禁してしまいそうだ。

次の瞬間、「んんっ！」とアリスの身体が跳ねた。絶頂に達したらしく、だらしなく濡れた舌を突き出し、切ない顔で天井を仰いでいる。快樂に堕ちた身体は、痙攣を起こしていた。

淫らな姿を晒すアリスに、隼樹はそそられて妖艶な笑みで舌舐めずりをする。

「アンタ、ホントに可愛いよ……！」

心ここにあらずな状態のアリスの頬を撫で、ふと隼樹はある事に気付いた。

「そう言えば、女のあたしの名前を決めてなかったわね……！」

アリスを抱きかかえたまま、女版隼樹は考え込んだ。
ややあつて、適当に名前を思い付いた。

「女だから、『隼子^{じゅんこ}』でいいか」

女版隼樹　隼子は隼樹以上に軽い奴だった。

自分の名前を決めた隼子は、今後の事も少し考えた。プレシアとアルフも機動六課に加わって、また戦力は強化された。フォワードの四人も成長しているが、ナンバーズが強化されている事を考えると、不安は拭い切れない。

もしもの時は、一時的にセイバー以外のサーヴァントや士郎にも協力を頼むかもしれない。だが、色々と問題がある。サーヴァントの再現は可能だが、戦闘となると膨大な魔力が必要になる。ソレが複数ともなれば、尚更だ。そして、サーヴァント自体にも問題はある。主に性格面で、約一名協力してくれるか怪しい者が居るのだが、どう扱ったらいいものか。コレ等の問題を解決しない限り、サーヴァントの助けを借りる事は出来ない。

「まっ、何とかなるでしょう」

隼子は、暢気な面もあった。

その夜、男に戻った隼樹は、四人の美女美少女と久々に熱く甘い夜を過ごした。

変更(前書き)

冒頭からのエロ描写に注意！ 注意！

変更

プレシア達が機動六課に訪れた翌日。隼樹は、単身で聖王教会に居た。

昨日、教会での話が済んで部屋を後にしようとしたところで、騎士・カリムから今日のお誘いを受けたのだ。こちらも最高評議会を潰す為に、後から協力をしてもらうのだから、断る事も出来ない。ソレ以前に、また相手をする約束までしている。どちらにしても、隼樹の選択肢は一つのみだった。

教会に訪れた隼樹は、カリムの部屋に入り、彼女の相手をする。

「ん……ふう……！」

静寂な空間で、キスをしてるカリムが淫らな声を漏らす。隼樹と身体を抱き合い、二つの胸の膨らみを押し当ててキスを味わう。普段は絶対に見せない、カリムのもう一つの姿があった。

隼樹もカリムの背中に腕を回して、離さないよう抱き締めている。騎士でありながら女性としての魅力が高いのは、セイバーやシグナム達と同じだ。なんとも、けしからん身体をしている。

興奮が昂り、隼樹は我慢出来ずに右手をカリムの胸に持っていく。立派に膨らんでる胸を、服の上から掴む。その瞬間、カリムは弾かれたように顔を上げ、嬌声を漏らした。

「あんっ……！　じゅ、隼樹さん……！　あっ……ソコは……！」
「カリムさん……！」

唇を重ねて、無理矢理カリムの口を塞ぐ。接吻をする口の中では舌を絡ませ、右手で胸を揉む。カリムも胸のサイズは大きく、程良い弾力と柔らかさで抜群の揉み心地だった。口の中と胸を責めるの

は、昨日の隼子の手法だが、自分である事に変わりないから使っても構わんだろう。

二重責めに遭うカリムは、アリスのように切ない顔になり、快感に身を振よらせる。

「んんっ……！ あむっ……！ あっ、ダメえ……ソコ、らめえ……！」

内と外からの刺激に、カリムの身体は熱く火照っていき、どんどん気持ち良くなっていった。

そして、

「んんんっ……！」

目をキツく閉じ、塞がれた口でぐもった声を上げ、身体が大きく跳ねた。全身に電流が走ったような感覚を味わい、口は涎まみれで濡れた舌を突き出して聖母のような顔からかけ離れた淫らな表情で、身体は痙攣を起こしている。快樂の海に身を墮として、興奮が最高潮に達したようだ。

「カリムさん……可愛い……！」

いけない事だと解っていないながらも、隼樹はカリムの誘いを受けて淫らな行為をした。どうしても断れず、彼女の誘惑に負けてしまうのだ。浮気をする男の心境は、こんな感じなのだろうか。

呼吸を荒げるカリムは、弛緩した身体を隼樹に預けた。

「はあ……はあ……気持ち、良かったです……！ こんなの、初めて、です……！」

興奮混じりの荒い息遣いで、カリムは恍惚な表情を浮かべる。

「貴方と居る時、だけは……騎士でも無い、女の子でも無い……“女”になれるんです……！ その事が、とても嬉しいんです……！」

隼樹の耳に、カリムの荒くも甘い吐息が吹きかかる。

この時、隼樹は再び疑問に思った。果たしてカリムは、自分に好意を抱いているのだろうか。それとも恋愛は関係無く、“女”で居られる居場所として求めているだけなのだろうか。

結局のところ、いくら隼樹が考えても答えは見つからず、本心はカリムのみが知る。

*

カリムの相手を終えた隼樹は、聖王教会を出て街に向かって歩いていた。『イメージ』で機動六課に跳ぶ事も出来るが、カリムとの行為を終えた後では、やはりすぐには帰り辛い。

このままカリムとの事を、セイバー達に黙ってるのは精神衛生上よろしくない。許してくれるか解らないが、なるべく近い内に正直に話そう。告白すれば、少なくとも半殺しは確定だな。

軽く憂鬱な気分になり、溜め息をついた時だった。

パッパァ、とすぐ後ろから、車のクラクションが鳴った。自分には関係無いと思いつつ、隼樹は振り返る。

「隼樹」

「あ、フェイト」

黒い車から顔を覗かせたのは、フェイトだった。本局に用事があ

つて、朝から隊舎を出ていたのだ。

「一人でどうしたの？」

「ああ……ちよつと用事で……」

「そうなんだ。あ、よかつたら乗っていかない？ 丁度お昼ご飯の時間だし、どこかで一緒に食べない？」

「うん、そうだね。ありがとう」

厚意に甘えて、隼樹は車に乗り込み、隣の助手席に座った。

二人が向かった先は、隼樹も利用してるファミレスだった。このファミレスには、奥に他とは離れた席があつて、静かに食事を楽しめ、他人に話を聞かれる心配も無い。隼樹のお気に入りであり、今日も空いていたのでフェイトと向き合う形で座る。フェイトは軽めの料理を、隼樹はハンバーグを注文した。しばらくして、料理を運んだ店員さんがやってきた。注文した料理と伝票を置き、去っていく。

こうしてフェイトと二人っきりで食事するのは初めてだな、と長い付き合いの仲で新鮮な思いを抱きながら隼樹は頼んだハンバーグを食べた。

二人で雑談をして、食事を済ませた後だった。

「あら？ 今日はお一人ではないんですね」

「え……？」

聞き覚えのある声をかけられ、隼樹は顔を引き攣らせた。

フェイトも顔を向ければ、三人の女性が席の隣に立っていた。一人は、以前ココで話をした事のあるウーノだ。

驚いた様子で、隼樹は席を立ち上がった。

「ウ、ウーノさん！？ どうしてまた……？ しかも、増えてるし

……！」

「突然ごめんなさい。実は、貴方に相談をしに来たの」

隼樹と親しそうに話してるウーノを見て、フェイトはポカンとなる。知り合いのようだが、局内では見たことが無い。それに、凄く綺麗な女性だ。隼樹には失礼と思いつつ、正直釣り合わないと言うのがフェイトの感想だった。まあ、ソレを言ってしまうえば、セイバー達とも全く釣り合いが取れていないが。

そんな事を思っていると、フェイトは別の女に声をかけられた。

「すまない。相席をしても構わないか？」

「え？ え、ええ……どうぞ」

思わずフェイトは、相手に対して敬語で答えた。

断りを入れてきたのは、明らかにフェイトよりも年下の女の子だった。長い銀髪と右目を隠した黒い眼帯が特徴的で、顔は幼く背も小さい。私服の上には、灰色のロングコートを羽織っている。外見적으로는完全に子供だが、立ち振る舞いや雰囲気は妙に大人びている。コレが、フェイトが敬語を使った理由だ。

銀髪の少女の後ろには、三人目の赤髪の女の子が居た。こちらは平均的な身長で、何かイラついているのか不機嫌そうに顔を顰めている。ふとフェイトは、彼女の顔に何か引つ掛かりを憶えた。初対面のハズなのだが、何処かで見えた事があるような気がするのだ。

結局違和感が解けぬまま、フェイトは隣の空きスペースに二人を座らせた。

ウーノも隼樹の隣に座り、三人はそれぞれ飲み物を注文した。食器を引き下げられ、代わりに新しく注文された飲み物が置かれる。

コーヒーを口に含むウーノに、隣に座る隼樹が尋ねた。フェイトに聞こえないよう、声を抑えている。

「ちょっと、何考えてるんですか！？　今は俺だけじゃなくて、局員のフェイトも居るんですよ！」

「ええ、解ってます。ですが、早い内に貴方に話したい事があるんです。細かくタイミングを図ってる余裕は無いんです」

ウーノの顔は、何か思いつめたような険しい表情をしていた。

何か事情がある事を察した隼樹は、とりあえず話を聞く事にした。本題に入る前に、ウーノはフェイトに自己紹介を始める。ぶつちやけ、この瞬間が隼樹は一番緊張した。

「初めまして、フェイト・テストロツサ執務官。私は、ジェイル・スカリエツティの秘書をしております、ナンバーズの？1、ウーノです」

「スカリエツティ……！？」

名前を聞いた瞬間、フェイトは血相を変えて立ち上がった。

ジェイル・スカリエツティは、フェイトが長年追い続けてきた広域次元犯罪者でもある。自分を造り出した『プロジェクトF』の基礎論理を組み立てた男で、母を狂わせた要因の一つにもなっている。それ故に、彼を捕まえようと追い続けているのだ。ソレがまさか、こんな形で間接的に接触する事になるとは、思わなかった。

感情を昂らせるフェイトの反応を予想して、すぐに隼樹が宥める。

「フ、フェイト、落ち着いて！　お願いだから、ココは抑えてウーノさんの話を聞いてくれないかな？」

「でも……！！」

「お願いだ！　今回だけでいいから……！！」

隼樹が必死に頼むと、フェイトは逡巡した。

ややあって、心を落ち着かせるように、溜め息をついた。

「分かった……」

フェイトは席に座ってくれた。

彼女が引いてくれて、隼樹は安堵した。ココでフェイトが敵意を消してくれなければ、話が進まない。原作のフェイトだったら、おそらくウーノ達を逮捕しようとしただろう。しかし、この世界では彼女の事情が大分違う。本来ならアリシアの遺体と共に虚数空間に身を落としたプレシアだが、隼樹と言うイレギュラーな存在の介入で、最悪の未来は回避されている。凶らずも、スカリエツティに対する憎しみを薄めているのだ。

フェイトが落ち着いたのを見て、隣に座っている二人のナンバーズも名乗る。

「?5のチンクだ」

「……?9、ノーヴェ」

銀髪の少女がチンクで、赤髪の少女がノーヴェだ。

「それで、話とは何ですか?」

警戒心は解かず、険しい顔でフェイトが話の内容を尋ねる。

彼女の問いに、ウーノが答えた。

「ホテル・アグスタ襲撃の前日に、黒龍と名乗る女性が私達のアジトに訪れました。強大な力を提供する代わりに、自分と同盟を結んでほしいと……。彼女の力に興味を抱いたドクターは、同盟を結んで仲間に迎えました。そして、協定通りに妹達に力を分け与え、結果、能力向上と共に新たな能力を得ました」

話を聞いた隼樹は、内心に舌打ちした。

思った通り、ナンバーズの強化には防衛プログラムが関わっていた。しかも、話を聞く限り、防衛プログラムは姿を女に変えているらしい。女と闘い辛い隼樹にとって、厄介な事この上ない。

「その黒龍と言う女は、もしかして防衛プログラム……？」

フェイトも同じ結論に達したらしく、ウーノに問うた。

ウーノは頷き、話を続ける。

「そうです。彼女の協力で、確かに妹達は強化されました。ですが、“防衛プログラムの力”を得た妹達に能力以外の変化が現れました。性格がより残忍に、残酷になったのです……！ その時、私は黒龍に対して恐怖と危機感を抱きました……！ このまま黒龍と手を組んでいていいのか……？ もしかしたら、私達はとんでもない怪物を招き入れてしまったのではないのか……？ そう思えてならないのです……」

廃棄都市の戦闘で、ヘリを狙って砲撃したディエチは、標的の姿を見る前なら平然とトリガーを引けるが、決して命を軽んずる悪党では無い。だが、防衛プログラムの力を得たディエチは、更に冷酷で冷酷な面が増して、ただ標的を撃ち落とすのみの砲撃マシンと化していた。その他の力を得たナンバーズも、影響の大小こそあるが、変化が生じている。

妹達の変化を目の当たりにして、ウーノとチンクは言い知れぬ危機感を抱き、面識があり、話を聞いてくれそうな隼樹に相談する事を決めたのだ。

チンクがウーノの話を引き継いだ。

「防衛プログラムの力を得てないのは、私とウーノにノーヴェ、そ

れから別行動をしている？2の四人だけだ。力の会得は、強制では無かったのだな。黒龍は危険だが、私達はドクターの手で生み出された戦闘機人だ。ドクターや姉妹を裏切る訳にもいかないが、私達の力では黒龍をどうする事も出来ない」
「なるほど……」

事情を聞いた隼樹は、険しい顔で考え込む。

どうやら、自分が思っていた以上に事態は深刻そうだ。おそらく、力を得たナンバーズは黒龍に従う兵士に変えられているのだろう。性格の変化も、その影響だと思われる。

しばしの沈黙の後、チンクが口を開いた。

「隼樹……敵対しているお前に、こんな相談をするのはおかしいだろう。だが、私は自分の姉妹が利用されるのが、悔しいのだ……！」

「一体私達は、どうすればいい……？」

チンクは膝の上で拳を固め、自分の力不足に憤る。

そんな彼女の心情を察して、隼樹は言った。

「いや、皆は何もしない方がいいです。黒龍が皆を利用してらなら、少なくともその間は向こうも手は出さないハズです。だから、黒龍に関してはこっちで何とかします……！」

元より、黒龍こと防衛プログラムとは決着をつけるつもりだ。

「それに、ナンバーズの皆も悪いようにはしませんし、スカリエツティに關しても出来るだけ努力します……！ 約束します……！」

ウーノ達の前で、隼樹は断言した。事実、ナンバーズもスカリエツティも犠牲者なのだ。

「フェイトが何か言おうとしたが、言葉を飲み込んで黙った。

「すまない……！」

チンクが頭を下げ、ウーノも感謝の気持ちを抱く。

ノーヴェだけが、話の間ずっと黙り込んで、隼樹を見つめていた。

*

「隼樹……どうして、あんな約束をしたの……？」

ウーノ達が立ち去った後、フェイトが尋ねた。

真相を知らないフェイトは、隼樹の考えが理解出来なかった。執務官として、犯罪者を庇う事は納得がいかない。

そんなフェイトに、隼樹は困り顔で答えた。

「……ゴメン。今は、まだ言えない。でも、そう遠くない内に嫌でも知るよ」

今、真相を局員であるフェイト達に教えるのは、動揺を与えるだけ得策ではない。

意味深に言う隼樹に、更に追及しようとしたフェイトだったが、すぐに止めた。疑問は残るが、自分や母親、フレシア、アリシア、姉、家族を救ってくれた隼樹を、信じようと思ったのだ。

フェイトの前で、隼樹は顔を上げて天井を仰ぐ。

そして、フェイトに聞こえないように、小さく呟いた。

「計画変更、だな……！」

黒龍の介入で、隼樹は計画変更を決断した。

公開意見陳述会で、決着^{ケリ}をつける。ミッド地上の護りの象徴である地上本部襲撃だけでも、充分に住民に恐怖と不安を与える事になる。それに、実質な被害を受けるのは、管理局だけだ。ある意味で自業自得な形であり、ヴィヴィオを攫われる必要も無いから、全てに決着をつけるには最高のタイミングだ。何より、地上本部襲撃では無血制圧が目的だが、豹変した今のナンバーズでは以降に人を殺してしまう恐れがある。ソレを避ける為にも、公開意見陳述会で決着をつけるのが、ベストであり、最高の形なのだ。

上等だよ。向こうがそう来るんなら、返り討ちにしてやるよ。

「勝ってやるよ……！ 今度こそ……！」

変更（後書き）

エロは、ギリギリグレーゾーン……のつもりです。
セーフ！ セーフ！

対策（前書き）

投稿者：勇往X邁進さん。

キャラへのプレゼントありがとうございます！

対策

機動六課に、陸士108部隊所属のギンガの姿があった。

レリック事件の捜査で、しばらく機動六課に向かう事が決まったのだ。お姉ちゃんっ子であるスバルは、大好きなギンガと一緒に働けると嬉しそうにしていた。

それからもう一人、本局から六課に訪れた女性局員が居た。マリエル・アテンザと名乗る女性は、なのは達が入局してからデバイスを見てきた本局技術部の精密技術官である。皆のデバイス調整も行ってくれるそうで、しばらくはギンガと共に六課に滞在するそうだ。新たな局員を迎え、フォワード四人の早朝訓練を開始する。エリオとキヤロはフェイトが、ティアナはヴィータが個別指導する事になり、残されたスバルは姉であるギンガと模擬戦を行う事になった。セイバー達も見守る中、二人の模擬戦が始まった。

流石はスバルのシューティングアーツの師匠だけあって、ギンガは最初から猛攻を仕掛ける。だが、スバルも負けてはいない。隊長達からの訓練に加え、オルタとセイバーによる命懸けの模擬戦を続けてきたのだ。攻撃の気配を察知して、動きを読み、必死に姉に食らいつく。スバルの成長に驚きつつも、ギンガは嬉しそうに激しい模擬戦を続ける。ほぼ互角の闘いを演じた結果は、引き分けだった。最後の一撃、互いの繰り出した拳が、相手の顔に当たる寸前で止められた。

強くなったスバルの実力を見て、感じて、ギンガは満足そうに微笑んだ。

早朝訓練を終えた一同は、少し休んで午前の訓練に入った。教官のなのはが前に出て、一同に内容を伝える。

「折角だから、ギンガを入れたチームでの模擬戦やってみようか？
フォワードチーム五人 対 セイバーさん、セイバーオルタさん

の二人……！」

訓練の内容を聞いた瞬間、初めてのギンガは茫然となる。言うてる意味を理解するのに、数秒の時間を要した。そして、解った時には目を丸くして動揺を露にする。

「え……ええっ!?!」

「いや、あのねギン姉……コレ、たまくにやるんだ」

「お二人共、一応手加減はしますけど、本当に殺気を飛ばしてきて、本気で潰しにかかってきますから……」

「とにかく、まずは勝つ事よりも生き延びる事を最優先に考えて行動します」

「元々、ソレが目的の模擬戦ですから」

軽くパニックるギンガに、スバル、エリオ、ティアナ、キャラの順に説明した。が、果たしてちゃんと声が届いてるかどうか。

すると、セイバーとオルタが、甲冑姿でフワード五人の前に立った。不敵な笑みを浮かべて、オルタが言う。

「安心しろ、ナカジマ陸曹。貴様等が、全力で、本気で、必死に生き残ろうと動けば、死ぬ事は無い……！」

「オルタ……！ 必要以上に相手を怯えさせる事は、控えて下さい」
「ふんっ。やはり、お前は甘いな」

目の前で口論を始めるオルタとセイバーを見て、ギンガは顔を引き攣らせて笑った。心なしか、顔の筋肉が痙攣してるように見える。セイバーとオルタの事は、スバルからのメールで知っていた。何より、先日の地下での事件で、セイバーの実力を実際に目の当たりしている。失礼な言い方だが、あの化け物染みた強さを誇る騎士が、殺気をぶつけて迫ってくるなど、想像しただけで鳥肌が立つ。

しかも、セイバー以上に強いと聞くオルタまで参加するのだ。恐がるな、と言う方が無茶な注文だ。恐怖する一方でギンガは、スバルの急激な成長の理由が解った気がした。

口論を切り上げたセイバーが、不安と恐れを抱くギンガに、努めて優しく声をかけた。

「オルタが無茶をしそうになった時は、私が止めに入りますので、安心して下さい。ですが、あくまで訓練ですので、基本的には自分達の手で切り抜ける事を考えて下さい。私も、容赦はしませんから」
「は、はいっ！」

幾分安心するも、緊張した声でギンガは返事をした。

こうして、フォワード五人の実戦式模擬戦が開始された。

まー、酷かった。

模擬戦の内容は、すんげー酷かった。

どんな風に酷かったのかと言うと、読者諸兄の皆さんの予想通り、オルタの攻めが半端無かった。まさに鬼神の如き暴れっぷりで、フォワード五人を圧倒したのだ。ギンガと言う新たな標的が加わったからか、いつも以上に猛攻を仕掛けてきたのである。ハッキリ言って、フォワード五人が勝つ可能性は、これっぽっちも無かった。テイアナの言った通り、皆生き延びる事に必死になっていた。

五人はバテバテになり、大の字になって草場の上に仰向けに倒れている。

「皆さん、お疲れ様です。ギンガを加えた初戦だと言うのに、皆上手く動いてました」

涼しい顔をしたセイバーが、皆を労い、模擬戦の内容を褒めた。

「あ……ありがとうございます……」

一同は何とか声を振り絞り、お礼を述べた。

*

マジパネえな、と訓練を観ていた隼樹は思うのだった。

只でさえ厄介な騎士なのに、二人攻めとなったら最高最悪に厄介となる。訓練を受けてる五人にとっては、鬼に追われる生き地獄に等しいだろう。

おっと、イケない。俺は俺で、今後の事を考えないとな……。
疲れてダウンしてるフォワード達から離れた所で、隼樹は胡坐あぐらをかいて考え事をしていた。悩みの種は、勿論、黒龍や強化したナンバーズ等の対策である。フォワード陣に関しては、なのは達の教導に加えたセイバー達による模擬戦での意識、技術面の向上で何となるだろう。

問題は、自分自身だった。いつまでも、セイバーやオルタに任せつきりと言う訳にもいかない。自分も闘いに参戦したいのだが、問題がある。ソレは、魔力量だった。二人のサーヴァントの戦闘分に加え、自分の戦闘分の魔力も用意する必要がある。ソレをどうするかで、隼樹は考えていた。

なかなか良い案が思い浮かばず、悩んでいた時だった。

ふとフォワード五人が居る辺りを見た隼樹は、ある物を発見した。

その瞬間、閃く。

見つかる、解決策。

「ああああああああ……っ！」

「えっ!？」

突如声を上げた隼樹に、離れているフォワード陣は驚き、顔を向けた。セイバーとオルタも、何事かと振り向く。

皆の注目を浴びる中、隼樹は発見に興奮した声を出す。

「そつだ……! その手があつたか……! 何で今まで気がつかなかったんだ……!？ 馬鹿だな〜! ホントに俺って、馬鹿で間抜けだ……!」

自分を卑下する発言をしながら、頭をグシャグシャと掻き乱した。気付くのが大分遅れたが、まだ手遅れじゃない。今からでも、充分間に合う。

解決法を閃いた隼樹は、善は急げとばかりに踵を返して、隊舎に向かつて走り出した。

遠ざかっていく隼樹の後姿を、一同は茫然とした顔で見送った。

*

隊舎の裏庭では、アルフがヴィヴィオの相手をしていた。傍には狼形態のザフィーラも一緒に、木製ベンチの上から二人が遊んでる様子を眺めている。

「ほらほら、こつちだよ〜!」

「あははっ! 待って〜!」

アルフが尻尾を振り、ヴィヴィオが捕まえようと追いかける。草の上を駆け回り、暖かい太陽の日差しの下で楽しそうに笑顔を輝か

せていた。

そんな穏やかで平和な場から少し離れた所で、隼樹とプレシアが話をしていた。先ほど自分が考えた案を話して、確認しているのだ。隼樹の話を聞いたプレシアは、浮かぬ顔をしていた。

「話は解ったわ。確かにその方法なら、貴方の魔力量を飛躍的に上げる事が出来る……けど、危険な行為でもあるわ。貴方の考えた方法は、一見魔導師と同じに見えて根本的に違うのよ？」
「いや、ソレは俺も解ってるんですけどねえ……。他に方法が無いんですよ……」

苦笑いを浮かべて頭を掻く隼樹に、プレシアは呆れたように溜め息をついた。

「まったく……貴方って、たまにそうよね」

「え……？ 何がですか……？」

「自他共に認める臆病な性格なのに、たまに無茶な事をする……。どうして貴方ってそうなのかしら？」

「さあ、どうしてでしょう……？」

自分でもよく解らない隼樹は、やはり苦笑いだ。

本人の様子に、今度こそプレシアは呆れた。無茶な事をする理由について、プレシアなりに見当はついてる。好きな女の為と言うのもあるだろうが、隼樹自身何も出来ないのが悔しいのだろう。これまでの勝負で、実質的に勝利を収めてきたのは、パートナーのセイバーだ。臆病者のクセに、難儀な事である。

しかし、隼樹の想いを無下にする訳にもいかない。

「解ったわ。貴方に言われた物、用意してあげる」

「本当ですか？ ありがとうございます！」

プレシアの協力を得て、隼樹は笑って礼を言った。
しょうがないんだから、と受けたプレシアは頬を赤く染めた。

*

午前の訓練が終了して、昼食を食べ終えた後の時間。

隼樹、セイバー、オルタ、プレシア、リンフォース、アリスの六人は部屋に集まっていた。セイバーとオルタは、午前中にフォワード五人の訓練を行ったので、午後は時間が空いている。

六人が部屋に集まっている理由は、六課に届いたある荷物にあった。セイバー達が午前の訓練を終えて隊舎に戻ると、預かっていた局員から届け物を受け取った。宛先は機動六課になっているが、同封されていた手紙からセイバー達に宛てられた物だと判明した。セイバー達は、昼食を食べ終わった後で隼樹の部屋に集まり、箱の中身を覗いてみた。ソコには、驚愕の物が入っていたのだ。

その荷物の中身を令、セイバー達は身に付けている。送られてきた物は、服だった。ソレも普通の服では無く、チャイナドレスやメイドコス等のコスプレ衣装である。

「これは……スリットがあって機能性に優れていますね」

「まあ、悪くは無い、か……」

「……」

セイバーは青、オルタは黒、アリスは青黒と色違いのチャイナドレスを着ていた。胸の谷間を強調するように胸元は露出しており、スカート部分には深いスリットが入って細く綺麗な美脚を露にしている。

「うう……！ 何故、このような服が……！」

リインフォースは黒いチャイナドレスの他に、頭には銀色の狐耳、腰には同色の狐の尻尾が付いている。妖艶なドレス姿に加え、可愛らしい獣グッズまで付けて、魅力倍増となっていた。本人は自分の格好に恥ずかしくて、顔を赤くしているが、ソレも可愛さを上げるポイントに過ぎない。

恥ずかしがらるリインフォースの隣には、更に顔を真っ赤にさせたプレシアが居た。

「貴女達は、まだマシな方よ……。私なんて……！」

彼女が着てるのはチャイナドレスでは無く、メイド服だった。チャイナドレス同様に、やたら胸や脚等の肌の露出が高いデザインで、一般的に可愛いイメージのメイド服が酷く色っぽく見える。しかも、彼女もリインフォースと同じく獣グッズを付けていた。頭には猫耳、腰には猫の尻尾をつけ、獣スタイルまで装着したプレシアは、激しい羞恥心に襲われていた。

箱を開けて中身を見た直後、何か魔法が仕掛けてあったようで、皆強制的に衣装に着替えさせられたのである。

そんな可愛らしく、中には妖艶に変身した美女美少女を見て、

「ぐばあっ……！」

隼樹は倒れた。桃源郷のような光景を眺め、9999ポイントの精神ダメージを受けた。勿論、良い意味で。

「いやああああ！ 見ないでえ……！ 見ないで、ご主人様アアアアア！」

恥ずかしさに赤面した顔を両手で覆い、プレシアはいやんいやんと身悶えし出す。

しかし、その行動は、隼樹の興奮を昂らせるだけだった。

「くっ……！ ヤベー、超可愛い……！」

「隼樹……！ 私は……私は、どうですか……？」

対抗心を燃やしたりインフォースが、隼樹に詰め寄る。胸を揺らし、生足を露出させ、可愛い獣グッズを付けたインフォースにも、隼樹は目を奪われた。

「可愛くて、その……色っぽいです……！」

「隼樹……。私には何も無いのか……？」

今度は、黒いチャイナドレスを着たオルタが迫った。

彼女に対して、隼樹が抱いた感想は、

「エロ恐いです……！」

「そうか。そんなに死に急ぎたくば、ココで殺してやるっ……！」

「嘘嘘嘘嘘ですっ……！ いや、ちよっ……待っ……！」

「じゅんにーさまっ！」

「やめなさい、セイバーオルタっ！」

オルタが黒剣を抜き、隼樹は恐怖に駆られて逃走を図り、アリスやリインフォース達が必死に止めようとする。

完全にカオスと化した部屋で、セイバーは参加する訳でも無く止める訳でも無く、ただ苦笑いを浮かべて立ち尽くすだけだった。

その時、扉をノックする音が鳴った。近くに居たセイバーだけが聞き取り、応対に出る。

「はい。……フェイト」

「えっと……ちょっとセイバーに用事があったんだけど……間が悪かった、かな？」

部屋を訪ねたのは、フェイトだった。セイバーの恰好や室内から聞こえる怒号や物音を聞いて、気まずそうに笑う。

「……いいえ、問題ありません。それより、私に用と言うのは？」

「う、うん。ちょっと、付き合っただけなんだ」

「分かりました。着替えますので、少し待っていて下さい」

セイバーが答えた直後、隼樹の悲鳴が上がった。

*

着替えを済ませたセイバーが、フェイトに連れられた所は空間シミュレーターだった。フォワード五人は、まだ午前の過酷な模擬戦での疲れが抜け切っていないので、今は誰も使っていない。

セイバーと向かい合い、真剣な顔でフェイトは言った。

「セイバー。また私に、稽古をつけてほしいんだ……！」

フェイトの頼み事に、セイバーは少々驚いた。

「最近、執務官の仕事やエリオ達の訓練に付き合ってたから、時間が無かったけど……。今度の事件は、きっと今私が思ってる以上に危険な気がするんだ……。だから皆を護れるように、今からで

も、少しでも強くなりたいんです……！」
「フェイト……」

自分に向けられる、フェイトの真っ直ぐな眼差しを正面から受け、セイバーは彼女の決意を察した。

同時に、胸の内に懐かしい感覚が蘇り、自然と微笑む。

「分かりました。いいでしょう。大分ご無沙汰ですが、久しぶりに稽古をつけましょう！」

「ありがとう、セイバー！」

礼を言うと、フェイトはバリアジャケットを展開して、バルディッシュを手に握り締め、戦闘態勢に入る。

対するセイバーも、騎士甲冑に身を包み、不可視の剣を構えた。

二人が構えを取った瞬間、脳裏に過去の稽古の様子が流れた。十年経った今でも、二人の師弟関係は変わらず続いている。その事を改めて実感して、緊迫した空気の中だと言うのに、二人は嬉しそうに笑っていた。

静寂の中で、達人同士が仕掛ける一瞬を探る。

そして次の瞬間、騎士と魔導師、師匠と弟子は同時に動き、甲高い音を鳴らして刃を交えた。

*

「まさか、貴女にも稽古を求められるとは、正直思いませんでした」
「だろっね」

深夜の機動六課隊舎の裏庭。

ソコに、セイバーと隼樹　いや、隼子の姿があった。夜空に浮かぶ月明かりを受けて、二人の金髪が煌びやかに光って見える。試したい技があるからと、隼樹に隊舎裏に呼ばれたのだ。そして実際に待っていたのは、隼子だった。長い金髪を手で払い、隼子が言った。

「まあ、稽古つつより、あたしの場合は模擬戦って言った方が正しいかもね」

「そうですね……。ですが、私としては、あまり貴女……ジュンキが闘う事は望ましくないのですが……」

隼樹のサーヴァントであるセイバーは、マスターを勝利に導き、護る剣でもある。純粹にサーヴァントとして、そして隼樹を想う者としての気遣いだった。

すると、隼子は面白くなさそうに、顔を顰めた。

「ふーん……。要するに、男のあたしは使えない足手まといと思ってる訳か……」

「なっ……！？　ソレは心外ですっ！　私は決して、ジュンキの事をその様には……」

「だったら、受けてくれない？」

セイバーの反論を遮り、隼子が急に目を鋭くさせて言った。

思わずセイバーは、目を見開いて息を飲んだ。

珍しく真剣な表情で、隼子は続ける。

「あたしの中の俺もさ、アイツなりに悩んでこうする事を望んだんだよ……！　護ってる方はよくても、護られる方はずっと護られっぱなしってのは、キツイもんなのさ……。アンタも俺のサーヴァントならさ、俺の気持ち少しは汲んで付き合ってくれない……？」

隼子の話を聞いて、セイバーは初めて隼樹の気持ちについて考えさせられた。

今まで、護られる側の気持ちなど、考えた事も無かった。自分が隼樹のサーヴァントで、マスターである隼樹を護っていくのが当たり前だと思っていた。事実そうなのだが、ソレは護る側の一方的な思考である。

セイバーは自分達の関係について改めて考え、意を決して答えた。

「分かりました。サーヴァントとして、マスターの意を受け、私の剣で応えましょう！」

「そうこなくっちゃ……！」

一転して不敵に笑い、隼子の雰囲気が変わる。

セイバーも鎧姿になり、不可視の剣を構えた。

「まあ、流石にアンタが全力出す程じゃないだろうけど、少しは本気でかかってきなよ……？ じゃないと、軽い火傷だけじゃ済まないかもしれないからさ……！」

最強の騎士を相手に、隼子は『イメージ』を発動させた。

「『パワーイメージ』……！」

対策（後書き）

次回から、公開意見陳述会の予定では。

襲撃（前書き）

地上本部襲撃及び機動六課襲撃編・開始！

襲撃

「しまったぁ……！ 明日の皆の警備配置とか、その他諸々の事考えるのすっかり忘れてた〜！」

「馬鹿か貴様……？ その頭の中に入ってるのは、一体何だ？ かばちゃか？ 軽めの岩か？」

愕然とした顔でド忘れに気付く隼樹に、オルタが毒舌を吐いた。

防衛プログラムの復活やナンバーズ強化等のイレギュラーな展開が起こり、自分の強化等に考えを回してナンバーズ救済計画の手順を忘れていたのだ。

具体的には、明日の警備配置、ドゥーエの任務変更、最高評議会の悪事の証拠掴みの主に三つである。特にドゥーエは命に関わるので、ミスは絶対に許されない。それだけでなく、現在進行形で黒幕の最高評議会と直接的に接している人物は、管理局に潜入中のドゥーエしか居ないのだ。つまり、彼女の存在自体が、希望でもある。危うく、間抜けと言う最悪な理由^{ミス}で、全てを水の泡にするところだった。

本当に隼樹は、イレギュラーに弱い男である。自分自身が、イレギュラーのクセに。だが、手遅れになる前に、自分の過ちに気付けただけでも良しとしよう。

「いや、まだ大丈夫……！ 今から配置を考える……！」

落ち着いて隼樹は、どう戦力を振り分けて警備させるか考える。

相手の出方を自分なりに予想して、原作展開も思考に入れる。

ややあって、隼樹は皆の配置を決めた。

「まず、セイバーとオルタの二人は六課隊舎に残ってほしい」

「二人共ですか？ 私かオルタのどちらか一人を、地上本部に置いた方がよろしいのでは？」

「まあ、ソレも一つの手だけど、機動六課にはヴィヴィオが居るか
らさ」

ヴィヴィオは、ただの人造魔導師では無い。古代ベルカ時代の最大最悪の巨大戦艦型ロストロギア『聖王のゆりかご』を起動させる重要な鍵なのだ。そう考えると、ゆりかごを起動させたい向こうからすれば、この機に入手しておきたいところだろう。しかし、こちらとしては、ゆりかご決戦に突入する前に事件に決着をつけたい。

ならば、六課隊舎の護りを固めて死守する。

「ガジェットの大群やナンバーズ襲撃もあるけど、何より防衛プロ
グラムこと黒龍が気がかりでさ。もし、アイツが戦場に出るとした
ら、ヴィヴィオが居るココだと思うんだ。その時に、俺等の中で実
力が上位二人で、迎え撃ってほしい。戦闘において一番厄介なのは、
ナンバーズ以上に黒龍だからね」

「そうですか。そういう考えならば、マスターの指示に従います」
「フンツ……。私一人で充分なものだが……。まあ、いいだろう」

セイバーとオルタは、隼樹の指示に頷いてくれた。

隼樹は続ける。

「それで、アリスは俺と一緒に地上本部に行って、ギンガの傍に居
てほしいんだけど……」

「断りますわ」

いつもの無表情な顔で、アリスはキツパリと拒否した。

「私が従うのは、じゅんねーさまであって貴方ではないわ」

「ぬっ……！」

即答に近い早さで断られるとは思わなかったので、隼樹は渋面で唸る。

アリスが慕っているのは、あくまで隼樹が『イメージ』で変身した隼子の方だ。アリスの忠誠心と一途さに悩んだ隼樹だったが、アツサリと解決法を見つけた。『イメージ』を発動させて、隼子に変身して言った。

「アリス！ アンタはあたしと地上本部に同行して、ギンガの護衛をしな！」

「はい！ じゅんねーさま！」

さつきと打って変わり、アリスは跪いて従順な態度を見せた。

ジュンキ……アリスの扱い方を心得ましたね……！

アリスを従わせる隼子を見て、セイバーは内心に呟いた。

その後も、配置の発表は続いた。ヴィヴィオに懐かれているプレシアとアルフは、六課隊舎に残って少女の護衛に付かせる。ザフィラとシャマルの守護騎士に加え、プレシアと言う大魔導師に使い魔のアルフ、更にセイバーとオルタの最強騎士コンビが護衛に付けば、ナンバースやガジェット程度なら問題無く護り切れるだろう。

だが、油断は禁物だ。ナンバースは原作以上に強化されており、黒龍が襲撃に参加する可能性もあるのだから。

ちなみに、ギンガ誘拐を防ぐ為に護衛に付かせたアリスには、もう一つ役目を与えるつもりだった。ソレは、チンクに頼んで、『最高評議会及びレジアス中将の暗殺中止』をウーノを通じてドゥーエに指示する事だ。しかし、スカリエツィの目を盗んで勝手な指示を出すのは危険であり、何よりドゥーエがそんな指示に従ってくれるか甚だ疑問である。

なので、ドゥーエの件は無しにして、別の指令をアリスに与えた。

ソレは、スカリエッティ一味のアジトの正確な位置を、チンクから聞き出すこと。前にウーノ達と会った時に、ウツカリ聞きそびれてしまったので、今回の件を機会に確認する事にした。事前に正確な位置を把握しておけば、地上本部襲撃後すぐにスカリエッティやウーノの身柄を確保する事が出来る。勿論、はやて達には理由を話して、保護する形で確保してもらう予定だ。

そんな感じで、ギリギリだったが何とか配置は決まった。

すると、丁度いいタイミングではやてに呼ばれ、六課隊員の警備配置確認に立ち合う事になった。なのはとヴィータ、リインフォースとフォワード四人がこれから地上本部に出発して夜勤からの警備を開始する。はやてとシグナム、フェイトの三人は翌日の早朝に入る事になっている。隼樹とアリスも、翌日の朝に地上本部に向かう事にした。

確認が済み、仮眠を取ったなのは達がへりで先に地上本部に出発した。

飛び去っていくへりを見送り、一同は踵を返す。

「では、我々も今の内に体を休めておきましょう」

「せやね。私も少し残つとる仕事片付けて、早めに休憩しとこ」

シグナムと並んで歩き、はやては隊舎の中に戻る。

セイバーも皆と一緒に戻ろうとしたところで、ふと歩みを止めて振り返った。ソコには、難しい顔をしてる隼樹が立っていた。

「ジュンキ。どうかしましたか？」

怪訝そうに尋ねるセイバーに、隼樹は、いや〜と頭を掻きながら答えた。

「今からもう緊張しちゃってさ……ちゃんと眠れるかな〜って……」

イベント事は、大抵前日の夜に緊張したり興奮が高まるものである。

*

翌朝。後発隊のはやて達も出発して、残るは隼樹とアリスの二人だけとなった。

しかし、この日の隼樹は深刻な寝不足に苦しんでいた。目の下に濃い隈くまを作り、いつも以上にテンションが低い。

「ヤべ〜、一睡も出来なかった……！」

「大丈夫ですか、ジユンキ？ どれだけ緊張してたんですか？」

「何言ってるのよ、セイバーさん。僕のような小心者にとって、緊張とは切っても切れない縁なんだよ？ ず〜っとベッドの上で緊張と格闘してたけど、勝てませんでした……！」

隼樹は頂垂れ、セイバーは呆れたように溜め息をついた。

「それならば、『イメージ』で緊張を解せばよかったのでは？」

「ハッ！ そうか！ その手があったかあ……！」

セイバーの指摘により、初めて緊張を解く方法を見つけた隼樹。たまに、単純な使い方かたに気付かない時があるのだ。

頭を抱える隼樹を見て、見送りに来たプレシアは不安を抱く。

「こんなので、ホントに大丈夫かしら……？」

「まあ、向こうにはフェイト達も居るし、何とかなるんじゃないか

い？」

隣に立つアルフが、楽観的に言った。
そんなやり取りをしていると、アリスが促してきた。

「じゅんにーさま、そろそろ……」

「ん？ ああ、そうだね」

声をかけられ、隼樹は出発の準備をする。睡眠不足だが、セイバーのお陰で解決法が見つかった。原作通りなら、襲撃まで時間があるので、それまで『イメージ』で落ち着いて仮眠を取るとしよう。ポケットの中に手をつ込み、持ち物を確認する。

「プレシアさん。頼んだ物、ありがとうございます」

「どういたしまして。けど、使い過ぎないようになさい。いいわね？」

「はい。解ってます」

返事をした後、眠い目を擦りながら隼樹はセイバー達に顔を向けた。

「じゃあ、行ってくるよ。二人共、頼んだよ」

「承知しました。マスターもお気を付けて……！」

「我等の心配など無用だ」

セイバーは優しく、オルタは自信に満ちた声で答えた。
二人の声を受けて、隼樹が踵を返そうとした時だった。

「隼樹お兄ちゃん！」

幼い少女の声を聞いて、動きを止めた。振り向いた先には、プレミアの前に立っているヴィヴィオの姿があった。

「……うん。いってらっしゃい！」

「……うん。いってきます」

少女の眩しい笑顔に、隼樹は少し間を空けてから、手を振って答えた。

少し前まで、こんな小さな子供をワザと攫わせようと考えていた事を思い出して、チクツと針に刺されたような痛みを胸に感じた。

そして、隼樹とアリスは地上本部に向かった。

*

「じゃあ、あたしは寝るから。警備、シツカリ頼んだよ」

「いや、隼樹……じゃなくて、隼子さんもちやんと警備して下さい！」

地上本部に着いて早々に、隼樹は隼子に変身してふてぶてしく仮眠を取るうとした。案の定、真面目なティアナに注意されたが。

場所は、地上本部の建物外。大勢の局員と共に外の警備を担当するのは、ヴィータにリインフォース、フォワードの四人、それと最後に到着した隼子だ。ちなみに、アリスは既にギンガの元に向かっている。

ティアナから注意を受けたが、その程度では、隼子は仮眠を止めようとはしない。

「大丈夫だって。とりあえずは、何も起きなさそうな感じじゃん？」

それに、襲撃が起こったらちゃんと起きるよ」

「で・す・か・ら・そういう問題じゃ無くて、他の局員が皆警備してる中で仮眠をする事が問題なんです！」

「大丈夫、大丈夫。あたし、そういうの全然気にしないから」

「貴女が良くても、私達は良くないんですってばアアアア！」

「テイ、ティア！ 落ち着いて！」

緊張感の欠片も無く、警備現場で堂々と仮眠しようとする隼子にティアナはとうとう我慢出来ずに声を荒げた。そんな親友を、スバルが必死に抑えて宥めようとする。

三人の様子を眺めているヴィータは、軽く頭痛を憶えて頭を押さえた。

「あの隼子って女^{ヤツ}、ホンツト隼樹と正反対な性格してるよな……」

「まあまあ、ヴィータ。彼女が寝不足なのは事実だし、他にも大勢の局員が警備してるのだから、少しくらい休ませてあげればいいだろう」

「だったら、せめて人目の少ない所に移動しろってんだよ」

自由奔放な隼子に、ヴィータは若干の苛立ちを憶える。

妙に緊張感の削がれた現場に、エリオとキヤロは苦笑いで立ち尽くすだけだった。

そして、ヴィータやティアナの心配とは裏腹に、周囲で警備してる局員達は呆れたり嫌悪するでもなく、隼子のダイナマイトボディに釘付けになっていた。赤くした顔で、無防備に晒してる爆乳を凝視して、股間のデバイスを起動させている者もちらほらと見える。

そんな男性局員共のスケベ心を察したヴィータが、鋭い目つきで睨みつけた。

「テメー等、真面目に警備しやがれっ！」

「は、はいっ！」
「失礼しましたっ！」

チビツ子騎士に凄まれ、男性局員は職務を思い出して、慌てて警備に戻る。

大人な身体の隼子に対して、ヴィータは劣等感を抱いた。

落ち着け……！ 落ち着け、あたしっ！ 今は女の姿だが、
アイツはホントは男なんだ……！ 男なんだ……！

心中で自分に言い聞かせ、ヴィータは冷静になるよう努めた。

必死なヴィータに、思わずリインフォースは失笑した。

そして、厳重な警備が行われる中、公開意見陳述会が始まった。

*

公開意見陳述会開始から約四時間が過ぎ、時刻は夕方空はオレンジ色に染まっていた。

そろそろ中の陳述会も終わろうと言う時まで、隼子は寝ていた。

ホントに一睡もしていなかったので、起きる気配が無い。だらしなく口の端から涎まで垂らして、気持ち良さそうな寝顔をしている。

そんな彼女の寝顔を盗み見ながら、男性局員は警備の中で癒しを得ていた。

弛緩した空気の中で、フォワード四人は緊張感を維持している。

「中の方も、そろそろ終わりね」

「最後まで気を抜かずに、シツカリやろう！」

「はい！」

スバルの言葉に、エリオとキャラコが元気良く答えた。

外から見れば、何も起きていないように見える。

だが、実はスカリエッティ一味による襲撃は内部から始まっていた。アジトで観ているスカリエッティの合図により、ナンバーズは行動を開始。

「ミッション・スタート！」

まずは地上本部付近の空に佇んでいるクアットロがISを発動させ、本部の通信管制システムをハッキングして機能を奪う。

その直後、管制室の硬い天井に波紋を生じさせ、すり抜けるように一本の腕が突き出た。？6のセインのIS『ディープダイバー』で、無機物の中を自由に移動して、難なく管制室まで辿り着いたのだ。特殊ガスを装填したハンドグレネードを投下する。室内で爆発を起こし、ガスを充満させて局員を無力化させた。

続いて、防壁の動力源がある部屋にチンクが現れ、ISを使って破壊して出力を落とした。

そして、本部から離れた上空で待機していたルーテシアの遠隔召喚を使い、ガジェットを本部に送り込む。建物を大量のガジェットで囲み、強力なAMFを発生させて本部の機能を完全に停止させ、中に居る人間を閉じ込めた。陳述会が行われている会場には、警備に着いてるはやたとシグナムの他に、参加しているカリムの姿もあった。本部の中にはデバイスの持ち込みが禁止されているので、はやて達は部屋から出る事は叶わない。

一方、外では地上本部に向かってくる局の航空魔導師隊を、二人のナンバーズが待ち構えていた。一人はトーレで、もう一人は新しいナンバーズだ。ピンク色の長髪で、額にヘッドギアを付けている。無表情ながらも綺麗な顔立ちで、トーレ並の長身を誇り、両手には刃の付いた巨大なブーメラン型の固有武装『ブーメランブレード』を握っている。

腕組みの姿勢で、トーレが声をかけた。

「セツテ。お前は初戦闘だが……」

「心配ご無用。伊達に遅く生まれていません」

姉に言葉を返すと、両手のブーメランブレードを構えた。

「IS発動……『スローターアームズ』！」

「『ライドインパルス』！」

アクションっ！

二人はISを発動させ、航空魔導師隊に突っ込んだ。直後、撃墜音と共に悲鳴が上がった。

他の警備局員が倒れる中、ヴィータ達とフォワード四人は何とか無事で居た。デバイスを起動させ、バリアジャケットを装着する。

「副隊長！ あたし達は中に入って、なのはさん達を助けに行きます！」

右手を握り締めて、スバルが言った。固めた右手には、預かったなのはのデバイスが握られている。

エリオの手にも、フェイトから預かったバルディッシュがあつた。スバルの言葉を聞き、ヴィータはポケットからレヴァンティンとシユベルトクロイツを取り出した。

「コイツらの事も、頼んだ！」

「はいっ！」

差し出された二つのデバイスを、ティアナが受け取った。

ヴィータとリインフォースはユニゾンを行い、ロンググーチから報告があつた本部に接近中の航空戦力の対処に向かう。

隊長陣のデバイスを抱え、フォワード四人は本部の中に入ろうとした。

その時、ハツとキャロがある事に気付く。

「あの、そう言えば隼子さんは……？」

「あ……！」

一同は立ち止まり、同時に顔を振り向いた。

しかし、先ほどまで寝ていた場所に、隼子の姿は無かつた。

*

トーレとセツテが航空魔導師隊と交戦していた場に、本部敷地内から姿を消した隼子が居た。次々と撃墜されて数を減らした航空魔導師隊と二人の戦闘機人の間に入って、腰に手を当てて佇んでいる。目の前の相手を見据えたまま、振り返りもせずに隼子は航空魔導師隊に言った。

「あ、アンタ達？ ぶつちやけ邪魔だから、消えてくれない？」

「え……？」

「いや、しかし……」

突然の乱入に動揺する航空魔導師隊が、職務もあつて戦場に残ろうとした。

しかし、ソレをこの女は許さない。

「あのさあ……!!」
「ひいつ……!?!」

隼子が振り向き、目を合わせた瞬間、航空魔導師隊は震え上がった。

目を鋭くさせて射抜くような視線をぶつけ、女独特の恐い迫力も当てて隼子は続ける。

「あたしが消えろって、言ってるの……!! いい? 雑魚が何匹集まっても所詮雑魚は雑魚っ……!! アンタ等が居ても、邪魔で目障りなだけなんだよ……!! あたしが上! アンタ等が下! 解ったら、とつとと消えなっ……!!」
「は、はいいいい……!!」

隼子の凄みに完全にビビった航空魔導師隊は、逃げるように去っていった。

その情けない様を眺め、隼子は呆れて溜め息をついてトーレとセツテに向き直った。律儀にも、二人は奇襲をしないで待っていてくれた。

「まったく、俺もそうだけど男ってホント情けない奴等よね。アンタらもそう思わない?」

同意を求めて問うたが、トーレとセツテは口を閉ざしたまま答えない。

二人の反応に隼子は顔を逸らして、「無視かよっ!」と小声で悪態をつく。

すると、トーレが口を開いた。

「貴様は確か、女に姿を変えた葉谷資隼樹だったな。一人で我々の

相手をするつもりか？」

「もし貴女と遭遇した場合は、捕獲するようにと黒龍様から言われています。抵抗するならば、手足を折つても連れて行きます」

無表情のセツテもデバイスを構え、戦闘態勢に入る。

二人の戦意を感じて、隼子は不敵に笑った。

「いいねえ……！ あたしも、ずっと闘^やりたくてウズウズしてたんだ……！ さあ、始めようじゃんか……！」

発動

リインフォースとユニゾンをしたヴィータが、別の航空戦力のゼストとアギトの相手をしている一方で、他でも戦闘が始まるうとしていた。

管理局地上本部から離れた上空で、隼子はトーレとセツテの二人と対峙していた。

トーレは腕を組み、ブーメランプレードを構えるセツテの後ろで控えている。どうやら、彼女に闘う意思は無く、セツテに相手を任せるようだ。

隼子としては、正直有難い事だった。戦意を抑えられずに出てきてしまったが、今の状態で二人相手はキツイ。しかも、目の前に居るナンバーズは実力上位である上に防衛プログラムの力を得て、原作以上に実力が未知数になっている。

夕焼け空は更けていき、星が輝く夜空に変わった。静寂の夜空で、隼子とセツテは相手を見据えたまま動かない。素手の隼子と武器を持つセツテ、両者とも攻撃を仕掛けるタイミングをうかがっているのだ。

しかし根競べとなると、喧嘩っ早い性格の隼子には性に合わない。

「ああ、もう！ 来ないならこっちから行くよ！」

痺れを切らした隼子が、宙を翔けてセツテに立ち向かう。それに考えてみれば、飛び道具使い相手に距離を離すのは得策ではない。ココは突っ込むべきだ。

対するセツテは、両手に持つ二本のブーメランプレードを放つ。回転して空を切り裂きながら、迫りくる隼子に迫る。

そっぴや、アレを自在に操るのがセツテの能力だった……！
眼前に迫るブーメランプレードを睨んで、隼子は能力を確認した。

セツテのIS『スローターアームズ』は、固有武装であるブーメランブレードの軌道を自由に操れるのだ。先に交戦していた航空魔導師隊も、ブーメランブレードの不規則な軌道を読めずに混乱して倒されていた。

だが、隼子は構わず突っ込む。距離を詰めれば、武器の軌道など気にする必要は無い。一本は正面から、二本目は弧を描いて隼子の頭上を超えて背後から襲い掛かる。咄嗟に隼子は、全方位障壁を張ってブーメランブレードを弾きつつ間合いに入った。

もらいつ！

セツテの腹部目掛けて、隼子は拳を突き出す。

だが、彼女の拳はセツテには届かなかった。素早く手を回され、当たる寸前で掌で受け止められた。涼しい顔で拳を掴み、そのまま後ろに向かつて放り投げる。

隼子はしかめっ面で舌打ちして、空中で止まった。セツテに向き直ろうと振り返れば、迫りくる二本のブーメランブレードが目に入る。右手を前に突き出して、撃ち落とそうと魔力弾を放つ。だが、ISで軌道を変えられて魔力弾は外れた。軌道が読めない以上、下手に動けない隼子は、全方位障壁を張って亀状態になる。

その時、セツテが新たな“能力”を発動させた。

「『デモンズシャドー悪魔の影遊び』……！！」

能力発動と同時に、異変が起こった。

空中を飛び交うブーメランブレードの数が、六つに増えたのだ。軌道は相変わらず変幻自在で、数が増えた分、更に対応し辛くなっている。

「マジ……？ でも、数が増えたって、障壁の中に籠ってりゃあ…

…」

台詞を言い終える前に、ガラスが砕けるような甲高い音が鳴った。ブーメランプレードが、障壁を軽々と砕いたのだ。増殖だけでなく、武器の威力も増幅しているようだ。単純な能力向上だが、対人攻撃として効果は絶大である。

「コレ、ヤバっ……！」

割れた障壁から抜け出した隼子に、ブーメランプレードの群れが襲い掛かる。魔力弾を撃ち、拳を突いたりと応戦するが、ISで軌道を自由に変えられては避けられてしまう。ソレに不規則な動きのせいで、先読みが出来ず、どうしても後手に回らざるを得ない。

しかも、セツテは掌から砲撃を放ち、ブーメランプレードに紛れて奇襲を仕掛けてくる。周囲のブーメランプレードに意識を集中していた隼子は、背中に砲撃をモロに受けてしまう。

「あぐうっ……！」

背中に痛みを受け、隼子は端正な顔を歪めて呻いた。

直後、今度はブーメランプレードの鋭い刃が身体を斬った。六本のブーメランプレードは、隼子を中心に不規則に飛び交って円の形を描いていた。ブーメランプレードの円の中心に居る隼子は、襲い掛かる刃を受け続ける。

「ごんのオオオオオオ！」

感情を爆発させ、隼子は『イメージ』で衝撃波を周囲に放った。一瞬だがブーメランプレードの動きを止め、円の外に飛び退く。体中傷だらけで血を流し、隼子は息を荒げる。左腕の傷を押さえ、得物を自分の周囲に引き戻したセツテを睨みつけた。

無表情の顔で、セツテが言う。

「大人しく投降する気になりましたか？」

「冗談……！ あたしが上！ アンタが下！ それを解らせてやるよ……！」

強気に返す隼子だが、正直ヤバい状況だった。

「そうですね。なら、戦闘不能にして連れて行くだけです。ですが、暴力には弾みと言うものがあります。間違って死なせてしまった場合は、ご容赦を……」

「する訳ないだろ、バーカっ……！」

さて、あたしの身体が持ってくれるかね。

*

地上本部地下。

あらかじめ 予め決めておいた合流地点に、フォワード四人と隊長二人が落ち合った。スバル達は預かっていたデバイスを、なのはとフェイトに手渡す。はやてとシグナムの分は、後からやってきたシスターシャツハに任せた。

その時、スバルが動揺した声でギンガの名を呼んだ。何度呼びかけても、通信が繋がらないらしい。

外の状況を確認する為に、フェイトはロングアーチと通信を繋げる。

「ロングアーチ、こちらライトニング1……！」

『ライトニング1、こちらロングアーチ！ こちらは現在、戦闘機

人とガジェット、更に未確認体アンソウンの襲撃を受けています！ ですが、セイバーとセイバーオルタ、ザフィーラとアルフ、シャマル医務官が外で食い止めています！ 今のところ、防衛ラインを突破される心配はありません！』

部隊長補佐のグリフィスから六課隊舎が襲撃を受けている事に一瞬動揺が走ったが、すぐに状況を聞いて一安心した。あの二人の騎士が護りに加わってくれていれば、まさに鉄壁だ。

しかし、安心する一同にグリフィスが別の報告をする。

『隊舎は今のところ無事ですが、地上本部付近の上空で敵と交戦中の隼樹さんが、追い込まれて危険な状態です……！』

「隼樹がっ……！？」

大切な人の危機を聞いて、フェイトの顔色が変わった。なのはとフェイトは目を合わせ、頷き合う。

「分散しよう！ スバル達はギンガとアリスの安否確認に向かって、私は襲撃戦力の排除……！」

「私は、外で闘ってる隼樹の助けに行く……！」

「はいっ！」

速やかに確認を済ませ、バリアジャケットを身に纏って一同は行動を開始した。

*

機動六課隊舎。

ガジェットの大群が、機動六課を取り囲んでいた。陸と空から、光線による同時攻撃を仕掛ける。

「クラールヴィント！ 防いで！」

すかさずシャマルが、何枚もの大型障壁を六課隊舎前に展開させ、光線の一斉攻撃を防ぐ。だが、これまでのガジェットより攻撃力が上がっており、光線と障壁は共に崩れて相殺された。

地上では、ザフィーラとアルフが未確認体と交戦していた。全体的な形は人間に近いが、全身が黒一色で顔は爬虫類のような形で、腰の辺りには尻尾があり、トカゲ怪人のように見える。

「でええええいつ！」

アルフが魔力を溜めた拳を振るい、怪人の顔面を殴り抜く。だが、怪人は倒れずに踏ん張り、牙を剥いて襲い掛かってくる。

直後、

「おおおおおおつ！」

ザフィーラが雄叫びを上げ、床から白い棘のような物を突き出して怪人を足下から串刺しにする。口から血塗られた白い棘を突き出して、怪人は途切れ途切れに声を漏らす。力尽きた怪人は、白い棘だけ残して消滅した。

アルフは周囲を警戒しつつ、ザフィーラに振り返った。

「すまないね！ 助かったよ！」

「うむ……！ だが、気を付ける！ コイツ等、一体一体が強く、小技では倒せんぞ！」

「ああ！ チェーンバインド！」

アルフは足下に魔法陣を展開させ、オレンジ色の鎖を複数出して、怪人の身体に巻き付けて拘束する。身動きを封じた怪人達の前で、アルフは右腕を振りかぶる。すると、人の手だった右手のみが巨大な狼の前足に変化した。

「『ウルフ・クロウ』！」

鋭い爪を有する狼の右手を振り抜き、怪人達を横に切り裂く。バラバラに身体を切り裂かれ、怪人は消滅した。

「あたしだってこの十年間、何もしてなかった訳じゃないんだよ！」

元が狼のアルフが、身体の一部だけ獣の姿に変える『部分変化』を覚えたのだ。魔力を通して、切り裂く鋭さも増している。彼女が独自に編み出した強化魔法だ。

アルフ達が奮闘してる前で、セイバーとオルタも戦闘を繰り広げていた。

「はあああああああ！」

気合いと共に不可視の剣を振り抜き、一振りで複数のガジェットと怪人を斬り捨てる。斬撃の際に生じる剣圧は周囲の敵の動きを鈍らせ、反撃の隙を与えずに容赦無く斬り付けていく。

雑魚を斬り捨てていく最中で、セイバーはより強い攻撃の気配を察して動いた。空中に飛び跳ね、不可視の剣を振るうと同時に隊舎を狙った緑色の光線を弾く。軌道を変えられた光線は、近場の海に着弾して飛沫を上げた。

セイバーは地面に着地して、光線を撃った張本人を見上げる。ガジェットの軍団を後ろに控え、空中に佇むのはナンバーズだっ

た。短めの茶髪で、ボディースーツの上にジャケットを羽織った、珍しくボーイッシュな出で立ちをしている。一見男のようだが、例に漏れず女性であり、？8のオットーと言う。ISは、エネルギーを操る『レイストーム』だ。

セイバーがオットーと対峙している一方で、オルタは別の戦闘機人と交戦していた。赤い刃の双剣を操るナンバーズだ。オルタは黒剣を振るい、重い一撃を繰り出す。戦闘機人は咄嗟に双剣を盾にして防御するが、衝撃に押されて後方に吹き飛ばされてしまう。

「くっ……！」

なんとか空中で止まり、僅かに顔を顰めて地上に堂々と立つオルタを見下ろす。

彼女の名前は、？12のデイド。茶色のロングヘアーで、頭には青いカチューシャを付けている。オットーと同じく最後発メンバーの一人であり、同じ素材から生まれた関係で双子のような間柄になる。彼女のISと固有武装は、赤いエネルギー刃を操る『ツインブレイズ』だ。

オルタと剣を交えたデイドは、彼女の底知れない強さを体感する。

「やはり、ISだけでは勝てませんね」

「違うな。機械兵如きがどんな力を使おうと、王である私に勝つ事など出来はしない……！」

相手を見下しながらも、重みのある言葉を口にして、オルタは剣を構える。

「マスターからの命令で、殺しはしない……。さあ、防衛プログラムの力でも何でも使ってこい……。その力の全てを、私の黒剣で斬

り捨ててやるっ……！」

*

地上本部付近の上空。

セツテと交戦中の隼子は、防戦一方の苦戦を強いられていた。読めない軌道に高い威力を誇る攻撃に、手も足も出せずに、一方的に傷付けられている。バリアジャケットのような防護服の役目をしている薄着は、破れて右側の乳房が露にされ、ミニスカートも更に丈を削がれて白い下着を晒す辱しめを受ける。

恥ずかしい恰好をさせた隼子に、セツテは感情の無い顔で言った。

「頑丈ですね。ですが、ココまでです……！」

「ハッ……！勝手に、決めてんじゃないわよ……！」

虚勢を張る隼子は、飛び交うブーメランブレードに囲まれて絶体絶命のピンチに陥っていた。

反撃の準備は整ったが、状況が悪過ぎる。一対一なら問題無いのだが、セツテの他にトーレが控えてるとキツイところだ。

苦境に苦笑すると、セツテが右手を前にかざした。

「では、そろそろ楽にしてあげましょう……！」

能力により、六本のブーメランブレードを一齐に隼子に襲わせる。月明かりに刃を光らせるブーメランブレードが、隼子に届く直前金色の閃光が、隼子を抱えてブーメランブレードの攻撃の隙を縫って翔け抜けた。

「むっ!？」

異変を目にしたセツテとトーレは、金色の閃光が翔けた先を見る。視線の先に捉えたのは、隼子を抱きかかえたフェイトだった。

「フェイトお嬢様……!」

フェイトの姿を確認して、トーレは組んでいた腕を解いた。

二人と対峙するフェイトは、隙を見せないように抱えてる隼子に声をかけた。

「隼樹……じゃなかった、隼子、大丈夫？」

「助かったけど……。アンタねえ、来るの遅すぎ……!」

「ご、ごめんね。本部の機能が完全に停止させられて、デバイスを受け取って出てくるのに時間かかっちゃって……」

申し訳なさそうに答えるフェイトに、隼子は笑みを浮かべてかぶりを振る。

「あー、いいよ。そうだった、そうだった……。アンタ等も大変だったんだよね」

本部の状況を思い出して、隼子は納得して文句を言うのをやめた。腕の支えから離れて、改めて礼を言う。

「それに、助けられといて文句言うのは筋違いだしね。ありがとね

……!」

「うっん」

笑顔で受けたフェイトは、すぐに気持ちを切り替えて二人の戦闘

機人に向き直る。

すると、隼子が言った。

「フェイト。あたしはピンク色の髪の方をやるから、アンタはもう一人の方を頼むよ」

「えっ……！？ でも、隼子、そんな傷だらけで大丈夫なの……？」

フェイトが心配するのも、無理は無い。

さつきまで一方的に攻撃を受け続け、ほぼ全身に傷を負った状態で闘いを挑むのは、無茶以上の無謀である。

しかし、何か勝算でもあるのか、隼子は余裕さえ感じられる笑みを浮かべた。

「もう大丈夫……！ 絶対勝つから心配いらないよ……！ それよりも、フェイトはアイツを頼んだよ……！ 限定解除してんだから、負けるんじゃないよ……？」

「隼子……」

少し迷いが生じたフェイトだったが、吹っ切れたように真顔で頷いた。

「うん……！ 隼子も、負けないで……！」

「はいよ……！」

隼子の力強い答えを聞いて、フェイトはバルディッシュを構えてトーレと視線を交わす。

次の瞬間、二人の姿がその場から消えた。超高速で、離れた空域に移動したのだ。

残された隼子とセツテは、静かに対峙する。

ブーメランプレードを周囲に引き戻して、セツテが言う。

「まだ闘うのですか？」

「当たり前でしょう！ これからが本番なんだから……！」

言いながら隼子は、ミニスカートのポケットに手を突っ込み、何かを握って取り出した。

距離は離れているが、常人を超える視力を持つ戦闘機人の目は、隼子の手が掴んでいる物を鮮明に視認出来る。ソレは、黄色い薬莢のような物だった。セツテの中で、一つだけ心当たりがある。

「カートリッジ……？」

「そうさ……」

答えた隼子は、手に力を込めてカートリッジを握り潰し、砕いた。ドクンッ。

驚くセツテの前で、隼子の身体に異変が起こる。砕いたカートリッジの中に込められていた魔力が、一滴残らず隼子の身体に直接流れ込んだ。取り込んだ魔力が、オーラのように全身から迸る。

目の前の異変に警戒を強めるセツテに、隼子が言った。

「フェイトが来る前に、あたしを倒さなかった事を後悔するんだね……！ アンタの動き、技、能力、全部観させてもらったよ……！ アンタはもう、あたしには勝てないっ……！」

不敵な笑みを浮かべ、隼子は『イメージ』を発動させる。

「『パワーイメージ』 純力想像』っ……！」

発動（後書き）

次回、『純力』じゅんりき

純力（前書き）

後書きには、能力紹介を書きました。よかったら、覗いてみてください。さい。

*

ついに始まった壮絶バトル！

ナンバーズの脅威が迫る！

純力

魔力変換資質。魔法陣を展開して発動させる魔法とは別に、魔力を別のエネルギーに変換出来る能力の事を示す。現在のところ確認されているのは、シグナムの『炎熱』とフェイトやエリオの『電気』の二つの属性である。

そして今宵、新たな魔力変換資質が発現された。

『イメージ』を発動させた隼子を警戒して、セツテは全神経を研ぎ澄ませる。一見した限りでは、隼子に目立った変化は確認出来ない。身体から魔力が迸っているが、ソレはカートリッジを直接体内に取り込んだ結果で、『イメージ』の効果とは別である。

油断なく見据えていると、隼子も右拳を引いて構えた。二人の間に、沈黙が生まれる。

そして刹那、隼子はセツテの懐に入り込んだ。

「なっ!?!」

「ボムナツクル”っ!”」

一瞬の動きに驚愕するセツテの腹部に、隼子の重い拳がめり込んだ。

腹部を強打されたセツテは、口から唾を飛ばして後方に吹き飛ばされる。痛みを堪え、空中で踏み止まった。受けた打撃は、その名の通り体内で爆発を起こしたかのような、とんでもない威力を誇っていた。ランクにして、最低でもオーバーSと言ったところか。激痛を感じる腹を押さえ、動揺と苦痛に歪めた顔で隼子を睨んだ。

な、なんて重い一撃っ……! それに、速いつ……!?!?

さっきの動きは、『イメージ』を発動させる前とは別物だった。だが、追いつけない速度では無い。先ほどは虚を衝かれたが、速度が上がった事を認識すれば動揺して隙を作る事も無くなる。

相手が追撃に移る前に、セツテは反撃に動く。

「『デモンズサークル悪魔の檻』っ！」

ブーメランプレードを操り、円の形を作って隼子を取り囲む。鋭い刃を有する六本の武器が、隼子を中心に不規則に飛び交う。いつ、何処から、どんな軌道で攻撃を仕掛けてくるか、予測出来ない魔の領域だ。フェイトが駆け付けるまで、隼子が苦戦していた技だ。

円の外で、セツテがスローターアームズで軌道を操る。まずは死角となる背後から、一本のブーメランプレードを飛ばす。当たる直前、隼子は後ろを振り向きもせず、ブーメランプレードをかわ躲した。

「何っ!？」

完全に死角から狙った一撃を難なく回避され、セツテは動揺を禁じ得なかった。

すぐにセツテは、追撃を放つ。正面から一本、左右挟む形で二本のブーメランプレードを飛ばす。上下左右に軌道を不規則に動かし、正確な狙いを悟られないように迫る。隼子は拳を前に突き出して、正面から迫りくるブーメランプレードを弾こうとした。だが、当たる寸前で軌道を下にズラされ、拳は空を突き、武器は隼子の足下から斬り上げるように襲い掛かる。しかし、隼子は動じる事なく前に跳んで下から迫るブーメランプレードを避けた。続けざまに、左右からブーメランプレードが斬りかかるが、ソレすらも隼子は躲した。攻撃を全て避けられ、セツテは驚愕する。

速いっ……!! いや、違う……!!

強化された目で隼子の動きを観て、回避の秘密に気付いたセツテの脳裏に彼女の言葉が過った。

アンタの動き、技、能力、全部観させてもらったよ……!!

これは速さでは無く、見切っているっ……！！

信じ難い事実に、セツテの動揺は膨らむ。

セツテの睨んだ通り、隼子はブーメランブレードの不規則な軌道を見切って回避しているのだ。先ほどの戦闘の間、隼子はずっとブーメランブレードの軌道を観察していた。どんなに動きが複雑でも、操り手の動作パターンと言うのがある。隼子は、それを見抜いていたのだ。しかし、いくら動きが読めても、体が対応出来なければ意味が無い。

ソコで発動させたのが、『パワーイメージ純力想像』だ。この技は、魔力を“純粋な力”へと変換させる事で、身体能力を飛躍的に上昇させ、攻撃力も爆発的に強化する。更にカートリッジに込められた魔力を直接体内に取り込む事で、強化効果を底上げしているのだ。ある程度『攻撃を躲す自分の姿』もイメージしてるので、回避行動は完璧とも言える。

この戦法に問題があるとすれば、相手の動きを観察し終えるまで、攻撃に耐えなければいけない事だ。相手が一人なら難なく凌げるが、二人以上となると厳しくなる。だから、フェイトの救援は本当に助かった。

相手が強ければ強い程、自分は更に上をいく。ミッド式でもベル方式でも、ましてや自分達が使ってるISとも違う、この世界の『魔法』に当てはまらない異質な能力だ。

セツテは、目の前の想像者の危険性を察して、目的を変えた。

この女、危険過ぎる……！！
今ココで、確実に排除しなければ……！！

今回の襲撃の目的は無血制圧であり、隼子は遭遇した場合は捕獲するよう黒龍から指示されている。だが、状況が変わった。独自の判断で、始末する事を決めた。殺しても死体を消して、行方不明扱いにすれば問題無い。

冷酷に思考を働かせ、セツテは殺しにかかった。

だが、彼女が行動を起こすよりも先に、隼子が動いた。凶刃が飛び交う危険な壁の隙間を見つけ、強化した速度で円の中から脱出する。高速で飛び、無防備なセツテに急接近して顔面を殴り抜く。しかし、セツテは倒れないで、睨んできた。防衛プログラムの力は、思った以上に本人の肉体をタフにしているようだ。

「くっ……！」

「チッ……！　今で決めるつもりだったのに、アンタ自身も相当強化されてるって訳ね……！」

「デモンズシャド悪魔の影遊びっ！」

セツテは更に能力を発動させ、左右に人影を作った。

「えっ！？」

驚く隼子に、二つの人影は左右から蹴りを入れる。咄嗟に腕を前で交差させて防御したが、衝撃に押されて下に落とされる。空中で踏ん張り、止まって上を見上げる。

セツテの前に佇む人影は、姿が彼女と同じだった。全身真っ黒で瞳は赤いが、間違い無くセツテである。どうやら、デモンズシャドーは、武器だけでなく、能力者本人も増やせるようだ。

能力の全てを出し切ったと思っていた隼子は、思わず苦笑した。

「やっってくれるじゃん……！」

「貴女はココで排除します……！」

「やってみなっ！」

声を上げ、再び隼子はセツテに向かって突っ込む。

六本のブーメランブレードが迫りくるが、軌道が読めた攻撃は恐れるに足らず、弾き、捌き、躲して進む。ブーメランブレードの群

れを抜けた先に待ち構えていたのは、二人の黒いセツテだった。一人は拳を突き、もう一人は距離を離して砲撃を撃ってきた。隼子は左手で拳を受け止め、右手で砲撃を弾く。

だが、本命の攻撃は別にあつた。背後に回り込んだセツテが、ブーメランプレードを背中目掛けて飛ばす。だが、身に迫る危険を感じ取ったのか、隼子は振り返りながら半回転の蹴りでブーメランプレードを弾き返した。

猛スピードで返ってくるブーメランプレードを、セツテは横に動いてギリギリで避ける。直後、ハッと気付いた時には、既に懐に拳を構えた隼子の姿があつた。急いで反撃に転じようとしたセツテだったが、遅かつた。

「ボムナツクルっ！」

渾身の一撃が、セツテの腹に叩き込まれた。

「がはっ……!?!」

二度目の激痛を腹部に受け、セツテは苦痛に顔を歪めた。元々ダメージを受けた所に同じ衝撃を喰らい、体内に深手を負う。頑丈な機械部品も損傷して、とてもじゃないが戦闘出来る状態では無い。強烈な痛みに耐えきれず、少量の失禁を起こして下半身のボディースーツに小さな染みを作る。

「あ……あ……!」

意識が飛び掛け、目は虚ろになり、呼吸を求めるように開いた口から濡れた赤い舌を突き出す。

もう闘える力は残っていないが、セツテは片方の手で腹にめり込んでる隼子の腕を掴んだ。もう片方の手は、隼子の首を絞める。だ

が、あまりに弱々しく、相手に苦しみを与える事は出来なかった。まだ闘う意思を捨てないセツテを、隼子は厳しい顔で見る。

「アンタ……まだ闘う気なの……？」

「黒龍、様の……邪魔者、は、排除、する……！ わ、たし達は……戦闘、機人……！ 闘って、勝たなければ……意味など、無い……！」

朦朧とする意識を繋ぎとめ、尚も向かってくるセツテ。黒龍に支配されているとは言え、心の根つこの部分にあるのは、自身の存在意義だった。闘う為に生み出された自分達は、勝ち残る事でしか存在価値を見いだせない。勝てなければ、意味が無い。

闘って、ぶつかり合い、セツテの 戦闘機人の胸の内に触れて、隼子は僅かに表情を曇らせた。

だが、すぐに普段の顔つきに戻り、首を絞めるか弱い手を外し、セツテの顔に手を添えて上を向けさせ、目を合わせる。

「もういいわよ……。ゆっくり休みな……」

言うや否や、隼子は顔を近付けて唇でセツテの口を塞ぎ、接吻をした。

「んんっ……！？」

突然のキスに動揺するセツテだったが、目を閉じて眠りについた。使用者の意識が途絶え、ISと防衛プログラムの力が解除された。

もたれかかるセツテを、俗に言うお姫様抱っこで抱える隼子。

「“サキユバス・キス”……。良い夢見な……」

相手を眠りに落とす魔性のキスでセツテを寝かせ、隼子は一息ついた。

闘いを終えた隼子は、先ほどセツテが言っていた言葉を思い返す。戦闘機人は、闘って勝たなければ意味が無い。事実、原作で敗れたナンバーズは、その中でも捜査に非協力的な半数の者は拘置所に送られた。妥協して減刑も受けられただろうが、ソコは敗者の矜持と
言うモノらしい。

しかし、そんな未来は、隼子にとってもクソ喰らえだった。

「敗者は勝者に従うモノ……！ 負けたアンタは、あたしに従う義務があるわ……！ だから、絶対に拘置所になんか入れさせないよ……！ って言うか、全員そう！ 管理局やナンバーズ側にどんな事情があるうと、こんなに可愛い女の子達を牢屋に閉じ込めるなんて、あたしが許さないっての！」

隼子も隼子で、ナンバーズ救済の意思を固めた。

その時、身体にドツと重い疲労感が襲った。同時に魔力も霧散していき、『パワーイメージ』も解除されて通常の状態に戻る。セツテを抱えてる腕が、小刻みに震え、汗をかいていた。

「はあ……。やっぱ、カートリッジを使つての『パワーイメージ』はキツイわね……！」

カートリッジを使用しての『パワーイメージ』は、確かに飛躍的に身体能力を向上させる事が出来る。しかし、魔導師と違ってデバイスでは無く、自分自身の体内に大量の魔力を直接注ぎこむ事は、身体に負担をかける危険な行為でもある。カートリッジを用意してくれたプレシアが発前に、使い過ぎないように釘を刺したのは、この為だ。

疲労を感じながらも、隼子はあまり深くは考えなかった。

「まあ、いいか。一個だけなら、別に命に関わる訳でも無いし……」
楽観的な隼子は、顔の向きを変えた。

「さて、フェイトは大丈夫でしょうね……？」

隼子 VS セツテ。

勝者、隼子。

純力（後書き）

能力紹介

『デモンズシャドー悪魔の影遊び』

セツテに与えられた防衛プログラムの力。ちから対象物と同じ物を複製して、増殖させる能力で武器だけでなく使用者も対象に出来る。固有武装のブーメランブレードなら最大で四個、能力者なら最大で二体増やせる。能力者は肉体強化を施され、武器は威力強化が施されているので、増殖能力により更に凶悪になる。

『デモンズサークル悪魔の檻』

上記のデモンズシャドーで増殖させたブーメランブレードで、敵を囲んで円の中に閉じ込める攻撃陣。鋭い刃を有するブーメランブレードが飛び交う脱出困難な壁を作り、攻撃のタイミングが解らない心理的圧迫を与える中でIS『スローターアームズ』による不規則な軌道の攻撃を仕掛ける。

『パワーイメージ純力想像』

隼子がセツテ戦で使用した戦闘用『イメージ』。魔力を“純粋な力”に変換する事で、身体能力と攻撃力を飛躍的に上昇させる。更に相手の技や動きを観察して見切り、『回避動作』をイメージに組み込む事で防御面も向上させる。相手が強ければ強い程、更に自分はその上をゆく反則級の技。だが、確実に相手の実力を上回るには、しばらく相手を観察しなければいけないのが難点。

カートリッジを使用すれば、より強力になるが、魔導師と違ってデバイスではなく、自分の体に直接魔力を取り込むので、多用したり一度に使い過ぎると体に負担をかける事に。セツテ戦では一個で済

ませたが、更に数を増やせば命の危険も出てくる。

作者コメント。

オリジナルの能力を考えるのって、難しいなと改めて実感しました。でも、自分としては、ナンバーズに他作品の能力は使わせたくなかった。

いや、しかし……セツテ早くも負けて退場。ナンバーズの中でも、かなり好きなキャラだけにちょい残念。自分で書いといてなんです。最終決戦で、無理矢理にでも出番を出そうかな。しかし、失禁にまで追い込むなんて……好きなキャラをイジめるタイプか？

主人公に関しては、武器で闘う事も考えたのですが、既に周りに魅力的な武器を持ったキャラが盛りだくさんなので、徒手空拳型の戦闘スタイルにしました。元々、『ワンピース』のルイミタいな肉弾戦も好きです。オリジナル武器は、アリシアの分で精一杯です（笑）

ちなみに、ナンバーズの強化能力を『ディアブル』と『デモンズ』と使い分けてるのは、単に作者の気分で、深い意味はありません。

ディアブルジャプ！ って黒足コックさんだろが！
では。

速度（前書き）

今回はフェイトが……！？

後書きには、能力紹介

速度

時間は少し遡る。

別の空域で、フェイトとトーレによる空中戦が繰り広げられていた。互いに“速度”^{スピード}を武器とする者同士の衝突は、並の魔導師でも目で追うのは難しい。金色の閃光と紫色の閃光が、空中でぶつかり合って火花と強烈な光を夜空に発する。

何度目かの衝突をした後に、二人は距離を取った。

フェイトのバルディッシュは、巨大な金色の魔力刃を備えた大型の剣の形をしていた。幾つかある形態の内の一つで、『ザンバーフオーム』と呼ばれる。攻撃範囲が広く、斬撃、砲撃の威力も高い。対するトーレは、手足に備えた紫色の羽のようなエネルギー刃『インパルスブレード』で、応戦していた。今のところ、防衛プロゲラムの力は発動させていない。

武器を構えた体勢で、フェイトは険しい顔でトーレに声を飛ばした。

「スカリエッツィは何処に居る！？ 何で、こんな事件を起こす！？」

「お望みでしたら、ご案内しますよ。勿論、我々の仲間となって協力するならの話ですが……」

「誰が……！ 彼は犯罪者だっ……！ それも最悪の……！」

「悲しい事を言いますね」

言葉とは裏腹に、トーレの顔には表情の変化が見られなかった。

口調も淡々としたモノで、悲しみの感情の欠片も感じられない。

「ドクターは、貴女やあの少年の生みの親のようなものですよ？ 貴女方の命は、ドクターがプロジェクトFの基礎を組み立てたから

こそ……」
「黙れっ！」

相手の言葉を拒絶するように、フェイトは声を上げた。

今まで、数多くの人の命を犠牲にしてきたスカリエツティは、間違い無く犯罪者だ。しかし、数日前にファミレスで彼の仲間である戦闘機人と話をした際に、隼樹が彼女達とスカリエツティの処置に対する引掛かりを憶える発言をした。最初は不審に思い、今でも疑問は抱いているが、ただ一つ確かな想いがある。それは、隼樹を信じる事だ。おそらく、彼なりの考えがあるのだろう。それに、いずれ解る事だとも言っていた。ならば、その時が来るまで、フェイトも自分なりに正しいと思う事をするだけだ。

隼樹と自分を信じるフェイトに、迷いは無かった。

そんなフェイトの拒絶の言葉を聞いて、トーレは溜め息をついた。

「貴女の意味は固いようで……仕方ありませんね。ならば、ココで排除させていただきます……！ 仲間にならないのであれば、貴女の力は黒龍やドクターの計画にとって脅威となりますから……！」

僅かな仲間意識を完全に破棄して、トーレはフェイトを完全な敵と定める。

トーレの雰囲気が変わり、放たれる殺気をフェイトは肌で感じて気を引き締め直す。

「バルディッシュ！ ライオット！」
『ライオットモード！』

主人の声に応え、バルディッシュは形態を変えた。大型の『ザンバーフォーム』よりも小型化して、高密度の魔力刃を備えた『ライオットモード』だ。更に、縦に割って二刀流として扱う事も可能と

なっている。

そして、フェイトはもう一段階力を解除した。

「オーバードライブ！ 『真・ソニックフォーム』！」

フェイトの体が、強烈な金色の光に包まれる。

光の中で、フェイトの体を覆うマントが消え、バリアジャケットの装甲も薄くなる。やがて光が収まり、中から現れたのは新しい形態になったフェイトだ。黒いレオタード調のバリアジャケットで、十年前のデザインをアレンジした『真・ソニックフォーム』は、速さのみを追求した形態だ。防御力が低下する分、速度は驚異的に飛躍する。

この『ライオット』と『真・ソニック』は、限定解除されなければ使用出来ない切り札なのだが、事件前に隼樹がカリムに頼み込み、陳述会当日の限定解除はされている。フェイトだけでなく、別行動をしているのはも同様で、隼樹は本気で今夜の戦闘で決着をつける気なのだ。決着をつけるのに、出し惜しみはしない。

フェイトが力を解放したのを見て、トーレも防衛プログラムの力を解き放つ。

「『ディアブルウイング
悪魔の翼』！」

トーレの背中に、突如巨大な翼が生えた。黒と紫色が混同したような色で、禍々しさを感じられる。その名の通りの悪魔が付いている。そんな翼は、大きく、使用者のトーレの長身を覆う程である。

翼を生やしたトーレから、ただならぬ危険を感じ取ったフェイトは、冷や汗を流す。

数秒の沈黙の後、二人は示し合わせたかのように同時に動いた。互いに最高速度で宙を翔け、ぶつかり合う。二振りの大剣を操り、トーレに斬りかかる。だが、巨大な片翼によって、斬撃を防がれて

しまつ。更にもう片方の翼が、叩き落とさんと頭上からフェイトに迫る。一撃でも強い攻撃が当たれば墜とされてしまふフェイトは、高速移動で横に移動して回避した。背後に回り込み、横薙ぎの一撃を振るう。しかし、トーレの反応も早く、振り向きざまに腕のインパルスブレードで防御された。今度は両の翼を縦に構え、振り下ろして飛膜ひまくが襲い掛かる。上から迫りくる皮膜を、フェイトは二刀の魔力刃で受ける。瞬間、金属同士がぶつかり合う、甲高い音が夜空に響き渡った。どうやらトーレの飛膜は、縦に振り下ろせば相手を切り裂く刃になるようだ。

飛膜を弾き、フェイトは後ろに飛んで距離を取った。険しい顔でバルディツシュを構え、翼を広げるトーレを見据える。

あの翼……！ 防衛プログラムの力か……厄介だな……！

ただ飛ぶだけの道具ではなく、攻撃、防御と戦闘面にも特化している。それに、こちらの速度についてきている事にも驚きだった。勝負に勝つには、あの翼を破る事が必須であると見る。だが、今の数秒の攻防で生半可な攻撃は通らない事は実感した。オーバーSを超えるような、大技が必要だ。

少し逡巡したフェイトは、一つ試す事を決めた。

「よしっ……！ 行くよ、バルディツシュ……！」

『イエツサー！』

バルディツシュの黄色い球体が点滅して、主に答えた。

金色の魔力刃に魔力を通して、フェイトは再びトーレに挑んだ。トーレも飛んで迎え撃つ。超高速で動く二人は、夜空に金色と黒紫色の線を引く。常人はおろか、並の魔導師ですら視認出来ない速度の領域で、二人は先ほどよりも一層激しい空中戦を演じる。

襲い掛かってくるトーレの凶刃と化した二翼を、フェイトはギリギリのタイミングで防ぐ。多少のかすり傷は負うが、直撃を受けない限りは墜とされる事は無い。しかし、少しでも気を緩めれば、翼

の餌食になってしまふ。超高速の世界に身を置くフェイトは、同時に極限の緊張状態に居た。

小競り合いに飽きたトーレが、急に後ろに飛んで距離を取る。

「『ディアブルストーム悪魔の暴風』！」

巨大な翼を大きく羽ばたき、フェイトに向かって凄まじい暴風を起す。

咄嗟にフェイトはバルディッシュを縦に振り下ろし、迫りくる暴風を斬った。暴風の中で道を作り、超高速で一氣にトーレの懐まで飛ぶ。翼の対応が間に合わないと瞬時に判断して、トーレは両腕を交えて交差させたインパルスブレードで迎え撃つ。紫色の刃に挟まれる形で、金色の魔力刃が受け止められた。

そして、また小競り合いが始まった。夜空を飛び交い、超高速で刃と刃をぶつけ合う。

その時、トーレは感じた。衝突を繰り返すフェイトの金色の魔力刃に、膨大な魔力が流れ込んでいる。何か仕掛ける気だと察して、トーレは対応出来るようにフェイトから離れた。

ほんの少しでいい……！動きを止めて！

トーレが離れた直後、フェイトは彼女の手足にバインドを八メテ動きを封じた。

「この程度の拘束……！」

バインドを破壊しようと、手足に力を込めるトーレ。強化した彼女にとって、この程度の拘束は僅かな足止めにしかならない。

だが、フェイトにはソレで充分だった。

「『エクス約束された』」

フェイトは二振りのバルディッシュを振りかぶりながら、合わせ
て一本の大剣に変え、同時にカートリッジを四発ロードする。
そして、

「『勝利の剣』^{カリバー} アアアアアアアアアア！」

巨大な金色の刃を振り下ろし、同色の魔力の奔流をトーレに向け
て放つ。自分の魔力とカートリッジを使用した、“フェイト流のエ
クスカリバー”だ。オリジナルより劣るが、なのは『スターライ
トブレイカー』と同等かそれ以上の威力を誇る。

金色の閃光は、宙を翔けて一直線にトーレに迫る。拘束を解いた
トーレは、急いで翼で全身を包んで前面を防御して金色の閃光を受
ける。瞬間、超振動が翼を通じて体に伝わった。周囲の空気も震わ
せ、衝撃は雲を消し飛ばす。

「ぐうう……！」

トーレは歯を食いしばり、必死に金色の刃を受け止め続ける。
激しい攻防が続く中、翼とバルディッシュにヒビが入る。それぞ
れ衝突の衝撃と魔力解放の負荷で、傷付いてきたのだ。
攻める方も防ぐ方も、全力を注ぐ。

「はああああああああああっ！」

「ぐああああああああっ！」

次の瞬間、攻め続けた刃と受け続けた翼が、同時に砕けた。
技を放ったフェイトは、激しく呼吸を乱して肩で息をする。フェ
イト流のエクスカリバーは膨大な魔力を使用するので、デバイスは
勿論、使用者であるフェイトの肉体にも大きな負担をかける。コレ
を使えば、長時間での戦闘は不可能となり、戦闘後はしばらく魔法

を使う事が出来なくなる。

切り札はトーレ本体には届かなかったが、厄介な翼は破壊出来た。流石のトーレも、アレ程の砲撃魔法をフェイトが撃つとは思っていなかったらしく、冷や汗を流している。

「やりますね、フェイトお嬢様……！」

「優秀な師匠に、鍛えられてますから……！」

互いに力を消耗して、決着の時が迫っていた。二人もソレを予感して、最後の勝負に挑む。

しばしの沈黙の後、二人は同時に宙を翔けた。

「ライドインパルスっ！」

「真・ソニックっ！」

残された力を振り絞り、再び二人は速度の世界に飛び込んだ。

最後の勝負が始まった。両者の速度は、互角だった。衝突を繰り返し、刃をぶつけ合い、体を傷付け合う。バリアジャケットと戦闘スーツが破れ、素肌を晒していき、切り傷を作っていく。

負けないっ……！！

速度を落としてつつも、フェイトは動きを止めない。

負けられないっ……！！

どんなに魔力を消費しても、体に幾つ切り傷を作っても、決して止まらない。

私の“速さ”は……リニスとセイバーの、二人の師が認めてくれた、私の一番の武器だから……！！

大好きで憧れの師に認められた自分の武器を誇りに思い、フェイトは高速戦を続ける。

相手のトーレも、エクスカリバーを受けた際に大幅に力を落としていたので、速度が徐々に下がってきていた。

十数回目の衝突を経て、二人は距離を取って旋回した。残り僅かな力を考えれば、コレが最後の攻撃となる。

「はあああああああああああつー！」

高速ですれ違いざまに、両者は刃を振り抜いた。

直後、空中で二人の動きが止まった。

静寂な夜空に、くぐもった声を漏らしてトールは体勢を崩す。フェイトの一撃を腹に受け、同時に力尽きて飛んでいる余力を失くしたようだ。ソレとほぼ同時に、フェイトの体も前のめりに傾いた。一撃を受け、魔力を消費して飛べないのは同じだった。このままでは、二人共下の固い地面に真つ逆さまだ。

しかし、落ちる事は無かった。

「よつと………！」

「えっ………！？」

浮遊感が消えて、代わりに抱えられる感触がして、フェイトは目を丸くした。見上げた先には、フェイトを抱える隼子の笑った顔があった。

フェイトを抱えて、安堵の溜め息をつく。

「ふう………！ 間に合った………！」

「じゅ、隼子………！」

驚いたフェイトは、隼子の背中に目を向けた。闘いに敗れたセツテが、背負られる形で眠っている。

「良かった………！ あつ！ 私が闘ってた、戦闘機人は………！？」

「目の前に居るだろうっ？」

「え……?」

言われて前を見ると、もう片方の腕に抱えられてるトーレが居た。フェイトと違って、身動きが取れないようバインドで拘束されている。

「くっ……! 放せっ……!」

「放す訳ないでしょう? アンタ等“保護”しなきゃいけないんだからさ」

「保護……?」

隼子の言葉に、フェイトは怪訝そうに首を傾げた。トーレから顔を離して、隼子はフェイトに向き直る。

「そっ、保護だよ。アンタ等の知らない事情が、コイツ等にはあるのさ」

「ソレって、前に隼樹が言ってた……?」

「そうそう」

すると隼子は、疲れを訴えるように唸った。

「じゃあ、あたしも疲れたから隼樹と交代するわ。後は、アイツと一緒によろしく……!」

「え……? ちょっ……!」

フェイトが言葉を言い終わらない内に、隼子の体が淡い光に包まれ、収まった時には隼樹に戻っていた。

元に戻った瞬間、隼樹は険しい顔になった。

「ぐおおおお……!?!? お、重いいい……!」

男とは言え、背中に一人、両腕に二人抱えるのはキツイ。隼樹は、すぐに『イメージ』で腕力を強化させた。

「あの女、急にチエンジするなつての……！ あっ、一応自分か……。って、フェイト、大丈夫!?」

「う、うん……！ だ、大丈夫だよ……！」

答えるフェイトは、隼樹を直視出来ずに俯いた。

今、フェイトは男の隼樹に抱えられている。十九年間の人生で、男に抱えられたのは初めての体験だった。しかも、今は真・ソニッククフォームで肌の露出が高い恰好をしている。

は、恥ずかしい……！

俯いてるフェイトの顔は、耳まで真っ赤になっていた。

三人の美女を抱えてる方も、フェイトと同じような心境なのは、言うまでも無い。

フェイト VS トーレ。

勝者無し 引き分け。

速度（後書き）

能力紹介

『ディアブルウイング
悪魔の翼』

トールに与えられた防衛プログラムの力。背中から黒紫色の巨大な翼を生やし、移動速度を高める能力。超高速移動の他にも、翼で相手を叩き落したり、縦に振り下ろす事で硬く鋭い飛膜を刃にして斬撃を繰り出し、全身を包んで攻撃から身を護る防壁に使用出来たりと戦闘面にも特化している。

『ディアブルストーム
悪魔の暴風』

ディアブルウイングで大きく羽ばたき、暴風を起こす技。その強力な衝撃波のような風は、単に相手を吹き飛ばすだけでなく、AAAランクの攻撃を弾き飛ばす程の威力を誇る。同ランクかソレ以上の斬撃を受ければ、暴風は割れてしまう。

『エクスカリバー
約束された勝利の剣』

トール戦でフェイトが使用した、砲撃魔法。己の魔力をバルディッシュの魔力刃に注ぎ込み、更にカートリッジを使用する事で放つ“フェイト流のエクスカリバー”だ。魔力消費が激しいので、現時点では一発限りのまさに最後の切り札。撃った後は長期戦闘が不可能となり、短期戦をした後は魔法が使用できなくなり、戦闘不能状態となってしまう。膨大な魔力を使用して扱うので、使用者やデバイスにも大きな負担がかかる。威力はオリジナルに劣るものの、なのは『スターライトブレイカー』と同等かソレ以上となる。

作者コメント。

トーレ姉とフェイトの激戦は、原作と違って“引き分け”と言う結果にしました。一方的に主人公サイドが全勝すると言うのは、個人的に状況次第では好まない事があり、何より、この二人の対決は引き分けにしたかったので。トーレ姉強いよ。でも、フェイトの“速さ”も負けてないよ。二人共強いよ。

そして、フェイトのエクスカリバー。やっちまいました。何か、こう、師弟関係的なサプライズを書こうと思ったら、撃ってました、エクスカリバー。でも、魔力光や剣を扱うところは同じだし、何よりこの作品ではセイバーと師弟関係にあるから、いいですよね？
では。

圧倒（前書き）

後書きには、能力紹介

*

ミッドチルダで練り広げられる激戦！

黒龍の魔の手が忍び寄り、機動六課に最大の危機が迫る！

圧倒

機動六課隊舎。

こちらでも、ナンバーズと交戦中のセイバーとセイバーオルタの姿があつた。

戦場は、機動六課隊舎の敷地内だ。アルフ、ザフィーラ、シャマルの三人がガジェットと黒龍の生み出したと思われるトカゲ怪人と闘っている前で、オルタは双剣使いのデイドと対峙していた。

数度の打ち合いで、ISのみでは勝てない事を悟つたデイドは、防衛プログラムちからの力を発動させる。

「『デモンズスラッシュ悪魔の剣』……！」

能力を発動させた瞬間、デイドのツインブレイズに変化が生じた。赤いエネルギー刃が歪み、形を変えていく。伸びて倍以上に巨大化した刀身に、複数の鋭い棘が生えて、禍々しく凶悪な形態になった。

変化した双剣を見ても、オルタはまるで動じず冷静に見据えている。見かけ倒しか、それとも何かしらの特殊能力が備わっているのか。

「はっ！」

デイドは右手の剣を振り下ろし、オルタは黒剣を頭上に構えて受け止めた。変化前より力は数段上がっているが、恐れる程では無い。

やはり、見かけ倒しか。そう思った直後、受け止めた剣が真の力を発揮した。

赤い刃が高速で伸び、柔軟なしなりを利かせて軌道を変えて背後

からオルタを串刺しにしようと襲い掛かる。異変と危険を察したオルタは、素早く横に跳んで寸前で赤い刃を躲す。だが、刃は更に変化を見せる。回避直後に軌道を変化させ、今度は正面からオルタを突きにかかると。オルタは舌打ちして、黒剣で赤い刃を弾く。同時に、もう一本の赤い刃が背後から斬りかかる。本能的に危機を察したオルタは、半回転しながら黒剣を振り抜いて赤い刃を弾いた。しかし、一瞬赤い刃の剣戟が速く、腕にかすり傷を負ってしまう。顔を顰め、オルタはデイドを睨んだ。

「小細工を……！」

デイドが得た能力は、自動追尾機能だった。双剣は避ければ追いつけ、一本の刃を防いでも二本目の刃で傷を負わせる。

長い付き合いで、オルタが傷を負ったところを初めて見るアルフは、動揺して声を上げた。

「オルタっ……！？」

「騒ぐな……！ この程度、何の問題も無い……！」

オルタは敵を見据えたまま、アルフの声を制した。相手に反撃をさせたくないデイドは、追撃を放つ。

「『デモンズソードダンス』
『悪魔風剣舞』！」

双剣を振るい、二本の巨大な赤い刃を飛ばす。その動きは、まるで生き物のようで、獲物を喰らおうと迫る蛇のように素早い。

オルタは真正面から受け、両手で黒剣を握り、迎え撃つ。前後左右から刃が襲い掛かり、剣術の基本となる“型”が無い野生の肉食動物のような動きの赤い刃を、オルタが直感と超人的な反応で対応する。刀身から突き出ている棘が、猛獣の牙や爪のように、オルタ

の身体を傷付けていく。

だが、猛攻を受けて防戦一方な状況でも、オルタは表情一つ変えずに冷静でいた。

「少し、本気を出そう……！」

刹那、オルタは薄笑いを浮かべた。

その直後、黒剣の刀身にどす黒い魔力が迸る。両手で黒剣を握って構えた上半身を後ろに捻り、筋肉と魔力をバネにして速く重い一撃を繰り出す。黒剣と二振りの赤い刃が衝突して、甲高い音と衝撃を隊舎敷地内に広げる。刀身にはヒビが走り、衝突箇所が生えていた棘は粉々に砕け散った。

「くっ……！」

衝突の際に生じた衝撃は、離れたデイドの手にも伝わっていた。黒騎士の黒剣に弾かれ、二本の赤い剣は標的から離れる。正面に道が切り開かれ、オルタは猛スピードで駆け抜ける。だが、すぐに背後から赤い刃が自動追尾で追いかけてきた。

しかし、後ろから刃が追ってくる事は、オルタの予定通りだった。走り続けるオルタは、デイドの眼前まで迫る。

慌ててデイドは、右手のツインブレイズを能力解除で元の刀身に引っ込め、向かってくるオルタ目掛けて横薙ぎに振るう。前後挟み撃ちにして、討ち取ったと確信するデイド。

しかし、オルタは超人的脚力で跳躍して、デイドの剣戟を避けた。

驚くデイドの目に飛び込んできたのは、迫りくる赤い凶刃だった。躲そうと身を振るが、躲し切れずに左腕を斬ってしまう。

「あぐう……！」

苦痛に顔を歪め、デイドは齒を食いしばる。切断こそ免れたが、傷は深く、出血を起こしていた。

その時、ただならぬ殺気を感じて、ハッとデイドは目を見開く。目の前に、自分の凶刃よりも禍々しい黒剣を上にも構えた、オルタの姿があった。

次の瞬間、オルタの振り下ろされた黒剣は、デイドの体を斬った。

「があっ……！」

容赦無いオルタの一太刀を受け、デイドは双剣を手放して仰向けに倒れた。

オルタは冷徹な顔で、黒剣の切っ先を倒れたデイドの顔の前に突き出す。

「言っただろう？ ガラクタ機械兵如きでは、王である私に勝つ事は出来な

い……！ 剣に使われているのなら、尚更だ……！」

「ど……どういう、事……？」

痛みに耐えながら、デイドが訊いた。

「気が付いてないのか？ 貴様は剣を使う者でありながら、自分の剣に使われているのだ……！ 剣に吞まれて使われるのではなく、剣を自在に使いこなして闘え……！ 力に溺れた貴様では、例え私を超える力を持ったとしても私には絶対に勝てん……！」

オルタの言葉が、今までのどんな剣戟よりも、深く、鋭く、デイドの胸中に突き刺さった。

強大な力にしたデイドは、逆に剣に操られていたようなも

のだった。己の技量では無く、剣の力に振りまわされて、凶刃に任せて敵と闘っていたのだ。いや、能力を発動してから、デイド自身は闘ってすらいなかった。

デイドが戦意を失くした事を察して、オルタは剣を引いた。

「急所は外してある。本来なら斬り捨てているところだが、マスターの命令で特別に生かしてやるう……！ シャマル！」

「は、はい！」

「バインドで拘束した上で、逃げられない程度に手当てしてやれ」「わ、分かりました！」

隊舎の護りをアルフとザフィーラに任せ、シャマルは言われた通りにデイドに治療を施す。

相手が居なくなつたオルタは、ガラクタ狩りに動いた。

オルタとデイドの勝負が決した一方で、セイバーはオットーと闘いを続けていた。

金髪の騎士相手にISが通じないと判断したオットーも、防衛プログラムを使う。

「『デモンズフラッシュ悪魔の光』……！」

オットーが手を前にかざすと、先ほどよりも極太に変化したエネルギー光線が放たれた。オットーが与えられたのは、単純な威力強化だった。

セイバーは横に跳び、外れた光線は地面に直弾して爆発を起こす。爆煙の中から見えたのは、周囲に亀裂を走らせた大きな窪みだった。空中に佇むオットーは、地上を駆けるセイバーを狙って強化されたレイストームを撃ち続ける。俊足の速さで走るセイバーの後ろで、

次々と爆発が起こる。逃げ続けても勝負は動かず、セイバーは地を蹴って跳び、空中のオットー目掛けて不可視の剣を振り下ろす。同時に、オットーはエネルギーを集束させた閃光を発射する。振り下ろされた剣とエネルギー光線がぶつかり合い、強烈な閃光を発した。足場の無い空中では踏ん張れず、剣を振り抜いたセイバーは、地上に押しやられた。エネルギーを集束して放たれた光線は、E-ス級の砲撃の威力を誇っていた。

不可視の剣を構え直して、セイバーは宙に佇むオットーを見据える。

相手が空を飛べる以上、砲撃を撃たれるよりも速く斬り込まなくては……！

その時、セイバーはハツとなつて周囲を見回す。集束された複数のエネルギーの塊が、宙に浮いてグルリとセイバーを取り囲んでいた。セイバーが気付いたと同時に、塊は極太の光線となつて中心に居るセイバーを標的に一斉掃射される。魔力とは別のエネルギーである為、対魔力で無効化する事は出来ない。更に魔導師で無いセイバーは、障壁を張る事も不可能である。

逃げ場も無く、絶体絶命かと思われた時だった。

「爆ぜよっ！ 『風王結界』っ！」

不可視の剣を中心に、台風のような強風暴風が吹き荒れた。光を屈折させ、不可視の剣を不可視たらしめる程の強力な風は、一斉掃射された光線の軌道をズラして、狙いを狂わせる。解放された風王結界は防御だけにとどまらず、解き放ったセイバーの体を強風で宙に飛ばした。

黄金の聖剣を構え、猛スピードで空中に居るオットーに突進する。

「デモンズ」

泡をくつて、オットーは光線を発射して迎え撃つ。

「フラッシュ！」

だが、最大限までエネルギーを集束する時間が無く、不十分な威力の光線はセイバーの剣の一振りですり切られて捨てる。

直後、勢いに乗せた剣の一閃が、オットーの体を斬った。

「がはっ……！」

斬撃を受けたオットーは、切り傷と口から血を吐き、地面に落ちた。

セイバーも、オットーの近くに着地した。後ろを振り返ると、オットーは仰向けに倒れたまま動かない。負傷した体で、セイバーに挑んでも勝てない事を悟ったのか、夜空を仰いでいた。

「シャマル。すみませんが、彼女の治療もお願いします」

「はい！」

既にデイドの手当てを済ませていたシャマルは、呼ばれて駆け付ける。

「セイバーも強っ……！」

「あの二人は無敵か……？」

セイバーとオルタの圧倒的活躍に、アルフとザフィーラは茫然となる。

これで六課隊舎襲撃の主戦力は倒れ、残るはガジェットとトカゲ怪人だけとなった。セイバーとオルタは勿論、アルフ達も余力を残している。このままいけば、隊舎を護り切れると誰もが思っていた。

土気の上がる一同の前に、あの女が現れた。

「ふふ……！ やはりナンバーズでは、お前達の相手は務まらないか……！」

綺麗だが恐ろしくも感じる声を聞き、セイバー達は弾かれたように振り返った。

海を背にして立つのは、黒いドレスを身に纏い、黒い長髪を夜風になびかせた黒龍だった。

彼女の姿を見た瞬間、アルフ達は背筋に悪寒を感じた。黒龍は美しい少女の姿で、十年前の姿の面影は残っていない。だが、笑みは妖しくも氷のように冷たく、撒き散らす威圧感は過去の防衛プログラムを遥かに上回っている。姿だけでなく、中身も別物と化していた。

セイバーとオルタが前に出て、黒龍と対峙する。

「ジュンキの読み通りに来ましたね……！」

「そうか、あの男の指示か……」

特に驚いた様子も見せず、黒龍は笑った。

目を鋭くさせ、セイバーが尋ねた。

「貴様……本当に、あの防衛プログラムか……？」

「そつだ……！ お前と隼樹に敗れ、この十年間ずっと復讐の機会をうかがっていた……！ ちょうどいい。まずは、お前達を死ぬ一歩手前まで痛めつけ、隼樹を呼び寄せ、目の前で消して殺す前に絶望の淵に叩き落としてやろう……！ なかなか良い案だとは思わな
いか……？」

「くだらん……！」

黒龍の言葉を、オルタは一蹴して黒剣を構えた。

「逆に貴様が、ココで消えるのだから……！」

殺気を込めた鋭い眼光を、黒龍にぶつける。ナンバーズの殺しは止められているが、黒龍に関しては何も指示は受けていない。つまり、殺しても構わない、と言う事だ。抑えていた殺気を解き放ち、周囲の気温を下げる。

後ろに居るアルフ達も、思わずゾツとした。

恐ろしい黒騎士の殺気を真正面から受けても、黒龍の笑みは消えない。

「では、試してみるか……？」

言うや否や、黒龍を右手を前にかざした。

警戒心を強め、セイバーとオルタは身構える。

一同の前で、黒龍は驚愕の現象を起こした。かざした手が光に包まれ、収まった時には一振りの剣が握られていた。

「えっ……！？」

ソレを見た瞬間、一同は驚愕の声を上げた。セイバーは勿論、あのオルタでさえ動揺を禁じ得なかった。

何故なら、一同の反応を愉しむように笑っている黒龍の手に、
“あり得ない物”が握られているからだ。

血相を変えて、セイバーが声を上げた。

「馬鹿な……！ 何故、貴様がソレを……！？」

黒龍の手に現れたのは、黄金に輝き、美しい白刃を有した聖剣

エクスカリバーだった。防衛プログラムは、十年前の激戦で隼樹の『イメージ』を憶えている。だが、『イメージ』の能力を以てしても、聖剣の中で最強のランクに立つエクスカリバーを造り出す事は不可能である。

不可能なはずなのに、黒龍はエクスカリバーをセイバー達の前で造ってみせた。

余裕と自信に満ちた顔で、黒龍は言った。

「我は、あ奴を超えた……！　もはや我に、不可能は無いのだ……！」

我、最強なりっ……！」

デイド VS セイバーオルタ。

勝者、セイバーオルタ。

オットー VS セイバー。

勝者、セイバー。

圧倒（後書き）

能力紹介

『デモンズスラッシュ
悪魔の剣』

デイドが与えられた防衛プログラムの力。ちから固有武装の『ツインブレイズ』を強化させ、特殊能力も備えている。刀身は伸びて巨大化して、鋭い棘が幾つも生えて凶悪な武器と化す。更に、相手の魔力を察知して自動追尾機能で太刀筋を変え、追撃をする事まで可能としている。

『デモンズソードダンス
悪魔風剣舞』

凶刃と化したツインブレイズの自動追尾機能を最大限に活かした攻撃。生き物のような動きで迫り、剣術の型を無視した猛攻を繰り返す。

『デモンズフラッシュ
悪魔の光』

オットーが与えられた防衛プログラムの力。IS『レイストーム』の威力を上げる能力。単純な威力強化だが、エネルギーを集束して放てば機動六課のE級級の砲撃に匹敵する攻撃が可能となる。

作者コメント

オットー 対 セイバー。デイド 対 オルタ。二つの勝負は短時間で決しました。元々、短く決着をつけようと考えてました。強化したナンバーズを短時間で倒す事で、セイバーとオルタの強さを魅せようと自分なりに工夫してみました。

結 束（前書き）

後書きには、能力紹介。

結 束

地上本部地下。

空や地上で激闘が繰り広げられている一方で、地下でもナンバーズとの戦闘が起こっていた。地下の広い大部屋では、所々に煙が立ち上り、亀裂を周囲に走らせた陥没箇所が幾つか見られる。戦場と化した地上本部地下室に立つのは、ゴスロリ衣装を着た少女と女性局員の二人、それから三人のナンバーズだった。

一人のナンバーズが固有武装を構え、一斉射撃を仕掛けてきた。赤い弾丸が雨のように、前方から降り注ぐ。

対するゴスロリ衣装を着たアリスは、無機物召喚で鉄球の散弾で迎え撃つ。魔力で強化され、回転が加わった強化弾は宙でスフィアと激しく衝突する。着弾の際に爆発音が響き、鉄球が粉々に砕け、スフィアも掻き消されて相殺していく。

だが、相手の攻撃はスフィアのみではなかった。スフィアの雨に混じって、黒いナイフが飛来してくる。防ぎきれずに、ある程度の接近を許した時だった。

「IS発動！ 『ランブルデトネイター』！」

接近したナイフが、アリス達の目の前で爆発を起こした。障壁を張って直接的なダメージは避けたが、爆煙に包まれて視界が零になる。

周囲を警戒していると、耳に何かの回転音が聞こえた。咄嗟に後ろを振り返ったのは、アリスの後ろに立つギンガだ。彼女の向いた先には、煙の中を突っ込んできたノーヴェの姿があった。ギンガのブリッツキヤリバーに酷似した『ジェットエッジ』で高速移動して、ギンガに迫る。

「うおおおおおおおおお！」
「はあああああああああ！」

互いに拳を突き出し、ぶつかり合う。小競り合いが続いたが、魔力で硬質フィールドを纏った『ナツクルバンカー』を放った分、ギンガの威力が勝って競り勝った。

「チツ………！」

力負けして後ろに押されたノーヴェは、顔を歪めながら追撃の準備をする。右手に装着した『ガンナツクル』を前に突き出し、黄色いスフィアを六発撃つ。

「トライシールド！」

ノーヴェの射撃に対して、ギンガは三角形型の障壁を展開して防御する。着弾したスフィアは、上下左右に弾かれた。

攻撃を防がれたノーヴェは、一旦仲間の元に戻った。

「ん〜。なかなかやるっスねえ〜！」

楽しそうな声を上げたのは、一斉射撃を撃ったナンバーズだった。？11のウエンディ。濃いピンク色の髪を後ろに結び、短めのポニーテールにしている。同色の目を持ち、子供っぽさの残る顔立ちをした可愛い女の子だ。しかし、そんな少女に不釣り合いな大きな得物を持っていた。『ライディングボード』と呼ばれる固有武装で、サーフィンボードのような形状をしている。先端の銃口から、スフィアを発射して攻撃する。

必死に抵抗し続けるアリスとギンガを見て、ウエンディは笑みを深めた。

「捕獲対象の『タイプゼロ・ファースト』は勿論、前に黒龍の部下だったアリスもしぶといっスね。デバイス無しでの魔法を使う魔導師なんて、滅多に見れないっスから」

魔法とは、通常デバイスの補助を受けて初めて真価を発揮するモノである。だが、例外も存在する。アリスの他にも、現在、無限書庫司書長を務めているユーノ・スクライアも、デバイスをを用いずに優れた結界魔法を駆使していた。

黒龍の部下だった、と言う言葉にアリスは怪訝な顔になる。取り調べに立ち合ったフェイトの推察通り、記憶を消されているので、本人には何の事かサツパリ解らなかった。

なかなか倒れない相手に、ウエンディは少し困った顔で頭を掻いた。

「ん〜、しかし本当にしぶといっスね、二人共……。このままじゃ埒があかないから、防衛プログラムの力を使わせてもらっスよ……！ 上手く加減出来なくて、ウツカリ殺しちゃったらゴメンっス……！」

最後の台詞を言った時、ウエンディの顔が狡猾な笑みに変わった。防衛プログラムの力を得た影響で、無邪気に命を奪う面が濃くなり、殺す事を当たり前のように平然とこなそうとする性格になっていた。ウエンディの言葉を聞いたチンクが、たしなめた。

「ウエンディ……我々の目的は、あくまで無血制圧と捕獲対象を捕まえる事だ……！ 殺害は認めないぞ……！」

「あ〜、すいませんっス、チンク姉」

笑顔で答えるウエンディに、反省の心はうかがえない。

防衛プログラムの力で変わった妹に、チンクは複雑な心境を抱く。隣に立つノーヴェは、そんな姉の心を察して顔を険しくさせた。

二人とは対照的に無邪気に笑い、ウエンディはライディングボードを構えた。

「まつ、急所を外して撃てば、死にはしないっすよ……！」

『ディアフレット下悪魔の弾丸』！」

能力発動をした直後、ウエンディの周囲に大量のスフィアが生成された。大きさはサッカーボール並で、凝縮されたエネルギー量も多い。

「喰らえっす！」

スフィアを一斉掃射させ、アリスも無機物召喚による投擲で受けて立つ。

だが、先ほどよりも威力は上がっており、強化された鉄球は着弾した途端に撃ち砕かれ、スフィアは消えずに襲い掛かる。咄嗟にギンガが、防御魔法のディフェンサーを張った。バリア硬度の高い障壁だが、スフィアは難なくディフェンサーを破る。

防御を破って、スフィアの直撃を受けた。

「きゃあああああああ！」

被弾したギンガとアリスは、悲鳴を上げて体勢を崩す。何とか倒れずに踏ん張ったが、受けたダメージは決して軽くは無い。被弾箇所のバリアジャケットは破れ、傷口から血を滴らせる。

傷付いた二人を見て、ウエンディは意地悪く笑った。

「あれれ〜？ その程度っすか？ アリスも、鉄球の数が少なくな

ってきたっスね〜」

人の神経を逆なでする声で言ったウエンディの言葉に、アリスは表情を険しくさせた。

確かに、戦闘を始めた頃に比べて、アリスの鉄球や飛来物の数が減ってきている。アリスの戦法は、無機物召喚によって貯蔵してある武器を飛ばす。魔力の消費を抑えられる一方で、弾数に限りがあるのが欠点だ。使った鉄球を回収してリサイクルする方法もあるが、鉄球そのものが破壊されては使い物にならない。故に、アリスは弾数を減らして、窮地に陥りつつあった。

アリスの睨みを軽く受け流して、ウエンディは少し飽きた風に言う。

「それじゃあ、そろそろ終わりにするっスよ……！」

台詞を言い終えた直後、大量のスフィアが一齐に発射された。

しかし、身構えるアリスとギンガに迫る途中で、突如別方向から飛来したオレンジ色の弾丸によってスフィアが弾かれた。

異変に顔を険しくさせたウエンディ達は、弾丸が飛んできた方を見た。通路の先から、四人のフォワード陣が駆け付けて現れた。

「ギン姉！」

「アリス！ 大丈夫！？」

スバルとティアナが声を上げ、安否を確認した。

「あちゃ〜。ちょっと遊び過ぎたっスカね〜。ゾロゾロと仲間が駆け付けて……」

地下室に駆け付けたフォワード四人を見て、ウエンディは不敵に

笑う。

ギンガ達も、地下室に駆け込んできたスバル達に気付く。

「スバル！」

「ギン姉！ 良かった……！ 無事だったんだ……！」

「心配かけてごめんね。追い詰められてたから、念話で伝える余裕が無かったの……！」

姉が無事なのを確認出来て、スバルは一安心した。

だが、敵が居て、ココが戦場である以上、完全に気を抜くには早い。すぐにティアナが、状況と戦力を分析する。見たところ、一番厄介そうなのはスフィアを撃った狙撃型の戦闘機人だ。他の二人の闘いの様子を見ていないが、狙撃型の戦闘機人が一番危険な感じにする。弱ってるギンガ達から彼女を引き離しつつ、全員で確実に倒す。三人を一気に倒すより、一番危険な敵を仕留める。二対二の同数ならば、ギンガとアリスもある程度持ち堪えてくれるはずだ。

早速ティアナは、作戦の旨を皆に伝えた。

すると、ウエンデイも動く。

「とつとつ片付けるっスよ！」

狙いをスバル達に変更して、ウエンデイがスフィアを雨のように放つ。

三十を超える弾数に、驚きつつもティアナは得意の精密射撃で迎え撃つ。スバルもマツハキャリバーの機動力を活かし、エリオも得意のスピードでスフィアを避ける。キャロは後方に下がり、障壁とフリードの火炎で凌ぐ。

ウエンデイ達が戦闘を開始した側で、チンクはギンガ達を見据える。

「ノーヴェ！ 姉達はタイプゼロ・ファーストを捕獲するぞ！」
「おおっ！」

姉に力強く答え、ジェットエッジの噴射口からエネルギーを噴射して、一気に加速して接近する。

後ろに控えるチンクは、固有武装『ステインガー』を両手に構え、ノーヴェを避けて標的に向かって放った。アリスも鉄球の投擲で応戦する。鉄球と接触した瞬間、チンクはISを発動してステインガ―を爆発させた。爆煙を作り、アリス達の視界を奪う。

ギンガは慌てず、アリスと背中を合わせて何処から襲撃を受けても対処出来る態勢を作った。直後、後ろに回り込んだノーヴェが、回転蹴りを繰り出してきた。ギリギリで迎え撃つ態勢を敷いていたギンガは、虚を衝かれる事なく冷静に腕を縦にして蹴りを防御した。

地下室で、激しい射撃戦が起こっていた。

強化されたスフィアを撃ちまくるウエンディに、フォワード四人は苦戦していた。銃弾の雨が多過ぎて、アタッカーのスバルとエリオは接近できずにいる。ティアナの魔力弾も届かず、フリードの火炎も通じない。

スフィアの雨を止めて、ウエンディが余裕に満ちた声で挑発した。

「機動六課のフォワードってのは、その程度っすか？ 四人揃って手も足も出ないなんて、話にもならないっすね〜！」

ティアナは、悔しい気持ちを必死に抑えた。感情的になれば、仲間を巻き込んで全滅させてしまう。こういう時こそ、冷静に物事を考えなければならぬ。

物陰に身を隠して、フォワード四人は相談する。

「ティア、どうする？」

「あのスフィアの雨を、どうにかしないとね。アレさえどうにか出来れば、一発のあるアンタやエリオの攻撃を当てるチャンスが出てくる。けど、並の攻撃じゃあ、どうにもできない……」

「ティアさん……」

キャラが不安そうな顔を見ると、ティアナは笑みを向けた。

「大丈夫よ。策は考えてある……！ 並の攻撃が通じないなら、その上をいけばいいだけの事よ！」

希望を見出したティアナの言葉に、キャラも自然と表情が明るくなった。

三人に作戦の手順を話して、決行する。

「頼んだわよ！ スバル！ エリオ！」

「おおっ！」

「任せてください！」

ティアナに元気の良い声で返して、スバルとエリオが同時に正面から突っ込んだ。

「突進しか脳の無い馬鹿程、狙いやすい標的は無いつスよ！」

小馬鹿にしたように言っつて、ウエンディは大量のスフィアを撃つ。しかし、仕掛ける準備をしていたのは、スバルとエリオだけでは無かった。薄暗い地下室にオレンジ色の光が現れ、カートリッジを四発ロードする音が鳴った。両手にクロスミラージユを構え、周囲に魔力弾を待機させたティアナの姿があった。彼女の後ろでは、キャラがピンク色の魔法陣を足下に展開して、『ブーストアップ』を

発動させている。

「クロスファイアアアアアシューウウウトっ！」

二十を超える魔力弾が、一斉に発射された。

オレンジ色の魔力弾は、スバルとエリオを追いぬき、迫りくるスフィアを次々と相殺して、二人が通る道を作っている。カートリッジロードの効果で魔力弾は強化され、ティアナの正確な精密射撃で寸分変わらず標的のスフィアを相殺させていく。ティアナの援護射撃を受け、スバルとエリオは被弾どころか掠る事すらなく、ほぼ安全にウエンディに接近する。

その時、ウエンディは不気味に笑った。

「『ディアブルスイカ悪魔の砲弾』！」

ライディングボードの銃口に凄まじい速さでエネルギーが集束され、特大のエネルギー砲を放つ。充分に引き寄せてからの砲撃では、回避は不可能だ。直撃すれば、ひとたまりも無い。迫りくる砲撃に、スバルとエリオは驚愕の表情を浮かべ、防御も回避も間に合わず成す術も無いまま飲み込まれ　はしなかった。

砲撃は、二人の体をすり抜けたのだ。

「なっ……！？　幻影っ……！？」

予想外の展開に、ウエンディは我が目を疑う。通常の幻影では、ウエンディの目を欺く事は出来ない。にも関わらず騙されたと言う事は、ティアナ幻術使いは戦闘機人の仕組みを詳しく知っているとと言う事になる。

本気の援護射撃は、この囷作戦を成功させる為の布石だった。

動揺するウエンディの背後に、スバルとエリオの姿が突然現れた。

ティアナの『オプティックハイド』の効力で姿を消して、幻影とティアナ達に気を取られてる隙に背後に回り込んだのだ。キャロのブーストアップの効果は、幻術の方に回っていたのである。

背後からの気配を察して、ウエンディは振り返りながらライディングボードを構え、照準を合わせてディアブルバズーカで返り討ちにしようとした時だった。

「アルケミックチエーン！」

「なっ……！？」

キャロが召喚したピンク色の鎖によって、動きを鈍らせた。そして、その数秒の動きの鈍りが、勝敗を分けた。

スバルとエリオは、カートリッジを二発ずつロードした。

「デイベイイイイン、バスタアアアアアアアア！」

「サンダアアアア、レイジイイイイイ！」

スバルとエリオの必殺技が、ウエンディの身体に直撃した。

「ぐああああああああっ……！！」

砲撃と電撃を体の一点に受けたウエンディは、悲鳴を上げて力無く地面に倒れた。強力な衝撃を受けたウエンディは、そのまま気絶して動かなくなった。

ウエンディを倒したスバルとエリオは、少し息を荒げる。全身全霊の一撃だったので、肉体的にも精神的にも疲労していた。

「スバル！」

「エリオ君！」

ティアナとキャラコが、二人の元に駆け付けた。

「二人共、大丈夫？」

「うん！ ちょっと疲れたけど、ティアとキャラコのお陰でバッチリ！」

「はい！」

スバルとエリオの笑顔の答えに、ティアナとキャラコはホッと安堵した。

だが、すぐに気を引き締め直す。

「さっ！ 今度はギンガさん達を助けにいくわよ！」

「おう！」

倒れてるウエンディにバインドを施して、ギンガ達の援護に向かおうとした時だった。

「いや、その必要は無い……！」

声が響き、一同は振り返って身構えた。

目の前に居たのは、チンクとノーヴェ、二人の後ろにはギンガとアリスが並んでいる。

「ギン姉！ アリスちゃん！」

「どついう事ですか……？」

流石のティアナも、状況がよく理解出来ずに訊いた。すると、前に立つチンクが答えた。

「我々は、大人しく投降する。我々三人の中で、一番戦闘能力が高

いのはウエンディだ。主力がやられては、お前達を倒す事も、この場から離脱する事も難しい。何より、姉として妹達を危険に晒す訳にはいかない……！」

チンクの答えを聞いて、フォワード四人は呆気に取られた顔になる。何と云うか、意外にも呆気ないと言うか、随分と妹想いな行動に言葉も出ない。

チンクは、隣に居るノーヴェエに顔を向けた。

「すまないな、ノーヴェエ。だが、コレが最善の選択だ」

「解ってる……。解ってるけど……！」

僅かに顔を俯くノーヴェエは、悔しそうに拳を固めた。

闘う為にのみ生み出された戦闘機人しびんたぢは、勝ち残る以外に道なんて無い。負けてしまえば、皆バラバラになってしまう。ソレが悔しくてたまらないのだ。

そんな妹の心情を察して、チンクが励ますように優しく声をかけた。

「大丈夫だ……！ 隼樹が、必ず何とかしてくれる……！ あの男を信じよう……！」

「隼樹さんが……！？」

思わぬ人物の名前を聞いて、ティアナ達は驚いた。また、何もしていないようで、実は何かしてるようだ。

ウエンディ VS フォワード四人。

勝者、フォワード四人。

チンク、ノーヴェ VS ギンガ、アリス。
チンク、ノーヴェの投降により勝者、ギンガ、アリス。

結 束（後書き）

能力紹介

『ディアブレット悪魔の弾丸』

ウエンディに与えられた防衛プログラムの力。ちから弾丸の強化と増殖が主な能力。障壁を軽々と破る威力を有し、並の魔力弾では弾道は反らせても相殺は出来ない。

『ディアブルバズーカ悪魔の砲弾』

強化したスフィアを集束させ、エネルギー砲を放つ技。強力な威力を誇る砲撃で、直撃すればひとたまりも無い。

作者コメント

難しかった！ ウエンディの強化能力を考えるのも勿論ですが、何よりフォワード四人との戦闘を書くのが難しく、大変でした。僕には、ティアナのような戦術の才能なんて無いんです……もう一杯一杯です……。もう小難しい闘いなんて、書きたくないっす！ でも、ティアナとかが居る限り無理かな……。先生、もう限界です。

個人的に原作アニメで、ティアナ一人でナンバーズ三人を倒したのが納得いなくて、逆にフォワード四人 対 ナンバーズ一人を書きました。あつ、別にティアナが嫌いな訳では無く、三対一で負けたせいでナンバーズが酷く弱く見えたので……。好きなキャラが弱く描写されるのって、嫌なんですよね。でも、この作品でも結局は敗北……悲しいな。

では。

魔王（前書き）

隼樹が『エクスカリバー』等の宝具を造れない理由を、書きました。

魔王

各地で闘いが終結していく中で、機動六課隊舎では、新たに、これまで以上の死闘が始まるうとされていた。

壊れたガジエットの残骸が転がってる敷地内で、セイバーとオルタは『約束された勝利の剣』^{エクスカリバー}を手に持って不敵に笑う黒龍と対峙する。信じ難い現象に、動揺を禁じ得ないでいた。

エクスカリバーは人造による武器では無く、星によって鍛えられた神造兵器であり、聖剣と言うカテゴリーの中では頂点に位置する宝具である。コレを『イメージ』で造れない一番の原因は、単にランクが高いだけでなく、多くの人々の“こうであってほしい”と言う想念に起因している。多くの想念が蓄えられ、星の内部で結晶・精製された『最強の幻想』^{ラスト・ファンタズム}を、たかが一個の道具では再現する事など不可能なのだ。中身の無い、張りばてならば造れるが、完全再現する事は出来ない。

しかし、黒龍は再現^{コレ}を実現させた。過去の死闘で、黒龍はセイバーをその身に取り込んでいた。その時に、エクスカリバーに宿る想念を読み取って、理解したのだ。知る事によって、防衛プログラムは長い年月をかけて、エクスカリバーの再現に成功したのである。

聖剣を造り出せる現時点では、確かに黒龍は隼樹を超えた想像者となった。

手に持つエクスカリバーを眺め、黒龍はウツトリとした顔になる。

「いつ見ても惚れ惚れとする、素晴らしい聖剣だ……！　ソレを持っていると言うだけで、身を震わせてしまっそうだ……！」

マスターでさえ再現出来ない聖剣を、敵に用いられてセイバーは顔を険しくさせた。騎士王として、自分の剣に誇りを持つ彼女は、自分の力を穢されたような不快感を憶える。

それは、オルタも同様だった。

「我々の宝具を造ろうが何をしようが、貴様を斬るだけだ……！」

オルタは黒剣を構え、目の前の敵を射抜くように鋭く睨んだ。

隣に立つセイバーも、風王結界を解放した抜き身の状態で、黄金の剣を構える。

二人と正面から対峙する黒龍も、静かに身構えた。

口を閉ざし、一切の雑音を排除した静寂な空間が出来上がった。

勝負が始まる前から、アルフ達は固唾を飲んで見守る。肌に触れる夜風の音だけが、静かに耳に聞こえてくる。

次の瞬間、三人は同時に動いた。地を蹴り、一瞬にして甲高い音を立てて静寂を破り、聖剣を交えた。セイバーが正面から小競り合いをしてる隙に、オルタが左側に回り込んで黒龍に斬りかかる。剣も盾も無い左側は、完全に隙だらけだった。

しかし、黒龍の剣戟は防がれた。なんと、左手にも二本目のエクスカリバーが握られ、黒剣の刃を受け止めているのだ。一本だけでなく、二本の再現を可能としていた。

僅かに動揺したオルタとセイバーだったが、大きな隙を作る程では無かった。

「はあああああああああああ！」

気合いと共に剣を振るい、二人の騎士王は剣戟を繰り返す。

黒龍は二振りの聖剣を巧みに操り、二対一と言う不利な状況でありながら剣戟を全て防いでいる。それどころか、二人の剣戟の僅かな隙を衝いて、反撃さえ仕掛けた。『イメージ』の肉体強化を自身に施して、二人の騎士の動きに完全に反応している。

剣戟の嵐を受け続ける中、黒龍が動いた。黒いニーソックスを履いた足で、セイバーの振り下ろす攻撃動作に合わせて腕を蹴り上げ

る。ガラ空きになった腹に、横薙ぎに振るった聖剣で斬りにかかった。刃が届く寸前で、セイバーは地面を蹴って後ろに跳び退き、聖剣の一閃から逃れた。

オルタが魔力を迸らせた黒剣で、黒龍の顔を突きにかかる。だが、こちらも寸前で頭を引いて躲かれ、逆にカウンターの一撃を放たれる。オルタも紙一重で切っ先を避け、横薙ぎに振るって仕留め損ねた頭を斬りにかかった。が、黒龍は体を沈めて刃を回避して、斬り上げるように下から聖剣の一閃を繰り出す。咄嗟にオルタは後ろに跳び、聖剣の切っ先が金色の前髪を少し掠った。

刃を躲したオルタも、黒龍から一旦離れてセイバーと並んだ。

「成程……どうやら、本物のようですね……！」

一分にも満たない打ち合いで、セイバーは黒龍の持つ聖剣が完全再現されている事を確信した。

二人の騎士王と互角の闘いを演じた黒龍は、自信に満ちた不敵な笑みを浮かべる。

「来ないのなら、今度はこちらから攻めさせてもらっぞ……！」

黒かった瞳が、血塗られたように紅く変色した。同時に魔力が充実して、全身に回って迸る。

どうやら、更に身体能力を強化させたようだ。本気でかかってくる事を察して、セイバーとオルタは気を引き締め直した。

直後、黒龍が動いた。神速の域に達した、目にも映らない速さで二人の騎士王と衝突する。右目でセイバー、左目でオルタを捉えて、二振りの聖剣による激しい剣戟を繰り出す。セイバーの剣技に更に速さと力を加えたような猛攻で、二対一と言ちからうのに、セイバーとオルタは防戦一方に押されていた。黒龍は白銀の線を夜の闇に引き、美しい剣の乱舞で攻め立てる。闇夜に火花を散らし、閃光を発しな

がら剣戟の嵐は続く。

離れて見守っているアルフ達は、自分達の範疇を超えた剣戟の世界に見惚れていた。恐ろしくも綺麗で、幻想的で、神話の再現のような現実離れた闘いに魅了されていた。隊舎を護る、と言う自分達の目的を忘れてしまう程の圧倒的美しさだった。

仲間が見守る中、セイバーとオルタは剣戟の嵐の中心で黒龍と剣を交える。顔、首、心臓等の急所を狙った攻撃は、両手の聖剣によって阻まれ、力押しでも負けてしまう。

この戦況は、セイバーとオルタにとって予想外だった。二対一でありながら、まだ一太刀も浴びせていない。逆に二人は鎧に傷を付けられ、下に着込んだドレスも所々斬られて破れ、身体には斬り傷を受ける。

このままでは勝てない。そう悟ったセイバーは、魔力放出により衝撃波を生み、オルタと共に後ろに跳んで離れた。

紅い瞳で引いた二人を見て、黒龍は余裕の笑みを浮かべる。

「どうした……？ もう終わりか……？」

セイバーとオルタは、答えない。

二人の態度が癪に障ったのが、黒龍は初めて笑みを崩して顔を顰めた。

すると、セイバーが口を開いた。

「あまり、マスターに負担をかけたくは無かったです……」

「フンツ……！ 負けて消えては、元も子も無い……！ もっとも、負ける気など無いがな……！」

二人の言葉に、黒龍は訝しげに目を細めた。

突如、二人の体に膨大な魔力が駆け巡り、全身から青と黒の魔力を迸らせる。溢れ出る魔力は風となり、二人を中心に強く吹き荒れ

ていた。その強大な魔力は、相手を押し潰しそうな程の威圧感を持っている。並の相手なら、情けなく尻餅をついているだろう。

セイバーとオルタの変化に、黒龍は目を見開く。その圧倒的な魔力に、思わず一步後ずさってしまった。

強敵を前に、二人の騎士王は、普段は抑えている魔力供給の量を増やして、真の実力を発揮出来る状態となったのだ。力を抑えた状態では、黒龍は倒せない。

力を解放したオルタは、背筋が凍るような妖しく、冷たい笑みを浮かべた。

「フツ……。全力を出すのは、初めてだな……！」

デイドと闘った時も、実力の半分も出してはいなかった。

そしてセイバーも、魔力供給の量が増えた事で、更に力を上げている。

一気に力が膨れ上がった二人の騎士王を前にして、黒龍は歯を食いしばり、顔色を悪くする。セイバーだけでなく、オルタもこれ程の実力を持っていたのは誤算だった。

動揺する黒龍の前で、オルタは黒剣を振るった。瞬間、風圧が起こり、硬い地面が斬れて溝が出来た。直接接触せずに地面に傷を付けたオルタに、アルフ達は目を丸くした。

全力解放した二人の騎士王が、改めて剣を構える。

「全力で二人掛かりとは、些か気が引けるが、仮にもマスターに仕えるサーヴァントでな。マスターを護る為に、確実に貴様を殺すつ

……！」

「行きますよ、黒龍……！ 力を解放した私達は、先ほどのようにはいきませんっ……！」

力を全力解放したオルタとセイバーが、地を蹴って反撃に出た。

黒龍を険しい顔で歯噛みしながら、聖剣を両手に迎え撃つ。

そして再び、宝具同士の激しい剣戟演武が始まった。セイバーとオルタが同時に剣を振るい、黒龍が両の剣で受ける。瞬間、先ほどとは比べ物にならない衝撃が剣を伝って、腕から上半身に走った。甲高い衝突音は耳を痛める雷鳴の如く、三人を中心に吹き荒れる剣圧は嵐のように、発せられる火花は稲妻のような強烈な閃光を発する。一撃の重さに、黒龍は歯を食いしばり、より一層表情を険しくさせた。

白い閃光と黒い閃光が、闇夜を奔り、黒龍は二本の聖剣で受けて、捌き続ける。形勢は完全に逆転していた。セイバーとオルタの猛攻は、獲物を狩る猛獣なんてレベルでは無い。自分以外の全ての生物の命を喰らう、圧倒的な幻想獣トラクション 龍の牙のようだ。黒龍の命を刈り取らんと、龍は牙を剥いて襲い掛かる。

防戦一方となる黒龍だが、それでも二人の剣戟を防いでいた。セイバーの動きを『イメージ』で再現した上に、強化を施し、全神経を研ぎ澄ませて挑んでいるが、力の差は歴然だった。致命傷こそ避けているが、着ている黒いドレスは所々破れ、身体には斬り傷を作って紅い血を滴らせている。傷を増やしていく黒龍の顔が、身を焦がさんばかりの憎悪で歪んでいく。しかし、止まらぬ猛攻を受け続ける中では、相手に憎しみの言葉をぶつける事さえ出来ない。左右の目で二人の騎士王の動きを追い、両の聖剣で剣戟を防ぐので精一杯だった。しかしながら、一人で二人の騎士王を相手に致命傷を負わずにいるのは、見事と言う他に無い。

だが、いくら防ぎ続けても、勝負には勝てない。攻撃を受ければ受ける程、黒龍の中で憎悪が膨らんでいった。

「おのれエエエエエエ！ ならば、力だつ………！」

渾身の一振りですえイバーとオルタの聖剣を弾き、一瞬にして後ろに跳んで距離を離れた。

二人の騎士王を憎悪と怒りの形相で睨み、二振りの聖剣を頭上に高く掲げる。

「隊舎もろとも、貴様等を消し飛ばしてくれろっ……！」

膨大な魔力が聖剣に集まり、輝かしい黄金の光を放つ。追い詰められた黒龍は、真名を唱えて宝具を解放するつもりだ。漆黒の身でありながら、その手に持つは神々しい輝きを発し、暗い闇夜を照らす聖剣だ。

受けてセイバーとオルタも、同じように聖剣を上段に構える。

「いいでしょう……！ ココでなら、隊舎や街の被害を気にせず、私達も宝具を使用出来るっ……！」

黒龍の向こう側に広がるのは、綺麗な夜空を映した広大な海だ。街を焼き尽くさん威力を誇る宝具を放つても、仲間や人々を巻き添えにする心配は無い。こちらも、全力の一撃を放てる。

「王を愚弄した罪……その身で償ってもらっぞ……！」

オルタとセイバーが天に掲げた二振りの聖剣に、魔力が溜まり、膨れ上がっていく。聖剣から放たれる輝きは、神秘的で、見る者全てを魅了する幻想的な美しさを持っていた。星によつて鍛えられた聖剣は、その輝きに匹敵する光を、黒く塗りつぶされた黒剣は、禍々しく恐ろしい“恐怖”を具現化したような光を発する。

そして、遂にミッドの地で、伝説の聖剣が解き放たれた。

「約束された」

三人は連動してるかのように、同時に動き、

「勝利の剣^{カリバー}

っ！」

全てを切り裂き、無に帰す光の刃が夜空を照らして一直線に翔ける。究極の剣同士が激突し、地震のような揺れを大地に起こす。魔力と魔力、光と光、音と音、ありとあらゆる力の要素と現象がぶつかり合い、押し合い、大型台風のような強風を吹き荒らし、千の稲妻のような強烈な閃光を発する。その荒れ模様は、まるで人知を超えた聖戦を人間に見せないようにする為の、神が敷いた壁のようだった。事実、アルフ達は閃光に目を閉じ、強風に吹き飛ばされないように踏ん張っている事で、精一杯だった。目の前の聖戦を見る余裕など、微塵も無い。

他者が目撃する事すら許されない聖戦は、長くは続かなかった。激突の光は収まり、強風も無くなり、聖戦の場は濃い煙が立ち込めていた。アルフ達は顔を上げ、目を開いて、晴れていく視界に人影を捉えた。

見えてきたのは、セイバーとオルタだった。

二人を見た瞬間、アルフは笑顔で弾かれたような声を上げた。

「セイバー！ オルタ！」

「あの二人……もはや、次元違いの強さだっ……！！」

十年前の防衛プログラムとの闘いで、ザフィーラ達は一度セイバーのエクスカリバーを見ている。そして今回、街一帯を更地に変えてしまいそうな程の威力同士の激突を目にして、改めてセイバー達の強さを実感した。

シャマルも同様で、二人が味方で良かった、と心底思った。

安堵する三人だったが、セイバーとオルタの顔は険しいままだ。

二人の様子を怪訝に思い、もう一度アルフは声をかけてみた。

「セイバー！ オルタ！ どうしたん……」

「まだです……！」

「え……？」

声を遮ったセイバーの言葉に、アルフ達は訝る。

セイバーとオルタは、静かに剣を構え直し、ジツと煙の中を見つめる。エクスカリバーは、確かに黒龍のエクスカリバーを破り、本体に当てた。手応えもあった。

だが、終わってはいない。寧ろ、始まりに過ぎなかった。

次の瞬間、突如強風が吹き荒れ、煙を吹き飛ばした。その中から現れたモノを見て、アルフ達は愕然となる。

一同の前に姿を現したのは、“魔王”だった。

「礼を言う、ぞ……！ 騎士王達、よ……！ お前達のお陰、で……
…我は、唯一無二の、『力の究極体』となった……！」

魔王（後書き）

作者コメント

戦闘描写、む・ず・か・し・いいいいいいいい！

もう嫌っ！ 戦闘描写嫌いっ！ 頭の中で映像を浮かべても、ソレを上手く文章に書けん！ きいいいいいいいいいい！

……取り乱して、すいませんでした。でも、読者の方からお褒めの言葉を頂きましたので、少し落ち着いたと言いますか、安心した感じです。

そして防衛プログラム……まだまだ死なんぞ〜！

隼樹が宝具を再現出来ない理由は、ちよつと無理矢理と言いますか、強引な感じになっちゃいました。ジユエルシードで再現するには、

『ランクが高過ぎる』『人々の想念の蓄積である』の主な理由は二つです。後者は、エクスカリバーのみかな？

では。

大敗（前書き）

後書きの『作者コメント』も、よければ覗いてくださいな。

*

セイバー達の前に立ちはだかる
防衛プログラム！

闘いの果てに待ち受ける結末とは！？
『魔王降臨篇』 衝撃のクライマックス！

大敗

魔王。目の前に現れたモノを言い表すなら、コレ以外には無いだろう。

隊舎の高さを大きく上回る巨体は、相手に圧倒的存在感と威圧感を与える。顔は悪魔染みた髑髏むくろのようで、生物の死を表した恐ろしい形相だ。灰色の巨体は筋肉の塊のようで、雄々しく盛り上がった。一本一本が丸太のような太い指先には、死神の鎌のような黒く鋭い爪が伸びていた。

巨大な髑髏状の顔の額には、裸の女性の上半身が生えている。紫色に塗られた素肌に、腰まで届く長髪は銀色に輝いていた。前髪は綺麗に切揃えられたお姫様カット、瞳と唇は紅く塗られた人外の妖艶さを醸し出す美顔、胸部に異性の性欲を刺激する大きな乳房を晒した美しい肉体を誇る美女の姿をしている。

額の女性が、妖しく、美しい声を出した。

「ふふ……！ 素晴らしい……！ コレこそ、この姿こそ、我が長年求め続けていた、『力の究極体』だ……！」

異性を虜にするような魔性の笑みを浮かべ、額の女性は喜びを表す。どうやら、額の部分の女性が本体のようだ。

「な……何なんだい、アレは……？」

怪物を見上げるアルフの顔は蒼ざめ、声が震えていた。側に立つザフィーラとシャマルも同様で、圧倒的恐怖に支配された身体は身動き一つ取れない。

アルフの問いに、怪物の額に居る女性が答えた。

「我こそが、防衛プログラムだ……！ 二人の騎士王が倒したのは、謂わば“感情”と言う余分な要素モを持った、人間に近い肉体だ……！ 我は、その肉体と言う抜け殻から出た、“力そのもの”……！ “力そのもの”である我こそが、貴様等が防衛プログラムと呼ぶ存在だっ……！」

かつて、遠い昔、まだ『闇の書』が『夜天の書』と呼ばれていた時代に、一人の主が居た。歴代の主達の中で、彼はいつしか数多くの魔法を記録した魔導書の魅惑とに憑り付かれ、人間が誰もが持つ欲深さをゆり起してしまった。この強大な力を自分の物として扱いたくなり、更なる力を求め、魔導書を改造してしまう。結果、魔導書は主の命さえ奪う『闇の書』と化し、主は己の欲深さに憑り殺されてしまった。残された魔導書は、力を蓄え続けた。主の改悪によって自我を持ち、変貌した防衛プログラムは、力を求め、究極の存在になろうと転生を繰り返していった。

そして時は流れ、隼樹と言うイレギュラーな想像者と遭遇して、並外れた力を手にした防衛プログラムは、ついに念願だった『力の究極体』に進化したのだ。セイバーとオルタは、黒龍を倒す代わりに、最悪な魔王を解き放ってしまったのである。

「人間への復讐など、くだらない……！ 我にあるのは、究極の存在となり、世を支配すること……！ それだけだ……！ 究極の力を得た我は、全てを闇で覆い尽くし、支配する魔王サタンとなったのだっ……！」

言つや否や、変貌した防衛プログラム サタンは、巨大な右手を夜空にかざした。直後、『イメージ』によってエクスカリバーを造り出す。しかも、今度のエクスカリバーは黄金の聖剣では無く、漆黒に染められた黒剣だった。

自分の剣を再現され、オルタは不快感と驚愕の感情を混ぜ、目を見開く。

「何っ……！？」

「いけないっ！」

一方でセイバーは、サタンが起こす行動を察して、宝具を放つ準備をする。聖剣に魔力を溜めながら、セイバーは後ろに顔を向けて叫んだ。

「アルフ！ ザフィーラ！ シヤマル！ ナンバーズを抱えて、急いで私達の後ろにつ……！」

「えっ……？ あ、ああ……！」

血相を変えた余裕の無いセイバーの顔から、ただならぬ危険を察したアルフ達は、言われた通りにデイドとオットーを担ぎ、急いでセイバー達の元に駆け付けた。

セイバーの隣では、オルタも同じように剣を構え、一撃を放つ準備をしていた。

そして、アルフ達がセイバー達の後ろに着いた時だった。

「約束された」

三本の聖剣が、

「勝利の剣　　っ！」

同時に解き放たれた。

サタンの振り下ろされた黒剣から、全てを飲み込み、無に帰さんとする文字通りの闇が、邪悪な魔力の奔流となって迫る。

セイバーとオルタも、迎え撃つと言うより、防ぐように聖剣を解放した一撃を放つ。黄金の刃と漆黒の刃が一つとなり、迫りくる邪悪な刃と激しく衝突する。

純粹な力と力の激突で、隊舎の敷地に二度目の災害のような強風と閃光を起こす。一度目と違うのは、二人の騎士王の刃が今回は盾のように、相手の刃を受けているところだ。

やがて風と光が収まり、身をかがめていたアルフ達は、顔を上げて目を開けた。瞬間、恐怖と驚愕に目を見開いた。

漆黒の奔流を防いでいたセイバー達と後ろに居るアルフ達、それから隊舎以外の物が、消えていた。隊舎の周りにあった森や施設が、跡形も無く消えて更地と化しているのだ。先ほどまであった物が消えてなくなった光景に、アルフ達は衝撃を受けて、顔が真っ青になる。恐怖に駆られ、小刻みに体が震えている。

「くっ……！」

何とか一撃から仲間達と隊舎を護ったセイバーとオルタだが、表情は険しく、冷や汗を流している。

二人共、既に黒龍との戦闘で宝具を使って魔力を消費していた。更に、サタンの黒いエクスカリバーはオルタの物で、『イメージ』による強化も施されて威力が増大しており、押し返す事は不可能だった。

しかも、二度目の宝具解放で、またも魔力を消費してしまった。最悪だが、反撃して倒す余力は無しに等しい。

凶悪なエクスカリバーを撃ったサタンは、目の前に広がる絶大な威力による『絶望の光景』に、満足そうに笑った。

「ふふふ……！ 良い景色だっ……！ いずれ、ミッドチルダも……そして、次元空間に存在する全ての世界が、こうなるのだっ……！」

自分が手に入れた強大な力に嬉々として笑うサタンの前で、セイバーとオルタは刃を向けて構える。

魔力を消費した現時点では、サタンを倒す事は出来ない。しかし、だからと言って退く訳にはいかない。機動六課隊舎コクを護るように、マスクマスケルから頼まれているのだ。サーヴァントとして、騎士として、この場は全力で死守する。

しかし、そんな二人の意思を嘲笑うかのように、サタンは二本目の黒いエクスカリバーを左手に握った。更なる力を手にして、サタンは妖艶な笑みを浮かべる。

「さて、聖王の器をいただくのでしょうか……！」

サタンの目的は、あくまで聖王のゆりかごを起動させる、セイザ聖王の器イオを奪う事だった。

*

数分後。機動六課隊舎は、燃え盛る炎に包まれていた。

オレンジ色の炎に囲まれ、損壊した隊舎の中には、傷付き倒されたプレシア、アリシア、その他の局員の姿があった。外では、傷だらけのセイバー、オルタ、アルフ、ザフィーラ、シャマルが倒れている。彼女達に敗れたデイドとオットーの二人も、側で意識を失っていた。

敗者の姿を眺め、満面の笑みを浮かべるのはサタン。

そして、サタンの横に、もう一人ナンバーズが居た。

「いや〜ん！ サタン様あ、その姿お素敵です〜！」

？4のクアットロが、豹変した防衛プログラムの姿に感激していた。巨体の魔王を恐れた様子は、全く無い。

そんな彼女の腕には、気絶してるヴィヴィオが抱えられていた。サタンがセイバー達を倒した後で、安全に回収したのだ。

髑髏顔の額に生えた女性が顔を向け、クアットロに確認した。

「ソレが、ゆりかごを動かす鍵なのだな？」

「はい。コレでようやく、私達の楽園を築くことが出来ますわ」

丸眼鏡の奥の目を細め、クアットロは不気味に笑った。

目的の物は手に入れ、破壊した隊舎を後にしようとした時だった。ふとクアットロが、何かを見つけた。

「あら？ アレは……」

「ん……？」

クアットロの視線を辿り、サタンも巨体を返して見た。

更地と化した地に、人影があった。トーレ、セツテ、フェイトを抱えた隼樹だ。セイバー達の宝具使用を感じて、駆け付けたのである。六課に辿り着いた隼樹は、変わり果てた光景と倒れたセイバー達を目にして、衝撃を受け、愕然とした顔で立ち尽くす。

抱えられてるフェイトも、隊舎の惨状を見回して、目に涙を浮かべる。

そして、この惨劇を起こした主と思われる怪物を、怯む事なく射抜くように睨んだ。

「お前が……お前がやったのか……！？」

「だとしたら、どうする……？」

サタンは見下しの笑みで、フェイトを見る。魔力が無ければ、向かってくる事さえ出来ないだろう。

確かに、魔力を使い切ったフェイトは、何も出来ない。だが、もう一人、怒りに打ち震える者が居た。その男は、爆発寸前の怒りを抑えて、抱えてる三人をゆっくりと地面に降ろした。そして、ポケットから二つのカートリッジを掴み取る。

今の隼樹の中では、恐怖よりも怒りが上回っていた。

「テメエ……」

拳を握り、カートリッジがミシミシと軋む。顔を上げ、怒りの形相でサタンを睨んだ。

「何やってんだ、テメエエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

マグマのように煮えたぎった怒りを爆発させ、カートリッジを握り潰した。

「カートリッジ！ 『パワーイメージ』！」

二個分のカートリッジ内の魔力を取り込み、隼樹は急激に力を増幅させ、『イメージ』で身体能力を飛躍的に上昇させた。

そして地を蹴った隼樹は、一瞬にして巨体のサタンの前に高速移動した。

十年前とは違う隼樹の動きに、サタンは一瞬ギョツとなる。その隙に隼樹は、

「ボムナツクルっ！」

怒りを乗せた鉄拳を、サタンの巨体に叩き込んだ。

「力の差も解らんゴミめ……！　だが、我が究極体になれたのは、貴様と言う存在が手助けになったのは事実……。ならば、感謝の念をこめて、この刃で消してやろう……！」

巨大な手が握るのは、黄金の輝きを持つ、セイバーのエクスカリバーだった。

「愛する女の剣で殺されるのなら、本望だろう……？　はははははは……！」

「やめろ……！　お願い、やめてっ……！」

悲痛な想いで、フェイトは必死に訴え、懇願する。心の底には、助けに行けない自分の無力さを憤っていた。

しかし、どんなにフェイトが必死に訴えても、サタンは死へと誘う手の動きを止めない。

そして、サタンがエクスカリバーの刃を振り下ろした時、夜空に黄金とは別の光がさした。

「デイベイイイイイン、バスタアアアアア！」

桜色の閃光が夜空を照らしながら翔け、聖剣を振り下ろす腕を弾いた。

着弾した箇所から煙が上がリ、腕は動きを止める。サタンは顔を向け、砲撃が発射された場所を見る。

地上に居るフェイトも、見覚えのある砲撃に、弾かれたように上空を仰いだ。

星々が輝く夜空の下に、レイジングハートを構えたなのはが居た。限定解除によって、エクシードモードに姿が変化している。

「なのはっ……！」

頼もしき友の救援に、フェイトは嬉し涙を流す。
フェイトを一瞥した後、なのはは険しい顔でサタンを見た。

「隼樹さんから、離れなさい……！」

怯えが、全く無い訳では無い。しかし、だからと言って、大切な人達を見捨てるような事は、絶対にしたくないのだ。なのはの瞳には、仲間を護ろうとする、強い意思が宿っていた。

なのはの態度を見て、クアットロは不愉快そうに顔を顰めた。サタンを前にして、怯えず退かず、立ち向かおうとすらしそうな、なのはの態度が気に喰わないのだ。不屈の精神だとか、友情だとか、反吐が出る程に嫌いなタイプである。

「どうしますう、サタン様々？ 私の力で、プチッと潰しちゃいましようか？」

管理局のエース・オブ・エースを前にして、クアットロのこの余裕。

しかし、サタンはかぶりを振った。

「いや、今回は引こう……！ 目的の物は手に入った……！ それに、どうせ奴等を潰すなら、より大きな絶望を与えてからの方が良いだろう……！」

「そうですね〜！ 素敵なお考えですわ〜、サタン様々！」

二人の会話を聞いていたなのはは、クアットロの腕に抱えられているヴィヴィオに気付いた。

「ヴィヴィオっ！」

すぐさま飛んで奪い返そうとするが、相手の行動の方が早く、サタンの『イメージ』で離脱されてしまった。

残されたなのはとフェイトは、何も出来なかった悔しさに、胸を苦しめ、歯を食いしばって涙を流した。

その後、ヴィータとリインフォースが、航空戦力のゼストに撃墜された報告を受け、本部と機動六課の襲撃事件は、終結した。

大切なモノを傷付けられ、奪われ、“大敗”と言う苦汁を味わった。

黒龍 VS セイバー、セイバーオルタ。

勝者、セイバー、セイバーオルタ。

サタン VS セイバー、セイバーオルタ、隼樹。

勝者、サタン。

大敗（後書き）

作者コメント

モンスターは好きな方の赤夜叉です。スカリエッティ側に、“純粋な悪”のような敵を置こうと考え、防衛プログラム最終形態“サタン”を出しました。イメージ的には、『ドラゴンボール』の某魔人のように、善と悪が分離したようなモノです。と言っても、黒龍は善ではありませんが。ちなみに、サタンの髑髏顔の額にある本体の女性は、原作アニメの防衛プログラムの怪物の頭部に生えている女性モデルになってます。あのキャラデザインは、個人的に好きなので。人外キャラ好きです。

次回から、最終篇『逆襲英雄篇』のスタートです！

そろそろドゥーエ出したいなあ。彼女に課せられた任務が任務なだけに、出すタイミングが……。最終篇では、出番多くするぞ〜！

うん、出来たらいいな〜。

そして、ゼストも出てない。……別に、イジメじゃないよ？
では。

再起

襲撃事件から翌日。

聖王医療院には、昨日の襲撃で負傷した六課の局員達が入院していた。シャーリーを始めとする管制官は、留守を預かった六課を護れなかった事を嘆き、プレシアとアリシア達もヴィヴィオを護れなかった自分の無力さに憤り、涙した。無事だった他の局員は、現場調査の手伝いに向かったりと仕事に就いている。ずっと怪我人の側に着いてる訳にもいかないが、何よりジツとしていられる心境では無かった。

そして、別室に一人の男が眠っていた。頭に包帯を巻いた男は、静かに瞼を開いた。目に映ったのは、知らない天井だ。男は寝起きで、頭がぼんやりとしていた。

ココは何処なのか、と疑問を抱いた時、横から名前を呼ばれた。

「ジュンキ！」

「隼樹さん！」

二人の女性に呼ばれ、ベッドに横になっている男　葉谷資隼樹は、顔を声の主に向けた。

ベッドの横に座って、こちらの様子をうかがっているのは、セイバーとカリムの二人だった。

意識がハッキリしてきた隼樹は、二人の姿を見て、ベッドから上体を起こす。

「セイバー！　それに、カリムさんまで……！　いつつ……！」

「ジュンキ！　大丈夫ですか！？」

「まだ横になっていて下さい！　今動かしては、身体に障ります！」

痛みを訴えた隼樹に、慌ててセイバーとカリムが近寄る。カリムは、隼樹が倒れた事を聞いて、教会からコツソリ抜け出て、医療院に隼樹の見舞いにやってきたのだ。

隼樹は身体だけでなく、頭も少しフラつく感じだった。医者から容態を聞いたカリムによれば、脳に負担がかかっているらしい。最近は、『イメージ』の使用回数が多かったので、ソレが原因だろう。長時間で無くとも、回数が多かったり、一回の『イメージ』が強力だったりすると、脳に大きな負担をかける結果となる。しばらくは、『イメージ』を使う事を止めるよう言われた。なので、『イメージ』による傷の回復も駄目と言う事になる。

身体の方も、サタンから受けたダメージとカートリッジを使用した反動で、二、三日安静にしてる必要があると言われた。

自分の状態を聞いた後、隼樹はセイバーとカリムに状況を尋ねた。二人は険しい顔で、重い口を開いて伝えた。倒した黒龍から、サタンと言う新たな防衛プログラムが誕生したこと。そのサタンに敗れ、隊舎を損壊されて、ヴィヴィオを連れ去られてしまったこと。ヴィータとリインフォースが撃墜されたこと。全てを話した。

六課が倒したナンバーズは、ギンガが所属している陸士108部隊で身柄を預かっている事も伝えた後、セイバーは言った。

「申し訳ありません、ジュンキ……！ 貴方から、隊舎やヴィヴィオ達を護るよう任されていながら、このような結果になってしま……！」

己の無力さを悔むように、セイバーは下唇を噛んだ。サーヴァントとして、マスターの命を護れなかった事に憤りも感じていた。騎士にとって、主との誓いを破るのは死に等しい恥なのだ。

しかし、隼樹は申し訳なさそうに頂垂れるセイバーに、かぶりを振った。

「いや、セイバー達は悪くない……。皆の為に、必死に闘ってくれたんだから……」

そう、一番悪いのはセイバー達では無く、奪い去ったサタンである。

隼樹の脳裏に、出発間際にヴィヴィオが見せた笑顔が、過った。あんな無邪気に笑う少女を、ワザと攫わせようと考えていた過去の自分を殴ってやりたいと思った。ヴィヴィオを連れ去られ、隼樹の胸中には、怒り、悔しさ、憎しみが激しく渦巻いていた。感情を内に溜め込んで、固く拳を握り締める。

その様子を見て、カリムは表情を曇らせた。情けない事に、励ましの言葉一つ出てこない。これまで自分は、隼樹に沢山励まされてきたと言うのに。

すると、セイバーが隼樹に身を寄せ、そつと握り拳に手を添えた。

「貴方一人が背負い、溜め込む必要は無いのですよ……！ 病室ヨクには、私達以外に誰も居ません……」

セイバーの声を聞き、腹の底に溜めていた感情が込み上げてきた。歯を食いしばり、顔を上げて天井を仰いだ。

「悔しい……！」

涙こそ流さないが、大きく口を開き、感情を声にして出す。

「悔しいっ……！ 悔しいイイイイイ……！」

感情を解放して、病室に声を響かせる。サタンに手も足も出せずに敗れた悔しさ。セイバー達を傷付けられ、自分に笑顔を向けてくれたヴィヴィオを攫われた怒り。ソレ等の感情がごちゃ混ぜになっ

た感情を、腹の底からぶちまける。

サタン……！ サタン……サタン……！ ふざけた名前しやがって、何様のつもりだ……？ ちくしょう……！ 負かせてやる……！ 這わせてやる……！ 必ず……！ 次は、俺達が勝つ……！

手を添えたまま、傍に居るセイバーはマスターの声を聞き、戦意を奮い立たせた。

マスターの叫びを、部屋の外の廊下に佇んでいるセイバーオルタとアリスも聞いていた。無言で腕を組み、静かにマスターの病室の入り口を護っている。

敗者の咆哮と再起の叫びは、しばらく続いた。

内に溜め込んでいた感情をぶちまけて、隼樹は息を吐いて気を落ち着かせる。

傍で隼樹の気持ちを肌で受けていたセイバーが、声をかけた。

「気分はいかがですか？」

「ああ……ちょっと、スッキリした感じかな。ありがとう」

「いいえ」

隼樹が立ち直れた事に、セイバーは安心して微笑んだ。

二人のやり取りを見ていたカリムは、隼樹が元気になった事を喜ぶ半面、彼の心の支えとなっているセイバーを少し羨ましく思っていた。ソレは、嫉妬にも似た感情だった。長年の付き合いで、セイバーが隼樹にとって特別な存在なのは解っている。だが、頭では理解出来ても、感情面はそうはいかなかった。

ふとカリムは、何故自分が、セイバーに対してこんなにも嫉妬しているのか疑問に思った。何だか、自分の所有物を奪われたような感覚と似てるのだ。妙に胸が苦しくなり、自分でもよく解らない気

持ちに、カリムは困惑していた。

その一方で、隼樹は今後の行動について考えていた。ヴィヴィオがスカリエツィ側に奪われた以上、ゆりかこ浮上は確定と言えるだろう。昨日の襲撃事件で、大半のナンバーズは既に確保しているならば、フォワードの四人を街の護りに当てなくても大丈夫だろう。いや、駄目だな、と考え直す。セイバーが言うには、隊舎を襲撃したガジェットは性能が向上しており、防衛プログラムの怪人も強くてアルフ達は苦戦していたそうだ。そんな厄介な軍団の進攻を、局の並の魔導師隊で食い止められる訳が無い。やはり、街の護りに着かせるべきか。反撃に関しては、チンク達からスカリエツィのアジトは聞き出せただろうから、主力を引き連れて奇襲染みた殴り込みを仕掛ければいい。

決戦に関しては一旦考えを打ち切り、隼樹は別の問題を解決しようと思った。

「カリムさん」

「はい。何でしょうか？」

「ちょっと、お話したい事があります……」

真剣な表情の隼樹に、カリムも自然と表情を引き締めて対応した。隼樹は、スカリエツィの事や彼が起こした事件の知る限りの真相を、カリムに語った。スカリエツィが、アルハザードの技術で生み出された異端の科学者であること。彼を生み出したのが、時空管理局を創設して、局のトップに腰を据えている最高評議会の三名であること。スカリエツィやナンバーズも、皆、身勝手に歪んだ正義の犠牲者であること。全てを打ち明けた。

管理局と関係の深いカリムにとって、隼樹から明かされた事實は衝撃的だった。ミッドの住民にとって信じ難い内容だから、無理もない。正義を掲げる組織のトップがテロの黒幕などと、誰が思うだろうか。

目を見開き、動揺して僅かに顔色を悪くするカリムに、隼樹は声をかけた。

「信じられないのは解りますけど、事実です……！」

「……恐ろしい話ですね」

カリムは胸に手を当て、深呼吸をして落ち着こうとする。吸って吐いてを繰り返して、幾分か動揺が収まった。

「……証拠はあるのですか？」

「いえ。今のところ、物証も何もありません。けど、その証拠を入手出来る人に、心当たりはあります……！」

「そうですか……」

「信じてくれますか……？」

こんな事、聞いてすぐに信じられるモノでは無い。今まで信じてきたモノが、間違いであったと言われてるようなモノだ。

隼樹が訊くと、カリムは口を開いた。

「出来れば信じたくはありませんが……ソレが事実ならば、見過ごす訳にはいきません……！ それに、隼樹さんが言うのであれば、きつとソレが真実なのでしょう……！ 私は信じます……！」

自分を励まし、心の拠り所となってくれた隼樹を、疑う事など出来なかった。カリムは、隼樹を信じる事にした。

カリムの信用を得て、隼樹は笑顔になる。

「ありがとうございます！」

「それで、私は何をすればいいのでしょうか？」

「カリムさんには、とりあえず今はナンバーズの保護に力を貸して

下さい。それから、この事をカリムさんの方から、クロノ君に伝えて下さい。こつちで最高評議会の悪事の証拠を掴んだら、クロノ君に渡して世間に暴露して貰います。全てを白日の下に晒して、最高評議會を蹴落としてやりたいんで……！ 前にも言いましたけど…… 管理局側の二人には、厳しい役目になりますけど……」

協力には感謝しているが、同時に申し訳なく思っていた。自分達が属する組織を、窮地に追い込む危険で損な役回りを頼んでいるのだから。

しかし、カリムは微笑みを浮かべて、かぶりを振った。

「いいえ。悪者を捕まえるのが、管理局のお仕事ですから……！」

カリムの優しさに、隼樹は少し救われた。

「すみません」

「あの、一つ訊いてもいいでしょうか？」

「はい。何ですか？」

「先ほど仰っていた、証拠を入手出来る人とは、何者なんですか？」

尋ねられた隼樹は、少し逡巡した。協力してもらうのだから、少しくらいは話しても構わないだろう。自然と声を抑えて、隼樹は話した。

「ココだけの話なんですけど……相手は、管理局に潜入してるスクリエッター味のスパイです……！」

「えっ……！？」

聞いたカリムは、目を剥いて驚いた。

そりゃあ驚くよな、と隼樹は思った。企業スパイとか聞くが、他

の会社では『まさか自分のところには』と言う意識が殆どだ。管理局も、その例に漏れていないらしい。もし、過去に教会にも潜入していた事を話したら、どんな反応をするだろうか？ きっと、更に驚いたリアクションを見せるだろう。

しかし、今は弄って他人の反応を楽しむ余裕など無い。

「スパイの方は、俺達の方で見つけます。あまり遅くなると手遅れになりかねないんで、今からでも……」

「ですが、ジユンキ。まだ安静にしていなければ……」

「派手な運動しなければ、大丈夫だよ」

隼樹が答えると、セイバーは呆れて溜め息をついた。隼樹がたまた無理をする事は、サーヴァントであるセイバーも知っている。言っても止まらない事も。

「あの……」

タイミングを図って、カリムが遠慮がちに声を上げた。

「防衛プログラム……サタンに対しては、どのように迎え撃つおつもりですか？」

カリムが、最大の問題を口にした。

隼樹の『イメージ』だけでなく、セイバーとオルタの宝具まで使いこなすまでに強大になった防衛プログラムは、間違い無く強敵だ。生半可な攻撃は通じないだろうし、数で攻めれば何とかなるような相手でも無い。

一応、対策は考えてある。だが、上手くいくか正直、隼樹にも不安だった。

「防衛プログラムに関しても、一応対策は考えてあります……。だから、証拠の件を済ませた後で、ダメ元で当たってみようと思います……！」

「当たる……？」

隼樹の言葉に、カリムとセイバーは怪訝そうに首を傾げた。

難しい顔をしてる隼樹の脳裏に、ある男のシルエツトが浮かんだ。

自信なんて無いけど……出来る事なら、引き入れたい……！

あの英雄王おとこを……！ 俺達の勝ちを具現化させる為に……！

隼樹の『イメージ』とセイバーとオルタの約束された勝利の剣エクスカリバーを得て、『力の究極体』を自称したサタン。

しかし、彼女は知らなかった。

聖剣の中でも頂点に立つエクスカリバーさえ上回る最強最悪の魔剣と、その担ぎ手である真の王 英雄王の存在を。

再起（後書き）

あのサーヴァントの登場フラグが立ちました。
次回は、あの懐かしのキャラが登場する予定です。原作アニメでは、
ホテル・アグスタで登場してましたが。

信用

決戦の対策は一先ず置いて、隼樹はまず、最高評議会を蹴落とす準備に取り掛かった。

この策には、管理局に潜入しているナンバーズの？2、ドゥーエの協力が必要不可欠となる。スカリエッティ一味の中で、唯一最高評議会と直接コンタクトを取り、ポッドメンテナンスマで行う彼女なら、最高評議会の悪事を証明する物ぶつを持っているはずだ。無ければ無いで、こちらには考えがある。とにかく、ドゥーエを何とか説得して仲間に引き入れ、協力を得られる状況を作るのだ。コレが上手いかなければ、いくら防衛プログラムを倒して、決戦に勝利してもナンバーズを完全に自由にする事は難しくなる。

そして、場所は時空管理局本局。

「いや、ホントに助かるわ、ユーノ君！」

「何言ってるんですか。僕と隼樹さんの仲でしょう？」

一時的に外出許可を貰った隼樹と共に本局に居るのは、ユーノ・スクライアだった。

伸びた髪をヘアバンドで後ろにまとめ、一本に降ろしている。眼鏡をかけ、顔に浮かべる爽やかな微笑みは好青年の印象を受ける眩しさだ。同じ眼鏡をかけている地味男あしむらとは、男としてのレベルが違う。

ドゥーエ搜索の為に、ダメ元で隼樹が呼んだのだ。セイバーやオルタ、機動六課の皆では目立ち過ぎてしまう。そんな大勢で搜索をすれば、ドゥーエは警戒して姿を消してしまう恐れがある。ソコで、六課には所属していないが、古い知り合いであるユーノに協力を煽いたのである。事情を聞いたユーノは、快く時間を空けて協力してくれた。

持つべきモノは、やっぱり友達だよな……！

無限書庫の司書長として忙しい身であるハズなのに、わざわざ時間を作って駆け付けてくれた友に感謝しつつ、隼樹はドゥーエ搜索の説明をした。

ドゥーエのISは、『ライアーズマスク』と言う変身能力だ。単に外見を変化させるだけでなく、綿密な身体検査さえ欺く超高性能である。あの騎士・ゼストでさえ、レジアス暗殺に居合わせていたドゥーエに気付かなかった程だ。

隼樹が知る限り、ドゥーエの姿は3パターンある。レジアスの秘書としてのピンク色の長髪をした局員。最高評議会のメンテナンス役であり、恐らく潜入任務の基本的変身姿である青緑色の長髪をした局員。最後は、ドゥーエの素顔である金髪の姿だ。この3パターンを手掛かりに、本局内に潜んでると思われるドゥーエを見つけ出す。

「分かりました。それじゃあ、二手に分かれて捜しましょう！」

効率性を考え、ユーノは手分けしての搜索を提案した。

そのまま搜索を始めようとした時、隼樹から待ったをかけられた。

「ちょっと待った、ユーノ君！」

「何ですか？」

「いや、その……二人で一緒に捜さない……？」

目を逸らして気まずそうに笑いながら、隼樹が言った。

「でも、固まってるより、別々に行動した方がいいと思いますよ？」
「うん。いや、それは俺も解ってるんだけどさ……」

何やら怯えの混じった様子で、隼樹は続けた。

「ホラ、ドゥーエって潜入任務に長けてるけど、同時に暗殺も得意にしてる訳よ。んで、もし、相手に気取られて、後ろからズバツと殺^やられたら……！ おおっ……！ 想像しただけで震えが起きやがる……！」

恐怖に駆られ、隼樹は小刻みに足を震わせた。

要するに、搜索の途中でドゥーエに襲われるんじゃないかと、ビビっているのだ。アニメとは言え、レジアスが彼女の固有武装で、背中からブツリと刺し殺された場面を観ている。ブツリと。なので、脳内でレジアスの位置を、自分に置き換えて恐がる事に拍車をかけていた。

隼樹の恐がる気持ちも、ユーノは解らないでも無かった。しかし、二人と言う超少数で、広く高い本局内を搜索するとなると、時間がかかってしまう。急ぎならば、ココは手分けして捜すべきだ。

安心させるように、ユーノは努めて優しい声で言った。

「大丈夫ですよ、隼樹さん。確かに、その点は不安かもしれませんが、本局内には沢山の局員が居ます。流石の彼女も、この大勢の人が居る建物内で暗殺等の騒ぎになる危険な行為はしないと思いますよ。死体の処理にも手間取るだろうし、下手をしたら自分も容疑者として睨まれるかもしれない。その、ドゥーエと言う戦闘機人が頭の良い女性なら、そんな明らかにリスクの大きな行為には走らないハズです」

ユーノは、冷静に考えた自分の意見を隼樹に聞かせた。流石、素で優秀な出来る男だ。同じ眼鏡でも、怯えているだけの隼樹とは違う。

話を聞いた隼樹は、一理あるな、と納得する。人混みの中では、相手も手が出せない状況なのは違う。

「それじゃあ、僕はこっちの方を捜します。何かあったら、念話で伝えて下さい」

「あ、ああ……」

隼樹を置いて、ユーノは先に捜索に動いた。

残された隼樹は、ユーノの根拠を聞いて幾らか不安が払拭されたものの、まだ若干怯えていた。セイバー達に『イメージ』の使用を止められているので、性格を変える事も出来ない。

ややあつて、隼樹は諦めの溜め息をついた。

「まあ、何とかなるだろう……」

開き直り、隼樹も捜索を開始した。

*

数時間後。

一通りの捜索を終えた二人が、本局の一角で落ち合っていた。

「み……見つからねえ……！」

両膝に手をつき、腰を屈めて疲労を表す体^{てい}で、隼樹が呟いた。

ユーノと分かれた階から、順に上に移動して捜した。空き部屋や物置、会議室等の入れる部屋は可能な限り中を覗き、女子トイレでは不審者と疑われるのを覚悟でしばらく身を潜めて出入り口を見張り、行き交う局員にも目を光らせたが、ドワーエの姿は見つからなかった。

ユーノの方も結果は同じで、全く見当たらなかったそうだ。広い本局内を捜し回ったので、二人共バテバテになっていた。息を切らす隼樹が、額の汗を拭って言った。

「くそお……！ 何で見つからねーんだ……？ まさか、俺の知ってる3パターン以外にも変身姿があるのか……？」

「その可能性も、無くは無いですね……」

流石のユーノも、動き回って息が上がっていた。司書長である彼は、肉体派では無いのだ。

落胆する隼樹の前で、ユーノはもう一つの可能性を考えていた。ソレは、ドゥーエが本局ではなく、地上本部に赴いている可能性だ。地上本部のレジアス中将の秘書にも就いていると言う事は、本部に居る可能性もあると言う事になる。

ユーノは、疲れ切ってる隼樹に、その事を言おうか迷っていた。さすがに今、打ち明けるのは酷なので、少し休んでからにする事にした。

「あの、少し休みませんか？ 病み上がりの体で、無理をし過ぎるのはよくないですから」

「あ、ああ……。そだね」

気を落とす隼樹は、素直にユーノの案に頷いた。

休憩室に向かおうと、二人は廊下を歩き出した。途中、本局に来る為の転送装置の前を通りかかる。

その時、転送装置が作動して、光り出した。誰かが本局に転送してくるようだ。何気なく歩みを止め、隼樹とユーノは光る装置を見つめた。たまにドアが開きかけると、不意に視線を向けてしまうアシである。

光が収まり、転送してきた人物の姿が見えた。

その瞬間、隼樹は目を見開いた。

「えっ……!?!」

「え?」

思わず上がった隼樹の声に、青緑色の長髪をした見覚えのある顔の女性局員が反応した。

転送装置で、二人の前に現れたこの女性局員こそ、数時間も本局内を回って捜していたドゥーエだった。

外に出てたんかアアアアアいつ!

内心にシャウトする隼樹は、頭を抱えて天井を仰いだ。

そこへ、ユーノからの念話が入った。

(隼樹さん! もしかして、この女性が……?)

(そうだよ! この人が俺達が捜してた、ドゥーエだよっ!)

コソコソと念話のやり取りをしてる二人に、ドゥーエは訝るように首を傾げた。

「あの、何も用が無いのでしたら、私は失礼しますけど……」

「ああああ! 待って下さい、待って下さい! すいません、用ありません!」

去ろうとするドゥーエを、慌てて隼樹は引き止めた。

ドゥーエを連れて、隼樹とユーノは本局にある一室に入った。シツカリと鍵を閉めた後、自分達以外に誰も居ない事を入念に確認してから、隼樹は緊張した面持ちで単刀直入に言った。

「ナンバーズのドゥーエさん……！ 貴女にお願いしたい事があって来ました……！」

「……私の事は、知っているようですね」

こちら側に確信する何かがあると思ったようで、ドゥーエはシラを切らずに、正体を認めた。それでも警戒心を持って、隼樹に尋ねる。

「それで、私にお願いとは何ですか？」

「その……最高評議会の悪事を暴く証拠を、用意してほしいんです……！ それから、最高評議会とレジアス中将の暗殺を止めて下さい……！」

「何故その様な事を……？」

鋭い眼差しを向けて、ドゥーエが問うてくる。

瞳には殺気にも似た威圧感がこもっており、直視を受ける隼樹は動けずにいた。ドゥーエと言う戦闘機人は、身内には優しいが、敵には等しく残酷と言う性格をしている。ウーノから隼樹の話を知っている可能性はあるが、だからと言って心を許した訳では無い。返答を誤れば、即刃が飛んできて喉笛を切り裂かれるかもしれない。

隼樹の隣に立っているユーノも、ドゥーエが危害を加えようと動いた瞬間に、対処出来るよう警戒して身構えている。

緊迫した重い空気の中で、隼樹は喉を鳴らして唾を飲み込んだ。

「そ、それは……ナンバーズの皆を、自由にする為です……！」

「私達を……？」

隼樹の答えに、ドゥーエは怪訝そうに目を細めた。しかし、目力は緩めていない。

「何故、私達の為に……？」

「……事件の真相を知った時、こんな認められないって思ったんです。自分等てめえらの身勝手な正義の為に、良いように利用した拳句、犯罪者扱いにして自分達は罪に問われない……。そんな事、俺は納得出来なかつた……。！ だったら、俺がぶち壊してやるうって決めたんです……。！ 幸い、俺には協力してくれる仲間が居て、情報もあります……。！ ソレを活かして、連中の目論みを潰して、今の地位から蹴落としてやるうって……。！ それに……。！」

語る内に、理不尽に対する怒りの感情が込み上げてきて、声に熱がこもってきた。考えるよりも先に、言葉が口から出てきていた。しかし、最後の方で一旦言葉を切る。正直、この理由は言わなくてもいいんじゃないか、と思った。

だが、感情的で熱くなった隼樹は、半ばヤケクソ気味に最大の理由を口にした。

「それに……。俺、ナンバーズの皆が、好き、ですから……。！」

途切れ途切れに答えた隼樹の言葉を聞いて、ドゥーエは目を丸くした。ソレは、彼女にとって予想外の返答だった。

傍で黙って聞いていたユーノも、弾かれたように顔を向け、驚いた様子をしている。

小さな動揺を胸に、ドゥーエは本人に確かめた。

「私達が好きだから、助けようか……。？」

「は、はい……。！」

答える隼樹は、恥ずかしさで顔を赤くして、ドゥーエから目を逸らす。とてもじゃないが、直視出来ない。

「本気で仰ってるんですか……？」
「はい……！」

視線は僅かに下を向けてるが、隼樹の答える声に迷いは無かった。相手の心を見定めるように、ドゥーエは隼樹を見据える。三人は口を閉ざして、部屋に沈黙が生まれた。

そのまま、どれくらいの時間が経ったか。一分か、三分か、緊張感が高まつてる隼樹には、正確な時間は計れなかった。不意に、ドゥーエが溜め息をついた。

「戦闘機人と知ってて好きになるなんて……貴方のような人を、物好きと言うのね。さすがの私も、少し本気で驚きました。それに、既にセイバーを始めとする四人の女性と関係を持ちながら、まだ求めるなんて……強欲もいいところですよ」
「うう……」

返す言葉も無く、隼樹は唸りながら項垂れた。顔の熱は上昇して、耳まで真っ赤になっている。

隣に居るユーノも、何と声をかけたらいいのか解らず、苦笑いを浮かべていた。
すると、ドゥーエが言った。

「解りました。貴方達に協力するわ」
「えっ……！？」

隼樹は弾かれたように顔を上げ、ユーノも驚きの表情を向けた。

「い、いいんですか……？」
「ええ。貴方の事は、アジトに居るウーノから聞いてます。信用に足る人物だと聞いてましたが、自分の目で確かめさせてもらいまし

た。理由は、意外過ぎる全くの予想外でしたが、声を聞いて、目を見て、私なりに見定めて、改めて信用出来ると判断しました」

「ドゥーエさん……ありがとうございます！」

頭を下げて言った隼樹のお礼の言葉に、ドゥーエは少し心が揺れた。変身して任務に就いてる間に、言い寄ってくる男共は居た。皆偽りの姿に惑わされ、その様は、まるで光に群がる羽虫のようだった。ソレが、ドゥーエには酷く滑稽に見えた。自分が戦闘機人だと知れば、きつと態度を翻して恐れるだろう。

しかし、隼樹は違った。戦闘機人である自分達を好きだと本気で想い、“本当の自分”に対してお礼を言ってきた。彼女にとって、“本当の自分”にお礼を言ったのは、姉妹やスカリエッティ以外では隼樹が初めてだった。

ドゥーエは、以前にウーノが彼と接触した際に抱いたモノと同じモノを、感じていた。

不意打ちをされたようで、一瞬動揺が顔に表れたが、すぐに表情を引き締めた。

「それで、私に対する要求は、最高評議会の悪事の証拠の入手……！ それから、彼等とレジアス中将の暗殺を中止にする……この三つでよろしいですね？」

「はい！ それでお願いします！」

ドゥーエの協力を得られた事が嬉しく、隼樹は自然と笑顔になっていた。

あまりにも隼樹が嬉しそうに笑うので、ドゥーエも可笑しくて、釣られるように笑いそうになった。心の揺らぎを悟られないように、平静を努めてドゥーエは最後の確認をした。

「最後に一つだけ……。今、管理局に捕まってる妹達は、どうなる

のかしら……？」

「トーレさん達に関しては、聖王教会のカリムさんに保護をお願いしてます。身柄を確保したのは六課ですから、後ろ盾になってるカリムさんなら何とかしてくれるハズです。それに、ドゥーエさんが証拠を掴んでくれれば、信頼出来る人に渡して世間に真実を公表して、ナンバーズは被害者と言う扱いで、罪に問われなくなります。多分、スカリエッティも。今回の事件は、管理局のトップや、部下が気付かなかつた失態が招いた事ですから……！」

「そうですか……解りました」

念入りに確認してくるドゥーエを見て、本当に身内想いなんだなと隼樹は改めて知った。ドゥーエに限らず、ナンバーズは皆、根は良い女の子達なのだ。まあ、一人例外的な丸眼鏡をかけた腹黒女が居るが、アレはアレで彼女の味でもある。

話はまとまり、ドゥーエは部屋を出ようと扉に歩み寄った。ふと足を止め、後ろに居る隼樹に振り返った。

「隼樹……貴方を信じてます……！ ですから……姉妹を、ドクタ―をお願いします……！」

「はい……！」

ドゥーエの期待に、隼樹は正面から受けて答えた。

満足げで綺麗な笑みを見せて、ドゥーエは去っていった。残された二人は、緊張を吐き出すように深い溜め息をついた。重苦しい空気が解放されて、全身から一気に力が抜けていくのが解る。

事の成り行きを見守っていたユーノは、安堵の笑みを浮かべて言った。

「何とか、上手く協力を得られたようで、良かったですね……」

「ああ……！ 本当に良かったあ……！ 睨まれた時、俺殺される

かと思ったもん……！」

緊張感と恐怖から解放されて、隼樹の目には涙が浮かんでいた。
ああ、そうだ、と思い出したように隼樹は言った。

「もしかしたら、また何か頼んだり、ドゥーエから協力を煽られる
かもしれないけど……その時も、お願いできるかな？」
「もちろんですよ」

ユーノの爽やかな笑顔を見て、隼樹は思った。
なんて良い友達を持ったんだろう、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0360z/>

IMAGE ~ラストイメーヅバトル~

2011年12月20日00時51分発行